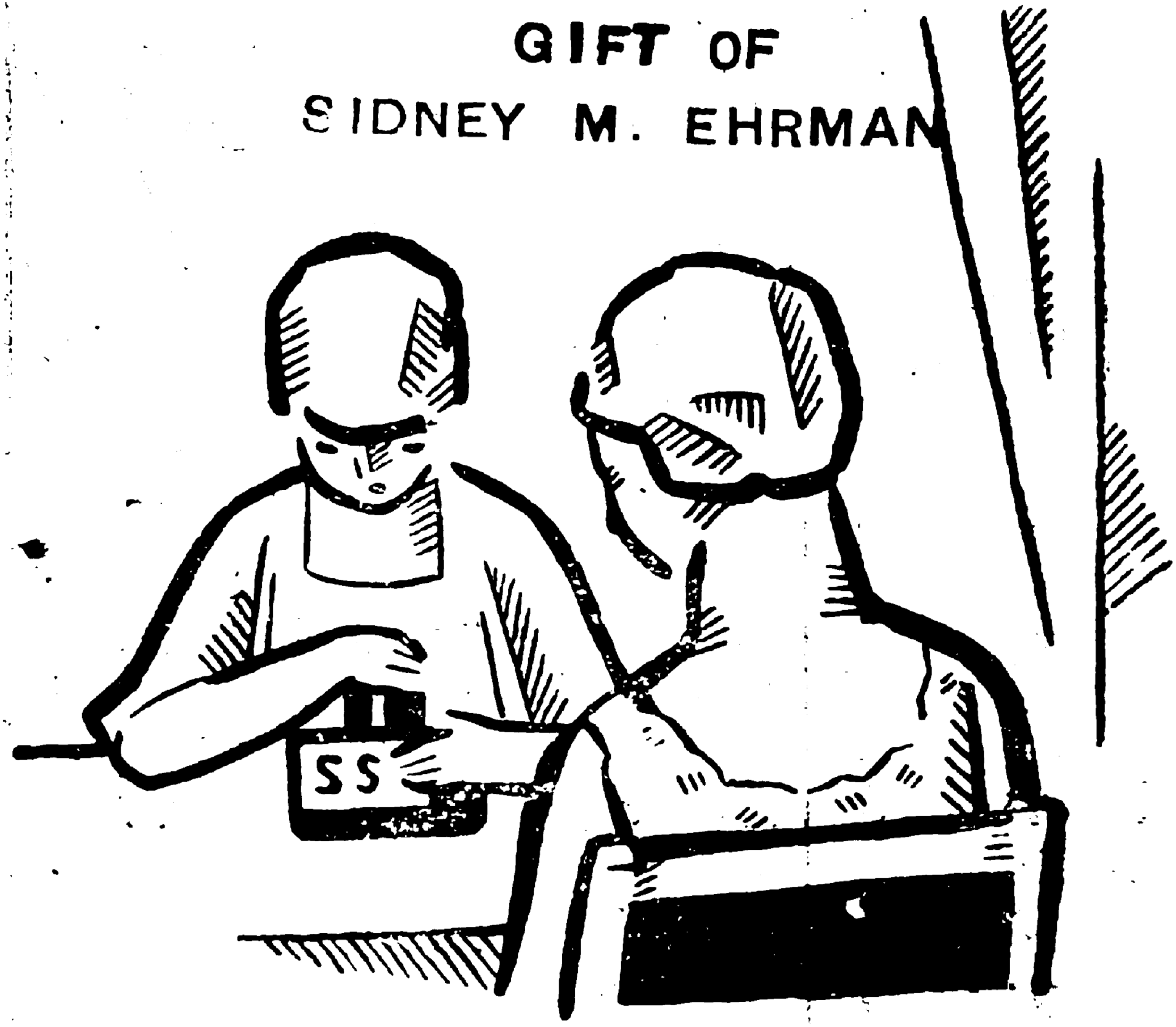
THE RECONSTRUCTION

改造

五月特別號

1921


SS



改造 五月號目次



ロメン・ロオラン原著
大杉榮氏譯

四六判美本
定價壹圓參拾錢
送料八錢

最新刊

民衆藝術論

新藝術の先驅者ロメン・ロオランの雄叫を聞け

舊き社會は既に滅亡に瀕してゐる。新らしき社會は將に勃興せんとしてゐる。民衆藝術は此の新社會創造の任に當る若き民衆の潑溂たる生命力の發現である。頽廢し切つた人類の更生を促成せんとする新らしき世界の爲めの新らしき藝術である。此の新藝術の最も精悍なる一鬪將ロメン・ロオランが雄叫びの聲を聞かんとする者は本書に來れ。

大杉榮氏著
クロポトキン研究（十一版）
定價壹圓參拾錢
送料八錢

大杉榮氏著
悪戯（五版）
定價壹圓參拾錢
送料八錢

東京市神田區
中猿樂町十五

アルス

振替東京二四八八八番
電話九段二一六九番

新刊

德富健次郎と愛

日本から日本へ

東の巻　六百十八頁　天金紫羽二重表紙

西の巻　八百三十六頁　六號横組四六版

定價			送料	
	東の巻	金五圓		金廿七錢
	西の巻	金五圓		金廿七錢

發兌元

東京市日本橋區大傳馬塩町壹番地

長　電話神田二〇七九番
特長電話神田四〇九一番
振替東京三八一七番

金尾文淵堂

婦人 性の研究

醫學博士 ドクトル

羽太鋭治氏著

新刊

定價二圓 郵税八錢
四六判 裝訂瀟洒

渾沌たりし婦人性の問題は本書に依り始めて釋然たり

本書は社會問題、思想問題及び心理學、倫理學、生理學、病理學一切の方面より、特に女性を赤裸々に解剖したるもの。先づ歐米諸大家の女性觀を述べ、醫學上より婦人の體質、生殖器の構造と其作用、及び婦人性慾の心理を說き、結婚を論じ、姙娠、分娩の狀態及び婦人病の手當法を敎へ、最後に婦人特殊の犯罪を擧けて賣淫論に及ぶ。何人も一讀再讀すべき良書。

―本書を讀むべき人々―

(一)思想家は 婦人問題研究の爲
(二)敎育家は 兒童敎育方針の爲
(三)父兄は 家庭敎育參考の爲
(四)經世家は 社會政策資料の爲
(五)刑法家は 婦人犯罪研究の爲
(六)未婚者は 童貞貞操保持の爲
(七)夫婦は 家庭圓滿和合の爲
(八)婦人病者は 其の疾病治療の爲
(九)姙婦は 其の出產準備の爲
(十)一般婦人は 社會的覺醒の爲

内容大略

ウオードの說：ショツペンハウエルの女性觀：婦人の性的特徵と其精神的能力：婦人の生涯：月經：結婚：姙娠：分娩：婦人の罹病率：婦人病：婦人の性慾：婦人と犯罪：賣淫論

□一般性慾學 十版
醫學博士 羽太鋭治氏著
定價貳圓八拾錢 郵税十二錢 菊判

□性慾と近代思潮 六版
醫學博士 羽太鋭治氏著
定價貳圓 郵税六錢 四六判

□性慾研究と精神分析學 十五版
醫學博士 榊保三郎氏著
定價貳圓 郵税十二錢 菊判

東京京橋南紺屋町 實業之日本社 振替東京三二六番

新人の新聖典

ラッセル論集

松本悟朗氏譯・廣川松五郎氏裝幀・四六判總クロース六百餘頁　價參圓五拾錢（送料廿三錢）

社會主義を始め過去一切の社會思想に對し廣く高く深き立場より嚴正透徹なる批判を試み進んでその大膽且つ切實なる社會改造意見を提唱して全世界を驚倒せるは實に哲人ラッセルである、本書は彼の名著「社會改造の原理」「戰爭と正義」「政治の理想」「自由への道」の四卷を校訂の上一卷の論集となせるもの、通讀以て彼が社會改造意見の全般を知悉する事が出來る。寔に新人必讀の新聖典！

ミシガン大學社會學教授 **クーレー著**・**納武津譯**　陸軍大學校長 宇垣一成序

最新 社會と我

四六判總クロース函入・價貳圓參拾錢・送料拾八錢

昨年各大學競つて社會學講座を創設し、本年に入り陸軍大學新に之を開始せるに至りて時代の新展眞に刮目すべし。本書は社會學的知識の精髓たる「社會と自我の關係」に就て根本的、徹底的解答を下せるもの、其見地の獨創的にして包容的なる、歐米社會學者の推賞措かざりしもの、原名を「人間性と社會秩序」と云ふ。社會的諸理論の混沌として決せず、而も社會學研究の曙光を見る今日、敢て本書を紹介推賞する所以なり。

陸軍教授 **稻葉君山著**

支那史講話

四六判總クロース函入・價參圓・送料十八錢

支那歷史は從來兎角乾燥無味に流れ讀者に快感を與へる事は出來難いやうに解されてゐる。著者は大に之を憂ひ精彩ある支那近世史の內容――政治文化社會經濟各般の事項につき極めて明快に平易に興味津々たる解釋を試みた本書は即ちそれである。著者は告白して曰く本書は余が大學に於て多年講述した稿本を印刷したもの之を從前世に出した著書の何れに比しても全然新しい氣分がすると、又以て內容を知るに餘りあらん乎、支那問題紛糾の今日本社が斯界の權威たる著者をして本書を成さしめ讀書界の急需に副ふは大に誇りとするものである。

日本評論社

東京市本郷區弓町
振替東京九六七八



—(改造五月號)—

暴力否認の標準

盛裝したる我社三週年記念號は突如として發賣禁止の厄に逢ふた我社同人がはり詰るやうに充實した心胸は玆に一段の緊張を加へた。

禁止の內容は禁止命令に明記されてゐない、唯だ公安を紊るものとして發賣を禁ぜられたのだ、その措置如何に對しては須叟く聲を潜むる、唯だ社中同人が心血を濺げるものが治安を紊り、そしてそれが十萬の讀者に行き亘らなかつたのは遺憾此上もない。親み深く、そして敬愛する讀者に對して幾重にも御詫する。

去りながら、當局者が「東京朝日」記者に明言したる所に依ると、その骨因はたゞ漫然たる物語り樣の暴力是認の一項がその國家の忌諱に觸れたものらしく受取れる。國家は共國家自體に於てその國家の安寧保持のため暴力を是認し、そしてそれを行使しておる、然らば、その暴力の行使、若くは暴力そのものに對して、是非するのは國家のためにも學問の獨立の上よりも、當然許さるべき性質のものと思ふ。

若し、それが特定の件に對して發せられ、そしてそれが、特定の時日を拘束するものならば治安にも支障あらんも、さあらぬ限りは何等の危險性を帶ぶることもない。

我等は當局者が法規の解釋にモット寛大であることを庶幾ふ、そうでない限り國法學、國家學の研究も全く出來ないことになる、そして禁止せざるの場合と、禁止したる場合の何れが民心へ影響するかをも考察する必要がある。

要はたゞ、暴力を是認し、否認するそのものゝ時間的であるか、特定的であるかに依つて國家の強制力が發動すべきものだ、何等の對象物なく、特定物件なく、特定時間なき暴力論に國家の強制力を及ぼすのは、それが眞理研究の自由を奪ふことゝなりはせぬか、一言當局者に反省を促すものである。

價格鬪爭より厚生鬪爭へ

(Vom Preiskampf zum Wohlfahrtskampf)

――殊に厚生鬪爭としての勞働爭議――（其一）

福田德三

（一）

經濟學の學派に樣々あり、其系統に數々あれども、今日現在我々の到達し得たる立場から見れば、其一切を通じて、二大分派を劃することが出來る。一は價格の經濟學（Price Economics）で二は厚生の經濟學（Welfare Economics）である。價格の經濟學はアダム、スミスより始めて今日に至るまで。大々多數の學者を網羅して居るに反し、厚生の經濟學を眞に代表するものは未だ極めて少數に屬する。然しこれは大體の系統から見たときの話で、學者所論の內容に就て云へば、厚生の經濟學は昔から多くの學者の所論中に包含されて居つたのである。唯其れが一の系統ある經濟學を構成しなかつたのである。此意味に於て凡ての社會主義經濟學も決して厚生の經濟學に屬せず、其系統的地位の上から見れば、依然として價格經濟學の範圍を脫して居らぬのである。就中カール・マルクスの『資本論』は、系統的には全然價格經濟學に屬するものである。否マルクスの最も偉大なる先驅者の一人たるウキリアム、タムソンの『分配論』は、全く價格經濟學の立場に立つものである。更らに換言すれば『勞働全收權』の主張者は何れも皆價格經濟學の埒外

に出づるものでないと斷言す可きである。

勞働者をして其所產の價格を全部收得せしめよ、資本家企業主等をして其價格の大なる又は小なる部分を奪掠せしむ可からずと云ふは、法理上の要求としても價格經濟の上に立脚するものであるが、經濟理論としては純然たる價格經濟的要求を主張するものである。從て此要求に基く鬪爭は價格鬪爭（プライス、カムプ）である。アントン、メンガーは此の勞働全收權の主張を勞働權の主張並に生存權の主張と同一列に置いて之を三の經濟基本權なりとしたことは、今日に至つては、社會問題に心を留むる聰明なる我邦の讀者の普く知る處であらう。森戶學士が其近業なる右メンガーの邦譯書序文に於て指摘せられたる如く、メンガーは、法理社會主義の拘束を終に蟬脫し得なかつたものであることは、此點の考察が最も克く之を立證するものと思ふ。社會法律の立場から見れば、右三者を同一列に導いて之を三個の經濟基本權と做すことは、無論失當ではないが、經濟生活の理論的考察の立場から見ると、三者を同樣にプライス・カムプの論據たる如く取扱つて、厚生の鬪爭、ヴオルフアールツ・カムプ（Wohlfahrtskampf; Welfare Struggle）としての側面を考へなかつた事は其中に一の大なる缺陷を伏在すると云はねばならぬ。是れ筆者がメンガーに就て學ぶ十數年にして漸く感得した一事である。

勞働權の主張は或度までは、價格經濟學の立場を固守するものである。何となれば、勞働の意思あり又た其の能力あるものが、社會の機關の不完全なるが爲めに勞働の機會を與へられずてふことは、之を流通經濟の言葉に引直して云へば、其の勞働の、其の勞働力の Verwertungsgelegenheit 又は=möglichkeit（換價の機會又は可能）を與へられずてふことである。卽ち他の言葉に移して云へば、其勞働に、其の勞働力に價格を附與せしむる機會又は可能を有せずと云ふことである。從つて勞働權の要求とは、此の機會、此の可能の附與の要求の謂である。從つて勞働權の要求は、其法理

的側面は拙く措き、經濟的側面、殊に流通經濟の方面より見れば、依然として一の價格要求（Preisforderung）であり、一の價格闘爭である。其上に立つ所の勞働者人格の主張は、價格の收得と不可切不可離底のものであつて、價格の收得を度外視し又は無視するものでは全然あり得ないのである。即ち一貫して價格經濟學の立場を肯定するものであつて、全體的には勿論のこと、部分的にも之を否定するものではない。乍併勞働權の要求が勞働全收權の要求と著しく異る一點ありと云ふは、勞働權の要求はメンガーの能く明かにした如く、其根底に於ては生存權の要求の一過渡たるに過ぎざるが爲めである。從つて其の要求其ものは價格收得てふ流通經濟上の立場に立つには相違ないが、其要求其ものが本來の目的ではなく、單に一の手段一の方便たるに外ならないのである。此點が勞働全收權の要求と甚だ異なるものなることは、メンガーの書が森戸君によつて邦譯せられて、廣く我が同胞の前に置かれて居る今日改めて解說するまでもないことである。此の意味に於ては勞働權の要求は價格經濟學の天地にのみ終始するものでないこと丈けを明かにして置けば足るのである。

然るに生存權の要求に至つては、其出立點を全然以上二種の要求と異にして居るのである。生存權の要求は價格收得の要求、價格闘爭の理論的背景では如何なる意味に於てもない。其流通經濟的立脚地も價格經濟學のポスチュレートの上に置かれたものでは更々ないのである。獨り其出立點が其處にないのみならず、其進行としても、其經過階段に於ても、生存權の認承は價格收得の認承を須つものではない。其れあるも妨げず其なきも亦妨げず、超然として其以外又は其以上に立つものである。故に經濟理論就中流通經濟の側面より見た其生存權の主張は勞働全收權の主張とは決して同一列に置かる可きものではない。否勞働權の主張とも伍す可き筈のものではないのである。從つて價格經濟學の天地に跼留つて居る限りの社會主義理論が、勞働全收權の主張に矛盾を發見し缺陷を感得すること屢々あり乍ら、終に生存權

の天地にまで進み行くことの出來なかつたのは理の當然である。

ゾムバルトが近頃マルキシズムを呼んで虚僞なる社會主義と云つた眞意は自ら他にあるであらうが、筆者が此一語に裏書する意は即ち此點の考察に基くものである。ゾムバルトは嘗つてはマルキシズムを以て現今社會主義理論の最代表的なるものと做して、其社會主義論に於てはマルキシズムのみを主題としたに拘らず、其最近著に於てはマルキシズムを虚僞の社會主義なりとし、而して眞正なる社會主義とは何ぞやとの問を起して答へて云ふ「社會主義とは非營利主義的傾向を有する社會合理論（Sozialrationalistik mit antichrematistischer Tendenz）の謂である」と、筆者は此定義に甚しく不滿を感ずるものである。

プラトーンより始めて今日に至る凡ての社會主義的思想と運動との最根底を爲す所のものは、單に營利主義の否認若くは非難と云ふが如き倫理的のものではない。他の方面からの考察は姑く措き本論の課題たる流通經濟の理論的方面より觀察するときは、凡ての社會主義的及共産主義的、無政府主義的思想と運動との最根底に横はる要求は價格經濟からの解放、價格鬪爭からの解放之れである。貨幣の否認と云ふが如きは其表はれたる一兆候に過ぎぬ。（川嶋清治郎氏の貨幣廢止論に對しても筆者は斯く考ふるによつて其立論には敬意を拂ふを惜まざると共に、其は倦怠を催す可きほど屢々繰返されたる半成論なりと解することを如何とも爲し難いのである）。

（二）

吾人の棲む現在の經濟生活の根本的性質は其が價格の生活であると云ふ一事にある。資本主義とは其外面の表徴の一たるに過ぎぬ、賃銀制度、賃銀奴隷制度と云ふも亦然りである。近頃例のハートレー・ウヰザースは資本主義擁護の一小冊（A case for capitalism）を著して其中に云つて曰く、社會主義の人々は現在の經濟生活を賃銀奴隷の制度なりと

云つて之を攻撃するが、若し今日の經濟組織が勞働者をして賃銀の奴隷とすと云ひ得るなら、同じ筆法を以て今日の經濟組織は資本主をして利子奴隷（Interest slave）たらしめ、地主をして地代奴隷（Rent slave）たらしめ、企業者をして利潤奴隷（Profit slave）たらしめつゝありと云はねばならぬと。此言には一理ありと思ふが、更らに之をより適切に言ひ表はすときは、今日吾人の經濟生活は凡ての流通現象を價格現象たらしめ、凡ての經濟行爲者を價格奴隷（Price slave）たらしめつゝありと云ふ可きである。

我々は其一生を通じ、其殆んど一切の生活活動に渉りて、價格世界の拘束を著しく被つて居る。我々は寢ぬるも覺むるも價格の天地以外に出づること能はず、思ふも感ずるも價格の稱呼を免るゝこと能はざるものである。是れが吾人現在の經濟生活の最根本的特徴である。資本主義とは此くの如く價格に拘束せられた吾人の生活の一側面たるに過ぎぬ、勞働者を壓迫しつゝある所の賃銀制度、賃銀奴隷制度とは此くの如き生活の一部分を示めすに外ならぬものである。然るにも拘らず資本主義の制限又は撤廢、賃銀制度の廢止のみを主張して居るのは甚だ不徹底な考と云はざるを得ぬ。所謂資本主義を廢し、所謂賃銀制度を廢するも吾人の生活にして價格の生活たると依然たらば、資本主義は廢さるゝも必ず之れに代位す可き同種のもの起るに相違ない、現在の賃銀制度に代つて起り來る可きものは其惡を均ふする―否或はより甚しくする所の――同種の制度たる可きである。貨幣全廢論者に對して筆者が王安石の故事を提出して太湖の水を乾かす爲めに更らに一の新しき太湖を堀るを要する樣ならば何にもならないではないかと言つたのは此意味である。資本主義全廢論、賃銀制度全廢論に對しても予は亦劉貢父の言を繰返さざるを得ぬのである。而して是れ亦筆者が勞働全收權の主張を以て不徹底のものなりとする所以である。

（三）

價格の經濟學の上に立つ以上、社會主義の理論はゾムバルトの云へる如く虛僞のものたらざるを得ない。其虛僞性を一掃する爲には、社會主義理論は他のものと共に、價格經濟學の天地を脫出することを要する。生存權の主要者も今日までは――恐らくアントン・メンガー其人も、亦ポッパー・リンコイス等も一樣に――未だ價格經濟學の束縛を脫し切らずに居る。乍去生存權の理論に徹底する者は、自ら其の束縛の如何にも强力なるを感得せずには居られぬ。既に感得すれば、其處に此の束縛からの解放の必要を痛感するに到るは寧ろ當然である。

バートランド・ラッセルは流通經濟の考察からでなく、其哲學的見地からして自ら此の解放に想到したものと思ふ。哲學其ものから批判するとき彼の社會改造の原理に幾多の非難――一例としては田中王堂氏の東洋經濟新報に掲げられた長論文を見よ――が下され得るようであるに拘らず、彼の思索が多くの共鳴者を見出した所以のものは、流通經濟學が正さに爲す可くして而して怠つて居る事を彼が敢て試みて其補ふ可き所を暗示した事も亦與つて甚だ力あるものではあるまいかと思ふ。

ラッセルの這般の思想は決して彼に始まるものでないことは、言ふまでもない處である。彼は前代及現代の各種の社會思想の流潮を洞察して深く思を潜めた結果、之を自家の哲學の形に鑄込みて所有衝動よりの解放と云ふ産物を作り上げたのである。此點に於て我々は名工の老手腕と容易ならざる思想の鍛錬とを見るものである。併し我々は彼の賜を珍重するを以て甘ず可きではない、與へられた分に應じ更らに考察を他の方面にも試みる可き義務を有して居る。筆者が其學ぶ所の流通經濟の方面に於ける貧弱な試みを述ぶるのは、ラッセルの賜を聊かにても活かさんとする微衷に外ならぬのである。

價格の世界からの解放は、社會主義學說の中に暗示せらるゝもの決して少くないは勿論、價格經濟學の立場に立つ從

來の經濟學通說の中にも亦た見出さるゝのである。就中最近時に於ける厚生經濟學（Welfare Economics, Economics of Welfare, Theorie des Volkswohlstandes, Theory of prosperity, Theory of prosperity, Theorie des wirtschaftlichen Fortschrittes）構成の試みは、何れも皆價格經濟學よりの解放の要求に應ぜんとするものである。而して近時に於ける此思潮の先驅と見る可きは、獨逸に於ける所謂倫理學派經濟學を外にしては、英國經濟學の宿儒アルフレッド・マーシアル其人であらう。彼畢世の大著『經濟學原理』の首篇は實に厚生經濟學の大宣言とも見る可きものである——大塚教授の譯書又は拙著經濟學講義を見よ——乍去厚生經濟學の使徒としてのマーシアルの眞面目は此書に於けるよりも寧ろ彼の學問的閲歴其ものに於て見る可きである。

近頃米國の學者某氏が米國經濟學協會雜誌に於て指摘した通り、右の『原理』に於けるマーシアルは首篇に於ては最も鮮明に又た大膽に厚生經濟學の代表者たる立場を宣言はしてゐるが、第二篇以下の論は漸次價格經濟學の常套を踏襲し終には他の儕輩と全く別つ所なき底の立場にまで落下し來つて居るのである。殊に其流通經濟論を述べたる第五、六兩篇の如き最も然りである。故に右某氏は評して謂らくマーシアルは猶舊時の價格經濟學と新時代の厚生經濟學との十字街頭に彷徨つゝあるものであると。此評は決して輕妄ではないと思ふ。是れ一にはマーシアル其人の穩健なる學風、愼重なる思索家たる本領の致す所たるには相違ないが、他面にはまた厚生經濟學の構成其事の甚だ困難なるを示めす所以である。學風の束縛なき獨逸の少壯學者の幾多の試みの未だ成効するに至らざること、就中社會政策の學問的樹立の成効するに至らざることは、此言を裏書するものと思ふ。

マーシアル門下の逸材にして其後繼者たるピグー氏は先年『富と厚生』（Wealth and Welfare 1912）てふ書を公けにし近くは其全部を改稿して『厚生の經濟學』（Economics of Welfare 1920）と改題して公けにし其抱負を披述しマーシ

アルの企てて成らざりし所を大成せんと鋭意して居るは我々に取つて甚だ快き事である。ピグーと同樣な事を他の點より仕上げんとしつゝあるは獨逸のリーフマンで「Theorie des Volkswohlstandes（厚生の理論）てふ題の書を公けにす可しと豫告したのは數年前の事であるか、今日迄其書は顯はれず却つて價格經濟學の權化とも目す可き尨大なる「國民經濟原論」二冊が戰時中に公けにされた。米國のパッテン、墺國のミッチェリッヒ等は「繁榮の原理」「進步の原理」など云ふ名の下に、厚生經濟學を組立てようとして居る樣子である。以上何れも未だ大成の域には達して居らぬが、亦以つて經濟學最近の思潮の趨く所を暗示するものと云ひ得ると思ふ。唯惜む可きは流通理論の方面からの考察が不十分なること是れである。

何故に然るかと云ふことは一考に値する。蓋し厚生の經濟學と雖も經濟的厚生（economic welfare）の概念を限るには、貨幣評量と云ふことを以て標準とせねばならぬ。貨幣評量を許す限りの厚生が經濟學の對象たり得とする以上は、其評量せられたものと價格とは多くの場合に於て一に歸するのである。從つて厚生經濟學と價格經濟學との分界線は甚曖昧に陷り易いのである。生產經濟の側面に就ては、貨幣評量は同時に物の分量動きの分量又は時長によつて匡正せられて、必ずしも價格現象と混淆し盡さないで濟むけれども、流通經濟の側面に於ては、其れが甚だ六ケ敷しいのである。從つて流通經濟の厚生學の成立は甚だ後れて居るのである。

（四）

バートランド・ラッセルは其『數學原理』に於て次のようなことを言つて居る。『非ユークリッド幾何學の發達以來、純正數學はユークリッドの公理や定理が現實の空間に就て正しきや否やの問題とは何等の關係を持たぬように考へられて居る。此種の問題は現實的數學に向ての問題であつて、決定の可能なる限りは、實驗と觀察とによつて決せらる可きも

のとせられて居る。純正數學の論斷する所は、單にユークリッド式定理は、ユークリッド式公理から出て來るもので卽ち其れは一のイムプリケーションを肯定するに過ぎざるものであつて、此く此くの性質を有する空間は又は此く此くの他の性質を持つものなりと論定するに止まる。從つて純正數學に於て取扱ふ限りに於ては、ユークリッド幾何學も、非ユークリッド幾何學も均しく正しいものである。其何れに於てもイムプリケーション以外何物も論定せらるゝことなきものである。故に現實に存在する處に就ての一切の定理――例へば吾人の棲む空間に關する定理の如き――は實驗又經驗科學に屬するものであつて、數學に屬するものではない」と。

ラッセルが此言を爲したとき、彼は未だアインシュタインの相對原理に接して居らなかつたので。然る限りに於て此言は學問の二大別を暗示するに適當な言表はし方と認む可きである。然るにアインシュタインの相對原理說の出でゝ後はラッセルの言は多少の修正を必要とする。經濟學に就ての形式主義と實驗主義との兩立可能論は此修正の後に於ては其以前に於ける若干の存在の理由をも全く失ふものと云はざるを得ぬ。――此點『資業の世界』所揭拙論『階級鬪爭とアプリオリからの解放』を見られたし、但し同時に石原純博士の同誌其次號に於ける拙論批評をも併せ見られたし――少しく說明して見れば、幾何學に於けるユークリッド幾何學と非ユークリッド幾何學の對立に比較し得らる可きものは經濟學に於てはアダム・スミス經濟學と非アダム・スミス經濟學との對立である。ラッセル流に云へば、純正經濟學なるものに於ては、一定の經濟的動機を有すと前提せらるゝ經濟人の上に立論するアダム・スミス經濟學も、其前提なき非アダム・スミス經濟學も、このイムプリケーションの論定としては共に正しかる可きである。其動機が現實の人間と如何なる交涉を有するやの問題は、所謂純正經濟學に取つては無關係なりと云ふ可きである。幾何學に於て相對原理が此を打破したと倶ずる我々は、更らにより强い意味に於て經濟學の天地から此くの如き純正經濟學、イムプリケーションの論定

を業とする形式科學としての經濟學は掃除し去られたと思ふものである。哲學に於てアプリオリからの解放と云ふことを主張するのは、科學者が實驗室に於ける多年の苦心を度外視して單に新奇なる流行を趁ひ求むる輕薄兒の所業なりと罵倒することが許されるとしても、經濟學上に於ての筆者如上の主張までが同一の取扱を許すものとは云へまいと存ずる。

價格の經濟學は形式論理の取扱を以て足るであらう。否此くの如き取扱に最も克く適して居たことは、リカルド經濟學の久しきに渉る全盛が十分に之を證明し、リカルド經濟學の延長たるマルクス經濟學の流行が更らに之を確めて居る。**ロッシアーが歷史派の旗幟を樹てゝ毅然として立つたのは實に此の強大なる力に對する抗爭を開始せんが爲めであ**つたのである。ブレンタノが『正統派經濟學論』も此の抗爭の繼續であつたのである。形式論理經濟學に我々が極力反對する所以は、其上に立つ限り經濟學は到底價格經濟學たる域を脫し得ないからである。厚生の經濟學は形式論理の束縛の下には到底建設し得られないからである。我々は單に光を求むるのみならず同時に又た果を求むるものである。否其光を求むるは果を得んが爲めである。――坂西教授神戶高商創立記念講演『經濟文化發展過程上の二傾向』を參照せよ――
――經濟學の術語を以つて云へば、我々が價格を研究するは其れ自らの目的ではない、經濟的厚生（Economic Welfare）が之れと關聯することを知る故に、之を研究して厚生の研究に進まんと欲するのである。經濟現象は、就中流通現象は――而して然るが故に勞働爭議の問題は――先づ價格の現象として我々の前に橫はるから此研究に從事するのである。決して價格の現象だけを究めて能事とする意では毛頭ないのである。然るに、此點を混雜せしめ以つて價格經濟學からの解放を著しく妨害したのは、經濟學の通說に於て重要なる地位を保つ利用（我邦多くの學者は効用と云ふ）Utility なる語である。

經濟的厚生は貨幣評價を許す限りの滿足と不滿足とに關連するものであるけれども、其關係は決して直接のものではないのである。兩者の間に欲望と嫌惡とが介在して在るのである。或人が或物又は或勞働に對して提供するを肯ずる一定の貨幣額は、其物、其働きより得可き滿足又は之を得るによりて免れ得可き不滿足を直接に測るものではない、唯だ其物、其働きに對する欲望、願求の強さを測るに過ぎないのである。然るに此の欲望願求の強さを言表はすに普通利用 Utility なる語を充てゝ居る。併し利用なる語は滿足の度合の謂であつて願望の度合 Desirability 又は Desiredness の度合の謂たる可きではないのである。利用大なりと云ふは得る滿足の大なるの意であつて、吾々が之を追求し願望することと大なるの謂である可きではない。然るに此兩者を均しく利用なる同一語を以て言表はすもの多いが爲め兩者の區別が曖昧となつたのである。故に伊國の學者パレトは利用（Utilita）なる語に換ふるに『オフエリミタ』（Ophelimita）なる語を以てす可しと主張し、米國の學者中には『ウオンタビリテー』（"Wantability"）なる語を新鑄し其單位を『ウオンタブ』"Wantab" と稱す可しと云ひ、英國のピグー氏はデザイアドネス（Desiredness）なる語を以てす可しと主張して居る。即ち提供せらるゝ一の價格は正當なる意味に於ける利用とは直接に關連するものでなく『オフエリミタ』『ウオンタビリテー』又は『デザイアドネス』若くは『デザイアビリテー』Desirability と關連するもので、然るが故に間接に利用と關連するに止るのである。

今假りに『オフエリミタ』『ウオンタビリテー』又は『デザイアドネス』を『要用』と邦譯するならば、價格が測る所は此『要用』であつて、『利用』ではないのである。『利用』が價格と終始すると云ふのは、『要用』の度合は大體に於て利用の度合に伴ふとの條件の下に於てのみ許與せらるゝのである。平たく云へば、甲乙兩個のものに對する或人の要求の強さと強さとの間の割合が、其兩個夫々の所有によつて彼が得る滿足等の割合に均しとの前提の下に於てのみ、利用は價格と

相關連するものと云ふ可きである。然るに此前提は必ずしも常に許與され得ないのである。滿足の期待と其の實現との一致せざることは常に見る所であるが、其以外に於ても、此一致の前提の保たれない場合は澤山あるのである。此處に價格の經濟學と厚生の經濟學との根本的差違が强く働くのである。殊に勞働爭議を單に一のプライス・カムプ（價格鬪爭）と見るの失當が著しく顯はるゝのである。從つて勞働爭議を價格現象と見ることの甚だ不可にして之を厚生現象と見ざる可からざる理由が存するのである。勞働爭議は『プライス・カムプ』でなく、『メンシエン・カムプ』（人の鬪爭）であり否ペルゾエーンリヒカイツ・カムプ（人格鬪爭）而して然るが故に厚生鬪爭（ヴオールフアールツカムプ・ウエルフエーア・ス・ラッグル Wohlfahrtskampf, Welfare Struggle）たる所以茲に存するのである。而して從來爲された厚生經濟學構成の試みが、流通の側面に於て甚だ缺如たるものある所以も亦茲に存して居るのである。

（五）

厚生の理論は、墺太利派の限界利用說に於て著しき刺戟を受けたことは、言を須たざる所である。又た所謂主觀學派、倫理學派の援助を受くる尠少ならざることも之を認めざるを得ない。乍去今日迄の限界利用說や主觀學說——リーフマンも此中に含む——は、其所謂『利用』や『收益』（リーフマンのErtrag『エルトラーグ』）やの觀念を『要用』と嚴密に區別せざるが爲めに、厚生學の構成に貢獻することと十分なるを得ないのである。從つて其の『利用』、『收益』と貨幣稱量又價格との關係に就て甚だ曖昧な立場に立つて居る。其絶好の代表者はアルフレッド・マーシアルである。

マーシアルの『消費者餘剩』論は甚だ暗示に富む着想であり乍ら唯だ其れ丈けに止まつて、更らに些の進展を今日に至るまで見得ないのは、此曖昧性の累するが爲めであると思ふ。リーフマンの極めて大膽にして或意味に於て破天荒なる新說が同學者から著しき非難を受くるを免れない一部の理由も亦茲に存ると思ふ。彼の所謂『エルトラーグ』は利用と費

用との差額なりとも云ひ又た一の關係比例なりとも云つて兩つの觀念を鮮明に別つことの出來ないは主として之れが爲めである。――マルクスの勞働價値論は勿論として――

此の曖昧を撤去することは、確かに厚生經濟學建設に向ての一大準備事業である。厚生經濟學を以て題名とするピグーの最新著(Economics of welfare 1920)は、若干此準備事業に向つて着手はして居るが、彼は何處迄も『國民分配分』ナショナル・デヰヴヰデントの舊套を脱し得ない爲め、流通理論に寄與する所が極めて少く、國民分配分の大さを以て嫌て厚生の度合と終始するものなりとの常識論に墮し了つて仕舞つた。彼は其總論の歸結として四個の設理を爲して居る曰く(一)他の事にして均しき限り、國民分配分の大さにおける增加は、經濟的厚生を增す可き蓋然性を有す。(二)他の事にして均しき限り、國民分配分中貧民に歸着す可き割合の增大は經濟的厚生を增大す可き蓋然性を有す。(三)他の事にして均しき限り、國民分配分の可變性の減少は經濟的原生を增加す可き蓋然性を有す。(四)他の事にして均しき限り、國民分配分中貧民に歸着す可き部分の可變性の減少が富者に歸着す可き部分の可變性の之に應ずる增加を償として起るときは、經濟的厚生を增大す可き蓋然性を有すと。此の四個の設理の凡てを通じて先づ起る疑問は、彼の所謂經濟的厚生の增大なるものは、要用の增大の謂なるか利用――此語の正當なる意に於ける――の增大の謂なるか是れである。

願望の增大、要求の擴大が、得らるゝ滿足の增加と同一のものなるならば、此くの如き疑問を起すは誠に無用なことであるが、願望の增大は得られたる滿足の增大ならざる限り、我々は此の疑問を先づ解決しなくてはならぬ。勞働爭議が單なる『プライス・カムプ』でなくして『ヴオールフアールツ・カムプ』なる以上、我々は此疑問を輕視することが出來ない。他の事にして均しき限り國民分配分の增加が經濟的厚生を增すと云ふのが、要用を增すと云ふ意ならば、我々は

直ちに之を肯定するに躊躇せざるものである。其れは此度の大戰中又は其間もなき後の我邦の現狀が有力に證明する所の如くである。之れに反して國民分配分の增大は、國民の得る滿足の總量を――他の事を均しとするは勿論として――即ち國民の得る總利用を增大すとの意ならば、我々は之に對して直ちに肯定も否定もなし能はざるものである。

今此問題に立入つて考察するに先つて、費用と利用との一致性に就て最も重要な一般的考察を略言することを許されたい。其は時間の問題である。此點に於ても筆者はアインシユタインの新說から著しい暗示が與へられ得るものと思ふ。空間の三デイメンシヨンに更らに時間を第四のデイメンシヨンとして加ふ可しとの彼の主張は、經濟上に於ては、夙くに暗中模索的に到達して居た處である――筆者の十數年前の論稿「トマス・ダキノの經濟學說」（經濟學研究所收）を參照せられたし――而して筆者は數年前よりマーシアル及びピグーの說に對し利用、費用相關論は、更らに時間を加へなければならぬ。利用、費用――餘剩の經濟理論は、利用、費用、時間――餘剩の經濟理論たらざる可からずと主張しつゝあるものである。而して此意味に於て、時間は常に縱線に對する橫線として考へられなければならぬと思ひつゝあつたもので、而して此點に於て筆者はアインシユタインの新說によつて著しく刺戟を受けたものである。

經濟上に於ける時間は、常に費用と利用、餘剩に對し特殊相對性を附與するものである。凡ての時に涉りて妥當にして普遍なる費用、利用、餘剩はあり得ぬ。此事は晩近に於ける物價の趨勢に少しでも注意を拂つたものゝ直ちに看取す可き處である。クナツプは其貨幣國定學說に於て貨幣價値特に計算單位の概念は、時間的にのみ、歷史的にのみ說明し得可きものなりと主張して居る。筆者は更らに之を布演して、凡ての價格は時間的に、歷史的にのみ說明せらる可きものなりと主張するものである。殊に厚生學の立場に立つときは、厚生とは凡て時間的にのみ解せらる可き一の意識狀態であつて、そして厚生に大小を分ち得るは、時間と關連してのみ可能な事であつて、時間を離れたる厚生の大小は之を

理解する能はざるものなるを力說せざるを得ぬものである。從つて一物、一働の收得に繫る要用と利用（卽ち滿足）は、同一時間に起るとき一致するものと推定し得とするも、要用發動の時と滿足享受の時とが異れば此一致は全く打破せらるゝものである。而して要用と利用とは其享受の時を同ふせざることが通例である。然らば時の差異は之を比例相關的に說明し得るかと云ふと、斷じて然らずと答ふるの外はない。

時の差異は凡ての點に於ての一致を打破するものである。此事は通說に於ても『將來の享樂の現在價値』『將來の割引』又は『期待性(プロスペクチーヴネス)の大小』などゝ云ふ名を以て若干說かれて居る所である。さればピグーの云ふが如く、國民分配分の增大が經濟的厚生の增大を來すと云ふのは、之を時の上に振當てゝ見なければ肯定も否定も共に爲し能はざる處である。卽ち國民分配分の增大が同一時に於ける利用の、從つて滿足の增大を來すものと云ふ大なる假定を認容せねばならぬのである。

筆者は今玆に流通經濟の理論其ものを說きつゝあるのでないから、時間の問題に此以上立入つて論ずることを斷念せねばならぬ。ソコデ、時間の問題を全く別に置いた上で、ピグーの第一設理果して直ちに受入れ得るやと云ふに、我々は眼下に彼自ら甚だ重大な制限をこれに加へて居ることを見出すのである。卽ち曰く『國民をして其願ふ所と其利益とが命ずるより以上働かしむる強制又は壓力を加ふることなくして、生產効程を增大し從つて國民分配分の平均量を增大する原因は、其國の可消費所得の分配を害せず又は其の可變性を擴大せざる限りに於ては、全體としては、經濟的厚生を增すものである』と。他の語を以て云へば、（一）生產能率增進の爲めに強制又は壓力を以て人の願望、利益の要求する以上勞働せしめざること。（二）國の可消費所得の分配を害せざること。（三）國の可消費所得の可變性を增大せざることの三つの條件の下に於てのみピグーは其設理を眞なりとするものである。此等三個の條件其何れか一を取るも實

に重大なものであるに況んや三つも重なつて居るに於てをや。而して價格經濟の吾人の生活の根本的缺陷は實に此三個の條件其一だにも充されないことに存するのである。

ピグーの設理は自殺的である。是れ彼が國民分配分を出立點としたためであり、又た國民分配分の增大てふ生產の側面から厚生學を建造し始めんとした誤のためであると思ふ。ピグーの設理は又た自明的なる一のトルイズムである。彼の擧げたる三條件が充さるゝならば其は經濟的厚生に導く可きは言ふ迄もない處であつて彼が試みた詳細な分解は殆んど徒勞に墮するものである。問題は彼のアッサーションの當否に存せず、彼の『プロヴアイゾ』の可許性に存する。而して此問題の解答は國民分配分の增大てふ生產經濟論──國富增殖論と其本體を實は一にする所の──を以てしては到底與へられ無いのである。此解答の必要は我々を導いて流通經濟論に向はしめる外はないのである。

（六）

國民の勞働が各人の願望及利益の要求する以上に强制、壓迫によつて擴張せられざるや否や、國の可消費所得の分配が害せられざるや否や、其の可變性が擴大せらるゝことなきや否や。兎にも角にも此等を保障す可き機關や施設やは現在の經濟生活には特置せられてないと云ふことが其の特徵であるのである。中世封建制度の下に於ける隷農制度（ヴヰレネーヂ、グーツヘルシアフト、コロナート等）には或度まで其保障のあつたことは、言ふまでもない所である。中世のギルドに在つては、此保障は著しく與へられてあつた。所謂『產業の自由』とは、一面には此の保障の撤廢を意味して居るものである。『產業革命』とは、此く保障せられたる產業が、保障を取去られた產業となつた行程の謂であると見る可きである。

更にピグーの第二、第三、第四の設理即ち國民分配分中貧民に歸着する部分の增大は──他の事にして均しき限り──

經濟的厚生の增大を意味す、國民分配分の可變性の減少は――他の事にして均しき限り――經濟的厚生の增大を意味す、貧民に歸着する國民分配分の部分の可變性の減少は富者に歸着する部分の可變性の增大を價として起るときは經濟的厚生の增大を意味す云々と云ふことは、何れも流通の現象であつて生產の現象ではない。今假りに此等の設理を悉く眞なりとして、然らば此等の作用は現在の經濟生活に於ては、如何なる機關、如何なる設備ありて之を招致するやと云へば一般に社會政策と稱せらるゝ立法行政及自治の施設の外には是なしと答ふ可きであらう、乍去此等の社會立法、社會行政、社會自治、社會政策をして、存在の理由あらしむるものは何ぞやと問へば、第一の設理に對すると同一の答を與ふるの外はない。

今日の經濟生活に於て、勞働者の願望、利益に反して勞働を强制、壓迫する作用を防ぎ、國の所得の分配を害し其可變性を增大せんとする作用に對抗するものは、主として厚生鬪爭、厚生運動としての勞働爭議、勞働運動のみである。他に若干の機關ありとも其力は極めて微弱殆んど用を爲さず、而して其用を爲す限りに於ては、厚生運動としての勞働運動を背景とし之を動源とするものである。其れと同樣に今日の社會政策、社會自治をして眞に其用を爲さしむるものは、其背後に於ける有力なる勞働運動であり、之を刺戟するものは厚生鬪爭たる勞働爭議是れであるのである。若しも勞働爭議が單なるプライス・カムプ價格鬪爭であるならば、單なる賃銀引上げの爭議であるならば、吾人今日の經濟生活は、一のパリエーチヴなき一の保障なき暗中模索生活に墮する外はないのである。

勞働爭議を單なる價格鬪爭又一の生產現象としてのみ見るときは、其はピグー等の所謂國民分配分增大の勁敵と目するの外なきは言ふまでもない。同盟罷工、サボタージユ、否此處まで至らざる凡ての勞働爭議何れか直接にこれによつて脅かさるゝ產業を生產的に害せざるものあらんや。否直接に脅かさるゝ產業のみではない。間接に受くる損失も亦決

して尠少ではないのである。此意味に於て勞働爭議は確かに一のソーシアル・イヴィルである。殊に最近に於ける爭議に於て然り。筆者今此稿を草しつゝあるとき(四月十日朝)英國に於ける三角同盟は愈々大罷業を決行す可しとの倫敦電報を日刊紙上で見た。三角同盟は何れも英國の基礎產業に屬するものである。千九百十二年三月の英國炭坑夫大罷業の爲め英國全體の勞働組合員の失業の割合は一割一分であつて千九百三年より十二年に至る每年三月の平均失業數五分五厘の倍に當つて居る。一產業たる炭坑夫のストライキは此くも全國の失業者數を增したのである。蓋し基礎產業に於ける罷業は(第一)其業に從ふ勞働者の收入を絕つ爲め他の產業の生產品に對する彼等の購買力を減じ又は全滅すると共に、(第二)他の產業に其要する原料を供給することを得さらしめて其生產を減少するものである。

此の第二の作用は必ずしも凡ての產業に於て同一でないは言ふ迄もないが、罷業の起つた產業がより基礎的なればなる程、又た其が他の產業との交涉の範圍廣ければ廣いほど此の第二の作用は大である可きである。卽ち炭坑業、運輸業就中鐵道、船舶業は最も然るのであつて、英國に於ける三角同盟の罷業は此第二の作用殆んど絕大なりと云ふ可きである。之に比すれば紡績業の罷業などは遙かに影響の小なるものである。

されば單に國富の增進を希ふ價格經濟學の立場に立つ人々が、凡ての罷業一切の勞働爭議を咒咀するのは無理のない所で、就中三角同盟の罷業の如き基礎產業に於ける爭議を以て、亡國的の非擧たるかの如く之を憎むは一應道理のあることである。然り、價格經濟學が吾人の經濟學の一切であるなれば!——乍併我らは何の爲めに價格を收得するか、何の爲めに價格の收得を大事と考へるのか、何の爲に價格鬪爭を敢てするのかを考へて見なければならぬ。我々は價格の爲に作られた動物ではない、我々は價格世界の奴隷たる可きではない。我らは我々の生を厚ふし我々の用を利し、人類としての生活の充實發展を期するに力り、今の世界が價格の世界なるが故に、其理法を尊重するに外ならないのである。

厚生の經濟學の立場に立つものは一切の勞働爭議を單に富の增殖の碍害と見る底の低い見地に安ず可きではない。否我らは此等の爭議を更らにより高き、より廣き見地から篤と考察して見なければならぬのである。

（七）

勞働爭議の種類は實に千差萬別である。乍去我々の立場より見れば其一切を大別して二とすることが出來る。一は旣締勞働契約に關する爭議で、二は將來の勞働關係に關する爭議是れである。第一は旣締契約の運用に關する爭議であるから主として解釋の爭Interpretation disputesである。而して勞働爭議の影響の大なるは主として此第二に屬するものである。解釋爭議も決して之を輕視す可きではない。乍去、其爭議には既締契約と云ふ共同の立場共同の制限がある、從つて其爭の範圍は限られて居つて無限に擴大するものではない。之に反し將來の勞働關係に就ての爭には此くの如き共同制限は一もないから其爭の範圍は當事者の力次第で如何樣にも擴大し得る。現英國の三角同盟の爭ふ所は實に此種に屬するのである。而して此種の爭こそ又た厚生鬪爭としてより重大な意義を有して居るものである。我々は、戰後に於ける世界殊に歐羅巴の勞働爭議は、段々解釋爭議たる狹き性質のものから將來爭議たる廣き性質のものに變じつゝ來つたことが特に重要な點であることを忘れてはならぬ。同時に我々は、勞働爭議が、急速なる勢を以て、價格鬪爭から厚生鬪爭へ進化し來つたのは此れが爲めであることは必ず之を記憶して置かねばならぬのである。尤も解釋鬪爭でも其範圍廣きに亘ることあり、又た根本的なる問題に觸れ重大な影響を有する場合もあり、將來爭議でも其影響左迄大ならざるものあることは否定す可きではない。殊に我邦に於ける勞働爭議は未だ多くは解釋爭議の範圍に屬するものであるが、其關係の可なり重大なものあることは玆に絮說する迄もないことで、今此稿を草しつゝある際問題となつて居る足尾銅山の紛爭の如き、今日或は警察力其他を以て鎭壓し得るとしても、其累積的影響は必ずや將來に於て重大なもの

ある可きは玆に豫言するを躊躇せざる所である。

勞働爭議を係爭の對象に從つて分類するときは、更らに二大別を生ずる。卽ち第一は賃銀爭議(traction of wages)第二は境界爭議(Demarcation disputes)是れである。賃銀爭議を更らに細分して(一)勞働の報酬、一般に賃銀の貨幣割合に關するもの、時としては、貨幣又は現物を以てする工場罰金、特別給與等に關するもの。(二)從業者の行動、態度に關するもの、(一般に勞働時間の問題を含む)の二とし、境界爭議を細別して、(一)各種勞働者及器械間の仕事の割當に關するもの、(二)雇主が從業者を招致する範圍に關するもの、(三)作業事項の決定に從業者參加の問題に關するものの三とする(ピグー)。而して勞働爭議の重なるものは、第一の賃銀爭議に繫るものなるは言ふを須たざる所である。實に今日までは勞働爭議と云へば、賃銀と勞働時間とに關するもの其大多數を占めて居る、唯だ大戰後に於て此狀態は著しく變化して來たのである。

賃銀爭議としての勞働爭議は、無論價格鬪爭の形を取るものである。賃銀爭議が勞働爭議の大々部分を占めて居た過去に於て、勞働爭議は全く單なる價格鬪爭に終始するものと考へられて居たのは此事情に基くものなるは言ふまでもない。乍去一見單なる價格鬪爭たる賃銀爭議も其根柢に於ては、厚生鬪爭であることを說明し得れば、筆者本論の要旨は十分に諒解し得らるゝことと信ずる。以下其說明を試みて本論を終ることとする。(十・四・十・逗子に於て)(次號完結)

ソヴィエットの研究

山川均

一、勞農露國の政治組織

マルクスは一八七一年の巴里コムミユンを批評した名著『佛蘭西の内亂』のうちに、『勞働階級は、單に出來合の國家機關を掌握して、之を自己の目的に使用する譯にはゆかぬと云つて居る。然らば勞働階級は、自己の解放を完うする爲には、——マルクスに從へば——如何なる國家機關を必要とするであらうか。

『佛蘭西の内亂』より四年後の一八七四年に書いた『ゴータ綱領批評』のうちには、マルクスは一層明白な言葉を以つて此疑問に答へ、『資本主義の社會と共產主義の社會との中間には、前者から後者に推移する革命的變形の行はれる時期がある。そして之には、政治上の過渡期が必要である。そしてこの政治上の過渡期は、即ち無產階級の革命的獨裁政治に外ならぬ』と云つて居る。

然るに此時から四十五年を隔てゝ、この無產階級獨裁政治は事實となつて露國に現はれた。一九一九年三月六日莫斯科に開かれた、萬國共產黨大會に提出した、有名な二十二箇條の網領のうちに、レーニンは次の如く述べて居る。

『□□の□□の絕滅は、全ての社會主義者の目的としたところのものであつて、マルクスは其第一人者であつた。此目的の

實現を見ないでは、眞實のデモクラシーに到達することは出來ぬ。然るに此目的は、唯だソヴイエツト（換言すれば無產階級的デモクラシー）によつてのみ成就することが出來る。何故ならばソヴエツト制度は、勞働者の大衆的組織を、不斷に且つ絕對的に國家の行政に參與せしめることにより、其第一步からして、有ゆる形態に於ける□□の「消滅」の途を備へるものだからである。』

斯ようにレーニンによれば、ソヴエツトの制度こそ、マルクスが半世紀前に豫見した無產階級國家の政治組織に相當するものであつて、『巴里コムミユンは、此方向に歷史的の第一步を踏み出したものであり、ソヴイエツトは、其の第二步を進めたものである』。

レイモンド・ロビンスは、ボルセヰキは、"All power to the Soviets"（一切の權力をソヴイエツトに）といふ五つの言葉によつて革命を成就したと評してゐる。けれどもソヴイエツトは、單に政權獲得の爲の機關に止らないで、舊るき政治組織に代つた新しい政治組織であつた。それは『單に勞働階級は既成の國家機關を掌握して、自己の目的の爲に運用することは出來ぬ』といふマルクスの言葉に應じた、無產階級的國家に特有なる、政治組織の一新模型を闢いたものである。

そこでソヴイエツトの研究は、露國現在の政治組織の研究であると同時に、それはやがてマルクス以來の懸案たる、歷史的問題の解釋であると謂ふことが出來る。

二、ソヴイエツト思想の起原

レーニンは曾て、米國赤十字の代表者、ロビンス大佐に向つて、『……吾々の制度は、諸君の制度を破壞するだらう、何故ならば吾々の制度は、近代生活の根底となつてゐる事實を認めて社會的管理だからである』と語つたことがある。ソヴイエツト主義は一つの『制度』であり、組織である。然らばこの制度の特質は何であるか。レーニンは語を續けて云つて居る——

『卽ち吾々の制度は、今日の眞の力は經濟力である、それ故に今日の社會的管理は、また經濟的の管理でなければならぬ。然らば何うしたらよからうか。例へばベタ地方から吾々を代表して、全國ソヴイエツトに列席するのは誰だらうか。ベタは石油の產地である。石油あつてのベタである。そこでベクの代表者は、石油業によつて選擧されるだらう。彼等は石油事業に從事する勞働者によつて、選擧せられるであらう……』。

ソヴイエツト制度の物質は、選擧區による選擧に對する。產業による選擧である。レーニンによれば、無產階級獨裁とは、

言葉を換へて云へば、ブルジョア・デモクラシー（ブルジョア獨裁）に對する無産階級のデモクラシーであつて、其特質は、前者が階級の對立といふ事實を隱くす地方的の代表を基礎としてゐるのに對して、後者は階級的對立の事實に立脚する、産業的單位による代表を以てすることである。

然しながら、地方的代表に代へるに産業的代表を以てすることが、ソヴイエットの根本思想であるとすれば、此思想は必ずしも、露國の革命によつて産まれたものではない。米國の有名な社會主義者ダニエル・デレオンは、露國に最初のソヴイエットの現はれ以前に、既に地方的の代表に對して産業的の代表を主張して居つた。レーニンは或る社會主義の雜誌に、自分とデレオンとの思想が比較評論してあるのを見て、早速デレオンの小著を借りて一讀して、彼れの先見に驚いた。後日レーニンは、特にデレオンの著述中の一句を取つて、共産黨の綱領に挿入したと云ふことである。

けれども産業的代表の思想は、遙かにオウエンの時代に遡ぼることが出來る。

一八三〇年代は英國の組合運動が、革命的高潮に達した時期であつて、オウエンは五十萬の勞働者を團結した、全國大聯合勞働組合の采配を揮つてゐた。此頃オウエンの下にゼー・イー・スミスなる人があつたが、彼はオウエン派の機關誌『危機』の誌上に、下院を廢止して職業議會を以て之に代え、各職業を選擧單位として、各々其職業の代表委員會を設ける提案を發表したことがある。けれども間もなく、全國大聯合勞働組合は凋落した。そして當年のスミスは、『牧師ゼームス・エリシヤマ・スミスに成り濟まして、『家庭新報』を發行し、綺麗さつぱりと昨非を改めた そしてこの新たなる組織形態に關する、彼れの偶然の議論は、古雜誌のうちに埋沒され、恐らくは再び、彼れの念頭にも浮ばなかつたらう。』（ポストゲート）

この無産階級的組織が二度目に現はれたのは、ポストゲートに從へば、『偶然の出來事ではあつたが、今度は紙の上ばかりでなく、少くとも事實の上に現はれたものであつた』。それは一八四八年の二月、巴里に現はれた。この時共和政治は布告され、街上には再びマルセイエイズの革命歌が歌はれ、ロスチヤイルド男爵は、公けの場所で一勞働者を抱擁した。けれどもブルジヨア共和主義者の臨時政府は、決して安心は出來なかつた。政府の内部にすらも二人の社會主義者がゐた。そして『其一人は、全歐羅巴を通じて、實際的の綱領を有する唯一人者たる、ルイ・ブランであつた』。當時ブランは、勞働階級の下に非常の聲望をもつてゐたので、『彼れが口を開くごとに、哀れな温和派は戰慄

した。若しプランが望むなら、巴里の民衆は、最も亂暴な要求をも强行することを、彼等は知つてゐた』。そこで彼等は、プランを政局の中心から遠ざける爲に、プランに全權を與へて特別委員會を組織させ、勞働組織の立案をさせることにした。この結果として組織せられたのが、彼の有名なルクセンブルク委員會であつたが、此の委員會は『種々なる工場から、職業別によつて選擧せられ、更に其下に設けられた小委員會も、種々なる職業を代表するようになつてゐた』。そして『巴里の無產階級を產業によつて代表した此委員會は、唯だにプランの社會主義的理想を賛容して、熱心に之を支持したばかりでなく、國民議會の選擧に赤色候補者を立てたり、當時頻發した同盟罷工に勞働者側を代表したり、更に或職業では、此委員會は八時間勞働や最低賃銀の如き、前代未聞の勞働條件を强行した』。そしてプルードンも亦た、全佛蘭西の都市に、之と同一の組織を設けることを提議した。

斯くて國民議會が開かれて見ると、それは反動的勢力に滿ちてゐた。そこで七月には遂に社會主義者の反亂となつたが、ルクセンブルク委員は直ちに此渦中に飛込んで、反亂を指導したが、三日間の苦戰の後に反亂は敗れ、委員會は消滅した。『マルクスも其他の何人も、この革命的議會の形態の重要に眼を留めなかつたが、しかも此最初のソヴィエットは、現はれて又た消滅したのである。』

この時から約六十年を隔てゝ、此思想は三度び現はれた――こん度はセント・ペテルスブルグの革命の渦中に、しかも眞實のソヴィエットの形を取つて現はれた。

『流產に終つた彼の一九〇五年の革命中に、セント・ペテルスブルグでは、總同盟罷工を遂行する爲に罷工委員會の組織を見た。そしてこの總同盟罷工の結果は、彼の十月の宣言(憲法制定の約束)の獲得となつた。この罷工委員には、事實上全てのペトログラード罷工者――其内には多くの中產階級的分子をも含んでゐた――の代表者を包括して居つた。然るに革命の進行につれ、此の委員會は、元に一つの罷工委員會だつたといふ事實に基づくソヴィエットの特徵――卽ち地方的性質を失つて來た。といふのは、南方露西亞の農民の代表者をも、加盟せしめるようになつたからである。然し此傾向が充分に發展せぬうちに、十二月には、ソヴエットは全く撲滅されたのである』。(ポストゲート)

勞働階級の代表者の委員會が、今日は無產階級國家の組織を意味するソヴエットといふ名稱を取つたのは、之を以て初めとする。一九〇五年のセント・ペテルスブルグのソヴエットは、社

會民主黨メンセヰキの手に成つたものであるとは、屢々傳へられて居る所であるが、正確に云へば、ソヴイエツトは當年の革命的形勢のうちから、自然に生じた勞働階級の組織である。獨り當年のセント・ペテルスブルグ勞働者ばかりでなく、全ての國の勞働階級は、階級鬪爭の形勢が或る段階に達すると、自然に之に均しい制度を發達する。レーニンはアーサア・ランソムに語つて『私は當初は、ソヴエツトは純粹に露西亞的のものと思つてゐたが、今や明白に、それは色々異つた名稱の下に、到るところ革命の機關となる可きものだと云ふことが明らかになつた』と云つて居る。現に英國の勞働者は工場委員(ショップスチュアード)といふ名稱の下に、ソヴイエツトと同一の組織を自然に發達しかけて居るのである。

けれどもペトログラード當年のソヴイエツトの組織が、大にメンセヰキの力に待つたことは事實であつて、ジノヰエフの如きも『一九〇五年の最初のペトルグラートのソヴイエツトは、メンセヰキによつて組織せられた』と云つて居る。けれどもメンセヰキ自身と雖も、このソヴイエツトが、將來に於ける無產階級國家の組織となることは、頭より意識してはゐなかつた。當時レーニンが、如何にソヴイエツトを觀て居つたかは、頗る興味のある問題であるが、ジノヰエフは『レーニンの生涯と事業』のうちに、次の如く述べてゐる――

『……一九〇五年には、彼はほんの一度か二度、ソヴイエツトを見たゞけであるが、それにも拘らず、私は確信する、彼れがバルコニーの座席の高い所から、この最初の勞働者議會を見下してゐた時に、ソヴイエツト國家の觀念は、早くも彼れの腦裡に現はれかけて居つたに相違ない。恐らくは當時、彼は夢のやうにぼんやりと、ソヴイエツト國家を豫見し、そして此社會主義的無產階級國家の原型が、此國の唯一の權力となるの日を心に描いて居つたらう……

『一九〇五年の當時、レーニンは既に、ソヴイエツトは今日現はれて明日消滅するやうな、一時的の組織ではないと云ふこと、そして其れは幾分勞働組合に似た、日常普通の組織ではなくて、萬國無產階級の歷史の上に、否な全人類の歷史の上に、一新頁を開きつゝあるものだと云ふことを說いてゐた』。

三、ソヴイエツトの發達

一九一七年三月の革命と共に、ソヴイエツトは再び露國に現はれた。フイリツプ・プライスは此等のソヴイエツトの萌芽が、革命の嵐のうちに、如何に簇生したかを敍して斯う云つて居る――

露國の勞働者は、歐羅巴に比類のない悲慘な窮乏の生活をし

て居つた。彼等は長時間の間働かされ、組織的に營養不足の狀態におかれてゐた。そして其工場は、刑事探偵の巣窟であつた。農民の運命も同じ事だつた。露國の土地の半分――然かも良い部分は悉く大地主と、寺院と、帝室とに屬してゐた。彼等は是等の土地に農奴の如くに働かされた。そして其收穫は、ツアーの軍費とする爲に外國に輸出され、彼等は殆んど饑餓に迫つてゐた。この上に尙ほ三年間の戰爭の悲慘を加へて見たならば、最早やツアーは無い、そして警官は勞働者の爲にペトルグラートに拘禁せられて居る、コサツクは民衆側に加擔したといふ風說が全國に傳はつた時の光景は、想像するに難くない。『全く洪水が一時に汎濫した。この時全國到るところ、兵士の群れは集會を開いて相談をし、勞働者は工場に集まり、農民はコムンの建物の周圍に群がつた。全ての人々の口からは、同じ言葉が出た――之から何うしよう?。バルチク地方から太平洋岸に、北極地帶からトルキスタンのオアシスに至る所在に起つた是等の非公式の集會は、何人が召集したのでもない。それは今、廢たれた無用の社會形態の羈絆を破つて迸り出た、自由な精神から生まれたものであつた。彼等は當初は漠然たるものだつたが、間もなく鮮明な形を取り、社會の新組織を建設するに至る可き、最初の粗末な機關であつた。彼等は實に、ソヴィエツトの萠芽たるものであつた』。

『新たなる社會組織の爲に、第一に必要なことは、新たなる規律であつた。そしてソヴィエツトと稱する是等の勞働者、兵卒、農民の非公式の集合は、此任務に當ることゝなつた。ペトルグラードの衞戍兵は、三月革命の第二回目に、以後兵卒ソヴィエツトの副署を有しない命令は、一切服從の義務なしといふ布告をした。……この時工場でも、勞働者は集合を開いて委員を選擧した。委員會の任務は、賃銀を生活費の昂騰に伴はしめることであつて、彼等は工場主の帳簿を檢査し、戰時利得の額を調査した……』

『一九一七年の夏になると、ツアーの正當の後繼者を以て任じてゐた階級――ブルジョア、製造業者、戰時成金――は、彼等の希望から遙かに行き過ぎた革命の打擊から、恢復しかゝつた彼等の絕望的の鬪爭は、コルニフの反亂となつて現はれたがこの反亂によつて、ソヴィエツトの實力は初て明らかになつた。

『兵卒委員會は、其同僚を電信隊や鐵道に入れたので、反革命派の通信は一切杜絕され、之に反して彼等の通信と訓令とは、全國に行き渡つた。斯くて反革命は消滅したが、戰爭は消滅しなかつた。……けれども大なる力平和國際的團結との精神――は露國民衆の心理を把握した。そして此力は、秩序のない無政

府的の狀態となつて現はれてゐた……。若しボルセヰキが此運動の先登に立たなかつたなら、他の何等かの團體がそうしたらう。そして世界的に知られるに至つたらう。そこでボルセヰキは……この運動を導いて、秩序ある近路に向はせた。彼等は、戰爭を利益とする階級のある間は、眞の平和のないことを確信した。そこで彼等は、平和に對する民衆の衝動を捕へて、平和を妨げてゐる階級に向はせた。斯くて革命の當初に、自然に發生した非公式の組織たる兵卒ソヴィエットは、彼等によつて、この衝動が、合理的の要求となつて外界に現はれる可く、近路とせられたのである』。

『勞働者のソヴィエツドも、之と同じ任務を行つた。一九一七年の夏を通じて、ペトログラードと莫斯科の勞働者は、工場委員によつて、生活の改善に努力したけれども彼等が傭主の行動を管理しようとする每に、サボタージといふ反動政策を以て迎へられ、時としては公然、傭主が「神聖なる財產權」を擁護する爲に使つてゐる「白衞軍隊」の抵抗に逢ふことも屢々であつた。混亂狀態は益々甚しくなつた。一團の勞働は、屢々他の一團の勞働者と、缺乏してゐる原料を爭奪した。この間に窮乏は益々甚しくなり、ソヴィエツトは今や、其會員の爲に、手當り次第に何でも掠奪する爲の委員會となる危險に瀕してゐた。この時ボルセヰキは舞臺に現はれた。そして十月に彼等が政權を掌握すると、既に存在してゐた是等の勞働者のソヴィエットに、政治上經濟上の權力を與へて、組織を有しない無產階級の大衆の動員に着手した』。

『農民の方も同樣であつた。一九一七年の夏には、地主は農民の土地委員會に對する反抗運動を組織した。農民中の先進者は、投獄され、或は射殺されたものもあつたが、農民は地主の邸宅を掠奪して之に應報した。十月にボルセヰキが政權を得た頃には、地方は無政府狀態に陷つてゐた。そしてボルセヰキは政權を掌握するや、三月革命の農村に於ける最初の果實たる、彼等の非公式の委員會を合法の權力と認め、是等の委員會に、地主の土地を沒收して、全會社の利益の爲に運用するの權利を與へた。……農民は更に富裕者と貧農とに分れて、互に大地主の土地を爭奪したが、農村のソヴィエットは、貧農階級の武器となつた。斯くて秩序なき反逆の土壤に播かれた種子は、芽を吹いて、秩序と規律の空氣のうちに育つたのであつた』。

斯ようにソヴィエットは、階級鬪爭のうちから自然に產まれた、無產階級の組織であつて、必ずしもボルセヰキの理論に應じて組織せられたものでなく、亦たボルセヰキの手によつて組織せられたものでもない。現に十一月革命の當時まで、メンセ

キキや社會革命黨は何れもソヴイエツトに多數を占めてゐた。けれども何人よりも先に、ソヴイエツトの歴史意義を觀取したものはボルセキキであつた。メンセキキや社會革命黨がソヴイエツトを以つて、單に勞働者と農民との、經濟上の利益を擁護する『日常普通の組織』と見て居つた時、この混亂狀態の裡から自然に生れた勞働者の組織に、無產階級國家の組織を觀取して、『一切の政權をソイヴエツトに』と叫んだものは、唯だボルセキキであつた。そこでソヴイエツトの起原と發達とは、ボルセキキの理論とは何等の關係もないが、無產階級國家の組織としてのソヴイエツトと、ボルセキズムとの間には離すことの出來ない、事實の上の關係がある。從つてポストゲートの指摘してゐるやうに、ボルセキキの沒落は、ソヴイエツトの沒落を意味するものである。そして假りに社會革命黨左翼の如き團體が、今までボルセキキに代つてソヴイエツトの支配を握るとしても、彼等の政策は、既にボルセキキの定めた政策を踏襲して、ボルセキキに倣ふの外はない。現に一九一七年の七月には、ペトルグラードでは、ボルセキキの或人々は獨探であるといふ文書を發表せられた爲め、或工場では、ボルセキキに屬する代表者を解任してメンセキキを選出したが、後ち其虛構たることが暴露となつたので、再びボルセキキを選出したことがある。之と同じく、今後と雖も、或る個人的の理由から、ボルセキキがソヴイエツトの少數となる場合があるかも知れぬ。けれども何人が其跡に代つても、ボルセキキの政策に從ふの外ないとしたならば、理論の上では、ソヴイエツト制度卽ちボルセキズムであると云つても差支ない。

四、ソヴイエツトの組織

斯ようにソヴイエツトとは、今日では特に露國に於ける、無產階級國家の政治組織を指すものであるが、本來の字義は英語のCouncil(委員會又は評議員會)に相當する言葉であつて、帝制時代の樞密院の如きも Gosdarstvennyi Soviet と呼ばれてゐた。ソヴイエツトは詳しく云へば、勞働者(又は農民、兵士)代表者委員會（ソヴイエツト）である。またソヴイエツトとは英語の發音で露音ではサウエートだと云ふことである。

『露西亞社會主義ソヴイエツト聯邦共和國』の各村落と各都市には、農民、勞働者、又は兵士によつて選擧せられた代表者のソヴイエツトがある。大きな都會では、更に各區のソヴイエツトがある。多くの場所では、當初は勞働者のソヴイエツトと兵士のソヴイエツトとが相並んで存してゐたが、三月革命後兩者の間には、段々と聯合委員會の組織を見るようになり、今日では全く一つに合して居る。然し特殊の問題に就ては、勞働者と

兵士とが、別々の集合を開く場合もある。

農村に於ける農民のソヴイエツトは、十一月革命後になつて初めて勞働者及び兵士のソヴイエツトと融合して、共通の大會を開くようになつた。

是等の地方的のソヴイエツトの代表者の集まつたものが、即ち全露ソヴエイツト大會であつて、全露ソヴイエツト大會は、露西亞社會主義共和國の最高權力を代表するものである。ソヴイエツト大會は、其中から全露ソヴイエツト中央執行委員會を選擧する。中央執行委員會は更に、專任執行委員とも見る可き人民委員評議會を選擧する。人民委員評議會は他國の政府に似たものであつて、レーニンは即ちこの人民委員評議會の議長に外ならぬ。

以上はソヴイエツトの組織の大綱であるが、各地方のソヴイエツトと、全露大會との外にも、尚ほ二種類の地方的大會がある。そして其一つは地方ソヴイエツトと全露大會との中間的の組織となつてゐるが、他の一つは系統を別にするものである。選擧の方法に就ても、組織の說明に就ても、多少明かでない點もあるが、今日までに入手し得た材料により、右の順序によつてソヴイエツトの組織の大體を說明しようと思ふ。

五、ソヴイエツトの選擧權

露國の國家組織は、無產階級が反對階級に對して、階級的意志を强行する爲に、組織せられた權力であつて、ソヴイエツトは、即ち其機關であり組織である。言葉を換へて云へば、露國の政治組織は、一面より見れば無產階級の獨裁であつて、更に他の一面から見れば、無產階級のデモクラシーである。そこでこの政治組織たるソヴイエツトの選擧は、無產階級間の完全なる普通選擧と、反對階級に對する選擧權の完全なる剝奪とを基礎とするものである。憲法第六十四條は、ソヴイエツトの選擧、被選擧權を規定して、次の如く云つて居る。

『露西亞ソヴイエツト共和國の市民にして、選擧の當時十八歲に達し、且つ次の種類に屬する者は、男女、宗教、國籍の如何を問はず、又た居住年限等に何等の制限もなく、全てソヴイエツトの選擧權と被選擧權を有する。

(イ)社會に有用な生產的の仕事をして、生活の資を得て居る者。又は是等の人々をして其職業に從事させる爲に、家庭の仕事に從事してゐる者。工業と商業と農業とを問はず、有ゆる性質と種類の勞働者と使用人。私人的收益の爲に他を使用せぬ農民、並にコサクツの農民。

(ロ)ソヴイエツト共和國陸海軍の兵士。

(ハ)以上二種の市民にして、勞働不能となつた者。

憲法と共に露國の基礎法となつてゐる『勞働階級の權利宣言』が、『社會の有ゆる寄生的分子を絶滅し、經濟生活を組織する爲に、萬人は社會に有用な仕事をするの義務がある』と明言してゐる如く、露國に於ては、何等かの社會に取つて有用な仕事をして居る者は、卽ち正當の市民であつて、正當の市民は十八歳以上に達した者は、絶對平等の選擧被選擧權を享有する。そして其仕事が筋肉勞働であるか、智力上の勞働であるか、又は直接生産に關係すると否とを問はぬ。現在では、家庭の仕事は尙ほ社會化せられて居らぬから、婦人は大部分依然として家庭の仕事に從事して居るが、是等の婦人は固より選擧權を有つて居る。

卽ち露國の今日は、尙ほ婦人を家庭の仕事から解放することが出來ぬにも拘らず、是等の仕事は、其他の一切の有用な勤勞と同一の立場におかれてゐる。卽ち價値の評價は革命せられてゐるのである。

年齢の制限は十八歳であるが、地方ソヴィエットは、其地方は事情によつては、中央機關の承認の下に、年齢の制限を引下げることが出來る。

但し上記の種類の何づれかには屬してゐても、同時に

(イ)收益の目的を以て他人を使用する者。

(ロ)自己の勞働から生じない收入、卽ち資本の利子、企業又は土地の所有等より生ずる收入で生活する者。

(ハ)商人、代理者、仲買人其他。

(ニ)各種の宗教の僧侶及び祭司。

(ホ)曾て舊警察の手先き、使用人、特別警察及び秘密探偵を勤めた者、並に舊王朝の家族。

(ヘ)法律上の手續を經て、精神に異狀ある者、發狂者、白痴と認定せられた者。

(ト)破廉恥又は金錢上の犯罪の爲め、法律又は裁判所の判決によつて定められた期間中、選擧權の行使を停止せられた者。

これだけの者は、固より選擧權をも被選擧權をも有しない。

選擧の時日、手續等の詳細は、各地方のソヴィエットによつて定められる。又た職業上産業上の團體が、ソヴィエットの選擧に關與する方法に就いても、憲法は唯だ、中央執行委員會の訓令に基づき、各地方ソヴィエットが其詳細の手續を定めるとだけ規定し、各地方に於ける特殊な狀況を斟酌するの餘地を殘して居るが、實際には、略ぼ一樣の制度が行はれてゐるようである。卽ち都市に於ては、各工場が選擧の單位となつて居り、農村では、純無産階級を代表する貧農委員會が、村民の選擧資格の有無を決定する機關となつて居る。

ソヴイエツトを組織する代表委員の數は、都市と農村とでは、標準が違つて居る。卽ち

（一）都市の場合は、選擧有權者一千人に對して、代表者一名を選出する。そして代表委員の總數は、五十名以上、一千名以下である。

（二）地方（農場、小村、村、野營、人口一萬以下の都市）では、住民百人に對し一名の割合で代表者を選出する。そして代表委員の總數は三名以上、五十名以下とする。

右の割合で選擧させられた代表委員會が、卽ち其都市又は村落のソヴイエツトであつて、各そのソヴイエツトは、選擧によつて執行委員會を組織する。執行委員會の人員は（一）村落のソヴイエツトでは五名以下、（二）都市のソヴイエツトでは、代表委員五十名に對する一名の割合で、三人以上二十五人以下である。但しペトログラードと莫斯科では、四十人以下となつて居る。

都市のソヴイエツトは、少くとも一週に一度、地方のソヴイエツトは少くとも一週に二度會合する。ソヴイエツトの會合は、執行委員會によつて召集せられるものであるが、代表委員半數の要求があつた場合には、執行委員會はソヴイエツトを召集しなければならぬ。そして執行委員會は、ソヴイエツトに對して、全責任を負ふものである。

ソヴイエツトは、各々其地域内に於ける最高の權力を有するが、小村落の場合には、出來得る限り、有權者の總會によつて、直接に行政上の問題を決定することゝなつて居る。そこで此場合には、代表によらぬ直接のデモクラシーが行はれる譯である。

ソヴイエツト及びソヴイエツトの執行委員會の權限に就いては、憲法は次の如く規定して居る。

『ソヴイエツト權力の管轄機關（州、縣、郡又は村の）並びに代表者ソヴイエツトは、次の如き權限を有つ。

（イ）一つ上の機關より發した一切の布告の執行。

（ロ）其地方の敎化上經濟上の生活を發達せしむ可き一切の適切なる施設。

（ハ）全ての純地方的問題の解決。

（ニ）其地域内に於けるソヴイエツトの、一切の行動を統一すること。

六、莫斯科ソヴオエツトの選擧方法

都市ソヴイエツトの選擧は、稍々複雜な代表方法が行はれて居るので、ソヴイエツト選擧の概念を明かにする爲に、その標本とも見做す可き、莫斯科ソヴイエツトの選擧の手續を述べて

見る。但[illegible]、多少の相異のあることは勿論であるが、大體に於いて、之に純じた代表方法が行はれてゐるものと見て差支へない。

（一）二百人乃至五百人の勞働者を使用する工場からは、一名の代表者を選出する。五百人以上の勞働者を使用する工場では、五百人毎とに一名。二百人以下の勞働者を使用する工場は、他の小工場と聯合して代表者を選出する。

（二）組合員二千人以下の勞働組合からは、一名の代表者を選出する。組合員五千人以下の組合は二名。組合員五千人以上を有する組合は、五千人に對して二名、五千人を增すごとに一名、但し一組合から選出する代表者は、十名を超えることは出來ぬ。莫斯科勞働組合評議會からは、五名の代表者を選出する。

（三）區ソヴイエツトは、各々二名の代表者を送る。

（四）各政黨よりは、合計三十名の代表者を出だす。この三十名は、各政黨の黨員數に比例して割當てられること。但し、其政黨が、黨員中に勞働團體の代表者四名以上を有する場合に限る。露西亞人以外の五個の全國的社會黨（猶太人社會主義同盟、波蘭社會黨左翼、波蘭及びリスアニア社會民主黨、レツト社會民主黨、猶太人社會民主黨）は、各々一名の代表者を送ること。

右は一九一八年四月の選擧に於ける代表方法であるが、斯くて選出せられる代表委員の總數は八百二名であつた。選擧は工場の場合には、各工場にて從業勞働者の總合に於いて、組合の場合は組合本部に於ける總會に於いて、行はれる。區ソヴイエツトの場合は、各區の有權者總會の席上で選擧せられるものである。そして何れの場合にも、選擧の時日は少くとも二日以前に、有權者に通知せしめなければならぬ。即ち工場の場合には、工場の廊下の目のつく場處には、總て張出される。又た組合の場合には、其組合の役員選擧の集會を通知するのと、同一方法によつて通知しなければならぬ。そして有權者三分の二以上の出席により、選擧總會は成立したものと見做される。

右の代表方法によると、勞働者は莫斯科の市ソヴイエツトに、四重に代表せられてゐる譯になる。即ち、先づ第一には（一）ソヴイエツト共和國の市民として——市のソヴイエツトに代表される。但し此場合にも、選擧は選擧區によつて行はれないで、出來得る限り、毎日仕事の爲に集合してゐる工場に於て、同僚の間から選擧する。そこでソヴイエツト代表者の多數は大小の工場、大販賣所、鐵道、教育上その他の機關の如く、一定の勞働者の集まつてゐる所から選出される。莫斯科の場合に

は、政府の使用人も同樣である。職業の性質上、工場による選擧の行はれぬ場合には、各々其所屬勞働組合の本部に總會を開き、この總合に於て選擧をする。リボン製造工（家内工業）、喫茶店、飲食店勞働者、商店員、配達人、家庭使傭人、電氣技師等の如きは其例である。要するに此代表の方法は經濟上の事實と實生活そのものを、有の儘に反映するものであつて、無產階級的デモクラシーが、ブルジョア・デモクラシーと根本的に異る第一の特徵である。ブルジョア・デモクラシーの下では、選擧は、實際生活と全然無關係に、獨斷的に切り離された、選擧區と稱する人爲的の單位によつて行はれる。然るにソヴイエツトの選擧は、特に選擧の爲に人爲的に造られた單位ではなくて、經濟生活の必要から生じ、そして現に日々其機能を行つてゐる實生活上の單位によつて行はれる。前者は選擧の終了と共に、事實消滅する單位であるが、後者は選擧した跡までも、永久的に存續する單位である。地理上の選擧區は、階級の對立といふやうな、實生活上の事實を抹殺するものであるが、產業による代表は、實生活上の活きたる事實を、其儘にソヴイエツトの中に反映しようとするものである。更に其代表者は、僅かに五百人を代表するものであり、且つ日常經濟上の機能を共にしてゐる同僚を代表するものである。彼等はソヴイエツトに選擧せられる以前も、選擧せられてから後も、其選擧者と生活を共にする。そして若し彼が選擧者の意志を代表しなくなつた瞬間には、何時でも辭任することが出來るのである。

工場によつて選擧が、ソヴイエツト選擧の基調であることは、代表の比例に於ても、第一位に置かれてゐることによつても知ることが出來る。即ち都市に於ける代表の比例は、選擧人千人に對する代表者一名が原則となつて居るが、工場に於ける選擧は、此一般原則よりも二倍の代表者を出だしてゐる譯であつて、都市ソヴイエツトのうちには、工場勞働者は、最も有力に代表せられて居るのである。

次に勞働者は、

（二）特殊な經濟上の資格、即ち生產者並に消費者として――市のソヴイエツトに代表される。即ち勞働組合、並に勞働評議會として代表せられて居るそこで勞働者は、之だけでも既に二重若くは三重に代表せられて居ることになる。斯ように勞働者が、工場として代表せられた上に、尙ほ其產業全體の組合として代表せられるのは、露國の經濟組織のうちに組合が重要な要素をなして居るからに外ならぬ。ソヴイエツトに於ける組合代表者は、他の專門技術家と共に、ソヴイエツトの下に設けられる。國民經濟委員會、勞働者產業管理委員會等の如き重要

な經濟組織の構成に任じてゐる。以上二様の代表に加へて、勞働者は更に

(三) 地域によつて分かれたソヴィエット——自治團體の資格で市のソヴィエットに代表せられてゐる。卽ち區ソヴィエットに基づく選擧がそれである。前項の二様の代表では、尙ほ無産階級の全部を包容することが出來ぬ。現に母として、又た世帶持ちとして家庭の仕事に從事してゐる大部分の婦人は、右の代表方法では、全く除外せくれて居る。更に其他にも、工場以外に孤立した手工勞働者がある。そこで第三種の選擧方法に於ける選擧區は、單に選擧の爲の一時的の區劃であるが、この場合には、區ソヴイエットといふ永久的の基礎がある。そこで『プラウダ』紙は、此選擧方法を以て、『自法團體の資格』に於いて勞働者を代表するものであると說明して居るが、ポストゲートは之を以て、寧ろ消費者としての無産階級を代表するものと見做して、次の如く論じてゐる。

『區によつて選擧する——卽ち地域的基礎によつて選擧すると云ふと、如何にも在來の國家の哀れな遺物の如くに見える。若し在來の國家の遺物とすれば、悲む可き遺物である。けれども其れは、確かに國家の外觀と機能とは失つてゐる。然り彼等は別の、そして一層有用な機能を行つてゐる。卽ち彼等は消費者を代表してゐるのである。勿論、消費者の代表としては不充分ではあるが、兎も角も、それは可なりよく消費者としての男女を代表し、斯くて婦人に選擧權を賦與してゐるのである』。

この代表方法の目的が、明白に、無産階級を消費者として代表するにあつたか否かは、固より明らかでない。けれども假りにソヴィエットの選擧を、工場と勞働組合とに限るとすれば、現に社會に取つての、缺く可からざる勤勞に從事してゐる大多數の婦人が、ソヴイエットから除外せられることは明かである。そこでポストゲートの指摘してゐるように、生産者の勞働組合以外に、ツヴイエットの如き政治組織を認めたサンヂヤリズムが行はれた場合には、其の無産階級獨裁は、同時に多數の無産階級婦人に對する、男子の獨裁を意味することを忘れてはならぬ。次に第四の代表方法は、『プラウダ』の註釋によれば、無産階級を

(四) 社會主義的階級意識に比例して代表するものである。但しこの代表方法は、人員に於ても意義に於ても、さまで重要ならぬものであつて、要するに各政黨の重要人物が、確實にソヴイエットに選入れるようにしたものである。各政黨は、無産階級の方に有する黨員の多少により、自然、ソヴイエットの

うちに代表せらる譯であるが、或場合には、黨の首腦者たる人物は却つて落選することがある。其結果、各政黨の意見が充分にソヴイエツトの中に現はれぬ恐れがあるのと、今一つは、各政黨の主要人物は、特に經驗と知識をもつてゐる人々であるから、其協力は、過渡期に於ける建設の事業に欠くからざるものであるといふ理由で、直接に政黨を代表する方法を設けたものである。

以上は一九一八年四月の莫斯科市ソヴイエツト選擧の代表方法であつて、以後多少の改變を見たかも知れぬが、大體に於いて今日も同樣の方法が用ひられてゐる。尙ほ現行憲法の布告せられたのは、同年の七月十日であつて、ソヴイエツトの選擧に關する規定は、この莫斯科ソヴイアツトの選擧を基礎としたものである。

右の代表方法による一九一八年四月の選擧の結果は、三百九十四の工場其他から、八百三名の委員が當選した。そして四月の二十三日の最初の會合に出席した七百三十三名の委員の黨派別は、次表の通りであつた。

ボルセヰキ	三五四
準ボルセヰキ	一五〇
メンセヰキ	七三
準メンセヰキ	九
社會革命黨左翼	四〇
準社會革命黨左翼	一一
合同社會民主黨	五
無所屬社會民主主義者	一
社會革命黨中央派	六一
社會革命黨右翼	五
無政府主義者	五
無所屬	九

村落に於けるソヴイエツトの選擧は、都市ソヴイエツトの選擧に比して極めて單純である。最少の單位は、即ちミールである。ミールは土地を共有する謂ゆる共産村落が、今尙ほ其儘に存してゐるものであつて、各ミールには革命以前から、各々ミールの農民の會議（スホード）があつた。今日ではミールには農民によつて選擧せられた村ソヴイエツトのある所もあるし、選擧權を有する農民全體の總會によつて行政を行つて居る場合もある。ここで農村では、一樣にソヴイエツトの組織があるのは郡（ウオーロスチ）である。但し郡（ウオーロスチ）ソヴイエツトは、或場合には、村落、農民總會で選出せられた代表者から成る普通のソヴイエツトであるが、或場合には、村ソヴイ

エットの代表者から成る大會であることもある。

七　ソヴィエット大會の組織

以上の選擧方法によつて、都會には市又は町のソヴィエットが組織され、農村には郡（ウオーロスチ）ソヴィエットの組織を見たが、斯く組織せられた都市及び農村のソヴィエットは、更に大小の地域に從つて、地方的の大會に組織せられて居る、ソヴィエットの地方的大會には次の四の種類がある。即ち

（一）郡（ウオーロスチ）大會

（二）縣（ウエーヅド）大會

（三）省（グベルニヤ）大會

（四）州（オーブラスチ）大會

であつて、其内、郡（ウオーロスチ）の場合は、前述の如く大會である場合と、單に郡（ウオーロスチ）ソヴィエットである場合とがある。右四種の大會の内で、第一と第二とは農村ソヴィエットの代表者のみから成り、第三と第四とは、農村ソヴィエットと都市ソヴィエットとの代表者によつて組織とせられるものである。

（一）郡（ウオーロスチ）大會は（郡大會は、郡内の全ての村ソヴィエットから、代表委員十人に對する一名の割合で選出せられる代表者から成つてゐる。ソヴィエット委員十名以下の場合も、一名の代表者を送ることが出來る。

（二）縣（ウエーヅド）大會　縣内にある全ての）郡（ウオーロスチ）ソヴィエット（又は大會）は、住民一千人に對する一名の割合で、縣大會に代表者を出だす。縣大會代表者の總員は三百名を限度とする。縣（ウエーヅド）大會は前にも述へた通り、農村ソヴエットの大會であるが、縣内に於ける人口一萬以下の小都會からは、同じく此大會に代表者を送ることゝなつてゐる。又た人口一千以下の村落のソヴィエットは、聯合して代表者を選出する。

（三）省（グベルニヤ）大會　郡（ウオーロスチ）ソヴィエットは、縣（ウエーヅド）大會を組織すると同時に、一方には、その省（グベルニヤ）内の都市ソヴィエットと共に、省（グベルニヤ）大會を組織する。省大會には、郡（ウオーロスチ）ソヴィエットからは、住民一萬人に對する一名の割合で代表者を送り、都市ソヴィエットからは、選擧人二千人に對する一名の割合を以て代表者を選出する。そして省大會の代表者總員は、三百名を限度とする。又た省大會の開かれる直ぐ前に、縣（ウエーヅド）大會が開かれた場合には、省大會に送る代表者は、郡（ウオーロスチ）ソヴィエットでは選出しないで、この縣大會に於て選擧せられた。但し代表者の割合は郡ソヴィエッ

トで選擧する場合と同一である。

(四)州(オーブラスチ)大會　州大會は省(グベルニヤ)大會も同じく、都市農村兩方のソヴィエツトの代　者によつて組織する。但し都市からは直接に、都市ソヴィエツトの代表者を送るが、農村からは、縣(ウエーツド)大會が代表者を送ることゝなつて居る。卽ち縣大會からは、住民二萬五千人每に一名の割合で代表者を選出し、都市ソヴィエツトからは、選擧人五千人每に一名の代表を選出する。そして州大會代表者の總員は、五百名を限度とする。

又た州大會の開かれる直ぐ前に、縣(ウエーツド)大會が開かれないで、省(グベルニヤ)大會が開かれた場合には、州大會に送る可き代表者は、縣大會から選出しないで、省大會から選出する。此場合にも、代表者の割合には變りはない。この場合も、また前項の省大會の場合に縣大會の代表者を以て郡大會の代表者に代へる規定も、要するに、最も新しい人民の意志を代表せしめる爲であつて、革命的時期に於いて、斷えず流動しつゝある人民の意志の變化を、精密に反映、代表することは、ソヴィエツト制度の神髓とするところである。

以上四種の大會は、それ〳〵執行委員會を選擧するが、其人員は(二)州(オーブラスチ)及び省(グベルニヤ)の大會では二十五名以內、(二)縣(ウエーツド)大會は二十名以內、(三)郡(ウオーロスチ)大會は十名以內である。執行委員會は、各々その大會に對して全責任を負ふ。執行委員會は自己の發表により、又は人口の三分の一以上を代表するソヴィエツトの要求により大會を召集するが、何づれの場合にも州大會は少くとも一ケ年に二回、省大會は少くとも三ケ月に一回、郡大會は少くとも每月一回開催せられなければならぬ。各大會、並びに大會の閉會中は各執行委員會は、其の地域に於ける最高の權力を有つ。

八、中央權力の組織

以上四種のソヴィエツト地方大會の他に、尙ほ全露ソヴィエツト大會がある。憲法第二十四條には、『全露ソヴィエツト大會は、露西亞ソヴィエツト共和國の最高權力である』と規定せられてゐる。

全露ソヴィエツト大會は、次の如き代表方法によつて組織せられて居る。

(一)都市ソヴィエツトより選出せられる代表者。選擧人二萬五千人に對する一名の割合。

(二)省(グベルニヤ)ソヴィエツト大會より選出せられる代表者。人口十二萬五千人に對し一人の割合。

若し全露大會の召集せられる前に、省大會が開催せられぬ場合には、縣（ウエーヅド）大會に於いて、全露大會に送る可き代表者を選擧する。又た全露大會の直ぐ前に、州（オーブラスチ）大會の開かれた場合には、州大會に於いて代表者を選出する。何づれの場合にも、代表の比例は、人口十二萬五千に對する代表者一人の割合である。

全露大會は、全露中央執行委員會を選擧する。執行委員會の人員は二百名以下である。全露大會は、少くとも一年に二回開催され、執行委員會は自己の發表により、又は人口の三分の一以上を代表するソヴイエットの要求により、臨時大會を召集する。執行委員會は、全露大會に對して全責任を負ひ、大會の閉會中は、露西亞ソヴイエット共和國の最高の權力を代表するものである。

斯ように勞農露國の國家權力を代表する最高の組織は、ソヴイエツトの全露大會であるが、この全露大會は、以上の說明によつて、普通に考へられてゐるよりも、遙かに直接に人民の意志を代表してゐることが分かる。ソヴイエツトと全露大會との中間には、四種の地方的大會が存して居り、上級大會での代表者は、下級大會から選出されるといふところから、多くの人々は、郡大會の代表者によつて縣大會が組織され、縣大會の代表者によつて省大會が組織され、省大會の代表者によつて州大會が組織され、更に州大會の代表者によつて、全露大會が組織せられるかの如くに考へて居る。從つて無產階級の意志は、極めて間接な方法によつて全露大會に代表せられて居るに過ぎぬと謂つて居る人々がある。けれども事實は全く之に反して居り、都市ソヴイエツトは直接に全露大會に代表者を送るものであつて、間接に代表せられるのは、唯だ農村のソヴイエツトだけである。それすらも多くの人々の考へて居る如く、三重四重の復雜な間接代表となつて居るものではないのである。

要するに農村ソヴイエツトの地方的大會には、二つの異つた系統がある。其一つはウオーロスチ（郡）、ウエーヅド（縣）の兩大會を經て、オーブラスチ（州）大會に至るものであるが、此系統はオーブラスチ大會で行き止まりになつて居り、特別の場合を除く外全露大會には續いて居らぬ。然るに此系統と全く離れて、グベルニヤ（省）大會がある。大會に代表者を送るのは、原則としては此のグベルニヤ大會である。そしてグベルニヤ大會を組織するウオーロスチ（郡）は、前にも說明した通り、村ソヴイエツトの大會たることもあるが、普通のウオーロスチソヴイエツトたる場合もある。そこで全露大會の代表は、農村の場合に於てすらも、多くの人々の考へてゐる程に間接的なも

のではない。

斯ように全露大會は(一)都市ソヴイエットの代表者と、(二)省(グベルニヤ)大會の代表者とから成立つて居る。そして省大會は、郡(ウオーロスチ)ソヴイエットの代表者と都市ソヴイエットの代表者とから成立つてゐる。そこで都市ソヴイエットは直接にも、また省大會を通じて間接にも、二重に全露大會に代表せられることゝなるが、實際には、果して二重に代表せられ居るものか否かは明かでない。都市ソヴイエトから全露大會に送る代表者は、選擧人二萬五千人に對して一人の割合であるが、選擧人二萬五千人を有する都會は、少くとも人口十萬の大都會であつて、人口十萬級の都會は、全露と通じて其數は幾何もない。そこで選擧人二萬五千人以下の小都市ではどうなるか、此點は、憲法の條項に明記せられて居らぬ。

地方的大會の場合にも、一名の代表者を送るだけの人にも有しないソヴイエットは、聯合して代表者を選出することになつてゐるが、右の場合には同一の規定のないところを以て見ると、直接に大會に代表者を送るのは、選擧人二萬五千以上の大都會のソヴイエットであつて、それ以下の小都市では、單に省大會に代表者を送るものかも知れぬ。そして直接大會に代表者を送る選擧人二萬五千以上の大都會は、省大會には代表者を送らぬものと假定すれば、都市ソヴイエットの二重代表といふことは無くなる譯である。

然しながら全露大會のうちに、都市ソヴイエットが二重に代表せられてゐるものとしても、必ずしも不思議はない。勞農露國に於ける『國家』とは、無産階級的革命の組織であつて、この國家の最高機關たる全露ソヴイエット大會は、常に無産階級の革命的精神によつて指導せされてゐなければならぬ。そして無産階級革命の前衛隊となつて居るものは、都會の無産階級である。そこで如何なる代表の方法を取らうとも、革命が維持せられて居る以上は、都會の革命的無産階級が事實上、國家機關に優越を占めてゐるものと見なければならぬ。そこで第一の問題は、革命は維持すべきか否かといふことであつて、代表方法の如きは、寧ろ第二義の問題たるに過ぎぬ。

假りに何等かの方法で、都市ソヴイエットの二重の代表は避けられて居るにしても、尙ほ都會の無産階級と農村の無産階級とは、全露大會のことに全然同一に代表せられて居るものではない。即ち都市ソヴイエットが直接に全露大會に代表せられて居るに對して、農村ソヴイエットは、省(グベルニヤ)大會に於いて、都市の無産階級の代表者と接觸し、其革命的精神を注入せられた上で、初めて全露大會に代表せられてゐるのであ

る。オーブラスチ大會に、都市ソヴイエツトが參加するのも、同じ理由に基づくものである。

然しながら代表の割合は、都市も農村も、略ぼ同一となつて居る。都市では標準は選擧者の數であるが、農村では住民の數である。即ち都市では選擧人二萬五千人に對する代表者一人、農村では人口十二萬五千に對する一人であつて、此比例は全露大會ばかりでなく、省（グベルニヤ）大會の場合も同一である。そこで露國の農民の家族の多いといふこと、選擧權を有しないものがあると云ふことを計算に入れると、人口五人に對して一人の選擧人のあるものと見做して大差ない、從つて都市の代表と略ぼ同一の割合にあると云ふことである。

九、中央執行委員會と人民委員

全露ソヴイエツト大會の選擧する中央執行委員會は、『ソヴイエツト共和國に於ける、立法、行政、及び管理の最高機關』であつて、憲法第三十二條以下數條は、其任務を次の如く規定してゐる。

『中央執行委員會は、勞農政府と共一切の機關を指揮し、立法上行政上の行動を調整し統一し、ソヴイエツト憲法並びに全露大會、及び中央政治機關より發した布告の適用を監督する。

『中央執行委員會は、人民委員評議會又は其他の部門から提出する布告の草案、又は其他の提案を審議批准する。中央執行委員會はまた、自己の布告及び規則を發布する。

中央執行委員會の今一つの重大な任務は、人民委員評議會の選任である。

『中央執行委員會は、露西亞社會主義聯邦ソヴイエツト共和國の一般事務に當らしめる爲め、人民委員評議會を任命する。中央執行委員會はまた、人民委員評議會の各部門の事務に當らしめる爲め、人民委員會と名づくる種々なる部門を任命する。』

人民委員會は、他の國家に於ける政府に類似したものであつて、人民委員評議會は、內閣會議に相當し、評議會の議長は首相に相當すとも見る可きものである。中央執行委員會は、單に是等の機關を任命するばかりでなく、其委員は、各々是等の機關のうちに働らくものである。

『中央執行委員會の各員は、自ら部門（人民委員會）のうちに働らき、又は中央執行委員會の特殊な任務に就く。』

斯ように人民委員評議會は、全露ソヴヱツト大會中央執行委員會の、更にまた專任執行委員とも云ふ可きものであつて、一般國家事務の處理に任ずるものである。此目的の爲に人民委員

評議會は種々なる布告、命令、規規等を發布し、一切の必要な施設を行ふ。一般政策に關する人民委員評議會の重要な布告や命令は、緊急の場合の外は、中央執行委員會に附議せらる可きものであつて、此手續を經ぬ一切の命令や布告に對しては、中央執行委員會は、何時でも取消又は中止を命ずることが出來る。

人民委員評議會（ソフイエット）は「議長外十八名の人民委員（コムミサール）より成り、人民委員評議會の下には、次の十八部門がある。

（一）外務。（二）陸軍。（三）海軍。（四）內務。（五）司法。（六）勞働。（七）社會事業。（八）教育。（九）郵便及び電信。（十）民族。（一一）財務。（一二）交通。（一三）農業。（一四）工業及び商業。（一五）食糧。（一六）國家監査。（一七）國民經濟委員會。（一八）衛生。

十八名の人民委員は、各々この一部門を擔任し、各人民委員の下には、人民委員評議會によつて選任された委員會がある。この委員は、大抵中央執行委員のうちから任命せられるものである。そこで人民委員はこの委員會の委員長であるが、人民委員といふ稱呼は、人民委員評議會の委員たる委員長のみに限られて居る。

人民委員は、其部門に關する一切の事柄については、其下にある委員會に附議するが、自己の意見に從つて最後の決定を與へることが出來る。人民委員の決定が委員會の意見に反した場合には、委員會又は其一員は、人民委員評議會又は中央執行委員會に上訴する權利がある。

人民委員評議會は、全露大會及び中央執行委員會に對して全責任を負ひ、人民委員及び其委員會は、人民委員評議會と中央執行委員會とに對して責任を負ふ。

一〇、ソヴイエット制度の特質

以上はソヴイエット及びソヴイエットを基礎とする政治組織の大綱であるが、レーニンは此組織を目して、彼のマルクスが半世紀前に、『勞働階級の經濟的解放を遂行すべき政治形態が、初めて發見せられた』と云つた、その政治形態に相當する政治組織であると云ひ、カメネフはソヴイエット制度を『無產階級獨裁政治』の方面から觀て『資本主義より共產主義への過渡期に於て、支配階級たる無產者の階級をして、能く社會主義的改造に對する搾取者の、一切の抵抗を粉碎することを得せしめる國家組織であり、政治形態であるといひ、更にブハーリンは、ソヴイエット制度を『無產階級デモクラシー』の方面から觀て次の如く云つて居る。

『勞働者の獨裁によつて生れたソヴイエツト共和國に於ては、行政は全然新大な基礎の上に立つてゐる。それは資本家に從屬し、そして民衆からは獨立してゐる役人の組織ではなくて、中央政府は、勞働者と農民との大なる階級的組織――即ち產業的組合、工場委員會、勞働者及び農民の地方委員會兵卒及び水兵の團體――の上に樹立せられてゐる。中心からは、無數の導線が四方八方に擴がつて、州ソヴイエツト、都市ソヴイエツト、地方ソヴイエツトから、最後に工場及び職場のソヴイエツトに繋ながつてゐる。

『斯くて吾々は、資本家的共和國のそれとは、全然異つた制度を實現した。それは單に、非生產者が投票權を褫奪されて居ると云ふだけではない。それは單に、勞働者と農民とによつて全國の政治が行はれてゐると云ふだけのことではない。それが資本家的共和國の制度と、全然異つて居る所以は、就中、ソヴイエツトの政府は組織せられた民衆と不斷の關係を保つて居る、斯くて多數の人民は斷えず國家の管理に參與してゐるところにある。全ての組織せられた勞働者は、何等かの影響を與へてゐる。といふのは勞働者が、一ケ月に一度か二度、自分の信託する人を選擧するといふだけのことではなくて、產業的組合は、自ら自己の組織の計畫を立て得るからである。そして是等の組合の立てた組織の立案は、之に關係のあるソヴイエツトや經濟委員會によつて審議され、そして共採用する所となれば、ソヴイエツト中央執行委員會の批准を經て、直ちに法律となるのである。斯くて產業的組合や工場委員會は、新たなる生活形態を建設する、共用の事業に參與するのである。

『資本家的共和國に於ては、民衆の活動が制限されゝば、それだけ國家の地位は安全となる。何故ならば無產階級の利害は、『資本家的國家と矛盾してゐるからである。然るに民衆の獨裁權を具現するソヴイエツト共和國は、民衆の支持なくしては、一瞬間も存立することは出來ぬ。否な其力は、民衆が自覺すればするほど、そして民衆が工場に於て、全ての都市と村落とに於て、有ゆる方面に活潑に行動するようになればなるほど、益々加はつて來るのである。

英國の記者アーサー、ランソムもソヴイエツト制度に對して同じ觀察を下してゐる。

『ソヴイエツトの組織は、事實上の立法者と人民の間の緊密な接觸を保障し、美しい理論の上ばかりでなく、事實上、人民は自己の立法者たることを保障するように、それは亦た、反對の方面に於ける內部の相互聯絡の途を備へて居る。

即ち圓の上の最も遠い周邊にある分子も、能く中心に影響を有すると同時に、中心はまたソヴイエツトを通じて、周邊の分子に影響を及ぼす。ソヴイエツトの制度は、人民委員評議會の有ゆる些細な行動も、各地方ソヴイエツトによつて、共地方的事情に應じて判斷し註釋せられる制度である。ソヴイエツト以外の如何なる政治の形態も、氣候を異にし、人種を異にし、平野あり、高原あり、山地のある、この廣大にして千差萬別な露國の西のするが如く、法律を自由に解釋することの出來る、地方的自治を與へ得るものはない。コオカサスの牧人も、ウラルのコサツクも、エニセイの漁師も、均しく全露會議に參列することが出來る。そして彼等が原則に就いて批准を與へる法律は、或者に取ては大き過ぎ、他の者に取つては小いさ過ぎるような、鋼鐵製の籠の如きものではなくて、それは各々のソヴイエツトが、各々にその自治體の特殊な必要に從つて、任意に形を與へ得る道具であることを知つてゐる……』

そして革命の前日に、共産主義者の豫め描いてゐた政治組織の理想、矢張り斯くの如きものであつた。十一月革命の一週間前に、ボルセヰキ中央委員の一人たるカラ！ハンは、來る可き政治組織を豫想して次の如く語つてゐる。

『ソヴイエツトを通じて現はれる人民の意志に、鋭敏に感應する緩かな組織であつて、地方的勢力に、極度の活動を許すものである。現在の臨時政府は、地方の民主的意志の活動を妨げて居ることは、尙ほツアーの政府と同じである。新社會に於ける自發的行動は、上からではなくて、下から來るであらう……政府の形態は、露國社會民主勞働黨（ボルセヰキ即ち今日の共産黨）の組織に倣はれるであらう。全露ソヴイエツト大會の頻繁な會合に對して責任を負ふところの、新しい中央執行委員會は、即ち議會となり、各省には大臣の代りに委員を置き、ソヴイエツトに對して直接に責任を負ふであらう：：』（ジヨン、リード。）

近來ソヴイエツトは全く官僚主義化せられたと傳へるものがある。この風說の出所は、第八回全露ソヴイエツト大會（一九二〇年）に『中央及び地方に於ける、ソヴイエツト機關の活動に關する取締、並に官僚主義、防止の鬪爭に就いて』といふ議案が討議せられたことであつて、この事實が誇大に傳へられたものである。ソヴイエツト大會に此問題が上提されたことは、寧ろ露國の共産主義者が、官僚主義化の危險に對して如何に敏感であり其防止の爲に、如何に細心の注意を拂つて居るかを示したものである。ジノヰエフは大會に附議した報告書のうちに、ソ

ヴィエットが官僚主義化する危険のある原因を數へて、(一)經濟上荒廢と物資の缺乏、(二)ブルジョワ專門家の採用、(三)民衆の無教育の三つを擧げた後に、次の如く論じてゐる。

『今やソヴィエットは、專ら國内の管理行政の爲に、民衆を動員する機關とならなければならぬ。斯くの如き行政上の見地より、吾々は一九一七年に、ソヴィエットの意義と任務とに就いて云はれたことを想起しなければならぬ。即ちソヴィエットは、民衆の最も自由にして且つ最も組織ある行動の出來る機關であつて、其中には、より下層の階級から、不斷に新勢力が注入せられ、民衆はソヴィエットに於いて、法律を作ることゝ、同時に自己の作つた法律の執行を學ぶのである。故にソヴィエットは、規則正しい改選が絕對に必要である。又たソヴィエット及び其執行委員會は、規則正しく其總會を開く可き規定が必要なばかりでなく、是等の集合に於ては、單に宣傳上の問題を討議するばかりでなく、最も重要な行政上、經濟上の問題をも討議す可き規定が必要である。相當の理由なくして、一ケ月間集合を怠つた執行委員會は須く解任しなければならぬ。又た執行委員會の集合は公開して、全ての勞働者と農民の傍聽を許さなければならぬ。更に大都會や重要な工業中心に於ては、執行委員會の會場は、種々なる勞働町、工場、兵營等に於て、交る〳〵開會せらるなければならぬ。ソヴィエット生活の重大問題は、適當の時期に、一つその決定以前に、ソヴィエット委員の協力の下に開かれる大衆の集合に於いて討議せらる可きである。……』

二、ソヴィエット制度の實際

諸國の無產階級と共產主義者とか、ソヴィエット制度に期待するところは、右の通りであるが、實際に運用せられてゐるソヴィエットは、果してこの期待に背かぬであらうか。ソヴィエット制度に對する實見者の批評は、固より同一でないが、可なり多くの中立的觀察者の報告は、ソビエット制度の實體に於いて、前に掲げたアーサア、ランソムの批評に共通するところのあることは爭はれぬ事實である。けれども其れと同 に、吾々は全く反對の批評をも聞くことが出來る。こゝには其一例として、特に日本の中產階級的思想家の間に信任のある、バアトランド、ラッセルの觀察を掲げて見る。ラッセルは其最近の著書『ボルセヰズムの理論と實際』の一節に、ソヴィエット政治を次の如く描いてゐる。

『私は露西亞に往く前には、新しい形態の代議政治に關する、興味ある實驗を見る積りであつた。成る程、私は興味ある實驗を見たには相違ないが、それは代議政治の實驗ではな

かつたのである……吾々が研究しようとした事の一つは、ソヴイエツト制度は、果して此點に於て、議會制度に優つてゐるかどうかと云ふ事であつた。

『然るに吾々は、全然何等の研究をも成し得なかつた。と云ふのは、ソヴイエツト制度は、既に死したる制度だからである。何も自由なる選擧の制度は、都市に於ても地方に於ても、共產黨に多數を與へない。そこで政府の候補者を勝たせぬ間に、擧手によつて行はれる。そこで政府に反對の投票をする者は、…………

第二には、共產黨員でない候補者は、印刷が出來ない。印刷工場は全て國家の手にあるからである。第三には、彼は如何なる集會で演說することも出來ぬ。何故ならば會場は全て、國家に屬するからである。……それにも拘らずメンセヰキは、莫斯科ソヴイエツトの千五百の議席中、約四十を獲得した。……實際に於て、彼等は競爭した所では悉く勝利を占めたのである。

『……地方では方法が少し違つてゐる。農村のソヴイエツトは共產黨で作り上げることは不可能である。何故ならば、少くとも私の見た農村では、共產主義者のゐないのが通例だからである。そこで私は農村で、彼等は如何にウオーロスチ（郡大會）やグベルニヤ（省大會）に代表せられるかと尋ねて見た。すると彼等は異口同音に、吾々は全然代表者を出だしては居らぬといふ答を得た。……そして若し彼等が共產黨以外のものを選擧したならば、當選者は鐵道のパスが貰へない、從つてウオーロスチ又はグベルニヤのソヴイエツトに參列することが出來ぬ。之が衆口一致の答であつた。……』

吾々はラツセルの名譽の爲に、其誠實を疑はないで、記述の全部を其儘に信用したいと思ふ。否な一步を進めて、反革命派の宣傳者以外には、如何なる實見者も觀ることの出來なかつた事實を、この大哲學者が見て來た功績を稱へたいと思ふ。其一例を擧げて見ると、ラツセルによれば、農村には——少くともラツセルの見た農村には——共產主義は殆んど皆無であつた。然るに非共產主義の代表者に對しては、ソヴイエツト大會への參列が不可能であるとしたならば、事實上全ての代表者は大會に參列出來ない筈である。それにも拘らず大會は開かれて居る。否なラツセル自ら、大會を見たと云つてゐる。少くとも此不思議は、ラツセルに非ざれば到底見ることの出來ない事實である。

ここでラツセルの哲學者的觀察力の優秀を證據立る爲に、吾々は特に、英國勞働團體の代表者として、ラツセルと時を同うし

て露國を視察し、そしてラツセルの同國人たるチョーチ、ランズベリーの觀察を對照したいと思ふ。ランズベリーは其近著『露國實見記』のうちに、當時恰かも選擧の行はれてゐた莫斯、科ソヴイエツトに就いて、次の如く云うてゐる。そしてラツセルがソヴイエツトの選擧に就いて記述して居るのは、同じ莫斯科に於いて、同じ時の選擧であつたことも忘れてはならぬ。

『……これ等の諸工場を見て廻つてゐるうちに、私は丁度前日、莫斯科ソヴイエツトの選擧が行はれたといふことを聞いた。そこで私は、共産黨員以外のものは選擧することが出來なかつたといふことと、投票權の自由な行使を妨げる爲に、威嚇(テロリズム)が用ひられたといふことは、果してほんとかと尋ねて見た。私の尋ねた程の人は、一人として、曾て威嚇(テロリズム)なんかの行はれたのを見なかつた。そして彼等は悉く私に、意見の如何に拘らず、苟も投票の資格のある者は、誰でも選擧されることが出來ると云ふことを保證した。投票は記名であつて無記名ではない。然し英國であるように、傭主階級が人々を選擧することが出來るか、乃至は英國で行はれてゐるような、直接間接の賄賂で恐る可く腐敗の影響を與へることが出來るのだつたなら、私はこれ(記名投票)には寧ろ反對する……』

同じ時、同じ場所に於て起つた、同じ事實が、同じ英國人の眼に、これだけの相異を以て映じたことは、如何に說明す可きであらうか。之に對する解釋は唯だ一つである。——大學教授にして大哲學者たるラツセルは誰れから其答を得たか。そして勞働組合機關紙の主筆にして、勞働團體の代表者たるランズベリーは、誰れから其答を得たかといふことである。吾々はラツセルが何人から其答を得たかを知らぬが、誰たランズベリーが、現に工場で働いてゐる勞働者から、其答を得たことを確實に知つて居る。二人の間の此觀察の相異は、二人の實見者の『眼』の相異ではなくて、何處から見たかと云ふ『眼の位置』の相異でなければならぬ。言葉を換へて云へば、ラツセルとランズベリーとの記述の相異は二人の誠實の問題ではなくて、無產階級獨裁を中心として戰はれてゐる階級と階級との鬪爭に對して、ラツセルとランズベリーとが、其いづれの陣營に立つてゐるかと云ふ問題に外ならぬ。

一二、ソヴイエツト制度の將來

ジノヰエフは第八回、全露ソヴイエツト大會に附議した報告のことに、過去三年間に於けるソヴイエツトの進步に就いて斯う云つて居る。

『……無產階級獨裁の三ケ年間に、ソヴイエツトは長足の步をした。十一月七日の直後には、ソヴイエツトは第二反抗

の機關であり、權力把握の機關であつた。第二期は略ぼウランゲルに對する勝利に至る迄の時期であつて、此時期に於てはソヴイエツトは第二戰爭の爲に民衆を一般的に動員するの機關であつた。今や第八回大會の開催に當つて、第三の時期に入つたものである。』

然らばこの第三期に於ける、ソヴイエツトの新職分は何であらうか。ジノヰフは『ソヴイエツトは專ら、國内の管理行政の改造の爲めにする民衆の動員である』と答へてゐる。

露國革命に於けるソヴイエツトの職分は、第一には、無產階級の手に權力を獲得するの機關となり、第二には、之によつて實現された無產階級の革命的獨裁を維持し、第三には、斯うして階級的對立を絕滅し、眞に共產的基礎の上に新たなる經濟組織の建設を成就することである。この三つの職分は、固より截然と、時間的に區別することは出來ぬが、革命の前日から、四ケ年を經過した今日に至る間に、ソヴイエツトの主なる職分が漸次に變化したことは爭はれぬ事實であつて今日のソヴイエツトは、革命の前日に、『一切の權力をソヴイエツトに』と叫んだ當時のソヴイエツトでないばかりでなく、最早や今日は、反對階級の強制と粉碎とのみと唯一の機能とするものでもない。斯ようにソヴイエツトの職分の變化は、要するに實際の社會に於ける、階級的對立の關係に起つた變化を反映したものである。即ち反對階級の力による抵抗が減少し更に反對階級そのものが漸次に無產階級に同化吸收せられるに從つて、ソヴイエツトの強制力としての職分は漸次に減する。そしてそれと同時に、ソヴイエツトを構成する分子の上にも變化の生ずべき筈である。

ソヴイエツトが、共產主義者の主張するように、民衆の意志に、最も銳敏に感應する制度であるとしたならば、斯ような實社會の上に起つた變化は、容易にソヴイエツトの構成の上に反映すべき筈だからである。そこでソヴイエツトが、破壞的の職分を主とした當時には、勢ひソヴイエツトには、革命的の實力を有する要素のみが代表せられてゐた。即ち當時のソヴイエツトは專ら兵卒と工場勞働者のソヴエツトであつた。然るに其後に至つては、漸次に、其他の社會的に有用な勤勞に從事してゐる要素も、次第にソヴイエツトのうちに代表せられるようになつたのである。

共產主義者の理論に從へば、ソヴイエツトは、無產階級獨裁の國家組織である。言葉を換へて云へば、反對階級に對する強制の組織である。從つて階級の對立が消滅して、全社會が無產階級に同化吸收せられるにつれ、組織せられた強制力としてのソヴイエツト、國家組織としてのソヴイエツトは、漸次に其職分

を失つてゆく筈である。即ちソヴエツトの組織は、革命的過渡期を代表する政治組織に外ならぬものである。

　そこで組織せられた強制力としての、ソヴイエツトの職分が全く無用となつた場合には、其跡には、唯だ無産者の組織――即ち勞働組合――のみが殘つて、玆にサンヂカリズムの理論が其儘に實現せられるか、それとも尙ほ、直接生産や分配の範圍に屬せぬ共同事務を處理する爲に、生産者の組織以外にソヴイエツトの組織が存續するものであるが。之は理論上からは甚だ興味ある問題であるか、實際の上では、尙ほ可なりに遠い將來に屬する問題であつて、吾々は寧ろ、之を周圍の形勢と事實上の必要とによる自然の發展に任じてよいと思ふ。

近時の憲法問題に就いて

法學博士　美濃部達吉

毎年議會期になると憲法問題に關する事が二つ三つは必ず起らないことはないが、今度の議會期にも、亦例に依つて種々の事柄に就いて憲法違反であるとかないとかいふ問題が、政爭黨爭のさま〴〵の問題に交つて、議會の內外に於て爭はれた。今此等の問題の中稍重要なるものの二三を取つて簡單なる解說を試みようと思ふ。

一　陪審制違憲論

原內閣の政綱の一として今期の議會に提出せらるべく豫期せられた陪審法案は、樞密院の審議が手間取つた爲に、遂に議會の間に合はないで終つた。樞密院の委員會で陪審法案を通過せしむることを拒んだ理由は、更に公表せられない爲に之を知ることは出來ぬが、傳ふる所に依れば、陪審法案を憲法違反なりとすることが其重なる理由の一であつたといふことである。其眞僞は自分の知らぬ所であり、況んや之を違憲なりとする理由が何れに在るかは、更に伺ひ知らぬ所であるけれども、若し世に傳ふる所が眞であるとすれば、恐らくは右の二點を理由として陪審制違憲論が主張せらるゝに至つたのであらうと信ぜられる。

第一點は憲法第二十四條の規定で、同條には「日本臣民ハ法律ニ定メタル裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權ヲ奪ハルヽコトナシ」となつて、その裁判官と言つて居るのは裁判を行ふ者が官吏であることを豫期して居るものである、然るに陪審員は官吏ではなく人民から選ばれるもので、之を以て裁判に與らしめることは、憲法の認めない所であるといふに在る。

第二點は憲法第五十七條及第五十八條の規定で、五十七條には「司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フ」とあり五十八條には「裁判官ハ法律ニ定メタル資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ任ス」とある之に依れば憲法の趣意とする所は司法權を以て裁判所の行ふべきものとなり、而して裁判所は天皇の官吏である裁判官を以て組織するものたらしめようとすることに在

ることは明瞭である。天皇の名に於て之を行ふといふのは、司法權が本來天皇の大權であつて、裁判官は唯天皇の御委任を受けて、天皇に代りて此大權を行ふ者であることを示すものであつて、而して天皇の名に於て大權を行ふ者である以上は必ず天皇の任命に係る官吏でなければならぬことは當然である。人民から選ばれた陪審員が司法權に關與することは、此の憲法の趣意に反するものであるといふに在る。

此の二つの論點の中、其の第一點は敢て重きを置くべきものとも思はれぬ。第二十四條の規定は、民事に在つては何人にても其權利の保護を求むる爲に民事訴訟を起す權利が有り裁判所は其裁判を拒絶することが出來ぬことを示し、刑事に在つては何人も正式の裁判手續を經ないで刑罰を認められない權利が有ることを示して居ることが、其の主眼とする所である。勿論憲法には裁判官と曰つて居つて、裁判を爲す者が官吏であることを示して居るけれども、是は敢て其主眼として居る點ではなく單に此文字のみに依つて憲法が陪審制度を禁止して居るものと解するのは、餘りに文字に拘泥するものである。憲法の所謂裁判官は唯 judge とか裁判機關とかいふだけの意味に解するのが穩當であらう。假りに其官といふ文字が重要の意義を含んで居るとしても、今度の陪審法案には、陪審に附せらるることを以て單に被告人の權利となし其義務とはしなかつたのであつて若し被告人が陪審に附せらるることを欲しないならば、自由に其權利を拋棄して陪審に附せられず裁判官のみに依つて裁判せらるることが出來るやうにせられて居るのであるから、裁判官の裁判を受くる權利は寸毫も害せらるることはない。陪審員は唯被告人が自ら陪審に附せらるることを望んだ場合にのみ裁判に參與するのである。それであるから、少くとも今度の政府の原案の形に於ては、如何に文字に拘泥した解釋を取るにしても尙第二十四條の規定には抵觸することの疑を生ずべき餘地は無い。

疑を生ずるのは唯其の第二の論點殊に第五十七條の規定に在る。第五十七條を、若し正面から解釋するならば、疑もなく司法權は天皇の名に於て裁判所之を行ふことを明言して居るのであつて、若し裁判所にあらざるものをして、司法權を行ふの任に當らしむるならば、此の規定の正文に抵觸するものであることは言ふまでもない。問題は唯陪審員は果して司法權を行ふのであるや否やの二の點に在る。若し陪審員は司法權を行ふものであることが肯定せられ、而も陪審員は裁判所を構成するものでないことが疑を容れぬとすれば、陪審制度が憲法違反であるとする議論の生ずることは、必ずしも怪しむに足らぬ。

之に對する辯駁として、司法權とは單に法規の適用を宣言する作用のみを意味するものであつて、法規の適用せらるべき事實を認定することは司法權の作用ではない、陪審員は單に事實の認定權を有するばかりであつて、法規の適用は專ら裁判官が決定するのであるから、陪審員は司法權を行ふものではないと主張する者が有るけれども、是は到底首肯せらるべき說ではない。司法權といふ語は言ふ迄もなく立法權及び行政權に對する語であつて、judicial power に相當すべき觀念である。其語は場合に依り種々の意義に用ゐらるることが有つて、必ずしも一定不動の意義を有するものではないが、憲法第五十七條は所謂司法權が民事及び刑事の裁判權を意味するものであることは、略異論の無い定論であり、少くとも刑事裁判權が司法權の中に含まるるものであることは、恐らくは何人も異論の無い所であらうと思ふ。而して刑事裁判とは何かと曰へば、各個の犯罪者に對して課すべき刑罰を決定し之を宣告する作用であると謂ふことが出來る。犯罪者に對して課すべき刑罰を決定するには、二つの行爲を必要とする。一つは犯罪事實を認定する行爲であり一つは其認定せられた事實に對し刑罰法規の適用を決定する行爲である。此の二つは等しく刑事裁判を構成する要素であつて二者相俟つて裁判行爲を爲すべきものであることは言ふ迄もない。凡そ裁判と言へば必ず善惡邪正を鑑別して、惡を惡とし、邪を邪として、各之に相等すべき應報を課するものでなければならぬ、されぱこそjustice の名が有るのである、而して善惡邪正を鑑別するには事實の眞を窮めて、犯罪事實の有つたか否か如何なる犯罪事實が有つたかを闡明することが其第一の要件である、換言すれば犯罪事實の認定は刑事裁判の最も主要の要素であつて、裁判が正しいか否かは主として此點に於て定まるのである。若し盜賊に非ざる者を捕へて盜賊なりと認定するならば、假令法規の適用にはいつては論理の精を極め更に批難の容るべきものが無いとしても、それは許すべからざる誤判であることは勿論である。此の故に司法權は裁判所の行ふべきものであると曰へば其意味は犯罪事實の認定も法規の適用の決定も共に裁判所の權限に屬すべきことを意味して居ることは更に疑を容れない所である、若し新に陪審制度を採用して犯罪事實の認定は專ら陪審員の權限となり、裁判官は唯陪審員の認定した事實に就いて之に適用すべき法を宣言するに止まるものとするならば、それは疑もなく司法權を裁判官と陪審員とに分配するものであつて、陪審員は司法權の一部を行ふものと言はねばならぬ。若し之に反して、事實の認定は司法權の作用でないとすれば、それが立法權でないことは勿論であるから、必ず行政權の

作用でなければならぬ。併ながら、何人が陪審員を以て行政權の機關であるとするものが有らうか。又現在の裁判官が事實の認定と法規の適用とを併せ行つて居るのを以て、司法權と行政權とを兼ね掌つて居るものとなすものが有らうか。

要するに陪審員の職務が司法權の一部を爲すものであることは、一點の疑もない所であつて、之を否定するのは餘りに甚しき詭辯である。而して陪審員は固より官吏ではなく、民間より出る者であつて、隨つて憲法に所謂裁判所の構成員たるものではない。裁判所は天皇の名に於て司法權を行ふものであるから必ず天皇の官吏を以て組織するものでなければならぬ。第五十八條に裁判官云々と曰つて居るのも間接に之を表明するものである。

それであるから、自分の信ずる所に依れば、若し憲法第五十七條の規定を嚴格に文字通りに解釋するならば、陪審制度は正しく此規定に抵觸するものである。陪審制違憲論の主張は此點に於て多少の道理ある主張と言はねばならぬ。

併ながらそれにも拘らず、自分は陪審制度を以て我が憲法の許容する所であつて、決して憲法違反を以て目すべきものではないと主張するものである。

凡そ法律學に於て最も忌むべきは、單に成文法規の文字のみを以て法を解釋する根據となし、事柄の正しきや否や、公益に適するや否やを問はないことに在る。凡て法は社會的正義を維持し、社會の公益を全うする爲に存するものであつて、其の第一の要件は正義と公益とに適することにあらねばならぬ。法の解釋適用に付ても亦正義と公益とを第一の標準となすべきものであつて、成文法規の文字は之と相並んで唯其の標準の一たるものに過ぎぬ、決して其の唯一の標準たるべきものではない。單に成文法規の文字のみに依つて法を見出ださんとする者は、自分の條文法學又は文典法學と稱せんと欲するもので、最も排斥すべき法律學の外道ともいふべきものである。殊に憲法の如き簡潔なる文字を以て國家統治の基礎原則を定めたものに在つては、他の總ての法律にも倍して文字に拘泥すべからざることの最も著しいものである。陪審制違憲論の如きも亦實に憲法の文字のみを以て憲法解釋の標準と爲さんとすることより生じた謬論であつて、正しく條文法學の弊に墮したものと言はねばならぬ。

若し憲法の文字のみを標準として、其文字通りの意義に解し之に抵觸するものは凡て違憲であるとするならば、現に行はれて居る事柄で憲法違反と看做さねばならぬものは殆ど數ふるに暇なき程である。就中若し陪審制が憲法違反であるとすれば同

じ理由で、地方自治制度の如きも亦憲法違反と言はねばならぬ。憲法には何れの條にも地方自治團體の權利を認めたものはなく、而も一方に於ては統治權は天皇之を總攬することを規定して居るのであつて、若し憲法の條文に拘泥して解するならば天皇の大權に基かないで、地方自治團體が獨立に統治權を行ふことは憲法に抵觸するものでなければならぬ。警察署長が警察犯の即決處分を行ふが如きも正しく裁判所に非ざる者が司法權を行つて居るのであつて、等しく憲法違反でなければならぬ。それよりも一層明瞭に憲法に抵觸するものには憲法第四十七條が有る。同條には「兩議院ノ議事ハ過半數ヲ以テ決ス」となつて、それには何等の例外をも認めて居らぬ、然るに憲法と同時に制定せられた議院法には衆議院に於ける議員除名の決議及び各院に於ける讀會省略の決議には出席議員三分の二以上の多數を要するものとして居る、是は明白に同條の規定に抵觸するものである。其他憲法五十五條には「國務ニ關ル詔勅ハ國務大臣ノ副署ヲ要ス」とあるにも拘はらず公式令には爵記、位記、勳記には國務大臣の副署を要しないものとして居り、同條には又「國務各大臣ハ天皇ヲ輔弼シ云々」とあつて內閣制度を認めて居ないにも拘らず、實際には內閣制度を採用して居る。凡そ此等の事柄が憲法の文字には抵觸するにも拘らず尙適法のものとして何人も之を怪まないのは憲法は決して文字に拘泥して解釋すべきものではなく、正義と公益とに適する限度に於て必要なる例外を設くることは、憲法の始より許容する所であるからである。

我が憲法は固より陪審制度を設くることに付いて何等の規定を設けて居らぬ。それは恰も地方自治制度に付いても、內閣制度に付いても何等の規定を設けて居らぬと同樣である。併ながら之を以て憲法が陪審制度を禁止して居るものと解するのは、不當に憲法を窮屈ならしむるものである。我が憲法は萬世一系の天皇國を統治するの主義を經とし、十九世紀以來諸文明國に共通の制度となつて居る立憲主義を緯として編成せられたものであつて、此の大主義に背かない限度に於ては、憲法は努めて自由に之を解釋し以て其の健全なる發達を希圖することが爲政者の任務でなければならぬ。陪審制度の如きは、君主主義の國たると民主主義の國たるとを問はず、世界の諸立憲國に於て殆ど普ねく行はれて居る制度であつて、是が我が憲法の精神に反するものでないことは、恰も地方自治制度が違憲なりと言ふべからざると同樣である。

陪審制度は固より大なる長所が有ると共に、見逃すべからざる弱點をも含んで居るもので、之を採用するに付いては愼重な

る考慮を要することは當然であるけれども、其考慮は專ら陪審制度の實質上の可否に在るべきであつて、憲法違反であるや否やの如き問題は宜しく考慮の外に置いて然るべきである。

二　司法官定年制

司法官定年法に付いても、或は之を違憲なりとする者が有つたけれども、是も等しく文字解釋の弊に陷したもので、徒に憲法の文字に拘泥するの誤である。

憲法に「裁判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルノ外其ノ職ヲ免セラルルコトナシ」とある「職」といふ文字は官の意であつて、官名だけを終身保有せしむるならば、職は免じても憲法違反でないといふやうな説を爲すのは、等しく文字論の弊を受けて居るもので、取るに足るべき議論ではない。憲法の規定は司法權の獨立の爲に裁判官としての官職の安全を保障してゐるのであつて、單に官のみならず職に付いても猥に免せられないことを要求して居るものであることは言ふ迄もない。若し任意に休職退職を命ずることが出來るものとすれば、司法權の獨立は全く破られて、その憲法に違反するものであることは勿論である。併ながら憲法は決して何等の例も外なく無制限に終身裁判官の職を保有すべきことを要求して居るものではない。此の點に於ても正義と公益とに適する限度に於て法律を以て之に多少の例外を設くることは憲法の許容する所と認むべきである。此意味に於て司法官定年法は決して憲法違反と看做すべきものではない。

三　一事不再議説

今期の議會に於て、選擧法改正案が憲政會と國民黨との雙方から提出せられ先づ國民黨が否決せられ次いで憲政會案が審議に上つた時、突如として田川君から是は一事不再議の原則に反するもので憲法違反であるとの説が提起せられ、尾崎君も亦之に贊成し、一時大に議場を騷したが、是は田川、尾崎兩君の誤解であると信ずる。田川君の發議に對して、議長は兩案の內容が異なつて居るから別々に審議するが當然であるといふことを以て答へたけれども、此答辯も亦正當とは認め難い。

誤解の原因は一事不再議といふ語に在る。憲法は決して一事不再議の原則を定めて居るのではない。唯「兩議院の一に於て否決したる法律案は同會期中に於て再び提出することを得ず」と曰つて居るだけで、卽ち否決せられたのと同一內容の法律案の提出を禁止して居るのである。それであるから若し今度の例に付いて言へば、憲政會案が未だ提出せられない前に國民黨案が否決せられたとすれば、其の後に於て憲政會案を提出しようとしても、それは許さるべきではない。假令兩案の內容が多少異つて居つて、例へば國民黨案は年齡二十一歲以上の普通選擧案であり、憲政會案は年齡二十五歲以上で且つ獨立の生計を要件

とする案であるとしても、尙等しく選擧權の擴張を目的とする法案である以上は、憲法の意義に於ては同一法律案と認むべきもので、其提出を許すべきではない。それは何故かと言へば等しく選擧權擴張に關する法律案である以上は、前の法律案の審議中に其修正案として提議を爲し得べきものであつて、其修正の提議も無くして否決せられたならば、修正意見も無かつたものと見るべきであるからである。それであるから一議員の質問に對して議長が選擧法改正案が否決せられた後更に內容を異にする別個の選擧法改正案が提出せらるれば之を受理すべきものであると答へたのは、正當ではない。

併ながら今回の場合は之とは異つて、二個の法案が同時に提出せられたのであつて、卽ち國民黨案の未だ否決せられない以前に、憲政會案も既に議案として成立して居つたのである。二の法律案が共に議案として成立して居る場合には、其の全く內容を同じうするものでない限りは、一の法律案が否決せられたが爲に他の法律案も當然消滅するものではない。それは恰も或る法律案に對し二個の修正意見が提出せられた場合に一の修正案が否決せられたとしても、他の修正案が消滅するものでないと同樣である。憲政會案及び國民黨案は共に現行の選擧法に對する修正意見の如きもので、而も其修正が互に異つて居るのであるから、雙方とも既に議案として成立して居る以上は、一方が否決せられたとしても、他の一方は尙ほ存在して居るもので、別に之を審議し其可否を決しなければならぬことは當然である。

四　豫算返附說

豫算返附說は是迄も少數黨に依つて主張せられたことが有り今度の議會にも見はれた所であるが、是は憲法上許さるべき所ではない。豫算の返附は豫算協贊權の抛棄か又は豫算の否決かの何れかに歸するものであるが、何れにしても不法の行動と認むべきものである。

豫算に對する議會の協贊權は立法に對する協贊權とは著しく性質を異にして居る。立法に對しては議會は全く自由であつて之を否決するに付いても何等拘束せらるゝ所はない。それは何故かと言へば立法は議會の議決に依つて始めて成立するものであるからである。豫算に對する協贊は之に反して國の歳入歳出に對する同意であつて、而して國の歳入歳出は決して議會の議決に依つて始めて成立するものではない。國家は法律命令の定むる所に依り必ず一定の歳入を有し又或る程度の歳出は是非共必要とするものであつて、此の限度に於ては議會は必ず之に協贊すべき義務を有つて居るのである。それであるからこそ、憲法第六十七條には所謂改定費目の制限を設けて議會は之を廢除刪減することの出來ないものとして居るのである。議會の豫算返附論は實に此の協贊義務を無視するものである。況んや豫算表中には皇室經費の如き議會の協贊を要しないものを包含して居るに於てをやである。

經濟眼で觀た日本現時の政治

法學博士　堀江歸一

議會の墮落

文明先進諸國の議會は所謂言論の府であつて、言論の力で、萬般の問題を決しようとする。眞劍に言論を鬪はして、事の可否を定めるのは勿論少數黨にも出來るだけ言論發表の機會を與へて、之を記錄に留め、又國民に深く知らせて、輿論を左右させることに努める。斯の如くして立憲政治の長所は始めて發揮され國論の存する所は必ず何かの形で政治の實際に現はれて來る次第であるのに、我國の議會は唯議員の頭數を澤山支配し得る政黨が頭數の少ない政黨を壓倒して、勝手次第の所業をする場所に過ぎないのであつて、言論の如きは、表面の形式を整へる爲めに鬪はされるに止まり、殆ど之に三文の價値すら與へるを許さない。反對黨の議論に對しては、之を傾聽するなり、之は速記錄を通じて、世間に公表させるなりするだけの雅懐が政府黨に依つて示されゝば、甚だ結構であるが、斯う云ふ事は藥りにしたくも見出されず、少しでも自分の黨派に攻撃を加へるような人が演壇に立てば、殊更に喧噪を事とし、劣等極まる言語や態度を縦にして、其人の演說を妨害したり、立往生させたりすることなどは、殆ど日常の出來事と爲り遂に鳥獸の啼聲を眞似て、議場を騷がす者の輩出したなどは、誠に我國議會の品位を傷けるの甚だしきものと云はざるを得ない。

此間英吉利でボナー、ロー氏が健康不良の故を以つて、政界を退くと云ふことが、ロイド、ヂョージ、氏を通じて、議場に公表された際に、ヂョージ氏が功績を稱揚したのは勿論であるが、昔も今も、ロー氏の政敵として渝らないアスキス氏が口を極めて氏の人格や、事業を激賞し、一日も早く健康の恢復することを祈る旨を演說したと云ふのは、何と云ふ美しい事であらうか、唯之を一場の儀式と思つて、輕く見流すのは、大間違である。人々に此公心があり、此人間性があつて、立憲政治は始めて全きを得るものである。我國が憲政を布いて既に三十餘年に及びながら、却て政治家に公心なり、人間性なりの乏しく爲

る趣のあるのは、何としても吾人の了解に苦しむ所である。

政權の濫用

議會の品位が斯く墮落したと共に、議會に於て論じらるゝ問題の性質も亦甚だ劣等と爲つた觀を免かれない。滿鐵問題は如何であるか、阿片問題は如何であるか。滿鐵會社の紊亂は世間の噂を半分に聽いても、隨分劇しい程度に上つて居る。或る炭坑を高値に買收したとか、或る汽船を頗る途方もない高値を拂つて、會社の所有にしたとか、或る化學工業會社を滿鐵の經營に移すに當つて、瀕死の工業會社を蘇生させるやうな有利な條件を以つてしたとか云ふやうなことは、滿鐵の當事者をして云はせたならば夫れ／＼辯解の餘地のあることであるかも知れないが、今後嚴正な司直の審理の進むに隨つて、或は橫領なり、或は背任なり、恐る可き罪科の摘發されることがありはしないであらうが。而して斯る罪科が滿鐵當事者一個の裁量で行はれて居つたものであれば、問題の及ぶ所は必ずしも廣しとしないが、若しも彼等の背後に政治上の權力者があつたり、又彼等の橫領したと明に爲つた金錢が多少なりとも權力者の懷に這入つたやうな事實が證明されたならば、忽にして政治上の重大問題たらざるを得ない道理である。

阿片問題にしても、近頃檢擧された大連民政署長の如き、一屬僚だけの意思で、あれだけ關係の廣汎な不正事件が行はれ通せるものであらうか。此屬僚の背後に、何人か今少し有力な大官が潛んで居つて、手足同樣に屬僚を操り、彼の如き思ひ切つた不始末を演ずるに至らしめたものではあるまいか。

滿鐵問題にしても、阿片問題にしても、之を摘發したのは、何れも、議會であり、政府は議會が摘發した事件に對して、國民の疑惑を一掃するに足りるだけの辯明をして居らない。否議會に於ける質問應答に徵すると、政府の是等問題に對する態度は甚だ不鮮明のものであつて、却つて國民の疑惑を深からしめるの虞れなしとしない。殖民地の行政が本國に比較して、自ら異なるものゝ多いのは、已むを得ない所であつて、現に英本國には一つも專賣の行はれて居る事實がなく、官業の範圍も亦限られて居るのに、印度には多くの專賣や官業が行はれて、財政上に大なる便宜を與へて居ると云ふ事に徵しても、殖民地の行政に特殊の點があり其立て方が本國に行はれるものと異なるのを當然とする次第である。然し印度の專賣や、其他の官業には必ず不正事件が伴うかと云へば、決してさう云ふことはなく、監督も餘程嚴重であれば、官紀も振肅されて居るやうである。特許會社が特許權として得る所を大ならしめようと云ふ考から、政府の大官を買收したり、立法部の議員に賄賂を贈つたりする

ような事實は屢々吾人の耳にする所であつて、自ら政治の腐敗する原因であると認められる。然し幾ら保護事業であり、殖民地事業であるからと云つて、必ず腐敗するとか、政治上の喰物に爲るとか、運命の定まつて居る譯のものではなく腐敗する傾があるとしても、一方に之を掣肘する力もある可き筈である。

然るに我國では是等の方面には必ず腐敗が付き纏つて居り、**滿鐵問題にしても、阿片問題にしても、今後司法上の處置の發展するに随つて如何なる成行と爲るか、**測り知れない狀勢のあるのは何故であらうか、而して斯る事件の背景として、政權濫用の事實の指摘されるに至つては、明に政治の腐敗を語るものであつて、吾人の甚だしく遺憾とする所である。

政治家と御用商人

政治上の腐敗は一つの政黨が議會に多數の勢力を擁して、永く政局に當つて居る時に發する。尤も其政黨に相當の教養あり、品格があつたならば、多數の威を藉つて、橫暴を逞うする道理もない、多數黨であれば、多數黨として信用を博するだけの配慮もすれば、態度の愼重を保たさせるのであるが、烏合の衆にも類する我國の政黨には是れだけの修養はない、多數黨の威力を以つてしたならば、天下に何事の成らざるものなしと云ふ考で、亂暴狼藉の所業をする。此際斯る多數黨の橫暴に對して、掣肘を加へるのは少數黨の任務であつて、少數黨の爲す所、正義に適ひ、輿論の力の之に加はるに至つたならば、多數黨の勢力を根柢から覆すに至ることも、望みなしとしない。唯少數黨が飽くまでも自重自省して、**正義に與することに心掛けなければならないのである。**

原内閣が衆議院に絶對多數を擁する上に今や貴族院にも其勢力を及ぼして、研究會を懷柔し盡し橫暴を極めて居るのに對しては、心ある者の憤慨し、慨嘆して、已まない所である。隨つて在野黨である憲政會が或る點まで、世間の輿望を收め來つたのは爭う可からざる事實である。政友會が所謂珍品問題を擔ぎ出して、憲政會總裁に手傷を負はせようとしたのは、詰り斯る憲政會の人氣恢復に對する嫉妬心の然らしめたものと見られる。

而して此問題も政友會の大小陣笠が始め騷ぎ出した程の重大事件ではなかつたとしても、尙ほ憲政會が御用商人や成金者流を近づけて、彼等に寄附金を要請し、彼等が或る條件を付けて、寄附金を出せば、會の總裁は其條件を遵守することを誓約して、之を受けると云ふような事實は極めて明瞭と爲つた。五萬圓と云ふ比較的些細の金額であつたればこそ、内田某の方でも大した條件を提出しなかつた、唯尾崎氏や島田氏の選擧を援助して呉れるな位の處に止めたかも知れないが、見方に依れば、

此條件は憲政會總裁をして會の領袖に對して、不信の所業を敢てせしめるものとも見られよう。五萬圓位の端下金で、政友を賣るやうな政黨の首領は金次第では何をするかも知れないと云ふ感を成金者流に懷かしめるのは勿論であつて、金の出し樣に依つては、政黨の綱領も、主張も幾らでも塗り替へられるか、測り知る可からざる譯である。折角在野三年の逆境に居つて、民望を恢復しかけた憲政會が金權に左右される政黨であると云ふ證據を暴露するに至つたのは、誠に愚の骨頂である。

政黨に對する國民の反感

政友會が富豪、資産家、中流以上の農民の利益を代表する政黨であり、會の領袖なり、又首領なりが其れ〴〵或る富豪と特殊の關係を持つて居ることは、爭ふ可からざる事實であつて、政黨の領袖と云つた所で、富豪の方から見れば、手飼ひの番犬位にしか考へられて居らないかも知れない。隨つて俸給衣食者であるとか、無産者であるとか、勞働者であるとか云ふやうな自ら富豪に對して利害の異なつて居り、又境遇の違つて居る者は政友會の如き政黨のある爲めに、却つて各々の利益を蹂躙されることはあつても、之を保護される望みはない。原內閣が從來物價問題の解決に就て、如何なる方針を取つたかと云へば、盡く國民多數の期待に背き、彼等の生活の安定を傷つるに終つたではないか。勞働問題に就ても亦同樣であつて、今期の議會に於てこそ、一方には勞働組合法を制定し、他の一方には第一回勞働會議で成立した諸種の決議を我國實際の立法に適用するであらうと、世人一般に期待して居つたのに、兩者共に政府の手に依つて、暗から暗に葬られた。而して之を葬り去る理由とし、政府は何と云つて居るかと云へば、勞働問題は不景氣の爲めに、下火に爲つたと。何ぞ知らん、險惡な性質を有する勞働爭議は此頃に爲つて、諸處に起りつゝあることを。原內閣が此實情を知らぬが如くに裝つて、國民生活に至重の關係を有する問題を解決しないと云ふのは、要するに多數國民に對して、自ら不信の所業を敢てするものであり、又金權者階級に媚びて、金權政治を行ふの外に、何ものゝあるを知らない醜狀を暴露したと評するのみである。

政友會が金權政治を行ふ機關であることは、紛れもない事實である。而して政友會と相對立す可き憲政會も今度の珍品問題で暴露された事實から推すと、寄附金に依つて、何時でも富豪成金の御用を勤めることを辭さない次第である。さうすれば日本の政治家は貧乏な民衆の如きは幾らでも反對するなら、反對しろ、自分達には金持の後援者があるから、貧乏人などは恐ろしくも、何ともないと云ふ考を持つて居るものと評されて

も、表し方はあるまい。正義とは何であるか、人道とは何であるか、斯る事は日本の政治家の念頭には全然上らない、口にすらされず、政黨は富豪の門犬であり、番卒であり、寧ろ富豪に與して、無産者を壓迫すると云ふ事實が段々に暴露し來つては、國民の間に議院政治を呪咀する者の生じて來るのは、免かれ難き勢である。私は今日の處では、徹頭徹尾「パーラメンタリズム」(議會主義)の信者であつて、直接行動の如きに對しては、絶對に反對をする。**然し、徒ら議會をして健全な立法を行はせようとして**も、政黨其ものが腐肉團であつたり、議會其ものが動物園程度のものであつたならば、之を如何ともするを得ない。私は此點に就て國家將來の爲めに、深憂を懐くことを禁じ得ない者である。

道德上の制裁

政治家は公職中の公職であつて、其進退を公明にし、又士人として節義を重んじなければならぬことは、論を俟たない。日本は道德上の制裁の強い國であるが、弱い國であるかと云ふ問題に爲ると、個々の場合に依つて、自ら異なるので、強弱孰れとも判斷に苦まざるを得ない。然し私の記憶する所に據ると、餘程以前後藤象次郎伯の農商務大臣であつた時、次官の齋藤修一郎と云ふ人が株式取引所から何か請託されて、謝禮に金時計を貰つたと云ふことが議會の問題に爲り、大臣次官共に職を去らさるを得ざるに至つた。而して其後齋藤氏は頗ガ才能の豐な人であると稱されて居つたが、不遇の間に世を辭したと云ふことで、人をして社會的制裁の酷烈に過ぎたかを思はしめた。然るに今日は之に比較して、如何であらうか。內輪の事を發き立てゝは際限がないから、單に衆人公知の事實だけで云つても、屢節を誤まつた陸軍大臣が依然として軍政を掌つて居り、二枚舌を遣つた文部大臣が濟まして文敎の司と爲つて居り、揃いも揃つて、**廉恥の何ものであるか、士道の如何に重んず可きかを知らぬ輩**で世間に對するのである。立憲政治は責任を紀すことを以て、要義とする。此一義こそ、專制政治に對して、立憲政治の長所と云はれて居るのに、其れが政黨政治の行はれ出した今日に爲つて、却つて地を拂うように爲つたのは、何とした事であらうか、私の了解に苦む所である。

現に今度の議會で、文部大臣中橋氏は自分の世間に聲明し、又管轄下の學校職員生徒に公約した事を果さない、卽ち二枚舌を用ひたと云ふことから、上下兩院で非難を蒙り、本人も深く責任を感じたが、自責の念に打たれたかして、意氣銷沈の姿であつた。然らば自分の責任感に訴へて、辭職するかと云へば、飽くまでも噛り付きを事とする。而して總理大臣は堅白異同の愛嬌を振り蒔いたりするものに比較したならば孰れを勝れりと辯を弄

して、文部大臣を辯護し、與黨も亦必死に爲つて、擁護しようとする。內閣とか、政黨とか云ふようなものを一個の私の團結としたならば、其仲間の一人が失策をした場合に、仲間中の者が罪を償つてやると云ふことは、一の美德であつたに相違ない、賭博打の仲間にも、巾着切りの仲間にも　此位の德義は行はれて居つたようであるが、政黨は天下の公器である。內閣に至つては、更に公的性質の强いものである國務大臣が失策をした場合に、其責任を糺さずして、私情や、利害から之を擁護するのは、理非を辨別せず、寧ろ公私を混淆したものであつて、私は原氏の中橋氏を擁護した態度を見て、氏は朋黨の親分に適する人であると云ふことを感じたのである。

政黨首領の風格

之と同時に私は加藤高明氏の政黨首領たる資格を以つて、零であると認めざるを得ざるに至つた。世間の噂では、加藤と云ふ人は傲慢不遜の不愛嬌者であつて、是等の點から氏を酷評する者もあるようである。然し傲慢とか、不遜とか、不愛嬌とか云ふようなことは人の生來の性質であつて、是等の性質があるからと云つて、直に其人を以つて、惡人であるとも云へなければ不德義の人であるとも見られない。加藤氏の傲慢であり、不遜であり、不愛嬌であるのは、自ら任ずる所の高い爲めであるかも知れず、心にも無い謙遜を裝つたり、お世辭を云つたり愛嬌を振り蒔いたりするものに比較したならば孰れを勝れりとするを得ないのである。然るに加藤氏が內田某に與へた手紙を見ると世評に違つて、仲々の謙遜家であり、お世辭者であり愛嬌者である。而して是等のお世辭愛嬌が總て五萬圓に對する代償であると思ふと、加藤氏は一廉の愛嬌者であるとしなければならぬ。世評と實際とは隨分違うものである。是れも世間の噂であるが、加藤氏は相當の財產家であると云ふことである。而して氏が政黨の首領と爲つて居るのは、唯此地位に噛り付いて居らうとか、外に仕事が無いから、一時遣つて居るとか云ふ輕薄のものでなく、自家の抱負を政治上に行うに就て、政黨の力に賴らうとするからであらう。然らば自家の黨與を殖やさう、又黨勢を盛にするには先づ自家の全財產を擧げて、政治運動に蕩盡するだけの覺悟を極めるのが、當り前の話であつて、自分が素寒貧に爲つた擧句であれば、世間から廣く淨財の寄附を受けるが正しき道である。自分は一廉の財產家に爲り濟し、政黨は貧乏だと云つて人から寄附を受ける、殊に御用商人成金風情から、不淨の財を受けたのでは、傲慢だとか、不遜だとか云はれる平生の看板に僞りのあるのは勿論政黨の立場を傷けるものとしなければなるまい。

政黨の首領には種々の資格が必要であらうが、一技一能ある人を總て傘下に網羅して政黨の大を爲すと云ふ廣い度量のあることは最も必要とする所である。若しも些たる感情で、或る人を毛嫌いするやうな性質があれば、其人は政黨首領には大禁物であるとしなければならぬ。伊藤公や、桂公には政黨首領として、其れ〳〵缺點はあつたであらうが、前者が政友會を後者が憲政會を創立する際には、諸方面から隨分異種異樣の分子を羅致して、之を一傘の下に集め得た。是れは畢竟兩公に何處か度量の廣い所のあつた證據としなければならない。然るに今日加藤氏の憲政會首領としての態度は如何であらうか。桂公の歿後、後藤仲小路諸氏の脫會したのは、兩氏の意思に基いたものとして姑く措くとしても其後大石正己氏が去り、今度は尾崎氏に續いて嶋田氏も黨外の人となつたのは、孰れも黨首としての加藤氏に一ツ缺けた所のあることの致すものと見なければならぬ。其缺けた所は何であるかと云へば、事の大體に於て人と協同する大きな處がない、無暗に人を毛嫌ひする、小異に拘泥すると云ふ性癖は卽ち是れであつて、尾崎嶋田と云ふやうな黨の長老を疎外することを條件とした寄附金を領收するが如きことは黨首としての脩養に缺けた態度としなければならず、又斯う云ふ態度に出たのも兩氏を容れるだけの度量の加藤氏に缺けて居る證據と見られるであらう。

原氏も加藤氏も共に官僚から、一轉して政黨の首領と爲つた同型同質の人である、原氏が政黨首領に適する度量を持つやうに爲つたかどうか、政友會の末社連中の云ふやうに、原氏が一個の大人物であるかどうかは、私の知らない所であるが、加藤氏に至つては今後餘程の修養を積み、工夫を重ねなければ、政黨首領の適任證を得ることの出來ない事實が今度の事件で、證明された。瓜の蔓に茄子は生らぬと云ふが、官僚上りが黨首に爲るのも、頗る六ケしいものと見へる。

本來桂公が政黨を組織した時に、幾多の先輩を凌いで、比較的政治上の經歷に乏しい加藤氏を副總裁に起用したのは、何の爲めであつたか。同氏自身は自分の力量の然らしめる所と考へるかも知れないが、是れは大きな自惚れであつて、實は氏の背後に岩崎と云ふ日本一の金櫃が付いて居り、斯人を副總裁に祭り上げて置きさへすれば、此金穴から、運動費を引出すに苦しまないと云ふ桂公獨得の打算から出て來たものに外ならない。而して斯る情實で一旦副總裁と爲つた加藤氏は桂公の死後饅上りに總裁と爲つたからには、前後の行掛りから考へて、先づ自家の財產全部を費すのは勿論、進んで岩崎から資金を引出して、之を黨員に撒布する仲介役に當らなければならぬ譯であ

る。然るに昨今のように憲政會の政戰資金が豐富でなく、政商連にまで叩頭して、零砕の資金を掻き集めなければならぬ境遇に陷つたとしたならば、加藤氏が總裁に擔ぎ上げられて居ることは全然無意義の沙汰であるし、地下の桂公をして言はしめたならば、自分の生前に立てた目算はがらりと外れたと嘆ずるの外はないであらう。昔から名古屋者の卑吝と云ふことは、著明な事實である。卑吝ならば、卑吝で宜しい、郷里に歸つて、高利貸でもして、爪に火を點す位の覺悟で貯蓄に勉めるのが柄相應の事であらうが、其卑吝漢が金錢を散ずることに最も淡泊であり、又大膽である可き政黨の首領と爲つて居るが如きは此上もない間違の沙汰である。少し許りの財産を後生大事にするような根性は政治家として、大禁物である。

財政の行詰り

原内閣が何時に爲つたら、辭職するかと云ふことは、議會開會當時からの問題であつた。學校昇格問題でも、陸相臣節問題でも、宮中の重大事件でも倒れない内閣であつて、世間から不死身と稱される程、頑强に囓り付いて居るが、今に何としても瓦解しなければならぬ時が來る。其れは即ち財政の行詰りである。元來過般の議會が假令ひ貴族院は何か警告のような文句を付けたとした處で、兎に角貴衆兩院共に鵜呑み同樣に彼の十六億五千萬圓と云ふ途方も無い經費を含んだ豫算案を成立させたのが、財政上に無理をする發端なのである。此巨額な經費に對して確乎たる財源が豫定されて居らない。不景氣の結果、各種の恒久的收入は必ず減少する、公債は政府の考へて居るように容易に募集されない、物價の下落に依つて、經費の縮小を望むが如きは、無理な話であつて、而して一旦承認された事業に要する經費は年と共に增加することを免かれない。明年度の豫算を堅實なる基礎の上に築き立てるが如きは、望む可からざる所であつて、結局原内閣は一時逃れの豫算を編成し、其破綻と共に、野倒れ死をするか、其れとも危險の到來する前此身を退くことゝするかの外に、出づ可き道はないのである。

如何な不死身内閣であつても、財政の滅茶苦茶に爲るまで局に當つて居ることも出來まいし、又國民が幾ら政治に無關心であつても、斯る失態の暴露されるまで、原内閣を寛恕する程の仁心も持合せて居るまいと思ふ。

政黨自活の必要

近頃尾崎行雄氏は政黨自活の必要を認め、軍備制限の演説をする時には、必ず入場料を徵收し、揮毫をするときには若干の潤筆料を取り、斯くて收め得た收入を政治上の運動費に投じることゝしたさうである。私は平生我國の政治を擧げて職業的政

治家に託して置く程危險なことは他にあるまいと思ふ。彼等が政治を壟斷して居ればこそ、生活上の必要から、金權者流の仕送りを受けなければならず、又何か血眼に爲つて、利權を漁らなければならぬこと〻爲るのである。一體自分の力で生活するだけの能力を有しない者が政治家と爲つて、他人の世話を焼くだけの資格があるかどうかも一個の疑問としなければならぬ。私は今後政治家として、世に立たうとする者は獨立の生計を維持する力量を施すだけの職業に就いて居る人でなければならぬと思ふ。斯る人が政治に干與してこそ獵官の弊も無くなけば、漁利の害も抑へられ、金權者階級に媚びることも、其跡を絶ち獨立獨行の政治に接すること〻爲るのである。其れには職業的政治家を排斥し、一技一能ある人士を政界に迎へて自活するだけの職業に就かせ、他の一方には國家の力を以つて、選擧運動に嚴重な取締を加へ、選擧運動費を節減すること〻しなければならぬ。

　尾崎氏の政治家自活策は假令ひ同氏が政治界に奔走すること四十年の後に案出されたものであつて、時機の頗る遲い憾はあるようなもの〻、今後政界に入らうとか、又は現に少壯の身で、政治に關係して居るとか云ふような人々に取つては、最も適當な羅針盤を示したものであつて、私は空谷に跫然たる足音を聞くの感に堪へないのである。斯る事から──表面に於ては小事とも見へるかも知れない事から、我國に於ける政界革新の端緒が開かれたならば、吾人の幸福之に過ぎないとす可きであらう。

米國に於ける裁判の社會化

東京帝大助教授　高柳賢三

一　法律的裁判と司法的裁判の二大原則

法は正義を實現するが爲に存する。換言すれば、正義の實現が終局の目的であつて、法は其の手段たるに過ぎない。正義とは何であるかと云ふことは法學の根本問題の一であつて、之を定義する事は困難である。自分は今之を試み樣とせない。此困難の理由は主として正義の內容が時代の變遷に從つて刻々進化して行き時代思潮の推移と共に高調される方面が異つて來る事から生ずるものである。又具體的係爭事件に就て甲の主張と乙の主張する處と何れが正義に合するかと云ふ事は之を決する人の教養とか社會的見解とかに從つて異らざるを得ないからである。然し內容は時代によつて變化するにしても、人事干係を正義を以て律して行かなければならんと云ふ事は、少くとも文明社會に於ては、一般に認められて居る處であらう。正義を實現するには、更に犯圍を狹めて係爭事件に就て裁判するには、必ずしも法に依る事を要しない。之を裁判する人の正義心公平心に委せて、各事件の性質に應じて決して行く事も理論上可能であり、又實際法制史の上にかかる實例も數多くある。然し乍らかかる行き方には、缺點に富んだ人間に免れ難い專擅のや裁判官の異るに從つて判決が區々になつて來ると云ふ樣な不便があるので、現今では法律に依る裁判、即ち裁判には法を基礎とした方が宜しいと云ふ事に意見が一致して居る。

勿論法律に依る裁判にも之に伴ふ幾多の弊害があるので、例ば具體的事件に當つては法あるが爲に反つて正義に反した判決を爲さなければならん樣な事があるのであるけれども、之を法に依らざる裁判の行き方に比して、先づ弊害が少いと云ふので各國は法律裁判主義を採用して居るのだと見て宜しい。

「法に依る裁判」と云ふ主義が確立したとしても、裁判をする人に依つて非常に結果が異つて來る。法制史の上から云へば、行政府が裁判した例も立法府が自ら裁判した例もある。然し乍ら此等の方法には色色の弊害があるので、近世では裁判所と云

ふ特別の機關に全部裁判の事はお委せすると云ふが一番安全であると云ふ事になつて居る。此の點を一番完備したのが十九世期末のイギリスとアメリカとで歐洲大陸や日本では所謂行政裁判所なるものを置いて一種の行政府裁判を行つて居る。行政府と人民との干係から發生する訴訟の裁判に就いて行政府内に裁判所を置くと云ふ事は係爭者の一方が裁判官になると云ふ事でこれは面白くないと云ふのがイギリス及アメリカ流の考へ方である。然し兎に角大體に於て何れの文明國でも裁判の事は不斷獨立そして充分に法律學の素養のある裁判官にやつて貰ふのが一番安全だと云ふ事に一致して居る。

十九世期の終頃には以上の「法律に依る裁判」と「裁判所に依る裁判」との二原則は少數の例外を除いて、大體に於て各文明國に確立して居つたのである。

二　米國殖民地時代の裁判

米國の歷史は三百年に過ぎない。ピルクリムフアーザースがメーフラワーに乘つて米國に上陸したのは千六百二十年の十一月で昨年の秋米國殊にニューイングランドで三百年記念祭が祝はれたのであつた。米國の歷史はかく短いのであるけれども、その米國が爲した社會狀態の變化、社會思想の變化は非常なもので、又急激なものであつた。

殖民地時代に於ける裁判の狀況は極めて幼稚なるもので、未だ「裁判所に依る裁判」と云ふ原則は發達せず、「行政府に依る裁判」「立法府に依る裁判」が行はれて居つた。

卽ち裁判は行政府又は立法府が行つて居つた。行政府に依る裁判の遺物は今でも或地方に「市長の裁判權」と云ふ形が殘つて居るし、又立法府に依る裁判は久しく各地に殘存して居つた例は米國獨立後離婚を立法府が許與すると云ふ慣行がニューヨークに行はれて居つたし、又同樣の慣行はコネティカット・メリランド・ロードアイランド等に十九世紀になつても殘存して居つた。一番遲くまでこの慣ひが行はれてゐたのはペンシルヴェニヤで、千八百八十年迄この慣行が繼續して居つて、同年には離婚を許す法律が十八丈發布された。かく純粹な裁判所に依る裁判と云ふ原則が發達して居なかつた許りでなく裁判所が裁判を行うた場合でも、裁判所を構成する裁判官は素人で、常識に依つて裁判する事が通常であつた。この現象は米國獨立後迄も續いて居つたので、一例を擧げると千八百十四年から千八百二十六年迄ロード・アイランドの判事の一人は鍛冶屋であつたし千八百十九年から千八百二十六年迄その裁判長は農夫であつたと云ふ事が記錄に殘つて居る。又今でこそ米國の判決錄の多い事は米國の法律家をも閉口さする位であるのだが、殖民時代には米

だ判決錄と云ふ可き公刊物がなかつたので、名判官ジエームス・ケントが千七百九十八年裁判官の地位に就いた時に、『吾々は吾吾の法律を持たない。何が法律であるかは何人も之を知らない』と云ふた程である。

要するに殖民時代の米國に於ける裁判の狀況は極めてプリミティヴなるもので、實際的家の立場から云へば米國法制史は獨立後に始るものと云つて宜しい位である。

三　個人主義を基礎とした法制の完成

現今米國裁判所の準據する一大法淵たる米國普通法即ちアメリカン・コンモン・ローは、米國獨立から十九世紀の半頃の間に創定せられたのである。

此の時代の米國の社會は大體に於て農業的社會と云ふ事が出來る。今日の樣な大都會の發達は十九世紀後半の事であつて、之に伴ふ色々な社會問題、法律問題が非常に喧しくなつたのは十九世紀の後四半期からである。例へばニユーヨーク市の如きでも千八百八十年頃迄は人口百萬を越えなかつたのである。衛生問題とか住宅問題等が少しでも論議せられる樣になつたのは内亂戰爭以後の事に屬する。

パイオニヤの社會で一番大切なのは只治安と云ふ事即ち社會の平穩と云ふ事であつて、複雜な法律を要求すると云ふ事は無かつたのである。然るに富が蓄積され、交通が發達し、社會組織が複雜になるに從つて財産權の安定と取引の安定との要求が起つて來て、裁判の確定性劃一性と云ふ事が必要になつて來て從つて規則とか法律とか云ふものが要求される樣になつた。當時の米國の裁判は先きに述べた樣に判決錄があるでなく、裁判官には多く素人が成つて居り、又行政官や立法官の爲す裁判は素撲的であり、偏跛であり、時には腐敗の事實も無くはなかつた。

言ひ換へれば當時の裁判の實際は當時の社會事情に合はなくなつたので之に代るべき裁判として人民の欲求して居つたのは法律規則に依る裁判であつた、劃一均等確實を保證すべき法規の創定であつた。

法規の創定は又十九世紀の米國に廣がつて居つた個人主義的の政治哲學によつて助長された。此政治的哲學に動かされて居つた彼等米人は政府の壓制と云ふ事に殊に鋭感であつた。政府が干渉すると云ふ事を特に嫌つたので、これは米國の歷史的背景から來る當然の歸結であつた。パイオニヤ社會では政府が干渉する事が極く少くても、立派に生存が出來たし、又彼等は之を以て滿足して居つたが、社會思想が複雜になるに從つて、矢張り或程度迄政府に干渉さする必要は認めても、程度を越えた干

渉と云ふ事に殊に鋭感であつた。彼等は明確なる法規を置いて、之に依つてその政府の活動が制限せらるる事を要求したのである。これは個人的哲學より來る當然の要求であつた。

更にこの傾向に力を與へたものはピユーリタンの人生觀及社會觀であつた。米國法の形成上ピユーリタンが與へた影響は恰もストイク哲學がローマ法の形成に與へた影響位力あるものであつた。ピユーリタンは法律を以て個人の良心の指針であると考へたのである。ピユーリタニズムの根本的觀念は『人間はその爲す事を撰擇する自由意志を有する爲の自由な道德的主體であつてこの選擇力に適應する責任を有するものとするにある。』ピユーリタンは『何等の權威も自由な道德的主體たる個人を強制すべきものに非ず』と考へ、同時に『個人はその選擇した結果を全部引受けねばならん』と考へて居つた。從つて彼等の政治思想の中心觀念は協同（Consociation）であつて服從（Subordination）ではなかつた。この協同の思想は各人の契約に依つて成立する確定絕對普遍なる規則を要求しお役人の意志とか裁量とかに服從すると云ふことを嫌つたのである。ピユーリタンは以上の理由から國家及法律は個人の行動があつた後に初めて干渉する事を認め行動前の干渉と云ふ事を嫌つた。彼等は個人が自ら誤つた道を歩んだ場合に、裁判官が之を罰する事には贊成したけれども、行政官が正當なる道を歩く事を個人に強ゆる事には反對した。かくしてピユーリタンの性格に存する一大矛盾、即ち一方に於て政府とかお役人とかが個人の意志を抑制する事を非常に嫌ひ乍ら、他方に於て人性の罪惡觀に對する信仰の上から、法律規則を制定することを好むと云ふこの一大矛盾は、永く米國の政體や法律にその跡を止めるに至つたのである。兎に角ピユーリタンが法律に依る裁判を極端に要求したと云ふ事が十九世期の米國に於て法律の發達を促した一大勢力であつたのは爭ない處である。

かくの如くにして米國法の形成時代に於ける主たる問題は法規の發見制定と云ふ點に集中して居つた。一方變化しつつあつた米國の社會狀態に適合する樣に、他方成るべく政府に裁量の犯圍を許容しないで個人の自由活動の犯圍を廣くする樣な法制を築き上げると云ふ事に集中して居つたので、この趨勢は內亂戰爭頃迄は繼續して居つたのである。かう云ふ有樣であつたから事件を正當に判決すると云ふ事よりも將來に對し正當な法規を設くると云ふ事が主眼であつて裁判所の構成等もこの目的に適する樣に仕組まれて居つたのである。訴訟手續きの複雜に出來上つて居つたのも、この見地からすれば理解出來るのである。

一言にして云へば、米國に於ける裁判の基礎となる法律は、

十九世期の前半期に於ける農業社會には適合し個人主義的哲學とピューリタン式法律主義とに影響されて作られて居つたのであつたのであるが、時勢は變じて大都會の生活が到る處に發生する樣になり、生活の形式が著しく變化して來る樣になり、又個人本位の哲學は社會本位の哲學の爲に代られ、極端に行き過ぎたピューリタン式法律主義の反動が起つてから、出來上つた法律も裁判の體制も時代錯誤の感を一般に感ぜしめる樣になつたのである。裁判の社會化は近代米國の社會現象中著しい傾向の一であるが之を正當に理解するには以上の前提を知る事が必要である。

四　法律の社會化と裁判の社會化

以上述べた樣に十九世期の終頃に米國の法律は個人本位の哲學ピューリタン思想の影響の下に農業的社會と云ふ經濟組織を根據に置き英國の法律を母法として其の上に一大法系が成立した實體法即ち個人との權利干係を定めた法律は詳細に確定さるる事となつた。處が十九世期の終頃から經濟組織が農業的から工業的と遷移し、大都會と云ふものが國民の生活の主要な部分を占める樣になつてから、社會思想も個人本位の主義から漸次團體本位の主義に遷移する樣になつて來た。此の變遷に伴つて法律の社會化及び裁判の社會化と云ふ事が熱心に提唱される樣になつて、そこで二個の方面に改造が行はるる事になつた。第一は即ち、個人本位の社會觀の基礎の上に立つた實體法を、團體本位の社會觀を基礎とした實體法に改造すると云ふ努力であつてこれは漸進的方法即ち特別成文法殊に所謂社會立法とか勞働立法とかの制定と云ふ事で實行して居る。此の方面は今之を論じない。第二は即ち裁判の社會化と云ふ問題であつて、實體法がどんなに完備しても、之を實現する機干や手續が不完全であつたり、裁判官の頭が時代錯誤であつては、正義の實現は之を求める事が出來ない。近代米國の法學界の視線が此の方面に特に注がるる樣になつた事は注意に價する現象である。

勿論米國には陪審制度が刑事にも民事にも行はれて居つたので、この方面から法律と民衆との間に親しみがあると云ふ事は歐洲大陸諸國の樣に萬事お役人たる裁判官の云ふ事に從ふと云ふ官僚式の行き方と違つて居る。又裁判官を民間の辯護士の間から出すと云ふ制度も或程度まで歐洲大陸で叫ばれて居る「裁判官の世間知らず」(Weltfremdheit)と云ふ弊を減少し情理兼具へた裁判が保證される事にならう。又米國の多くの州で行はれて居る裁判官選擧制と云ふもの(その極端なのは近時或州で認めて居る裁判官のリコール判決のリコール)は制度としての可否に就ては米國でも問題とされて居るけれども、兎に角裁判を

成るべく人民の欲する樣にさすると云ふ牽制力となるであらう。然し乍ら現今の社會はこんな單純な社會化制度、民衆化制度で正義の實現が保證される程單純でなくなつたのである。そこで色々な手段に依る裁判の社會化を實行する樣になつた。即ち抽象的に確定した正義の原則を最も有效確實に實際生活に適用する手段の研究と云ふ事に法律家の努力が向けらるる樣になつた。此處に之を評說する事は出來ないから只その二三を例示するに止める。

五　刑事裁判の社會化

近代各國に於ける刑事學は刑罰を如何にして犯人に適應するかと云ふ點に苦心して居る。一定の犯罪があれば一定の刑罰を機械的に科すると云ふ事でなく、犯人の改善とか、社會の防衞とか、社會の一般人を威嚇するとか、色色の刑罰の機能に照して見て、如何なる刑罰又は刑罰に非る取扱方法を犯人に與へるが適當であるかが實際上の問題である。アメリカでも亦左樣であつてアメリカの此方面に爲した功績も少くない。少年裁判所とか、不定期刑とか、プロベーシヨン制とか色々な試みに於て刑事裁判の社會化と云ふ點で各國に範を垂れた。此處に一一此等に就て述べることはせぬ。只刑事裁判の方面の社會化に就てシカゴ市の裁判所に附屬させられた精神病理學實驗所（Psychopathic Laboratory）に就て一言しよう。

シカゴ市裁判所では Court of Domestic Relations（家庭裁判所即ち（女子子供に對する犯罪を判決するので被告は通常父又は夫）とか Morals Court 即ち風儀裁判所（主として賣淫に干する事件を取扱ふ）Boys, Court 即ち未成年男子裁判所十七歲から二十一歲迄の未成年の男子の犯罪を取扱ふ）とか云ふものがあり、この外通常の刑事裁判所支部が十三もある。是等の裁判所で裁判さるる被告は大抵右に述べた精神病理學實驗所に連れて行かれて診斷を受ける。

この診斷は法律で强制はして居らないけれども、大抵の被告人は之に承諾を與へるさうである。此の實驗所はもう七年許りやつて居るがその結果は極めて良好であつて、裁判所は診斷した醫師の意見に基いで裁判を加減し、又プロベーシヨンに付するか如何かと云ふ事を決するのである。現に角その結果として色々有益な材料が集つて、將來の刑事裁判の社會化と云ふ事に非常な助けをして居る。即ち犯罪の種類と精神異狀の種類との干係が漸次明かになつて來る一例を舉ければ心神耗弱者（feeble-mindedness）は窃盜罪をやる傾向があるとか早發痴狂）（dementia praecox）は暴力に依る犯罪色情に干する犯罪を犯す傾向があるとか云ふ事が分つて來たのである。現に角犯罪者に心

神耗弱者と早發痴狂とが多い事、それから是等の精神異狀は現代の醫學の程度では不治であると云ふ事が愈々明かになつた。即ち是等の犯人を一定の期間監獄や感化院や病院に入れたとしても、出てからは又々罪を犯すので、社會から永久離して別天地に住ませるのが社會の爲にも本人の爲にもなると云ふので、所謂ファーム・コロニーを作るかと云ふ樣な主張も出て來る。兎に角今迄の刑事學が境遇(environment)と云ふ事に重きを置き過ぎて遺傳(heredity)と云ふ方面を怠つたと云ふ事が愈々實驗に基いて明になつた。それは兎に角このシカゴの市裁判所に附屬して居る精神病理實驗所は刑事裁判の社會化に努力して居る一つの面白い現象と云ふ事が出來よう。

六　民事裁判の社會化殊に貧民と裁判との問題の解決

次に十九世紀に完成した立派な法律の體系が、近代の社會組織上、正義の實現を不可能にさせたのは、貧民が法律に依つて附與せられた權利を行使する事が出來ないと云ふ點にある。即ち「貧民と法律」と云ふ問題は各國に於ける樣に米國でも大問題とされて居る。貧民が何故法律に與へられた權利を伸長する事が出來ないかと云ふと其原因は約三ある。第一は訴訟遲延と云ふ事にある。即ち訴訟手續が面倒なのと、上訴制度が面倒なので、訴訟に長年月がかゝつて、貧民は其の權利を遂行する丈けの資力も餘裕も無い。從つて權利が侵害されても、その儘泣寢入となるか、運よく行つて不公平な妥協に滿足せなければならん事となる。第二は訴訟費用の點にある。小額の請求は訴訟費用の爲に訴訟しては反て損をすると云ふ事である。これは富んだ者にも同樣であるが、貧民には殊にそうである。第三は辯護士の費用と云ふ問題で富んだ者は立派な辯護士が雇へる、又辯護士の費用もその有する財產に比して僅かであるが、貧民にあつては左樣は行かぬ。裁判の結果が辯護士の巧拙に依つて影響を受くる事が大である以上、貧者は富者に對して非常に不利な地位にあるものと云はねばならぬ。

此等の三つの原因が結び附いて正義の均等と云ふ大原則は空文たるに止る事となる。

此等の明瞭な事實に照して裁判の社會化と云ふ事が非常に必要になつて來た。

個人間の權利干係を定めた實體法は形式上萬人に正義を與へ公平無私であるとしても、之を實現する機干と手續とが不完全である以上、實質上に於て正義の均等は存在しない。この點に就て米國の裁判は近頃著しく社會化に努力する樣になつた。所謂「小額裁判所」(Small Claims Courts)はその一である。

この種の裁判所は千九百十三年初めてカンサス州で設立さるる樣になつたのであつて今ではクリヴラント・シカゴ・ミネアポリス・ポートランド(オレゴン州)等に於ても採用せらるる樣になつた。その組織の細目に至つては皆幾分宛異つて居るのであるが、その眼目とする簡略迅速安價と云ふ點に於ては皆その軌を一にして居る。

一例としてクリーヴランドで行はれて居る實際を擧げるとかうである。被害者は市裁判所の和解部(Courts Conciliation Branch)と云ふ部屋に出かけて行き、書記に向つてその不平を述べる。若し書記がその不平を以て正當だと考へると書記は手紙又は電話で被告と協解を試みる。若しこの方法が失敗すれば書記は裁判所の記錄に簡單な「請求の陳述」を書き入れて之に原告が署名する。そこで事件審理の日は直ちに定められ(被告に三日前の通告を與へる)原告に審理の日附・瞬間・法廷・裁判所の番地・電話番號の書き入れてあるカードを渡す。それから通常郵便で呼出狀を執達吏をして郵便箱に入れさせる。この呼出狀には審理の時間・審理の行はるべき部屋の番號が書き入れてあつて、審理は正確にこの時間に右の部屋で開かれる。(呼出狀を元は書留にしたが今では通常郵便にしたのは番地に誤があつた場合に早く返つて來るからである)。裁判所の光景は通常の裁判所と異つた事は無い。只辯護士の影が見えない點は異つて居る。法律上は辯護士を使つて惡い事は無いが、辯護士間の道德として出ない事にして居る。又裁判官も成る可く辯護士の出ないことを奬勵して居る。裁判所は口頭で非形式的に兩當事者にその主張を述べさせ之を質問をし、又相互に質問する事を許す。そして極く手輕に判決が下される。

要するに小額裁判所では一方訴訟費用を或は全然無くすか、(カンサス)或は五十五仙とか七十五仙と云ふ樣な小額にするかして、(カンサスポートランド)この點に關する困難を無くし、又手續が簡單で辯護士を要しない樣にして辯護士費用を無くし又手續も通常の訴訟法とか證據法とかに依らないで迅速簡單を旨となし又上訴に就いても原告には絕對に禁止し被告が上訴するのには費用がかかる樣にして間接に之を禁止して訴訟遲延の弊を除去して居る。この種の裁判所に提起し得る最高額はカンサスでは二十弗クリヴランドでは三十五弗シカゴでは二百弗となつて居る。どの位の額を最高とするのが適當とするかは可に實驗に俟たなければ分らない問題だがシカゴで二百弗まで引き上げて然も好評であると云ふ事は注意に値する。

小額裁判所は貧者と法律と云ふ問題に關聯して裁判の社會化を實現した一例に過ぎない。この外に家庭裁判所(Courts of

Domestic Relations) 協辨裁判所 (Conciliation Courts)仲裁々判所 (Arbitration Courts) 勞働者補償委員會 (Workmens Compensation Commission) 等諸種の特別裁判所も皆此問題を解決する爲の裁判を社會化せようとする例であるし、又公設辯護人制度(Public Defender Spstem)の發達や法律扶助會(Legal Aid Societies) の發達等も亦貧民にその權利を伸長する機會を與へると云ふ趣旨に外ならない。是等の詳しい説明はこの小論文の能くする處でない。

七　違憲立法の審査問題に關する裁判官の態度變更

十九世紀の末から二十世紀にかけて、個人主義の哲學とパイオニヤの農業的社會の基礎の上に築き上げられた米國の法律は如何にも精密に出來上つたのである。けれども何分にも集合主義の哲學と都會生活と云ふ社會組織と合はなくなつて來た。

そこで他の歐洲諸國と同樣に、所謂社會的立法勞働立法が無數に聯邦議會からも各州の議會からも制定さるる樣になつた。處が此處に米國には他國に餘り例の無い憲政上の問題がある。それは卽ち裁判所の立法審査權と云ふ事である。卽ち議會を通つた法律でも裁判所が一定の訴訟事件でこの法律が聯邦憲法や州憲法に違反すると見れば、直ちに無效であるとしてこれを適用することを拒むのである。裁判官と云ふものはどこの國でも保守的なものであるが、米國もお多聞に洩れなかつた。彼等は個人主義を基礎とするコンモンローの訓練を受けて居つたのでその頭で新しく出來る社會立法に接する。從つて米國憲法第十四條修正法の「適當なる法律手續に依るに非れば何人も生命自由財産を奪はるゝ事なし」と云ふ文句を振り翳して社會立法に對した。「契約の自由」「私有財産の保護」と云ふ大原則に反すると云ふ理由で筍の樣に出て來る社會立法に致命傷を負はせる事をした。それで裁判官等は社會改良家(ソシャルリフォーマー)や經濟學者や進歩的の政治家から蛇蝎の如くに見られる樣になつた。處がこの十數年間に(殊に千九百八年ミユラー對オレゴンと云ふ事件から)裁判官の頭が余程變化して、所謂ソシャル、ヴユーを以て是等の立法を見る樣になつたのである。卽ち大抵の社會立法は之に花を持たせて有效なものと見る樣になつて來たものでこれは近頃の米國の判例を讀んで著しく氣付くのである。殊にホルムス判事とブランダイス判事は一番進歩的の樣に見受けられる。裁判官の頭を社會化すると云ふ事は米國で非常に識者間の問題とされて居つたのであつて余の恩師たるハーバード大學のロスコー・パウンド氏を旗頭に幾多の社會學者經濟學者法學教授に依て叫ばれたのであつた。パウンド氏が初めて社會法學を唱へた頃は彼は野

に叫ぶ豫言者の面影があつたが今はで彼の說は殆ど通說となり法律家中でも一番保守的な裁判官でもソシャル・ヴューを有する樣になつたのは時勢の變遷が成した變化中最も著しき現象である。裁判所の違憲立法審査權と云ふ問題は米國獨有の問題で他國には起り得ないのであるが、兎に角この問題に就て裁判官の心理狀態が變化する樣になつたのは裁判の社會化に干聯して注意す可き事實であらう。

之を要するに裁判の社會化は實際問題としては實體法を實現する機千手續の社會化と之を運用する辯護士裁判官の頭腦の社會化との二點に歸する。前者は之を物的改造と云ふ事が出來るとすれば後者は之を心的改造と稱す可きである。前者は米國で着々行はれて居る事は右に示した通りであるし、後者はそう早くは行かないにしても法學教育の社會化及法律學の社會化——是等の點は此處には述べない——に依つて漸次實現しつつあるのである。

最後に日本は如何であらうか。自分は未だ歸つて來て間もないので、日本の裁判のサイエンテイフイツク・ダイアグノ・シスをするの機會を與へられないが、新聞や雜誌で此點に干し間接に知つて居る處では、矢張り此の方面の發達を必要とするのではあるまいかと思はれる。(終)

泥棒と貴族との話

□關西のさる都會に或る泥棒があつた、その泥棒が年齡十六七の小泥棒を使つて或る書店から「死線を越へて」の書籍十冊ばかりを盜み取らせた、そしてその泥の使ひ賃として、十冊のうちの一部を小泥に分ち與へたのであつた。

□小泥先生何氣なくその書物を讀んで行くうちに、異常の興味を覺えさせられて、トウ〱お終ひまで讀破するに至つた。

□所が、その書籍のうちに、强盜が出たり、小泥棒が出たりして頻りに主人公をなやましてゐる。なやまされた主人公は一向平氣で、打擲したいものには打たせ、盜みたいものには盜ませておく、其處を讀んだ小泥先生感激して俄に書物の著者賀川豐彥君が慕はしくなつて、遂に神戶まで尋ねて行つて氏の門下生となつたと云ふ美談がある、昔は近江聖人が村の馬方を風化したが今は賀川先生盜坊を善化した。

□それから、モ一つの挿話がある、さる貴族が「死線を越へて」を一讀して、賀川氏の爲人に感激し、遂に氏の手をかりて洗禮の式を擧げたと云ふことである、その貴族の名前は一寸發表を憚るが、何にしても「死線」の一書の感化力の偉大なのは全くお話が出來ぬ位のもので、感謝狀や、弟子入りの書翰等は山堆さるる位であるとか。

京都片々

千八百九十八年の初夏、紐育を五十哩も離れたロングアイランドのヤパンクと呼ぶ潮風と雛菊の香に包まれた、平和な村に金満家ミス、ウヰークスの別荘を訪れた一日本青年が有た。村人のお從[illegible]と呼ばれて居た老嬢は息子の歸省を喜ぶやうに手を取つて迎へた。ヤパンクの生活は、淋しい異郷の青年にとつて何麼に幸福であつたか。家のめぐりに咲いたデージーに結ぶ黎明の露を吸ふては唄ふホイプルウイル(小鳥の名)の囀りを眼醒めのベッドにきいた。夜は村の廣場のリンデンの樹蔭から踊り疲れた村娘を丸太を組んだ馬車に乗せて、鞭を鳴しながら家路に送り届けた。其れから二十幾年の月日が流れた。當時の日本青年、米田庄太郎博士は、大著述の原稿を整理しながらも、あのデージー畠に囀るホイプルウイルの唄、潮風薫る丘の夕べ聞たバンヂョーの哀歌、ヤパンクのロマンチックな生活を追想する毎に、懐げに瞳を輝かせて『何しろ僕だつて其の頃は詩人だつたらうかとも思た位いだからね。』と、手文庫の中から取り出される二十年前の寫眞がある。それは廣い額に波打つ美しい髪 下から、圓い眼鏡ごしに、理想と情熱に輝く美しい瞳か、詩的なヤパンクの思出を樂むやうに。

□紀州田邊に靜養中であつた河上肇博士が、日頃大學の研究室で企て難い三個の事業を計畫した。第一は禁煙 、是れは先づ失敗であつた。第二は畫を描く事だ、流石に昨年の二科展に「家のある對岸の小山」を出陳した新進畫家河上左京氏の令兄であるだけに、數日の後、水彩でもつて附近の風景を見事に寫しあげた。そして第三は小説を作る事で有た、それは構想のみなつて間もなく歸京後 稿した、抑博士最初の創作で、即ち本誌本號のために寄せられた雄篇「斷片」であつた。

□河上左京氏が河上博士の令弟であるやうに、あの温い光と豐滿な調子の作品を屢々帝展の推薦畫として出陳する田邊至氏は哲學者田邊元博士の令弟である。正宗得三郎畫伯を親友とする河田嗣郎博士は、京大第一の美術家で、自然に對する洞察力の優れた博士の作品は、何處かに云ひ知れぬ偉力を持て居る。石井柏亭畫伯は朝永三十郎博士の親友で、そして遠縁に當る筈である。博士の美術に對する批評は文藝のそれと共に、むしろ專門家よりも自由で親切だとの評だ。

□ある音樂の好きな雜誌記者が朝永三十郎博士を訪れた時、博士は盛に新輸入のレコードを演奏しては、或はマダム、エルパの獨唱を聞いては倫敦のコンサートホールの面白さを說き、あるひはカルメンの前奏曲に巴里のオペラ、ハウスの華麗なるを語るうち、暮れ易い冬の日は何時の間にか夜に入つてしまつた。博士は、長い廊下に客人を送りながら『借金取を都々逸で歸したは昔の事、今では蓄音機で原稿取を歸しますよ。』と、いつもの靜な和な調子で云つて、そして二人は顔を合せて一寸と微笑した。

□波多野精一博士も伯林から巴里までオペラを聽きに出掛けたと云ふ耳の持主だけに、音樂に關する趣味と智識は驚くべきものがある。博士の友人で小説家の佐藤紅緑氏が、ある新聞に小説を連載して居た頃、西洋音樂の智識を缺いだ作者は平氣で「オーゲストラがベトーベンのムーンライト、ソナタを演奏した」と書いてあるのを、最先きに發見してそして注意して寄來したのが波多野博士であつた。由來紅緑氏は「波多野君が見て居るから」と云つて浮りした事は書けなかつたさうだ。是の話は波多野博士の趣味を語るのみか、其の友情の如何に厚きかを知る一美談であるまいか(浩)

第三インターナショナル批判

第三インタナショナル

山川均

一

『妖怪は歐羅巴を悩ましてゐる——共産主義の妖怪。舊歐羅巴の列強は、この妖怪を追ひ祓ふ爲に神聖同盟を組織した。羅馬法王とツアーと、メテルニヒとギゾーと、佛蘭西の急進主義と獨逸の刑事探偵とが。……』

これは七十年前に、マルクスの起草した有名な『共産黨宣言』の劈頭の一句である。この同じ妖怪は、今や全世界を悩まして居る。全世界の舊權力は、この妖怪を追ひ祓ふ爲に神聖同盟を組織した。クレマンソーとロイド・ジョーヂと、佛蘭西の債券所有者と米國のトラストと、コルチヤツク、デニキン、ウランゲル、セミヨノフ、ケレンスキーと其信頼すべき後援者と！。全世界は第三インタナショナルの悪夢に魘はれてゐる。

二

第一インタナショナルは一八六四年に組織され、一八七〇年に消滅した。即ちマルクス等の協力の下に、主として英佛の勞働者によつて組織せられた萬國勞働者同盟（インタナショナル・ワーキングメンス・アッソシエーション）がそれである。第一インタナショナルは舊歐羅巴の權力階級を戰慄せしめた無産階級の最初の國際的運動であつた。萬國勞働者同盟は、マルクスとバクウニンとの暗鬪の爲に瓦解したと云はれてゐる。けれども此運動は、十九世紀の六七十年代に於ける各國無産階級の階級的成熟の程度を代表したものであつて、第一インタナショナルは、其歴史的使命を果して消滅したものと云はなければならぬ。

第二インタナショナルは一八八九年に創立され、一九〇〇年の巴里大會で初めて常設の機關を有するようになつた。即ちブラッセルに設けられた萬國社會黨事務局である。第二インタナ

京都片々

千八百九十八年の初夏、紐育を五十哩も離れたロングアイランドのヤパンクと呼ぶ潮風と藝術の香に包まれた、平和な村に金満家ミス、ウヰークスの別荘を訪れた一日本青年が有た。村人のお母様と呼ばれて居た老婦は息子の歸省を喜ぶやうに手を取つて迎へた。ヤパンクの生活は、淋しい異郷の青年にとつて何麼に幸福であつたか。家のめぐりに咲いたデージーに結ぶ黎明の露を吸ふては唄ふホイプルウイル（小鳥の名）の囀りを眼醒めのベツドにきいた。夜は村の廣場のリンデンの樹蔭から踊り疲れた村娘を丸太を組んだ馬車に乗せて、鞭を鳴しながら家路に送り届けた。其れから二十幾年の月日が流れた。當時の日本青年、米田庄太郎博士は、大著述の原稿を整理しながらも、あのデージー畠に囀るホイプルウイルの唄、潮風薫る丘の夕べ聞いたパンヂヨーの哀歌、ヤパンクのロマンチツクな生活を追想する毎に、懐げに瞳を輝かせて『何しろ僕だつて其の頃は詩人にならうかとも思た位いだからね。』と、手文庫の中から取り出される二十年前の寫眞がある。それは廣い額に浪打つ美しい髪 下から、圓い眼鏡ごしに、理想と情熱に輝く美しい瞳か、詩的なヤパンクの思出を樂むやうに。

□紀州田邊に靜養中であつた河上肇博士が、日頃大學の研究室で企て難い三個の事業を計畫した。第一は禁煙 、是れは先づ失敗であつた。第二は畫を描く事だ、流石に昨年の二科展に「家のある對岸の小山」を出陳した新進畫家河上左京氏の令兄であるだけに、數日の後、水彩でもつて附近の風景を見事に寫しあげた。そして第三は小説を作る事で有た、それは構想のみなつて間もなく歸京後 稿した、即ち本誌本號のために寄せられた雄篇「斷片」であつた。

□河上左京氏が河上博士の令弟であるやうに、あの温い光と豊満な調子の作品を屢々帝展の推薦畫として出陳する田邊至氏は哲學者田邊元博士の令弟である。正宗得三郎畫伯を親友とする河田嗣郎博士は、京大第一の美術家で、自然に對する洞察力の優れた博士の作品は、何處かに云ひ知れぬ偉力を持て居る。石井柏亭畫伯は朝永三十郎博士の親友で、そして遠縁に當る筈である。博士の美術に對する批評は文藝のそれと共に、むしろ専門家よりも自由で親切だとの評だ。

□ある音樂の好きな雜誌記者が朝永三十郎博士を訪れた時、博士は盛に新輸入のレコードを演奏しては、或はマダム、エルパの獨唱を聞いては聲歌のコンサートホールの面白きを説き、あるひはカルメンの前奏曲に巴里のオペラ、ハウスの華麗なるを語るうち、暮れ易い冬の日は何時の間にか夜に入つてしまつた。博士は、長い廊下に客人を送りながら『借金取を都々逸で歸したは昔の事、今では蓄音機で原稿取を歸しますよ。』と、いつもの靜な和な調子で云つて、そして二人は顔を合せて一寸と微笑した。

□波多野精一博士も伯林から巴里までオペラを聽きに出掛けたと云ふ耳の持主だけに、音樂に關する趣味と智識は驚くべきものがある。博士の友人で小説家の佐藤紅綠氏が、ある新聞に小説を連載して居た頃、西洋音樂の智識を缺いだ作者は平氣で「オーケストラがベートーベンのムーンライト、ソナタを演奏した」と書いてあるのを、最先きに發見してそして注意して寄來したのが波多野博士であつた。由來紅綠氏は「波多野君が見て居るから」と云つて浮りした事は嘗けなかつたさうだ。是の話は波多野博士の趣味を語るのみか、其の友情の如何に厚きかを知る一美談であるまいか（浩）

第三インターナショナル批判

第三インタナショナル

山川均

一

『妖怪は歐羅巴を悩ましてゐる――共産主義の妖怪。舊歐羅巴の列強は、この妖怪を追ひ祓ふ爲に神聖同盟を組織した。羅馬法王とツアーと、メテルニヒとギゾーと、佛蘭西の急進主義と獨逸の刑事探偵とが。……』

これは七十年前に、マルクスの起草した有名な『共産黨宣言』の劈頭の一句である。この同じ妖怪は、今や全世界を悩まして居る。全世界の舊權力は、この妖怪を追ひ祓ふ爲に神聖同盟を組織した。クレマンソーとロイド・ヂョーヂと、佛蘭西の債券所有者と米國のトラストと、コルチヤツク、デニキン、ウランゲル、セミヨノフ、ケレンスキーと其信頼すべき後援者と！。全世界は第三インタナショナルの惡夢に魘はれてゐる。

二

第一インタナショナルは一八六四年に組織され、一八七〇年に消滅した。即ちマルクス等の協力の下に、主として英佛の勞働者によつて組織せられた萬國勞働者同盟（インタナショナル・ワーキングメンス・アツソシエーション）がそれである。第一インタナショナルは舊歐羅巴の權力階級を戰慄せしめた無産階級の最初の國際的運動であつた。萬國勞働者同盟は、マルクスとバクウニンとの暗鬪の爲に瓦解したと云はれてゐる。けれども此運動は、十九世紀の六七十年代に於ける各國無産階級の階級的成熟の程度を代表したものであつて、第一インタナショナルは、其歴史的使命を果して消滅したものと云はなければならぬ。

第二インタナショナルは一八八九年に創立され、一九〇〇年の巴里大會で初めて常設の機關を有するようになつた。即ちブラツセルに設けられた萬國社會黨事務局である。第二インタナ

ショナルは各國の社會黨と勞働黨の國際同盟であつて、三年毎に萬國社會黨大會を開いて、一般的の行動原則を決議した。歐洲戰爭勃發當時には、萬國社會黨事務局に加盟したものは二十七箇に亘り、一千二百萬の黨員を代表して居つた。

第二インタナショナルの數回の大會を通じて、最も重要な問題となつたものは、軍國主義と國際戰爭であつた。常備軍撤止の要求は一八八九年の巴里大會に提出せられて以來、一八九一年のブラッセル大會、一八九六年の倫敦大會、一九〇〇年の巴里大會によつて確認せられた。一九〇四年のアムステルダム大會は、時恰かも日露戰爭の最中に開かれたが、兩交戰國の代表者、プレハノフと片山潜は大會の演壇で握手を交換して滿場の熱狂を喚び起した。一九〇七年のスツットガルト大會は、國際戰爭に對する萬國社會黨の態度を確定した有名な會合であつた。大會の決議は、資本主義を以て帝國主義的戰爭の原因であると斷じたあとで、次の如く云つて居る。

『開戰の危險が迫つた場合には、用ひ得可き一切の手段に訴へて、戰爭の防止に全力を盡すことは、關係國に於ける勞働階級と議會に於ける其代表との義務である。但し是等の手段は、階級鬪爭の切迫如何により、又た一般政治上の形勢によつて異り、且つ發達するものである。

『是等の努力に反して既に戰爭の勃發した場合には、彼等は戰爭を迅速に終了せしめ、且つ戰爭によつて生じた經濟上政治上の危機を利用して、資本制度の沒落を促進せしめる爲に、最も深刻に民衆を鼓吹することに、全力を盡す可き義務がある。』

然しながら第二インタナショナルは各國社會黨の弛緩な聯合であつて、其中央事務局は事實上一つの通報連絡の機關に過ぎず、其大會は各國社會黨の領袖が集つて、各種各樣の意見を交換し、そして是等の全ての滿足し――若くは其何づれをも滿足せしめぬような、乘合馬車的の決議を通過する機關に過ぎないものであつた。斯ように第二インタナショナルは無產階級國際的團結と友愛とに對する感情を基礎とするもので、嚴密な主義を以つて集まり、そして組織的の行動を取る可き、行動の機關ではなかつたのである。其結果は、數回の國際的協議と交歡とを重ねつつ、しかも各國の社會黨は、實際に於ては國際主義を忘れて、漸次に國家主義に□□□□あつたのである。

國際社會主義の斯ような□□と、行動の機關としての第二インタナショナルの無力とは歐洲戰爭の勃發によつて、遺憾なく暴露されたのであつた。帝國主義的戰爭は、事實の上に始まつた。この血腥い風が一度び吹き荒んだ時、其跡には何物が殘つたらう。『戰爭によつて生じた經濟上政治上の危機を利用して

……資本制度の沒落を促進せしめよ』と云ふ萬國社會黨の旗印は、暴風の前の枯葉の如くに飛散した。彼等は帝國主義の戰爭と變じて、階級の戰爭とする代りに、資本主義の戰爭を變じて、却つて國內に於ける階級の協調とした。彼等はさつさとブルジョア政府の軍費を協贊した偉大なるインタナショナルはこの暴風の跡に、死屍の如くに横はつた。第二インタナショナルは死んだのである。

三

第二インタナショナルは死んでも、萬國社會主義の精神は亡びなかつた。各國の社會黨は、一時戰爭熱の大波に洗ひ去られたが、革命的な少數の團體主義者は、此間に除々と氣力を恢復して居つた。否な各國の社會黨のうちでも露國社會民主黨、伊太利社會黨、米國社會黨、其他セルビヤ、匈牙利、ルウマニア等の社會黨は最初から戰爭反對を以て終始した。そこで開戰の翌年には、早くも社會主義運動の團體關係を恢復しようとする運動が、既に芽ざしてゐた。この企ては先づルガノに於ける伊太利及び瑞西社會黨の協議會となり、米國社會黨のワシントン國際大會召集の計畫となり、コーペンハーゲンに於ける中立國社會黨の會議となり、更に一九一五年の三月には、クララ・ツェトキン女史によつてベルンに召集せられた、國際婦人社會主義會議の開催となつた。

然しながら是等の企ては、多かれ少かれ第二インタナショナルの國際事務局と關聯し、其諒解の下に行はれたものであつて、況んや第二インタナショナルに對して、新たなるインタナショナルを創設しようとする運動ではなかつた。ところが一九一五年九月に至つて、初めて舊國際事務局から全く離れた、反戰爭社會主義者の國際運動が現はれた。彼の有名なツイムメルワルトの會議は即ちそれである。

ツイムメルワルト會議には、露國、伊太利の社會黨を初めとし、旅券の交附を得なかつた英國及び米國を除く殆んど全ての國の社會黨、勞働團體、若くは其少數反戰爭派が參加したけれどもツイムメルワルト會議は、要するに廣き意味での反戰爭社會主義者の會議といふに過ぎないもので、其內には伊太利のモディグリナリ、露國のアキセルロッド等の中央派を眞中にして、右翼には英國獨立勞働黨のような純粹の平和主義的社會主義者があり、左翼には、獨逸獨立社會黨のシデブールの一派があつた。そして國際の戰爭を變じて、直ちに國內の階級戰爭たらしめよと叫ぶレーニン、トロツキー等は勢ひ此會議の最左翼に立つてゐた。

ツィムメルワルト會議の宣言は、當時各國資本家政府をして徉目せしめたものであつたが、それは單に資本主義的帝國主義

の罪惡を糾彈し、平和と社會主義との爲に、萬國無產階級の團結の必要を叫んだものであつて、その基調は『無賠償無併合の即時平和』と『國民の自決』とであつた、要するに現狀維持の平和に過ぎなかつた。レーニン等の極左翼は、固より現狀を基礎とする平和に滿足しなかつたばかりでなく、更に萬國無產階級の〇〇〇〇〇たる第三インタナショナルの創立を主張したが、極左翼の決議は十九票對十二票を以て敗れた。けれどもツィムメル會議の繼承者と見做す可きキーンタール會議によると、形勢は一歩を進めた。キーンタール會議の決議は『ブルジョア的平和主義に反對し、『政治的權力の把握と人民による資本の所有』――『社會主義の勝利』を以て平和の唯一の條件であると云ひ、第二インタナショナル國際事務局の行動を極力非難してゐる。即ちツィメムメルワルドの平和的社會主義は、キーンタールの革命的社會主義に進んで來た。レーニン等の極左翼は明らかに勝利を占めた。けれども即時に第三インタナショナルを組織すべしといふ彼等の主張は、此會議に於ても尙ほ少數であつた。然るに一九一七年九月のストックホルム會議に至ると、形勢は再び變化した。この會議は明らかに、新インタナショナルの創立を可とする決議を通過した。レーニン等は最後の勝利者であつた。

四

戰爭が終了して巴里に平和會議が開かれると、各國の戰爭社會主義者は開戰以來事實上消滅してゐた第二インタナショナルを復活し、二月三日より數日間、ベルンに國際會議を開催した。會議は英佛側と獨逸側との、開戰責任論を以て初まつたが、最も重要な問題はボルセヰズムとデモクラシーの論爭であつた。會議は此問題に於いては、終に決議案の採決をしなかつたが、佛のルノーデルはボルセヰキ問責案を提出し委員會の決議案も亦た『ベルン大會は……確乎として民主主義の原則に確立し、社會改造は民主主義の獲得を基礎とせざる可らず……故に人民多數の協贊を得可き機會を有せざるが如き、一切の社會主義化の方法は、之を排斥せざる可らず』として暗にボルセヰキの憲法會議解散を非難し、獨逸のベルンシタインに至つては、ロンゲー等が露國の實狀を視察するの必要ありと云ふ主張に對して、視察の必要すらもないと斷言した。

戰爭社會主義者等が、巴里の平和會議に於けるブルジョア政治家と同じように、露國革命といふ既成の事實を前にして、デモクラシーとディクテートルシップとの優劣の討論をしてゐる間に、莫斯科では萬國の無產階級を糾合する眞實の行動の機關を組織する運動が進行して居つた。ベルン會議に先づ一九一九年

一月二十四日を以つて、露國共產黨（舊ボルセヰキ）は波蘭、匈オ利、獨墺、レットランド、芬蘭、バルカン諸國の共產黨の援助の下に、萬國共產黨會議を開催す可き招狀を公けにした。此會議は同年三月二日から六日まで、莫斯科に於て開催せられたが、各國政府は或は旅劵の下附を拒み、或は代議員を逮捕し、有ゆる方法によつて白國社會黨の參加を妨げたにも拘らず、次の各國から代表者が參列した。

アルメニア（共產黨）。墺太利（同）。エストニア（同）。芬蘭（同）。獨逸（同）。レットランド（同）。匈牙利（同）リスアニア（同）。諾威（社會民主勞働黨）。波蘭（共產黨）。瑞西（社會民主黨非公式代表）。露西亞（共產黨）。瑞典（社會黨左黨）。ウリライナ（共產黨）。米國（社會主義勞働黨非公式代表）。バルカン社會革命同盟。露國に於ける獨逸殖民地の共產黨。露國に於ける東洋民族の團體。ツィムメルワルド派の左翼。

以上正式に票決權を持つた代表者以外にも、ブルガリア、和蘭、ユーゴスラヴ、支那、□□、チェクスロワキア、佛蘭西、波斯、チョルヂア、瑞西、トルキスタン、英國、米國からは、單に討議權を持つた代表者が參列した。此會議の結果、ツィムメルワルド委員會は正式に解散され、萬國共產黨同盟が創立せられた譯である。

大會は（一）報告（二）共產黨インタナショナルの綱領、（三）ブルジョア・デモクラシーと無產階級獨裁、（四）社會黨及びベルン會議（第二インタナショナル）に對する態度、（五）國際の形勢と聯合國の政策、（六）執行委員會の選擧と編制の順序で進行したが、三月十日にはラコフスキー、レーニン、トロツキー、ヂノヰエフ、プラッテンの署名を以て、『有名な共產黨インタナショナルの宣言』を發表した。此宣言はマルクスの『共產黨宣言』以來の、重要な歷史的文書と見做されて居る。

五

そこで現在どれだけの國の社會黨が第三インタナショナルに加盟して居るかは、尙ほ正確には知ることが出來ぬが、一九二〇年の初には、次の諸國に於ける社會黨、又は其左翼少數派は加盟したものと見做されてゐた。

アルゼンチン（共產黨）。アルメニア（同上）濠洲（社會黨）。墺太利（共產黨）。白耳義（同上）。ブラジル（同上）。支那（社會主義勞働黨）。□□（勞働團）。丁抹（社會革命黨左翼）。エストニア（共產黨）。芬蘭（同上）。チョルヂア（同上）。獨逸（同上卽ち前スパルタカス團）。英國（ブリチッシュ・社會黨、社會主義勞働黨、勞働者社會主義同盟、

サウス・ウエルス社會主義協會、全國勞働者委員會）。希臘（社會主義勞働黨）。和蘭（共產黨即ち前社會民主黨）。匈牙利（勞働者共產黨）。伊太利（社會黨、サンジカリスト同盟）。□□（社會黨）。ユーゴスラヴィア（社會主義勞働黨、前セルビヤ社會黨をも含む）。レットランド（共產黨）。リスアニア（同上）。メキシコ（同上）。諾威（勞働黨）。波斯（共產黨）。波蘭（同上）。ルウマニア（同上、前社會民主黨）。露西亞（共產黨、前ボルセキキ社會民主勞働黨）。南アフリカ（國際社會同盟）。瑞典（社會黨左翼）。トルキスタン（共產黨）。米國（社會主義勞働黨、共產黨、共產勞働黨）。

尤も此表は、固より正確とは云はれない。更に其後に幾多の變化があり、變化は今尚ほ行はれて居る。殊に第三インタナシヨナルは昨年の第二回大會に於いて、二十一ヶ條の加盟條件を決議した。此條件によると、第三インタナシヨナルに加盟し得可き社會黨は、單に多數決によつて第三インタナシヨナルの綱領を採用するばかりでなく、中央及び右翼の分子を、悉く黨外に一掃しなければならぬ。この條件は云ふ迄もなく、加盟團體の組織と綱領とを純一にして、インタナシヨナルをして眞に行動の機關たらしめる必要の上から設けられたものである。第三インタナシヨナルの創立そのものが、既に各國の社會主義運動の池中に巨石を投じたものであつたが、此二十一箇條の加盟條件は、更に其波瀾と動搖とを甚しくしたものであつた。此結果は全世界の社會黨を、革命的社會主義と改良主義的社會主義との、截然たる二つの陣營に兩斷する。そこで各國の社會黨は多かれ少かれ、此分化作用を蒙つた。そして其作用は、今尚ほ到る所に行はれて居るのである。

之に對して各國の社會黨が如何なる態度を取つたかと云ふ、大體に於いて三つに區別することが出來る。即ち第一は、依然として第二インタナシヨナルに留まること、第二は、無條件に第三インタナシヨナルに加盟すること、第三は、第二インタナシヨナルより脫退して、第三インタナシヨナルの原則を採用はするが、直ちに莫斯科（即ち第三インタナシヨナル）に加盟することは之を保留し、莫斯科をも包括する革命分子の新インタナシヨナルを組織することとである。英國の勞働黨、獨逸の社會民主黨（即ち多數派）などは第一の態度を取り、各國の共產黨は第二の態度を取つたが、佛蘭西社會黨、獨逸の獨立社會黨、英國の獨立勞働黨などは、何れも第三の立場を取つた。

其後に於ける佛蘭西社會黨の變化は、全世界に於ける社會黨の分化作用を最もよく代表したものであつ

て、一九二〇年のストラスブルグ大會では、第二インタナショナル脱退贊成は四千三百三十票であつて、反對は三百三十七票であつた。然るに『改造說』(卽ち前揭の第三の態度)は三千三十一票であつて、卽時莫斯科加盟說は千六百二十一票であつた。

そこで佛國社會黨は、この大會の決議に從つて、インタナショナル『改造』の運動に着手し、幹事フロッサールと機關紙の主筆カシアンとを露都に派遣したが、二人は『改造』說の不可能と卽時莫斯科加盟說を齎らして歸つて來た。そして昨年十二月のツール大會は、大多數を以て、第三インタナショナル加盟を決議し、中央及び右翼は其爲に分裂した。

獨逸の獨立社會黨も、最近の大會に於いて分裂し、左翼は舊スパルタキスと合同して共產黨を組織した。英國では稍々形勢を異にし、從來數個の加盟團體が並立して居つたが、第三インタナショナルの一國一黨主義に從ひ、昨年末の聯合大會によつて一個の共產黨に結合した。米國の兩共產黨も、遠からず一黨に結合せらるる筈である。

斯ように第三インターナショナルの出現は、全世界の社會主義運動に一大波瀾を卷き起したが、波瀾の起るごとに、第三インターナショナルの差し潮は高まつて居る。第二インターナショナルは昨年ゼネヴアに大會を開いたが、其主要分子は英國の勞働黨、獨逸の多數派社會黨などであつて、其綱領は依然として傳統的の革命的用語を繰返しては居るが、殆んど何等の革命的の精神をも、革命的方法をも示して居らぬ。

第三インタナショナルと關聯して、國際勞働組合聯合に對立して、各國の革命的勞働組合を糾合する赤色組合インタナショナルの成立を見たことは、前號『社會主義國家と勞働組合』のうちに畧述した通りである。

六

第三インタナショナルの綱領は、こゝには記述の自由がないが、要するにソヴィエット制度を基礎とする無產階級獨裁によつて、共產主義の實現を期することである。けれども第三インタナショナルの特徴は唯だに此綱領のみではなく、寧ろ其組織にあることを忘れてはならぬ。

前にも述べた通り、第二インタナショナルは畢竟するに、各國社會主義運動の通信聯絡の機關であつて、三年每に開かれる大會は、各國社會主義運動の種々なる意見と經驗とが交換され、そして何人にも異存の無い、然しながら(寧ろそれ故に)何人をも眞に滿足せしめるに足らぬ乘合馬車的の決議が通過され、而かも實際運動の上には、何人も此決議に固執するの義務と熱誠とを感じないものであつた。そして其結果は、國際的友

サウス・ウエルス社會主義協會、全國勞働者委員會)。希臘(社會主義勞働黨)。和蘭(共産黨即ち前社會民主黨)。匈牙利(勞働者共産黨)。伊太利(社會黨、サンジカリスト同盟)。□□(社會黨)。ユーゴスラヴィア(社會主義勞働黨、前セルビヤ社會黨をも含む)。レットランド(共産黨)。リスアニア(同上)。メキシコ(同上)。納威(勞働黨)。波斯(共産黨)。波蘭(同上)。ルウマニア(同上、前社會民主黨)。露西亞(共産黨、前ボルセヰキ社會民主勞働黨)。南アフリカ(國際社會同盟)。瑞典(社會黨左翼)。トルキスタン(共産黨)。米國(社會主義勞働黨、共産黨、共産勞働黨)。

尤も此表は、固より正確とは云はれない。更に其後に幾多の變化があり、變化は今尚ほ行はれて居る。殊に第三インタナショナルは昨年の第二回大會に於いて、二十一ケ條の加盟條件を決議した。此條件によると、第三インタナショナルに加盟し得可き社會黨は、單に多數決によつて第三インタナショナルの綱領を採用するばかりでなく、中央及び右翼の分子を、悉く黨外に一掃しなければならぬ。この條件は云ふ迄もなく、加盟團體の組織と綱領とを純一にして、インタナショナルをして眞に行動の機關たらしめる必要の上から設けられたものである。第三インタナショナルの創立そのものが、既に各國の社會主義運動の池中に巨石を投じたものであつたが、此二十一箇條の加盟條件は、更に其波瀾と動揺とを甚しくしたものであつた。此結果は全世界の社會黨を、革命的社會主義と改良主義的社會主義との、截然たる二つの陣營に兩斷する。そこで各國の社會黨は多かれ少かれ、此分化作用を蒙つた。そして其作用は、今尚ほ到る所に行はれて居るのである。

之に對して各國の社會黨が如何なる態度を取つたかと云ふ、大體に於いて三つに區別することが出來る。即ち第一は、依然として第二インタナショナルに留まること、第二は、無條件に第三インタナショナルに加盟すること、第三は、第二インタナショナルより脱退して、第三インタナショナルの原則を採用はするが、直ちに莫斯科(即ち第三インタナショナル)に加盟することは之を保留し、莫斯科をも包括する革命分子の新インタナショナルを組織することである。英國の勞働黨、獨逸の社會民主黨(即ち多數派)などは第一の態度を取り、各國の共産黨は第二の態度を取つたが、佛國社會黨、獨逸の獨立社會黨、英國の獨立勞働黨などは、何れも第三の立場を取つた。

其後に於ける佛國社會黨の變化は、全世界に於ける社會黨の分化作用を最もよく代表したもので あつ

て、一九二〇年のストラスブルグ大會では、第二インタナシ■ナル脱退贊成は四千三百三十票であつて、反對は三百三十七票であつた。然るに『改造説』(卽ち前掲の第三の態度)は三千三十一票であつて、卽時莫斯科加盟説は千六百二十一票であつた。

そこで佛國社會黨は、この大會の決議に從つて、インタナシ■ナル『改造』の運動に着手し、幹事フロッサールと機關紙の主筆カシアンとを露都に派遣したが、二人は『改造』説の不可能と卽時莫斯科加盟説を齎らして歸つて來た。そして昨年十二月のツール大會は、大多數を以て、第三インタナシ■ナル加盟を決議し、中央及び右翼は其爲に分裂した。

獨逸の獨立社會黨も、最近の大會に於いて分裂し、左翼は舊スパルタキスと合同して共產黨を組織した。英國では稍々形勢を異にし、從來數個の加盟團體が並立して居つたが、第三インタナシ■ナルの一國一黨主義に從ひ、昨年末の聯合大會によつて一個の共產黨に結合した。米國の兩共產黨も、遠からず一黨に結合せられる筈である。

斯ように第三インターナシ■ナルの出現は、全世界の社會主義運動に一大波瀾を卷き起したが、波瀾の起るごとに、第三インターナシ■ナルの差し潮は高まつて居る。第二インターナシ■ナルは昨年ゼネヴアに大會を開いたが、共主要分子は英國の勞働黨、獨逸の多數派社會黨などであつて、其綱領は依然として傳統的の革命的用語を繰返しては居るが、殆んど何等の革命的の精神をも、革命的方法をも示して居らぬ。

第三インタナシ■ナルと關聯して、國際勞働組合聯合に對立して、各國の革命的勞働組合を糾合する赤色組合インタナシ■ナルの成立を見たことは、前號『社會主義國家と勞働組合』のうちに略述した通りである。

六

第三インタナシ■ナルの綱領は、こゝには記述の自由がないが、要するにソヴィエット制度を基礎とする無產階級獨裁によつて、共產主義の實現を期することである。けれども第三インタナシ■ナルの特徴は唯だに此綱領のみではなく、寧ろ其組織にあることを忘れてならぬ。

前にも述べた通り、第二インタナシ■ナルは畢竟するに、各國社會主義運動の通信聯絡の機關であつて、三年毎に開かれる大會は、各國社會主義運動の種々なる意見と經驗とが交換され、そして何人にも異存の無い、然しながら(寧ろそれ故に)何人をも眞に滿足せしめるに足らぬ乘合馬車的の決議が通過され、而かも實際運動の上には、何人も此決議に固執するの義務と熱誠とを感じないものであつた。そして其結果は、國際的友

愛の感情が熱心に唱へられつゝ、社會主義の運動は却つて國家主義的になつて來た。歐洲戰爭に對する各國社會黨の態度は、遺憾なく此實狀を曝露したものであつた。要するに其れは無產階級の國際的行動の機關といふよりも、寧ろ萬國社會黨の勢揃ひ、乃至は觀兵式に過ぎないものであつた。

第三インタナシヨナルは、（三十一缺）それは一定の綱領の下に、一定の組織によつて結合せられたものである。第二インタナシヨナルは戰爭と共に破產した。過去に於ける二つのインタナシヨナルは、各々其歷史的使命を終へて消滅した。第三インタナシヨナルは、未來の人類の歷史の上に、如何なる頁を書き加へるであらうか。『妖怪は歐羅巴を惱ましてゐる』。否な全世界を惱ましてゐる——第三インタナシヨナルの妖怪！

獨裁主義の無能

―第三インターナショナルの缺陷―

賀川豐彥

第三インタナショナルで問題になるのは、なぜ民主々義に代へるに獨裁官を以つてするかにある。

それは過渡期だから仕方が無いと云ふ。然し獨裁官で資本主義の整理が出來るならば政治も最も幼稚な君主的專制主義で發達し切つた資本主義の經濟制度を支配が出來ることになるのである。

私のよく聞くことは普通選擧などはいかぬ。あれは經濟運動に政治を混へるからいかぬと云ふのであるが、第三インタナショナルは政治運動と經濟運動を區別すると稱して實際は政治運動どころでは無くて軍事行動まで用いて、政治運動は勿論のこと凡ての組織を經濟的勢力を用ゐて顚覆せんとする。それで、サンヂカリズムの云ふ經濟運動の外政治運動をするなと云ふことは　經濟的勢力を用ゐた方が、政治運動をするよりか早く政治を覆へすに便利だと云ふことだとするのが善いのだ。

サンヂカリズムがもう少し極端に行つたのがボルセヴキズム即ち第三インタナショナルであるが、サンヂカリズムにはまだ明瞭に意識されて居なかつた英雄主義が、レニンには之が獨裁官と變化されて居る。この邊の消息はケレンスキーの外務大臣であつたミルコツフが詳かにその著『ボルセヴヰズム』に書いて居るが、サンヂカリズムを押し詰めて行けば民主々義に信用を置か無くなると共に獨裁主義のボルセヴズムに移つて行くのは當りまへである。

私に云ふ人は、誰れでもかう云ふ、それは過渡期たから仕方が無いのだ。ボルセヴヰキの眞目的は眞正な民主々義の確立にあるのだが、資本主義が凡てを奴隷にして居るから、その奴隷を解放するには先づ英雄の力を借りて奴隷を解放してそれから産業上の民主々義を確立すれば善いのだと。

そんならマルクスの云ふた、唯物史觀の決定的進化は何處へ行つたか、資本主義が熟して後に産業民主の時が來ると云ふたが、その決定は待て無いで、獨裁官の力を借りて經濟組織を動かすことが出來る程度にまで決定の進行が早かつたと云ふのか？

そんなら、決定によつて、獨裁官が（政治的勢力）が運いて經濟的勢力に作用すると信ず可きものか？或はまた獨裁官で動かせるような世界は眞に經濟組織が資本主義化して居らぬ幼稚な世界で、ロシアのような國でこそそれが實行が出來るものではあるまいか？獨裁官で片付けることの出來るやうな制度であれば、それはマルクスの唯物史觀とは逆倒で『凡ての文化は――資本主義の經濟制度をも含めて――政治的勢力（特に獨裁官の上に乘つて居る』と唯物史觀の公式を書き換へねばならぬではあるまいか？この點に就て私はレニンがマルクスの弟子だと自稱して居るのは怪しいと思ふのである。

それで、獨裁官の勢力で凡てが解釋が出來るのであれば、スコツト・ニアリングでは無いが、凡ての問題はとうの昔に解決して居る筈のものでは無いか―

實際レニン自身ですら、初めの程は憲法會議を召集して、普通選擧を實行すると聲明して居たでは無いか！つまりレニンは一度は普通選擧を云ひ出したが自分と徹底的革命に都合が惡いので民主々義を引き込めたのである。つまり獨裁主義は一種のレニンに對する誘惑であつたのだ。そしてレニンはそれに敗けたのだ。レニンとしては萬已むを得なかつたであらうが、惜しいことをした。

然し、人は云ふ、そんなら、レニンが徹底的勝利を得た後に民主々義に歸れば美いでは無いかと、實際私の聞きたい點はそこにある。レニンが獨裁主義をどんなにして民主々義に移すか

と云ふことを教へてくれさへすればそれで善いのだ。然しそんなことはどうでも善い、少し位い專制でも、過激派の專制は政治的專制で、資本主義の專制は經濟的專制だから、資本主義の專制の方が惡い。それで過激派の目的が善いからその方に贊成すべきだと云ふ。

然し專制に於ては同じことで、それに變つたところは少しも無い。之を產業民主々義の第二インタナショナルで行けば、二つともに專制を破壞する目的を持つて居るから猶都合善いのだが、過激派に贊成する人は、そんなことは問題にせぬ。然し實際の問題は、過激派であれば、交換の自由、職業の自由、移住の自由も政治的に奪はれるから、凡ての人々は農奴の昔に歸るようなものだ。それでどうして新しい資本主義以上の產業民主々義を生むことが出來ようぞ。

私の聞きたいのは、此點である。レニンのようにやれるなら古代ローマのチンナやスピリアンの革命で最後の無產者時代が來てゐた筈では無いか！こんな危ない獨裁制度よりか、產業民主によりカール・カウツキーの云ふ通りに普通選擧と產業管理で行かんとする第二インタナショナルで行くのがどれだけ安全であるか知れ無い。

民主々義の方向は嘗て敗北したことの無い決定的進化の道である。私は飽迄その安全な道を行く。

偏見的インターナショナリズム

高畠素之

第一、第二、第三インターナショナルの區別と云ふやうな事も面白い問題であらうか、今のところ小生には興味がない。第二にしても第三にしても、土臺インターナショナルなどと云ふ問題で西洋人の尻馬にのる氣にはなれぬ。

全體、西洋人ほど甚だしく口と心の違ふ奴はない。此點は耶蘇宗徒も社會主義者も區別はない。社會主義者の『同　志』は耶蘇宗徒の『兄弟姉妹』耶蘇宗徒の四海同胞主義は社會主義者のインターナショナリズムと思つてゐれば間違ひはない。兄弟

姉妹よと叫びながら資本家は勞働者を搾り、『インターナショナル』を歌ひながら社會主義者は社會主義者を肉彈に供して居れる人間だ。口にインタイナショナルを唱へても、心はナショナルに燃えてゐる。

殊に西洋人の人種的偏見と來てはお話にならぬ。彼等は白人以外の人種は總て劣等なものと云ふ目で我々を眺めてゐる。亞米利加あたりからやつて來る下廻りの社會主義者など迄が『カムレッド』と叫びながら、一段高い所から我々を見て居るやうな態度を見せる。此んな手合を遠來の客だなどゝ云つてチヤホヤするなどは馬鹿げ切つた奴隷根性だ。

西洋の社會主義者が唱へるインターナショナリズムとは、精々白人のインターナショナリズムだ。歐羅巴の萬國主義だ。白人以外の人種に對しては、斷じて心からのインターナショナルではないと思つて居れば間違ではない。インターナショナルを餌にして我々を奴隷に釣らうと云ふ下心が見え透いてゐる。

資本家が仁義道德を說く時勞働者がそれを眞に受けたら、それこそ資本家は喜ぶだらう。西洋人がインターナショナルを叫ぶ時に、好い氣になつてそれに呼應したなら、西洋人は嘸喜ぶだらうが、我々はそれではバターの奴隷にならねばならぬ。

對等のつき合ひならインターナショナルも結構であらう。

りながら、向ふには我々を輕侮するが心シコタマあり、事實に於て我々の實力が劣つてゐる今日（現在に於て、西洋人に誇り得る我々の實力は惜しいかな武力のみだ―彼等のことを考へると、此唯一の實力にだけでも縋りたくなる）彼等の尻馬にのつてインターナショナルの握手を求めるなどは眞平だ。

何はともあれ、國として國民として强くならぬ限り、富に於ても、學問に於ても、武力に於ても、社會組織に於ても、眞に彼等と對等の實力を涵養するに至らざる限り、インターナショナルは西洋人だけのお題目にして置け。日本人は日本人としての實力を養ふことが先決問題だ。

附記、露西亞人は西洋人か否かを知らず、西洋人ならずとせば、以上の點に於て幾分西洋人よりもマシのやうに見えるが之れとて中々由斷はならぬ。

第二及第三インターナショナルの分野

法學士　河村又介

本稿は　レドラー著「社會主義の思想と行動」
ビーヴァン著「戰時中のドイツ社會民主義」
コンテンポラリーシヴイウ(昨年十二月號「ドイツに於ける共産主義者と社會主義者」)
フオルトナイト、ーヴイウ(今年一月號)「社會主義運動の分裂」
ラウンドテーブル(昨年十二月號)「第三インターナショナルとドイツの社會主義者」
等に負ふ所最も多いことを斷つておく。

(一)

『バクーに於ける東洋共産黨大會に於て、中央執行委員會長ジノヴイエフは帝國主義に對する○○○○○宣言した。東洋二千の代表者等は劍戟を閃かし、銃砲を誇示し、斃れる迄戰ふことを誓うて○○○○絶叫した。帝國主義呪詛の聲は四壁に鳴り響いた。』

これは昨年九月第三インターナショナルがバクーに開催した東洋共産黨大會に關する外相チエチエリンの報告である。『コーランか劍か』といふのは回教宣布の標語であつたが、ボルシエヴイズム宣傳の「○○」ボルシエヴイストにはこの二途あるのみ、曖昧と中腰と筒井順慶とを許さない、白色の資本主義を敵として宣戰を布告したことは勿論であるが、所謂黄色の勞働組合や妥協社會主義を蛇蝎視することは更に之にも劣らない。從つて之等の聯合である第二インターナショナルに對して、ボルシエヴイストを中心とする第三インターナショナルが猛烈なる進擊を開始したことは當然である。

之に對して、第二インターナショナルの首府たるロンドンの

宣言は『全世界の勞働者よ！不眞面目なる手が諸君の結合を引裂きつゝある、「勞働者よ！分裂せよ！」といふのがその叫である。……インターナショナルは今や危機に瀕してゐる、資本主義が決して爲し得なかつたことを、狂熱せる獨斷家が我等自らの陣營の中で成し遂げた、彼等は無産者結合の巖を内部から打ち碎いた』と宣べて警戒し、尙語を續けて『第二インターナショナルは民主的社會主義の理想のために一方には資本主義の奴隷制に對し、他方にはボルシエヴイズムの暴君的獨裁に對して戰ひつゝある。社會主義は平和を意味する、ボルシエヴイズムは暴力と戰爭とを意味する。……第三インターナショナルの指導者等はロシヤ人民の希望を塵埃中に踏み躙つて民主主義の代りに武裝の獨裁政治を布いた、而も無産者の獨裁に非ずして委員の獨裁を。……彼等はロシヤ皇帝專制の舊世界に屬してゐる。……彼等は賃銀の奴隷制を廢止したかも知れないけれども、國權の奴隷制と不幸とを生んだ。彼等は勞働者から團結と運動との自由を奪うて經濟的民主主義の創設を阻みつゝある。

社會主義のための最後の戰が可決せられるのはロシヤに於てではあるまい、資本主義の最も發達し最も力強き國々に於てゞあらう。この理由によつて第二インターナショナル大會はイギリス勞働黨をその選手と指名した。……諸國民の解放者たる國際社會主義萬歲！』と云つてをる。

の宣言にはヘンダーソン、ヴンデルヴエルデ、マクドナルド等が署名してをるが、モスコーの宣言によれば『この署名人等は信義深き資本家の忠告者であり、信頼すべき「〇〇〇〇〇〇〇〇〇」なのである。『改善せられた自分共の地位――中等階級といふ薔薇色の眼鏡越しに世界を見る』が故に不熟練職工の苦難を知らぬものである。『資本家の代表者との平和な取引に於て、無産者の革命を邪魔物扱にして、終に革命の眞劍の敵となつたものである、大戰中には『萬國の勞働者よ！團結せよ！』といふ叫の代りに『萬國の勞働者よ！祖國防衛のために相互の咽を斷ち切れ！』と宣したものである。資本家の内閣に入り無産者を說き伏せて『最後の一息迄資本主義のための戰場に鬪はしめたものである。彼等は『マルクス、エンゲルスの敎理の背敎者であり、從て又社會主義と勞働階級との叛逆者』なのである。第二インターナショナルに對する彼等の批判に曰『マルクスとエンゲルスとが資本家社會を解說して、資本と勞働との間に到底相容れざる戰の生ずるは必然でもあり、又正當でもあること、而してこの戰は世界の勞働階級が資本を顚覆することによつて終局を告げねばならぬことを指摘して以來七十三年間（共産黨宣言は一八四八年出でた）、唯一分子のみがこの鑑識の眞理を體

眛にし、それが鼓舞した革命の力を弱めるために奉仕した、この分子とは云ふ迄もなく進化的社會主義である』と。この批判は恰例をドイツに取つて、同國の社會黨が資本家と術合し、カイゼルの傀儡となり、戰爭に加擔し、無產者に機關銃を向けてその代表者を殺害したことを痛擊し、更に修正派の頭目ベルンスタインが『最終の目的は無い、運動が凡てで』あるといふに至つたことを難じてをる。

（二）

之に對して第二インターナショナルの擁護派は答へる。資本家の工場が惡いものであるといふのは成程事實だ。然し何もないよりは優つてをる。我等は生產力を破壞すること無しに一步々々之を改良することを目的とする。君等革命主義者は勞働者の經濟的不調を喞つて、之を暴力革命の理由とする。先づダイナマイトで工場を破壞して然る後紙上計畫のユートピア工場を建設しようとする。然し乍らそしたら君等が心配した勞働者の苦難は何うなるか？君等が片手に警察と爭ひ片手に夢想の工場を建設しようとする間に彼等は騷動に捲き込まれ、職業を失うて餓死するより外なからう。成程ダーウインが進化論のためになした所をマルクスは社會主義のために爲した。然しダーウインの後繼者が彼の發見に革命を加へたと同じく、資本主義社會に對する半世紀以上の經驗は、進化による社會進步といふ概念をマルクスに加へた。君等は我等が資本家の毒に浸潤せられてをるといふけれど、君等が罵ふ所の我等の御都合主義が社會主義の普及に貢獻したことは、君等のダイナマイトよりも遙に大である。我等は組織と教育とによつて勞働者の地位を大に強めた。我等の如く教育と民主々義といふ有効な手續きを經て爲すことは、君等が暴力で失ひつゝある所の道德力を得る所以である。君等は資本主義が暴力を使用するときはそれを御ちながらそれを自らの權利として道德として用ゐようとする。社會主義は、今更野蠻な鬪爭手段を採用するには、余りに長い間それの憎むべきことを說き來つた。而して民主主義は、それを我等が實行する順番になつた今に於て、俄かに放棄するには我等は余りに長い間それを熱愛することを習慣とした。無產者の獨裁といふのが大多數の意思を容れるといふことであるならば、それは我等の所謂民主々義である。然し君等の考へる所は實は、ロシアに實行せられてゐるやうに、自ら無產者の名を僭稱する一團の人々の專制である、資本家階級に對する專制であると共に勞働者に對する專制である。若しそれソヴイエト制度に至つては、それの實際の作用を示せ、而る後でなければ我等が有する唯一の統治機關を顚覆することはできぬ。それが果實を結ぶな

らば社會はそれを採用するであらうが、君等が發明した果樹の路圖を見せたゞけでは、我等の有する樹を一鉈の下に伐り倒す氣にはなれぬ。要するに『支配か滅亡か』といふ君等の態度は余りに狂熱的である。我等は共に相談し、又君等の教を學ばうとしてをるにも拘はらず、君等は資本主義といふ共同の敵との戰には加はらずして、勞働階級の勢力を分割することに全精力を捧げてをると。

（三）

かくて全世界の無産者は或は第二インターナショナルに踏み止まり、或は第三インターナショナルに馳せ參じた。前者の中堅を爲すものは七百萬の組合員を有するイギリスの勞働組合であつて、ドイツの多數派社會黨及勞働組合の五百萬、ベルジウム及オランダの勞働黨各五十萬、その他を合せれば約千四百萬の勢力であるといふ。

第三インターナショナルの赤旗の下に第一に馳せ參じたものはイタリア社會黨である。而して一昨年三月以來ノルウエー勞働黨、ブルガリヤ社會民主黨、スヱーデン左派社會黨、ハンガリアの共産黨及社會民主黨聯合、オランダ社會民主黨、スペイン勞働總同盟、ノルウエー勞働黨等皆この後を追うた。その數は固より測り知るを得ないが、刻々にその勢力を增大しつゝあることは明かであつて、その後脱退して第二インターナショナルに復歸したものとてはハンガリヤ社會民主黨あるのみである。

かくの如く各國の社會主義者は左右兩派に分れて各その好む所に赴いたが、此の外に尚中央派なるものが中間に介在してをる、ドイツ獨立社會黨、フランス社會黨、イギリス獨立勞働黨アメリカ社會黨、スペイン、スヰス、オーストリーの社會黨等即ちこれであつて、彼等は第三インターナショナルの微溫さに飽き足らず、さりとて命をモスコーに仰ぐだけの決心をも爲し得ないのである。然しながらかゝる曖昧な態度は赤色本部の斷じて看過し得ざる所である。彼等は曰ふ『第二インターナショナルの立場は明かである、彼等は我が敵である。中央派は危急の秋に際して何れの側に立たうとするのか不明である、その幹部の多くは狐疑逡巡して日和を見てをる。我等は中央派を分裂さして眞の革命的分子を我等の陣營に加へ、然らざるものを敵側に追ひ込まねばならぬ、内心第二インターナショナルに屬するものは幕下に走らねばならぬ、我等に屬するものは直ちに來り投ずるを要する、かくて戰線は明かとなるであらう』と。

（四）

（五）

（以下八十行缺）

或は之を以てローマ法王の權力をモスコーに樹立するものであると評するものがある、從に、資本主義の國家より成る國際聯盟未だ完成せず、徴温的社會主義者の第二インターナショナル動揺せる時にあたつて、革命共產主義者の第三インターナショナルは米國の無產者を糾合して世界に號令する條件の承認を强要したのである。これは實に各國の社會黨に投ぜられた爆彈であつた、醜政黨の役員が發した公開狀でさへも反對黨を攪亂するに充分であつた、かうして正々堂々と眞正面から二十一ケ條を突きつけられて否か應かの回答を迫られた各國の社會黨は動揺せざるを得なかつたのである。

イギリスの勞働黨は之に先つて加盟案を否決し、過激視せられてゐた獨立勞働黨や社會民主黨さへも參加　反對して大に保守國振りを示したが、之に不滿の分子は昨年八月共產黨を組織して加盟した。フランスでは昨年十二月の社會黨大會に於て加盟派大多數を占め、小數の留保附參加派及絕對反對派との間に分裂を生じた。イタリヤの社會黨中改良派はモスコー本部の破門を受け、今年一月の大會では共產派はユニタリヤ派及改良派の合同團たるイタリヤ社會黨と分離した。

ドイツに於ては第二インターナショナルに屬する社會民主黨中立の獨立社會民主黨第三インターナショナルに屬する共產黨の三黨鼎立してゐたが、二十一ケ條承認問題のために獨立社會黨は遂に分裂するに至つた、元來獨立社會黨はその多士濟々なることにより、又ドイツの如き軍國主義の眞唯中にあつてよく苦節を守り來れることにより、國の內外に勢力と信賴とを得て各國中央派の指導者と目せられ、その態度に依て諸國中央派の歸趨を示すものとして最も注目せられてをつた所であるから次に同黨態度決定の事情を述べよう。

(六)

獨立社會黨成立の由來は一八六九年ベーベル及ウイルヘルムリープクネヒトが社會民主勞働黨を組織した時に遡溯る、これは後に政府の壓迫のために全ドイツ勞働組合と合併して現今の社會　義黨を組織したけれども、黨內には兩派の爭常に絕えず、後者がラッサーレの流を汲んで國家社會主義的であり、ベルンスタインに從つて修正說を奉じたのに反して、前者はマルクスの正統を嗣いで相讓らなかつたが、黨の妥協的傾向益著しくなり大戰中には多年の節操を棄て、戰費の協贊を決議すること度重つたので、所謂小數派は一九一七年終に分立、一黨を組織して獨立社會の民主黨と稱したのである、その頃所謂小數派が非戰論と國際主義とのために、軍國主義の走狗となり了せた多數派と相爭うた意氣は、社會主義の歷史中最も興味ある頁の一

を含すものであるが茲にはそれを述べる余裕がない。

然しながらこの獨立社會黨も種々の異分子から成つてゐたので、その最左翼たるカール、リープクネヒト等のスパルタカス團は、革命後の黨の妥協的の態度に憤慨して分立し、その名を『ドイツ革命的共産勞働黨スパルタカス團』と稱した。後には比較的溫和な分子が殘つて中央派として存續したのであるが勢力はなか〳〵強く、昨年六月行はれた新憲法制定後第一回の總選擧に於ては、總投票數二千六百萬票議員總數四六六名中、最大多數黨たる社會民主黨が五百六十萬票一一二名の議席とを贏ち得たるに對し、獨立社會黨は四百九十萬の得票あり八一名の議員を選出して第二多數黨たるの地位を占めたのである、共産黨は四十三萬票を得たけれども當選者は二人に過ぎなかつた。

（七）

さてかの二十一ケ條の挑戰狀を最初に受取つたものはこの獨立社會黨であつた、領袖等直ちにロシヤに赴いたが歸り來るやその中でクリスピエン、チツトマン、ヒルフエルチング等は大反對を唱へドイミヒ、ステーケル等は贊成の宣傳を始めた、十月半幹部は急遽大會をハルレに招集した。第三インターナショナル執行委員長ジノヴイエフは贊成派を應援するため、ロシヤ小數派（メンシエビキ）の領袖マルトフは反對派聲援のため、而してフランスのロンゲは中央派を代表して條件附贊成を勸告するために來會したのである。

議長クリスピエンは立つて先づ獨立社會黨の立場を述べて曰『……右派は萬事を二途に歸して、民主々義か獨裁かより他に道は無い、而して前者は右派、後者は共産黨の採る所なるが故に獨立社會黨の據つて立つべき餘地は無いと云つてをる（實際その通りだと叫ぶものあり）。實際その通りだと云はれるのは我黨の根本原理を御存じないからである、我等が奉するライプチヒ綱領には、我等の武器が階級鬪爭の原則、革命的會議制度及集團行動であることを示してをる、これは右派と相違する點ではないか』と、彼れは次に第三インターナショナル反對の理由として先づ土地政策に意見を異にすることを述べ、會議制度に就て相容れざる點を擧げ、恐嚇と力の使用との一視を難じて『勞働者を一黨の專制の下に置くことは勞働者の教育い進めるドイツでは不可能である』と說き、「○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○」として認めると云ひ、更に共産黨に協和的精神の缺乏せることとバクリーの大會にアルメニヤ人虐殺の當事者たるエニベル、パシヤを加へたことゝを難じ、我黨はロシヤ革命の代理店とならずして獨立の判斷に從て行動せねばならぬと結んでをる。

之に對してはジノヴイエフが一々反駁を加へ、『一九〇五年我等が、今の時は一八四七年なりや、抑も亦四九年なりや、換言すれば革命は今後來るべきや又は已に過ぎ去れりやと問へるに對する答は前者であつた。今のドイツも同樣な狀態にあるに拘はらず獨立社會黨は「〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇」戰前に於ては、『革命は何時來るとも早過ぎることは無い』と云つたカウツキーさへも今や『諸君は革命を欲することと餘りに燥急である』と云ふに至つたことを責め、『モスコーで呼鈴の釦を押すときは何時でも革命を起せ』と命ずるものでないことを辯じ、二十一ケ條中何れの條項が不滿なりやを明示して貰ひたいと逆襲してをる。更にヒルフエルヂング之に應酬して、國民的政黨としての自主權を廢することとの要求、勞働組合のインターナショナルを破壞することとの要求、反對黨員除名の命令、等が承認し難い條項であることを答へた。

採決の結果は二三七對一五六の多數で加盟派が勝利を得たので反對派は退場し贊成派はインターナショナルの歌を高唱した。之を議員數にすれば左派二十二名、右派五十九名、機關新聞爭奪の結果前者に屬するもの十六、後者に屬するもの二十八。

ブラス、ドイミツヒ、アイヒホルン、ガエル父子等の左派は後に共產黨と合し從て第三インターナショナルに參加したが、右派は直ちに社會民主黨と合併することをせずヂットマン總裁の下に一黨として存續し、イギリス獨立勞働黨、フランス社會黨小數派、スイス社會黨等と共に新しく中央派の結合を組織するであらうと觀測せられてをる。

日本に關係なし

堺　利　彥

『萬國の勞働者、團結せよ!』

マルクス、エンゲルスの『共產黨宣言』が此の有名な鬨の聲を擧げたのは一八四八年(今より七十二年の昔)である。そしてそれが卽ち歐洲勞働階級の『インタナショナル』運動の第一着手であつた。

然し『第一インタナショナル』卽ち『萬國勞働者同盟』の現實

に結成されたのは一八六四年であつた。此『インタナショナル』は、エンゲルスが云つたように、實質上、イギリスでは勞働組合運動であり、ドイツでは社會民主々義運動であり、南歐では無政府主義運動であつたが、兎にかく勞働階級の大規模なる國際運動として、當時の歐洲權力階級を震駭させたものであつた。

然るに此『インタナショナル』が內部的にはマルクス派とバクニン派との爭ひ、外部的には、パリ・コンミユン一揆の失敗に依つて、一八七〇年以後、自然に解體されてから後、勞働階級の國際運動は暫く屛息の觀を呈してゐた。

それが再興したのは一八八九年で、同年以後、『萬國社會黨大會』が三四年に一回づゝ、パリ、ロンドン、ブリユツセル、ベルヌ、アムステルダム、バーデン、スツウトガルトなどで開かれてゐた。それが卽ち『第二インタナショナル』であつた。此『第二インタナショナル』、卽ち『萬國社會黨大會』には、日本の社會黨(若しくは社會主義團體)も加盟して、一九〇四年のアムステルダム大會には、我が片山潜君が出席し、日露戰爭の眞最中に、ロシヤ社會黨の代表者プレハノフと演壇で握手の儀式を行ひ、勞働階級の國際的親交を象徵した。次に一九〇七年のスツウトガルト大會にも、加藤時次郞君が我々の代表として出席した。

然るに一九一四年八月、(第一インタナショナルの誕生から丁度五十年目に)、ウイーン大會が開かれる筈になつてゐた所、それに先だつて歐洲大戰が勃發し、各國社會黨及び勞働團體の多數は各々自國の政府を擁護して適國と戰ふ事になり、それと同時に、『第二インタナショナル』は俄然として消滅に歸した。

ドイツがロシヤに宣戰する數日前までも、ひたすら開戰防止に努めてゐた各國の社會黨が、開戰と同時に忽然として其の國際主義、非戰主義を擲ち、愛國者、帝國主義者、國家主義者、軍國主義者に早變りしたのは、如何にも不思議の感を生ぜしめたが、そこにまだ國際社會運動の未熟から生じた弱味があつた。そして國家主義者や資本主義者は、それ見た事かと云はぬばかりに、この社會黨の態度を冷笑しつゝ、而も外面には大いに之を稱揚したのであつた。

然し戰爭の進行中、『インタナショナル』の復活運動が漸く起つて來た。それには二つの潮流があつた。一つは國家的社會主義者(卽ち主戰的社會主義者)の運動、一つは純然たる非戰的革命的社會主義者の運動。後者はキーンタール派、若しくはチンメにワルト派と呼ばれ、ロシヤのレーニンなどが其の中心になつてゐた。

然るに大戰爭がロシヤ革命に續くドイツ革命に依つて結終となり、それと同時に『インタナショナル』が復活した。然しそれは戰爭中に於ける二つの潮流の發展として、二つの『インタナショナル』となつて現はれた。卽ち一つは『第二インタナショナル』の經續と稱し、實は國家的社會主義者若しくは愛國的社會主義者、若しくは改良的社會主義者、若しくは妥協的社會主義者の國際的提携運動である。そして今一つは、ロシヤのモスコウに本部を置く革命的社會主義者の純然たる國際運動である。それが卽ち『第三インタナショナル』である。正式の名稱は『國際共產黨』である。彼等は愛國的社會主義者と區別する爲に、『社會黨』と稱せずして『共產黨』と稱してゐる。

『第三インタナヨシナル』卽ち『國際共產黨』は、一九一九年三月二日から六日まで、初めてモスコウに大會を開き、同月十日付、ラコウスキー、レーニン、ジノヴイエフ、トロツキー、プラッテンの署名を以て、『宣言』を發表した。

當時此の大會を招集したのはロシヤ共產黨(卽ち、ボルシュキキ)で相共に第三インタナショナルを組織すべきものと認められた、諸黨派、諸團體は左の如くであつた。

一、スパルタカス團(ドイツ)二、ロシヤ共產黨　三、獨澳共產黨　四、ハンガリー共產黨　五、ポーランド共產黨　六、フインランド共產黨　七、エストニヤ共產黨　八、レツトランド共產黨　九、リスユヤ共產黨　一〇、白露共產黨　一一、ウクライナ共產黨　一二、チエコ社會民主黨中の革命的分子　一三、ブルガリヤ社會民主黨中の狹派　一四、ルーマニヤ社會民主黨　一五、セルビヤ社會民主黨左翼　一六、スヰーギン社會民主黨左翼　一七、ノルエー社會民主黨　一八、デンマークの『階級鬪爭』派　一九、ホランド共產黨　二〇、ベルギー勞働黨中の革命的分子　二一、根本問題に於てロリオの意見と一致するフランス社會主義者の團體　二二、同上フランス勞働組合　二三、スヰス社會民主黨左翼　二四、イタリー社會黨　廿五、スペーン社會黨左翼　二六、ポーチユガル社會黨左翼　二七、ブリチシユ社會黨(マクレーン代表)二八、社會勞働黨(イギリス)二九、I・W・W・(イギリス)三〇、I・W・(イギリス)三一、ショップ・スチユワード運動中に於ける革命的分子(イギリス)三二、アイルランド勞働法團體中の革命分子　三三、社會勞働黨(アメリカ)三四、アメリカ社會黨中の左翼(デブス)三五、I・W・W・(アメリカ)三六、I・W・(オストラリヤ)三七、W・I・I・U・(アメリカ)三八、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇社會主義團體　三九、ムンツエンベルグの代表する青年社會主義インタナショナル

此の大會以後、各國內に於て『第三インタナショナル』加入の可否が切迫した大問題となり、イタリー社會黨が黨全體として加入した外、大國では容易に其の去就を決する事が出來なかつた。然し大體に於いて、社會主義者及び勞働運動者中の氣力

ある青年は、多く之に傾く事となつた。然し其の傾向は段々に讃者になりながら、猶ほ躊躇する者が甚だ多かつた。

そこで今度は、スヰスの社會黨、ドイツの獨立社會黨、イギリスの獨立勞働黨などが主唱となつて、『第二インタナショナル』にも屬せず、『第三インタナショナル』にも屬せぬ、諸黨派諸團體の國際大會を開く事を發議した。それは時として『第四インタナショナル』の運動と呼ばれてゐる。或は『インタナショナル改造』運動とも呼ばれてゐる。然し其の大會は今日に至るまでまだ開催の運びに至つて居らぬ。

『第三インタナショナル』の第二大會は、一九二〇年七月末から八月初にかけて、ペトログラードとモスコウとで開かれた。此の大會で最もやかましい問題になつたのは『加入條件』であつた。若し加入條件を曖昧にしておくと、段々に多數の妥協派がはいつて來て、折角の『第三インタナショナル』を骨拔にする恐れがある。『第二インタナショナル』の墮落も矢張り其の爲であつた。だから今度は峻嚴な加入條件を定めて、有らゆる妥協派を排斥する事が必要だと決定された。其の加入條件が謂ゆる『廿一個條』で、それが又各國內の大問題になつた。

現にイタリイでは、折角全黨で『第三』に加入したのに、最近の共產黨第一大會に於いて、其の問題の爲に分裂を生じた。其の結果は、從來の通り國內社會主義者の合同を保たうとするセラチ一派が五十七プロの多數を占め、『第三』派が三十四プロを占め、『第四』の態度を取る者が八プロ弱であつた。

ドイツでは、先ほど獨立社會黨が分裂して、其の左翼は共產黨と合同した。

フランスでは、ロンゲー等の中央派と温和派とが從來の社會黨に居殘り、多數派は分離して共產黨になつた。カシャン、スーヴァリーヌなどが其の領袖である。有名の小說大家アナトール・フランスが共產黨に屬したのも面白い現象である。

イギリスでは、最近に共產主義の諸團體が合同して、合同共產黨を作つた。獨立勞働黨の左翼、ショップ・スチュアード運動の連中なども、遠からずそれに合同する筈になつてゐる。

他の諸國（墺、米など）に於いても、峻嚴な廿一個條を押し通して、それを遵奉しようとする共產諸派の合同が着々として行はれてゐる。

スペーンでは、モスコウに派遣した二人の委員が歸つて來て、一人は『第三』加入を主張し、一人は『改造』派加入を主張したが、前者は協議員會に於いて三對十で否決され、後者も六對七で否決された。

其外、チエコ國では大會が『第三』加入を可決し、ルーマニ

までは來る五月の大會で分裂が豫期されてゐるなどいふ報知がある。

要するに今の所、社會黨は右黨、中央黨、左黨の三派に別れ、左黨が即ち『第三インタナショナル』を作つてゐるのである。中央黨は（ドイツの獨立社會黨、イギリスの獨立勞働黨、フランスのロンゲー、イタリーのセラチなど大抵皆なロシヤの『ソヴイエット組織』と『勞働階級獨裁』とに贊成してはゐるが、各自國内の事情が違ふから、廿一個條で縛られてモスコウの支配を受けるのは厭だと云つた樣な態度である。然し純粹共産黨からそれを批評すると、彼等は口ばかりの共産主義者で、イザとなれば右黨に與するタヨリないものだと云ふのである。そして大體から見て、從來の社會黨名士は大抵、右黨か中央黨かに屬し、左黨は元氣な若手ばかりである。そこで左黨は其の形勢を批評して、謂ゆる名士元老は『兵卒を持たない大將』だと冷かしてゐる。

今後この形勢が如何なる消長を示すかは、固より容易に斷言するわけに行かないが、『第三インタナショナル』の勢力が「〇〇」發、前記の『宣言』及び『廿一個條』の内容、『赤色國際勞働組合』の事など書くと面白いのだけれど、誰か外の人が書いてゐるだらうと思ふから、之だけにして置く。

最後に國際共産黨第二大會で選出された執行委員を記しておく。

▲執行委員。レフイ（獨）（代理マイエル）。ロスメル（佛）。クエルチ（英）。ヨン・リード（米）。セラチ（伊）。スタインハルト（墺）。フリユース（スカンジナヴイヤ）。シヤブリン（ブルガリヤ）。ミルキヒ（ユートゴー・スラヴイヤ）。ルドニアンスキイ（ハンガリイ）（代理ヴアルガ）。スルタン・ザデー（近東）。パク（極東）。マンネル（フインランド）。キーンクープ（ホランド）（代理ヤンセン）。ジノヴイエフ、ブハリン、ラデツク、トムスキー、コペツキー（以上ロシヤ）（代理、レーニン、トロツキー、ベルジン、スタリン、パヴロヴツチ）。以上の中、ジノヴイエフは全會一致を以て執行委員長に選ばれ、コペツキーは幹事に選ばれてゐる。

少數者暴力の價値

土田杏村

1

さる人から『君は第三インタアナショナルを否定する論理を持つて居るか』と聞かれた時に、余は其の返答に躊躇せざるを得なかつた。何故なれば「第三インタアナショナルを否定する」と議論するものゝある場合には、「どうして否定出來るものか」といふ反抗心が余の中に起きて來るし、又反對に、「彼の人はボリシェーヴィキだ」といふのを聞くと、「其れは宜しい態度で無い」といふ批評心が持ち起つて來る、余自身としてはボリシェーヴィズムに同情もすれば又否定もして居るからである。併し其の意味は、世間でよくやる樣に、「此の點はよいが此の點は惡い、我々は其の長所を取つて短所を捨てよ」と、甚だ曖昧な折衷論を爲さうといふのでは無い。ボリシェーヴィズムの肩を持ちたくなるといふは、ボリシェーヴィズムが世界一般から大いなる誤解を受け、其の意味は態々曲解せられて彼方此方へ傳へられて居るが故に、私は其の學的良心の上に立つて、先づ第三インタアナショナルの意義を闡明するが至當だといふのだ。次に其の主張を否定するといふは、其等の環境的影響を離れて、純然、學問的にボリシェーヴィズムの普遍妥當性を否定しようといふのだ。余の如きも、最初はボリシェーヴィズムに大いなる同情を持つては居なかつた。といふのは、最初に我々の手に入れる事の出來た書物は、殆ど全部第三インタアナショナル反對の傳說的社會主義者の其れであつたからである。今漸く彼の眞相を知るに及んで、レエニンの洞察密論に甚だ慚愧を感ずる。

第三インタアナショナルの否定論は、我國では未だ大分に早過ぎる。否定どころか、其の意味は殆ど全く國民に知られて居ないでは無いか。ボリシェーヴィズムと言へば、まるで人體に對する猛毒の樣なものだと思つて居る。此れを『過激主義』と譯した當路者の宣傳政策は、日頃の宣傳下手にも似はぬ上出來であつたと一先づ感心して置くとして、其れは非常に背理的な、

殘酷な主義を鼓吹するものゝ樣に、何時までも國民を考へ慣らして置く遣り方は頗る不當である。否定論は屢々さうした所謂健全思想家に利用せられる惧れがある。否定どころか今は其れの解説を盛んにするがよいのだ。

2

第三インタアナショナルの批評に於て、我々は先づ二つの事を區別する必要がある。即ち(1)社會理想論として見たる其れ(2)謂ふところの社會理想に到達するタクティックスの主張として見たる其れの區別だ。第一に於てボリシェーヴィキは國家社會主義を取つて居ると見る事が出來る第二に於ては政治的社會革命へのプロレタリア獨裁を主張して居る以上二者を混同する事よりして、ボリシェーヴィズムの批評は歸一出來ない。無理も無い。現在は此の二者が一つになつて實現經路に立つて居るのだ。否な、寧ろ其の兩者が緊密に、結びついて實行せられて居るところが、ボリシェーヴィズムの面白いところであるのだ。併し兩者の結び付きは、必ずさうでなければならぬといふ理由は無い。殊に批評に於て此の兩者を混同するのは種々の不都合を來す第一原因だ。社會理想論に於けるボリシェーヴィズムの國家社會主義的傾向に就ては、今批評を略す。我々はたゞサヴィート露國が此の人生の偉大なる實驗を大膽にやつて除けて居る度胸に感心し、且つ感謝するだけだ。ボリシェーヴィズムのボリシェーヴィズムたる所以は其處に無くて、第二の革命のタクティックスに於てあるのだ。と余は考へて居る。

第三インタアナショナルを第二インタアナショナルに比較して見るに、余は正直に語れば、レェニン等の方が上は手の相撲を取つて居ると思ふものだ。カウツキイでもスパルゴオでも、乃至マックドナルドでも論理的には浮き腰になつて居て、甚だ影が薄い。誰れかの批評では無いが、「其の事實は間違ひだらけであるし、一向に眠氣を催す議論」である。ランスベリイでもメラアでも、どし／＼ボリシェーヴィキになつて行くのには、理由のある事だ。我が國にして見てもだ。友愛會などが「普選運動を爲さず」などゝ決議するのは、實際どれだけの根據を以つてやつた事か知らないが、込み入つた議論は脱きとして、其等の主張者の精神骨髓を直覺的に取り入れて了つたものと見える。力ある思想は常に以心傳心的の摩訶不可思議を現はすものだ。

議會は腐敗した。！と言ふ聲を至るところで聞く。我國だけの事では無い。腐敗したからと言つて、今更驚いたり呆れたりして居る人は最初から樂觀主義が過ぎたのだ。議會即理想實現では無い。議會即ディモックラシイで無い。一の機關が議會だ。

道具が議會だ。道具に精神が籠らず、道具を使用する主人に活殺自在の權利がある。今の議會が活人劍で無くて殺人劍になつたからと言つて、劍其のものに愛想をつかすのは少し早まり過ぎはせぬか。併し現に今は世界至る處で議會を呪ひの種にして居る。我國の議員や政論家がいつもお手本にして擔ぎ出す英國の議會主義にしてもだ。露國を見て歸つた人が言つて居る。「英國のディモックラシイは形式だけだ、其處には何のディモックラシイも無い」と。議會は階級鬪爭の決鬪場であつた。併し其の決鬪に於ていつも損の立廻りをするのはプロレタリアだ。彼等はブルジョアに對抗するだけの金力を持つて居ない。其の金力を持たねばこそのプロレタリアだブルジョアは其の金力を自由に驅使して、議會主義をどの樣にでも切り盛りすることが出來る。新聞を買收する。講演會場を借り切る。印刷物や廣告やで宣傳する。其等すべての宣傳力によつて、何時の間にか自分の意見で社會の輿論を形成する。社會の道徳意識や、又社會構成の理論意識をまでお都合次第に担つち上げて了ふ。例へば今回の英國三角同盟の蹶起を見ても、政府側の新聞は、直ちに「社會は危險に陷つて居る」といふ。併しメラア君は言つた。「危險に陷るといふ社會とは何の事であるか。英國筋肉勞働者の數は人口四千七百萬の中實に三千萬を占めて居る。即ち鬪爭は三千萬對千六百萬の其れだ。殘餘の千六百萬といへども、教師、事務員、技師などいふ分子を除いて了ふと、後は僅らにもならないでは無いか。然らば眞に危險を被る社會は何處にあるのであるか。」と大分手嚴しい。かうした宣傳と及び其他の資本主義的直接行動で固められた社會の議會主義なるものが何の意義を持つて居るか。議會主義を採用して居る傳統的社會主義に對し、第三インタアナショナルは先づ以上の如くに批評した譯だ。○○其の直接行動に於ては、サンディカリズムの總同盟罷業などゝいふ消極的方法には賛成しない。ストライキはやはりストライキを遣つたものゝ方の敗戰に陷るといふのだ。現在のディモックラシイはブルジョアディモックラシイである。○○。レエニンでさへ、「誰れとて流血の慘を欲するものでは無い。我々は元來戰鬪を欲しないのだ。併しカピタリストが其の武器を取るから已むを得ないのだ。」などゝ優しい事を言つて居る。

豫め言つて置いた如く、今はタクティックス問題にして居るのであつて、其の精進の理想を問題にして居るので無い。かうした方法の議論には二つの見方を爲す可きである。(1)其の方法は道義的に正當であるか。(2)其れが道義的に正しいとすれば更に可實行的であるか。第一には直接行動一般の價値的批判を要する。併し本論では其れにまで立ち入る餘裕が無い。今は專ら第二の實行の可能不可能を考察して見たい。

余は眞先きに其の結論だけを言ふならば、第三インタアナショナルの趣旨は、何處の國に適用しても其の勝利を占めるといふ性質のものでは無いといふのである。元來が其れは方法論だ。方法に普遍妥當的のものは滅多に無い。奇策縱橫が勝利の第一條件だ。第一に、あゝした社會革命は露國の彼の事情に於て始めて可能であつたのだ。言はゞボリシェーヴィキは火事場盜棒の遣り方に近かつたのだ。內にはツァアが憎まれつ子になつて居る。戰爭は敗ける。外國の援助は無い。出口の無い壺の中で鼠取りをやつた樣のものだ。國家主義的聯盟の力の强固な、又國家組織の秩序立つた他の諸外國では、いつもさうした革命的行動は失敗に歸する。第二には、小數黨が暴力を取つて戰ふといふ事になると、階級鬪爭は全然相互の暴力戰になる。併しブルジョアとプロレタリアと現在のまゝで互ひに暴力を用ひ出せば弱いプロレタリアの敗けるのは知れ切つた事だ。此の不景氣を背水の陣に置いて、ストライキを決行して居る足尾銅山の坑夫を見ても、其の場の感情如何とも致し方は無かつたであらうが、勝利は頗る覺束かないといふ氣がする。いつもプロレタリアは他人の頭を毆らうとして、却て自分自身の頭を毆る事になつて居るのだ。第三には、ボリシェーヴィキの遣方にも漸進主義は全然無かつたとは言へない。尤もレェニンは最後まで駄々子になつて議會を見向きもしなかつたが、併しトゥロツキイに出席した事もあつたし、ボリシェーヴィキの一部が出席して居たのは事實だ。よし議會主義に反對して居たのであるにせよ、ボリシェーヴィキで無い他のカデエト黨や社會革命黨やがボリシェーヴィズムへの漸進的花道藝を遣つてくれた。リヴォフ公、ミリュウコフ、ケレンスキイなどは、其の甚だ割りの惡い幕へ出て來たのだ。レェニンが最初から力任せにあのタクティックスを遣つたら勿論ボリシェーヴィキは破れたのだ。漸進主義の隱然たる一の教訓が其處にある。と言つても余は、先づ○○今は第三インタアナショナルの方法は露國以外の諸國に於ては實行の不可能なるものである事を主張して、或る種の勞働運動に忠言を寄せて置きたいのだ。（四月十三日稿）

科學と現今の産業制度

ジョン・デユウイ

私は前月號の論文に、西洋に發達した自然科學は、之を社會に應用した場合には、精神的價値を有したものであると述べて置いた。それは博愛的努力を起させた。それは進歩に對する信念を鼓舞した。それは物質的、精神的、道德的の諸方面に亘る人類の全ての狀態は、科學的方法の應用に依つて、不斷に改善せられるものであるといふ信念を造つた。自然科學が興る以前には、理想主義は一般に瞑想的で、平靜で、個人主義的であつた。それは世俗的で、物質的だと考へられて居つた事柄から身を退くことによつて開拓せられ、その目的とする所は、自己の天性の完成又は自己の靈魂の救濟にあつた。それは孤獨の裡に獲得せられ、無爲を伴ふものであつた。人生の罪惡は、人間の地上の存在にとつて、免れ難い必然の現象であつた。それは憐愍と慈悲とに依つて緩和することは出來るが、救濟することは出來ないものとなつて居つた。要するに高級な永遠の現實を瞑想するのが、理想主義の本領であつた。然るに、自然科學の進歩は、今や理想主義をして、弊害を豫防し救濟し、並に進歩を促進させるところの、能動的な活力なものとならしむるに至つた。行爲が瞑想に代り、精力が無爲に取つて代る。科學は、この世界が餘りに墮落して居るから、精神の平和を保つ爲に、濁世を遁れなければならぬといふやうな信念を與へずに、若し人々が科學の授けた方策を用ふるならば、世界は無限に改善せられるものであると、信じさせるのである。

同時にまた私は、科學の應用に伴ふ社會的結果は、極めて多樣であることも說いておいた。商工業に於ける科學の應用は、勞資問題や、從來距離が遠いために交戰することの出來なかつた諸國の間の戰爭の增加や、大仕掛な恐ろしい破壞の道具の使用等の如き、新しき重大問題を惹起した。是等の新しき罪惡は、科學を人生に應用したことが、幸福より

も寧ろ害を齎しはしなかつたかと疑ふ人さへ少くない位に苦しいものである。殊に最近の大戰以來、悲觀の傾向が著しくなつて來た。科學的智識の普及は、確に平和と幸福とを齎して、一般人類の狀態を改善するものであるといふ以前の信念を維持することは、今や頗る困難である。本論文に於ては、科學の社會的結果の方面を考査して、その原因を發見し、若し出來得るならば、理想主義が、科學を惡用する勢力と戰つて、勝利を占め得るには、何が力となるかを明かにしたいと思ふ。

私は、前號の論文で論じた或る事柄に出發點をおくことゝする。前號の論文には、過去數世紀の間西洋に於いて、科學はその生命の爲に鬪はなければならなかつたことを指摘しておいた。科學は、迷信と傳說とによつて反對された。それらは宗教的政治的權力の要塞に奧深く立籠つてゐた。今茲に我々の指摘したければならぬことは、科學の精神が全然獨力で是等の强敵に對抗して、その進路を拓いたのではないといふことである。それは舊き政治的經濟的事情の變化によつて、實際に利益を受く可き人々から、大なる援助を受けた。彼等が新しき科學を歡迎し、その敵に對抗して實際上の援助を與へたのは、科學の價値を尊重したからではなくて、科學の應用は、彼等にとつて好都合な權力の新しき分配を齎すといふ、實際上の利益があるからであつた。全體としては、當時勢力を得つゝあつた商工階級は、新しき自然科學の實際の結果から、恰も宗教的且つ封建的な舊社會が、その信條や思想の上で失つたと同じだけのものを得たのであつた。新興の產業的勢力は、直接に科學の探求を補助したり、又は直接に科學を援助することはなかつたが、それは科學から得られた結果に對する需要を造つた。この需要は、科學のために、發達すべき餘地と機會とを作り、間接にその强敵の襲擊に對する防禦を成したのである。

歷史を回顧して見ると、自然科學の社會的結果は、最初から混同せられ居たことが分る。それは舊き專制的勢力の有力な同類である迷信から、人間を解放しようとして居つた。人間との關係は一層密接となり、その持ちつ持たれつの狀態は、顯著な事實となつて來た。そして人類は特に、苦痛や困難を救ひ、慘澹たる缺乏に對する防禦に役立ち、又萬人の爲に經濟的安固と、相當の資產或は繁榮との保證に使用せらるべき有力な手段を附與された。しかし又一方に於いて

は、科學の社會的結果は、一經濟的階級、卽ち投資者、銀行家及び資本家的傭主に依つて獨占された。玆に於てか、科學の結果は、少數者が多數者の勞働を利用して、政治的優越權、社會的名聲、實際上の支配權を獲得せんが爲の手段と化した。人間を密接に集合させる傍ら、科學の結果はまた、戰鬪艦と激烈な爆發物とによつて代表せられる强制及び威嚇の機關と、印刷術と電信とによつて代表せられる知識的誘惑と欺瞞の機關とを提供した。現今の世界の狀態は、この科學の進步の二重の結果を大規模に露はしてゐる。世界は科學をこの相反する二つの目的のために使用した結果、恐ろしい自己分裂、及び內面的鬪爭を經てゐるのである。

この論文に執筆し始めて以來、私は最近の本誌に於てバートランド・ラッセル氏の、現今の混沌狀態の原因に關する論文を閱讀することが出來た。讀者諸君も記憶せられる如く、原因は產業主義と國家主義の二つであると彼は言つてゐる。そして彼は、これ等の背後には科學があるといふ意味深い言葉を附加へてゐる。幸にこの言葉は、恰も私が今世界の狀態は、相反する二つの科學の結果を大規模に露はしてゐると述べた、その言葉を裏書するものである。この事實の承認は、私の論文全體の取扱つてゐる問題の範圍を、大いに擴張するものである。この見地から、問題は最早や單に西洋の潑溂たる精神、特にその各々の物質主義的及び理想主義的勢力の理解に止まらず、それは實に、自然科學の影響を受けてゐる限りの、近代社會全體に働いてゐる勢力の理解に關する問題となつて來た。この問題に就いては、西洋文明に關する知識が最も大切である。この知識の大切な所以は外でもない。卽ち科學は最初西洋に起つたものであるから、科學の社會的結果の二方面は、西洋に於て之を最も明白に且つ廣汎に見ることが出來、又現に隨所に起つてゐる事柄に對して、西洋から敎訓と警告とを得られるからである。

近代の產業主義が自然科學に基づいてゐることは明白である。富に對する欲望、と富の齎らす權力と奢侈とに對する欲望がどれほどのものであらうとも、それのみでは、決して近代の商工業を創造することは出來なかつた。蒸汽應用の機械や蒸汽機關や、汽船は物理的科學の產物であつて、貪慾の產物ではない。大規模の物品生產は、必然に遠い市場の爲の生產を意味してゐる。そして大規模の生產にしても、或は遠い市場への分配にしても、科學的發明の產物たる機械が

なくては不可能である。遠い、不安定な市場に對する一定量の生産が、地方的であり且つ比較的固定してゐる市場に對する小規摸の生産に代り、かくて資本主義の一切の組織が生ずるのである。それは工場、鐵道、船舶、電信及び電話の工藝的資本の外に、この機械組織を設備する爲の財源の聚積を要するからである。これは個人々々の財源を結合することを意味してゐる。要するに、それは協同事業及び株式會社、並に投資と配當の全組織を意味するものである。遠い市場に於いて賣らんが爲の生産は、又大なる危險を冒すことを意味し、生産と回收との間、資本の使用と共齎らす收入との間に長日月をおくことを意味し、從つて又銀行及び銀行との信用取引が非常に重大な地位を占める近代の社會組織を生じて來る。畢竟産業的要求が社會に勢力を得るに從つて、財政的要素が産業界を支配するやうになるのである。製造業者や船舶業者がその傭人を支配し、且つ全く一般消費者を支配するが如く、銀行家は製造業者や船舶業者を支配し、彼等總てが消費者たる公衆を支配することになるのである。

我等は未來に於ては大規摸生産の爲め、且つ遠い、不確實な、危險な市場への生産と輸送の爲に要する資金の、共同蓄積に關して、現在よりも優れた方法の發見せられることを望み、且つ信じてよからう。少くとも全世界に亘る社會狀態の改善は、時勢の要求に一致する革新的手段を發見し、採用することに依る事だけは確かである。しかし現今の生産、分配、及び財政の現象、投資、配當並に銀行の財政的勢力の現象が、自然科學の應用に依るといふ事實を知らなかつたならば、何等得る處なく、却つて失ふところが多いであらう。權力と奢侈とに戀々たる心は、時勢の客觀的の事實を利用する上に大に働きはしたが、それは客觀的事實を生産しはしなかつた。大規摸の生産と、その結果としての、遠い市場への輸送と販賣とが生産を支配することは、据付又は移動する蒸汽機關、並に種々の電氣應用に基づく實際の力である。吾々が資本主義の名の下に總括する工場、銀行、鐵道、汽船の航路、銀行と大きな共同事業、その他一切の現象を造り出した根本的の力は、卽ち是等であつて、決して私利を營まんとする心ではなかつた。これまで主張せられた社會主義や共産主義が、現行制度の改革の爲に立てた種々の計畫の弱點の一つは、それが餘りに大げさに現今の社會狀態の徵候を救濟せんと志してゐることである。客觀的事實に適合し、且つ恰も資本主義がその事實を轉じて個人の目的に

適はしめたように、社會的目的に適はしめるような詳細な計畫は、吾々には未だ缺けてゐる。如何程社會的正義の爲に感激し、産業と政治方面の改革に熱中しようとも、科學が一層進歩し、新しき科學的發見に基づく、新しい技術の發見と知識とに依つて後援せられない限り、不十分である。

近代の國家主義が科學に賴ることは、近代の産業主義に賴つてゐることほど明に白ではない。それは科學の方が一層間接的であり、且つ複雜であるからである。併しそれは等しく事實である。獨逸が國民主義的政策の樹立に最も勉勵し、最近の戰爭までは、最も之に成功した國であつたことは、一般に異存のないところである。戰爭中に激烈な排獨宣傳が行はれたにもせよ、この國家主義の樹立に於ける科學の功績を見逃すのは、産業主義の建設に於けるその功績を看過すると同樣、大なる謬見である。野心と增長とは、共々に科學を利用した。けれども獨逸の勢力の主要なる源泉は、獨逸が列國に先んじて、教育、商工業の擴張及び軍事上に於ける價値を認めたといふ事實にある。組織的に、又飽くまで詳細に亘つて、獨逸は科學的方法と科學の結果とを開拓し實行し、遂にゲーテやカントやシルレンの理想主義的な獨逸國が、二十世紀初頭に於ける富强なる帝國となつたのである。

さて本論に立歸つて、二元的なる科學の社會的結果の貸借對照表を考案しよう。

第一に貸方に於て、科學は世界の歷史に於て、初めて人間の力を解放することを可能ならしめた。それは自然の機械力を以て、人間の筋肉の力に代用することを得しめた。卽ち、抽象的に云へば、機械の意義はこゝにある。有用な生産物は勞働なくしては作られもせず、分配されもしない。それには力を費さなければならぬ。物理的科學が起るまでは、人間の肉體の力以外に、力の出所はまづ絕無であつた。機械は、石炭や水や電氣を作業のために採用することを意味する。動力機の發明前に於ける道具は、人間の筋肉の力を擴張し又は時に洗練する手段であつた。道具はその代用物ではなかつた。專ら人間の筋肉——輸送の場合には動物の筋力に依つて補充せられたにしても——のみに賴つた社會的結果は、二重であつた。第一にそれは無數の煩瑣な苦役を必要ならしめた。この事實は農奴制と奴隸制とに重荷に小付をすることになつた。第二に、それは生産を制限した。何故なれば筋肉勞働の煩はしさは、機會ある每に人をして之を避けしむ

るに至り、殊に筋肉の力は、經濟的能率的な動力の源泉であかつたからである。この生產と輸送との制限は、社會的に民衆の生活標準を低下させた。それはまた新しい欲望の發展を阻止し、かくて社會を停滯せしむることゝなつた。新しき欲望と要求とは、突發的事變を防ぐと共に、有ゆる社會現象の變化の源泉である。有益な欲望を閉塞すれば、社會は舊い生活經路を持續することゝなる。政治的變革が起つても、王朝と支配者とが變つても、現今支那に於けるが如く、依然として民衆は、何等日常生活に影響を被らず、政治に沒交涉である。

アメリカの經濟學者パツテン氏は、經濟を二つに分けて、『不足經濟』及び『剩餘經濟』と名づけた。この言葉の意味は彼によれば、筋肉の力のみの使用は、高々欲望とその滿足とを制限するに過ぎないが、自ら自然力を利用する機械の發明と使用とは、不斷に滿足の分量を增加し、共が又轉じて新しい要求と、それを滿足させる方法とを創造するといふことである。私は殊更、勘定の借方の考察、卽ち機械力の採用に伴つた社會的罪惡の考案を保留してゐる。然しながら現在の制度に對する糾彈の中には、それが貧困と極端な缺乏とを擴大し、且つ激しからしめたといふ說に、確りした根底があるかどうかは多少疑はしい。疑ふまでもなくかような結果はある一定の時、ある一定の場所には起るものである。けれども全體として、十八世紀の中頃以來、歷史の主要の結果が、さうであつたといふ說を肯定させることは困難である。例へば近代產業主義の採用されてゐる國民が、支那や印度の國民の狀態にあるといふことは信ぜられない。確かに產業化して居らぬ國に於ては、その勞働時間は一層長く、一層肉體を苦しめて居り、且つ、遙かに多數の人達が、來る日も〳〵何處からその生活費が來るかを知らないで、絕えず眞に窮乏の境にある。飢餓と疫病とが絕えず續いて、その勢力範圍を廣めて居る。生活上の慰安と淸潔の標準は、確かに遙かに低い。この問題を人口過剩の故に歸するが習慣となつては居るが、これは原因と結果とを轉倒してゐる。何故なれば、一般的經驗の證明する所によると、生活標準の向上は出生率を低下し、生活標準の低い所では、高い出生率の結果は、世話の不足、窮乏、飢餓及び疫病に基づく、同じように高い死亡率のみに依つて打消されて行くものだからである。

公平に事實を述べれば、斯うである。卽ち產業主義が貧富の差異を增加し、從つて貧困を集中し、その弊害は益ゝ甚

しく、もはや逃れることが出來ないほどになつた。それと同時に人間の欲望は增加し、貧者は絕えず富裕者の享樂と奢侈とを見せつけられるので、不滿を感じて來た。その結果として、貧困は――富裕者の良心を益々煩はせ、多數の貧者の眼裡には救濟せらるべき不正として映ずる問題となつた。昔の宗教に於いては、貧困は運命、上帝、又は自然に基づく必然として、又は前世で行つた罪業の結果として考へられた。それは免れ難いことゝ思はれたので、問題とはならなかつた。若し少しでも問題らしいものがあるとしたならば、それは例へば、ある他の人の代りに、何故にその人が苦しむかとか、或は一體何故に惡は存在するかといふやうな、神學的又は形而上學的のものに限られてゐた。そこで產業主義が、貧困の上にどういふ特殊の經濟的結果を及ぼしたかといふことは別として、とにかくそれは貧困を一つの問題とした點に於て、特長をもつてゐる。機械的生產に基づく剩餘經濟は、貧困に依る窮乏と艱難との廢止を信ぜしむに至つた。それは其等をこの儘存續せしむることは不正だといふ意識を造り上げた。この意識は實際に貧困を廢止するといふ處までは我々を伴れて行かない。けれども機械と、機械組織に依つて我々のものとなつた富源なくしては、貧困を廢止することは不可能である。

　中にはこれらの考察を侮蔑して相手にしない人があるだらう。それは精神に關することではなくて、全く物質にのみ關することだと彼等は言ふであらう。しかし物質と精神とは嚴格に別々の商標をつけ、別々の包にされて、この世に現はれたものではない。多數の男女を休みなき苦役に處するやうな條件は、又彼等の心をも貧困にするものである。過去の筋肉勞働を理想化する人達は、自分が賞讃し、且つ大仕掛の機械生產によつて減される（それは全く事實である）と感ずるところの、美術的生產物を主とした立場から、さう主張する。彼等は、さういふ美術的生產物は、勞働の總生產物、例へば農業勞働の生產物の、取るに足らぬ微少な部分を代表するものであることを看過してゐる。これらの美術品の大部分は、帝室又は貴族方面の保護の結果であること、それが二三の勞働者の技倆を表はす時に於てすらも、それは富者なり權力者なりの趣味と享樂とを表はすものであることを忘却してゐる。それ故に殘忍なる貧困と救濟し難き苦役から民衆を解放する爲に、物質的方法を用ひる所以は、物理學の進步の理想的、非科學的結果に歸せられなければな

らぬ。

機械工業の結果に關する社會的臺帳の借方は明瞭であつて、別段之を敷衍して述べる必要はない。人間は理解しない機械に束縛せられた、彼等は機械の附屬物となつた。エマアソンの言つたやうに、機械組織が現今の勢力に達する遙か以前に、人間は蜘蛛と針とに化した。機械的動力の勢力は、石炭、石油及び鐵に對する大競爭を惹起した。製造と輸送とに必要な自然の富源の征服に依つて與へられた便利は大なるものであつて、私人のみでなく、國家に影響を及ぼした位である。それは新しき戰爭の原因を造り、掠奪的國家主義の發展を促した。遠い市場の支配に依つて獲得せられた利益に乘じて、それは經濟的帝國主義を創造した。機械の使用は農奴制と舊き家內奴隷の形式を廢止する傍ら、多數の民衆をして、生產及び分配の機械組織を所有する者の支配に從屬せしめ、かくしてその究極の形式に於て殆んど奴隷制と擇ぶ所のない、經濟的依賴の形式を創造したが、この新制度は、封建的奴隷制の特色であつた、勞働者を扶養する主人の責任といふ永久的要素を缺いでゐた。舊制度の下に於いては、家庭外に於ける婦人や小兒の勞働、家內工業、農業等は無報酬であつた。然るに今や種々の機械の嘴袋が工場に口を開いてゐて、婦人やいたいけなき小兒がそれの中へ呑み込まれる。

要するに、經濟的矛盾の全系列が創造せられたのである。一方では歷史上初めて、仕事の骨の折れる部分を機械に委すことに依つて、男女の大衆が過激な連續勞働に從屬することから解放せらるべき文明の可能性が確立せられた。然るに他の一方では、新しき形式の隷屬、――即ち機械そのもの、及び生產分配の機關を所有して、勞働者が生計の途を見出す條件を支配する者への從屬がある。

欲望は增進せられた。蓋し新しい品物が續々生產せられゝば、必ずかやうな品物に對する欲望が起るからである。自動車のない中は、誰も之を欲しがるものはない。かやうな品物の實用を目擊し、その享樂を認めれば、欲望を喚起せられざるを得ぬ。生活上の必要、端正、安樂及び奢侈の間には、判然たる境界線はない。少しでも生活標準が向上すると共に、品物は奢侈に近い狀態から、生活の必要に近い狀態に移るものである。けれども一方では、欲望を滿足する能力は

極めて不平等に分配せられてゐる。卽ち滿足の手段は少數者の手に集中され、此少數者は、彼等の消費し切れない收入を增加する新投資以外には、この手段の用途を見出すことが出來ぬ。然るに一方では、大衆は滿足することの出來ぬ欲望を懷いた儘、取殘されてゐる。

これらの現象こそ、アメリカ合衆國の如き、運動が極端にまで進んだ諸國に於て目擊せられる、西洋生活の、謂ふ方なき物質主義の主要原因である。けれども之は現今の科學に著明な變化のあるまでは、尙ほ產業主義の行はれる所ならば、何處でも現出せずには止まないものである。生活の可能性に對する新理想主義的意識は、萬人にその人格を圓滿に發展させる權利があるといふ感じに立脚する、普通敎育の尊重、今までは敎育以外の政治方面に於てのみ聲明せられてゐた自由と平等の目標への、熱心な獻心に於て表明せられるものである。この意識は、粗雜なる富の物質主義と、富者に對する羨望と並び存してゐる。しかし此兩者の間の溝渠は甚だ大きく、多くの人に取つては、理想主義的方面は僞善の證據の如くに見える位である。けれども理想主義的方面の眞實なことは、物質的方面に讓るものではない。之れは正に科學の進步によつて附與せられた、同一の力の產物であるからである。科學の進步は、民主主義の觀念を創造したと同時に、却つてその實現の主要なる障碍物をも創造した。近代的機械組織の應用と、工場と鐵道に依る人間の集中とが無かつたならば、輿論と代議政治は得られなかつたであらう。その外形と共に政治的民主々義の背後には、民主々義の眞髓たる、かの萬人の圓滿なる人格の發展を要求する意識が存在する。科學に依つて與へられた補助がなくては、これは一片の理想主義的夢想に止るものであつたが、今やそれは實現の得可き可能として、人々を驅つて不安と行動とに進ませてゐる。

科學の二重の結果は、近代の利他主義的運動全體に於ける、公共又は社會への奉仕を目的とする博愛や努力にも現はれてゐる。アメリカでは色々の社會の出來事に對して寄附する習慣が、世界中の何處の國よりも盛なことは、人のよく知るところである。カーネギイとかロツクフエラーとか云ふ名前は、何億萬人に施された喜捨に關聯して、世界中に知れ渡つてゐる。けれどもそれは富裕者仲間の殆ど普遍的な事實が、偶々顯著になつたに過ぎぬ。普く學校、圖書館、博

物館、美術館、病院又は難儀な者の救濟の爲に、何等かの形式で寄附しない富豪があつたならば、それこそ社會から後指をさゝれる人間である。この事實は非常に鋭い社會的責任觀念を證明するものだと見る人もある。皮肉家は之を解釋して、それは輿論に賄賂を使つて、善からぬ富を積み上げた手段を大目に見て貰はうとする、多かれ少かれ意識的な努力であり、又批評を買收し、悪い評判を豫防せんが爲の努力であるといふ。

二つの說明は、いづれも眞理を含んでゐるが、しかし何れも、原因より、寧ろ徵候を取扱つてゐる。その場合の性質として、大規模の社會的喜捨は、流動資本の產物である。土地と土地の直接生產物が富を形成する封建制に於けるが如く、富が主として不動產の場合には、喜捨は不可能である。かやうな事情の下に於いては、博愛は主として慈善の形式を取る。例へば中世の歐羅巴に流行し、そして今尙東洋に於いて、產業主義が發展しつゝある國を除く以外の、大抵の所で行はれてゐるやうなものである。富豪は乞食や難儀をしてゐる個々の私人、又は宗教的生活に從事してゐる僧侶などに、寄附をする。人に對して與へるこれらの個人的贈物は、慈善の傳統的觀念を形成してゐるものである。それは功德を積んで、未來の罪禍を避けんとする觀念と幾分關聯して、慫慂されるものである。慈惠がこの境地を飛び越えるのは土地が寺院や僧庵へ寄贈される時だけである。かやうな意味での慈善は、近代の博愛とは明かに對立したものである。後者は難儀な個々人に與へるより、寧ろ其事業に與へるものである。後者は場合に依つては、必要なものであるが、その性質上、純然たる緩和的のものだと考へられてゐる。博愛は公益上の目的と、個人的結果よりも寧ろ原因に携はる人々とに對して寄與するものである。即ち學校、圖書館、美術館、博物館を通じての教育の普及、疾病の硏究、科學の奬勵金等である。この社會的喜捨の趣味には、純なる理想的要素、一種の實際的理想主義が存在することは、否定することが出來ぬ。それは或る程度までは、正義に對する貧弱な代用物であつて、結局は私人の喜捨を不必要にし、且つ實際不可能にもするような、平等世界の實現に導くものだと云ふ理由から是認す可きものであることも否定し難いことである。かやうな事象の矛盾狀態も、社會生活に及ぼした科學の二元的結果を一方から說明するものである。

この二重の結果について十分に記述するには數卷の書物を要するであらう。何故なれば、その內容は、自然科學の結

果としての產業主義が極度に發達した所では、何處でも働いてゐる殆んどすべての諸勢力の所業を過ることだからである。茲に今一つだけ說明を加へて置かう。私は第一の論文に於いて、西洋人も東洋人も、各々その文明の物質的及び理想的方面を批判するには、異つた尺度を用ふべきことを述べて置いた。西洋人は、生存と安樂との爲の競爭に附隨する殘忍性と痴態とを忘却して、公共の利益と、社會の幸福に貢献する責任觀念の、一般的普及を見て自ら慰めてゐる。然るに東洋人は瞑想と、審美的精練と、精神修養とに餘暇を用ひようとする。この餘暇のあると云ふ事實と、それの消費せられる用途とは、人類の歷史に於ける、最も意義ある一章であり、而かも少しも研究も理解もされてゐない一章である。人間の筋肉から、石炭や蒸汽や電氣への勞働の變遷は、以前には得られなかつたような、或る程度の餘暇を齎らした。その外面的證明は、先進產業國に存在する、勞働時間を制限する法律に於いて、之を見ることが出來る。一週六日間以下、一日八時間が勞働の極限として、今や目覺せる勞働階級に依つて定められ、尙やがてその中には一日六時間になると期待されてゐるが、また一方では、一層空想的な計畫はすべての成人は何等かの有用な形の勞働に携はり、世界の需要は一日三四時間の勞働によつて滿足せられ、その殘餘の時間は、各自の自由な時間となるべきことを豫想してゐる。機械組織に於ける科學の應用は確かにこの理想を純然たる空想の世界から、實現し得べき可能性の世界に救ひ出した。しかし產業主義の影響による疑ひもなき餘暇の增加と共に、餘暇の使用準備の缺如してゐることも、均しく疑ふべからざる事實である。產業主義が、その最も進んでゐる諸國に於いては、旣に餘暇を增加させたことは、疑ひがない。この點を確めるには、東洋の勞働時間と、週休のない事とを比較すれば充分である。けれども、未だ極めて少數者のみが、この餘暇を善く利用してゐることも、亦等しく確かである。賭博や飮酒やその他色々の、無益な怠惰の形式で之を消費するのは、まだしも看過される。ゼイ・エイ、ホブソン氏はその著『戰後の民主主義』に於て私の知れる限りでは初めて、經濟的支配階級が、餘暇の增加を自己の利益の爲に利用する系統的の方法に對して、世人の注意を喚起した。確かに、經濟的利益に對する欲望は、商業化せられた遊戲、競技、娛樂、煽動的の新聞、安つぽい駄小說等の主要なる直接原因であつて、それはやがて大衆の需要を利用して、彼等が新たに獲得した餘暇を、何等かの方法で消費させるも

のである。しかしホブソン氏の指摘したやうに、これらの機關はまた、眞面目な事件から、勞働者の注意と思想とを散亂せしめる働きをする。そして之は實際に於て、又少くともある程度までは半意識的に、支配階級がその支配を繼續する爲の手段である。それは鎭痛劑として、社會的痲醉藥として役立つものである。それは當時の支配階級がパンのみでなく、彼の『圓形競技場』や觀世物を供給して、大衆を取鎭めた、かの往昔ローマ人の心理の反覆である。大衆が主としてこれらの餘興にその餘暇を費してゐる間に、富裕者は、彼等は有用な勞働をなす必要から免除されてゐるものだといふことを、誇張し廣告する、種々の餘暇消費方法を發明した。ヴエブレン氏はその著『有閑階級論』の中に、これらの虛飾的方法を非常に詳細に述べてゐるから、この點については、彼の著書を參照すれば十分である。玆に特筆大書しなければならぬのは、西洋に於て、かやうな物質主義的態度の盛んに行はれてゐる證據とも見える餘暇の用途は、主として科學の應用によつて生じた生活方法の變化の結果であること、これらの或物は、產業主義の性質が變化せられる迄は、苟も產業主義の行はれる所には、何處にも現はるべきものだといふことである。

本論文に於て甚だ不十分ながら略說した暗示の目的は、西洋文明のある主要現象、殊に合衆國に於けるが如く、その經過が最も成熟した國に於ける、西洋文明の主要現象の理解を助けんとすることである。一層廣い意味に於いて、その目的は、これらの現象はやがて世界中に擴がる傾向があるといふ事實の理解を助けんとすることである。何故なれば、それらは人種的又は國民的差異に依るものではなくて、ある一定の原因——自然科學の發達の結果たる產業主義に基づくものだからである。科學的精神と態度との効果に關する論文は、天秤の理想主義の方の皿に救ひの力を投入したものであつた、本論文もまた、科學が與へる理想主義的社會的結果を論述したが、それにも拘らず天秤は他の一方へ傾くやうに見える。科學の社會的經路の將來は如何？これが現在世界に於いて、研究せらるべき、最も重要な問題である。眞理の探求には、豫言は無益の業であるから、私は敢て豫言はせぬ。けれども私は、この論述の含意を記るして置かう。第一に、現今世人の視聽を集めてゐる種々の社會改革、又は社會革命の計畫の成否は、科學の發達との關係にかゝるといふことである。如何程熱心にこれらの計劃がめぐらされようとも、又は如何ほど熱狂して實行が宣傳せられようと

も、それが科學の利用と一致し、新しき科學的發見に依つて後援せられなかつたならば、所謂破滅を免れぬ。第二の事實は、これまでの科學の事業は、僅かに物理的自覺に觸れたに過ぎないことである。人間性や社會に關する科學は、未だ尙ほ、最も幼稚な狀態にある。例へばマルクス說の如きは、その信者に依つて、全く科學的だと觸れ出されてゐる。けれども先入觀念なき研究者は、それが近代的心理學の生れる前に起つたものであること、そしてそれは地方的の歷史的事實の概括であつて、十九世紀初頭に於ける獨逸の獨斷說と、當時勢力を占めてゐた哲學とに依つて特色づけられてゐることを見逃さないであらう。究極のものであり、すべてを包括するものであると稱する計畫に、科學的性質があることは、先入觀念なき研究者の信じないところである。第三には、人間的並に社會的科學の發達と應用とは、產業と國家とに於ける權力者の支配を脅かすが故に、それは大なる反對に遭遇するであらうといふことである。しかし其發達に影響する條件も三世紀前に歐羅巴に於いて、新しき自然科學の勃興に伴つて起つた反對以上に、都合の惡いものでは恐らくないだらう。科學が能くこの有力なる敵に打こんで勝利を占めることは、人間とその生活現象との科學の、究極の勝利を信ずる樂觀の餘地を與へるものである。

教育者組合の提唱

教育者組合を欲する理由

杉森孝次郎

教育者組合は、單能組合の一種として、われらは、すべからくそれの發達を歡迎し、助成すべきだ。國家をば、現代に於ける最大權能組合、または綜合組合と觀て、その國家と、國民の教育的進步性との間に立ち働らく主役を、教育者組合は引き受けべきだ。國民の教育的進步性とはいふても、そんなものが孤立的有形的に存するわけではない。國民は若干の人格的個性だ。その人格的個性の一部に、發展力ある教育思想として存する事實が、いはゆる國民の教育的進步性だ。教育者組合の有無强弱は、この國民の教育的進步性に對する保護に於ける、それだけの優劣を意味する。

單能自由組合の存在理由は、創始的活動の第一源泉たる個人の量的無力または微力を補足し、綜合組合が無責任無內容の中央集權主義、專制主義の弊に落ち入る事を防ぐにある。その存在理由の一要部はそこにあるのだ。それ故に教育者組合の憲法第一條ともいふべきは、强制的要素を必要の最小限に保持し、自由的要素を可能の最大限に擴充する事だ。教育者組合への入會を、世の教育者に强ひる如き事は、名實共に絕無でなくてはいけない。教育者組合に入らぬ個人を、直接にも間接にも迫害してはいけない。教育者組合から脫籍したい人には、その自由を十分に供給しなくてはいけない。

組合主義の信者にして研究者たるコール氏は、產業自治の第一着手をば、各工場の自治的組織に發見し、教育自治の第一着手をば、各學校の自治的組織に發見してをる。穩健なる見といふべきだ。教育の本場は、產業の本場が工場であるといふほどの高度に於いては、學校ではない。蒸汽力の工藝的活用の學と術が發達するに隨つて、生產は家庭を離れて工場に移つた。

けれども、印刷と交通の學と術が發達するに隨つて、教育の本場は、學校を去つて各人の自由讀書に立ち返る事が本筋だ。しかし、それにしても、學校は、教育の社會的方法としての位置を失はない。從來のやうに、學校が教育の全責任と全權とを負はせられ、握らせられる事は、今後はいよ／＼不正となつて行くが、學校としての責任と特權と能力とは、今後は從來よりも大となる。なかんづく今後の學校は、從來の他治を廢して、教育行政及び教育內容の諸般の方面にわたつて、自治を充實擴大して行くといふ意味に於いて、さうなんだ。

學校といへば、小學から大學までである。初歩の教育ほど、類性の開發を目的とするから、社會的方法としての學校の要が强い。小學校は中學校や高等女學校よりも、中學校や高等女學校は大學よりも、存在理由が明白に强烈だ。高等專門の學藝の研修でも、その學藝の種類別に應じて、學校を必要とし、有用とする程度に多少の差がある。物的設備や機械的裝置を要する學藝の研修には、學校の要が隨つて多い。教育といへば、普通教育の事であつて、それから上は、教授であり研究であると限るならば一面の便宜を增すが、他面に不利益が生ずる。教育の範圍をば小學から大學までの全階程にわたつて、倘ほその上下左右に連續してをると観る方が眞に近い。隨つて、教育者組合も、義務教育及びすぐその上の高等普通教育の直接關係者にのみ期待すべき事柄ではない。內容に從ふ分類と特殊化を忠實に勵行して行く條件のもとに、教育者組合は國民の教育的專門家をあまねく成員としうる綜合的組織的の一大勢力となるやうに、その方針を追うて最初から着手せらるべきだ。興味と能力に於いて教育者である人をば、他の專門職業方面からも自由に組合員となれるやうに待遇すべきだ。教育殊に普通教育の基礎條件は品性と常識に多分に屬する。卓越せる品性の人、常識の人は、現在の事實を観察しても、專門教育者以外に隨分多い。この教育的進步の活源泉の一を組合に輸導注入する事は、目下、教育者組合を形成し、發達させる方法として、恐らくは、必要中の必要に屬する。

教育者組合を生み育てる目的は、協力團結が可能にするすべての善福利益を獲得するにある事は無論だが、そしてその善福利益のうちには、文部省の豫算を增大する事を一必要條件とする部類の實行目的も包含されるが、さうした目的は、組合の代表的目的であつてはならん。組合の代表的目的は、教育の內容に直接關係を有する、或ひは直屬する問題の解決に存すべきだ。思想の自由、研究の自由を、校の內外に保護する如きはその一例だ。正善眞美なる倫理的原則を、校の內外に徹底させる

事もその一例だ。歷史の教へかた、法制經濟學科の教へかた等に、退步的亡國的不自由非眞實の檢束を加ふる陋習を一掃し去る如きもまたその一例だ。教育の府自身が、迷信と、道德的及び科學的虛僞と卑屈と邪曲とを躬行實證してよい筈がない。教育者組合はすべからくその團結力を正用して、教育思想及び教育行政上に於ける破邪顯正の常勝劍、降魔劍を縱橫無碍に揮ふべきだ。

級を小さくし、受け持時間を減じ、その位置に滿足せる、有能なる教育者を多くし、校舍と設備を富實にし、國費公費教育の年限と範圍を延ばし擴げ、奬學費を厚くする等の懸案も、教育者組合の努力に待つところ多大なる事柄である事は言ふまでもないが、斯かる經濟的改善は、教育內容自身を改善する努力を先決條件として、始めてその努力に意義を生ずる。

教育者組合の發達は、教育立法、教育行政の局に當たる公人や吏人をも、大抵はその組合の內から選出する能力を所有するやうにならなくては不十分だ。現今の政治的代表制は、組合代表制に進化すべきであるが、教育者組合は、その新代表制のもとに於いて、教育上の社會目的を達成する責任を負ふ。教育上の進步改善を立法部に代議する人もその組合から選出され、教育上の進步改善を執政部行政部に劃策實施する人もまたその組合から直接間接に選出される狀態を現實にすべきだ。教育の自治は、教育者組合がこの程度にまで發達するに及んで漸くその緖に就く。

教育者組合の發達は、教科書の改善を可能にする方向を取るべきだ。現行教科書の反教育的分子を除き去る事は、實に、教育者組合の首途の大動機の一でなくてはならん。聰明なる良心を有する父母は、その學童の教科書の內に、義憤せずにはをられない反教育的分子を見いだすだらう。この邊の宿弊を掃蕩する事は教育者組合の聰明と誠意の試金石ともいふべきだ。

十八世紀の獨逸大學は人物を輩出した。當時の獨逸國民は、賢こくも學の自由を教育の府に許し與へたのだが、人物の輩出はその結果たる意味が多かつた。あの當時に神學を硏究論議する事は、今日に於いて政治經濟を硏究論議するにもました危險事であつた。いはゆる硏究論議するとは、無論自由に硏究論議する事を意味したのだ。十八世紀の獨逸は、そのさしさはり多き神學の自由討究をさへも大學には認許したのであつた。然るに、戰前最近の獨逸は、政治經濟上の自由討究を大學に許容しなかつた。そして、その結果は亡國であつた。學の自由は興國の因であり、學の拘束は亡國の因であるのだ。教育者組合は、教育の自治の內容として、學の自由をも、十分にも、十二分に

も算すべきだ。

教育者組合は、各學校を第一單位として、そこに教育自治の原則を全現させ、それから小地方單位に及び、小地方單位から大地方單位に進達し、全國的教育者組合に延擴すべきだ。實をいふと、全國的教育者組合は、國際的教育者組合に步を進める必要がある。國際的教育者組合から、各學校的教育者組合へ、またその逆に、各學校教育者組合から、國際的教育者組合へ、教育自治の一原則が、規模形式の大小廣狹だけの差を保つて、

弱い教育者

一

同じ目的に向つて進み、共通の利害をもつてゐるものが、出來るだけ聯帶關係をかためて行かうとすることは、有ゆる職業團體の近代的一傾向であるが、教育者仲間に於ても、亦此の要求は可なり強く存在してをる。けれども、教育仲間は、其の體裁を憚るといふか、其の後難を惧るといふか、喉まで出た思ひを聲に出しかねた人の如く、やきもきと思ひながら、いまだ何

斷絕なしに博流しなくてはいかん。

各學校の教師と學生との間に、固陋な形の階級別を廢除して分業的協力の旨意を活かす事は、教育者組合を欲する理由と同一理由によつて欲せられる。自治を一身の事として切愛し、一校の事として切愛する人であつて、始めて國民的にも、國際的にも、教育者自治を要求し、主張する資格の一端を有するのだ。教育者組合の目的は、教育者の自治、責任、創造を保護達成する一手段たるにある。

帝大助教授　大島正德

事をもしかねてゐるといふ有樣である。尤も、本來、かゝる仲間の團體組織、謂はゞ組合を作るといふことが、教育者の念頭に往來する道德的判斷の上に於て、道理上不都合であると思はれることならば、其自利心は私に要求しても、之を敢て許り、敢て之を組織することは不都合といはねばなるまいから、單に思つただけで濟してもよからうが、想ふに、今日の教育者の心理狀態は、決して、かゝるものではないと信ずる。則ち、道理

上、一切の組合的行動を否認し、之を惡事と思つてゐる譯ではない。共同の目的に進み、共同の利害を伴へるものが、相結合して、其の正當の權利を主張し、正當の發展をはかり、教育者としては、教育者仲間の社會的地步を確立し、社會的努力を伸張し、其の行はんとする國家社會的教育的理想を實現せんと企てることを、不都合と思ふものは、ある筈はない。目的利害相通ずる職業階級が、組合組織を作り、團體的行動をとることは近代の顯著なる傾向であつて、教員組合の如きも、心理的に必然的に、其の大勢に促されて、教育者の頭の中に起りつゝある問題ではあるが、理論的に考へても、其の事が、單に階級利己心に固まるのみでなく、排他的であるのみでなく、全體としての社會的生活の合理的發展の上から考へて、正當視されなければならぬことである。以上教育者が、其の仲間の團體組合を作るといふことが、道德的に不都合であると思ひ得る筈はないのである。然しながら、今日の教育者が、心の中に大に是を希望しながら、敢て此の行動を正々堂々と開始しないのは、全く他の思はくや誤解、殊に當る者の夫れを惧れてゐた爲である。勿論、此の組合が作られる以上、官權を笠に着た吏員の不當なる壓迫に對して、相互の保護をはかるといふことは、重要なる條件になつてゐることは、明白であるが、當局者が不當でない限り、常に不當に當る者に反抗することを目的とされべき道理もない。此の國家社會生活に有用にして缺くべからざる職業であり階級である教育者が、相聯帶して、其の共同の目的利害のために、正當なる行動をとるといふことは、其の國家社會生活の全體の進歩のために是認され得べきことである。夫故に、かゝる組合をなすといふことが、國家社會的立場からみて不當視されべき道理はない。從つて官權は、只頭から之を不都合視すべき理由はない。むしろ、其の健全なる發達を希ふべきである。是れ眞に道理上、然るべきことである。此の道理を辨へる以上教育者が其の仲間の組合を作り、之に加入するに、何の憚る所あるべき筈はない。然るに、どういふものか、今日の教育者は私には、かゝる組合の作られることを強く希ひながら、いざとなると、敢て之を企て之に加入するものはないといふ狀態である。結局、只他から誤解されはしないか、不都合者と思はれはしないかといふ、卑屈な、怯懦の習性に囚はれてをるものである。自己の考へ得た道理に立つて動くことをせずして、ひとへに、他人の思はく如何、なした後の何かの結果如何をのみ、氣づかひて遂に何事も積極的行動に出で得ざるは、教育者心理生活の一大根本病である。

二

義務教育者殊に教員俸給國庫支辨案といふは、今日の教育界の輿論であり、且つ市町村も、教育費が七八割をなすといふので、市町村長からも、此を要求するやうになつてをるが、此の問題について考へても、教育者が、いかに其の教權の確立伸張を希望してゐるか、而かもいかに其の團結的勢力が乏しいかを能く示してをる。教育費を市町村の負擔にせず、國庫の負擔にするといふことは、表面上全く經濟問題であつて、是れこそ、教育者が、彼れこれいふよりも、まさに市町村の有志家が、疾くに大に呼ばるべき筈のものである。然るに、今日に於てこそ此の聲も市町村長の間に高くなり、其の會議まで開かれた次第であるが、實は此の問題はつとに早く、教員其者から叫ばれ、而かも熱心に叫ばれた聲である。是れ何故であるかといふに、是は單に表面上の經濟問題を示すだけで止まらぬからである。實に教育者生活の權威に關することであるからである。則ち市町村から俸給を受けるといふことは、彼等役人から召使人として頤使されることであるからである。即ち教育者といふ仲間が市町村有力者の下に壓迫され、氣の伸びることが出來ないから夫故に彼等から俸給を受けることを快からず思ひ、此故に、教員俸給國庫支辨を絶叫してをるのである。此の心理狀態は、今日の教育者生活がいかに壓迫されてをるかを示すものであつて、是れより免れんがために、せめて俸給なりと國庫から受けて、市町村有志からきりさいなまれることの苦痛を脱せんとするのである。されば、市町村の手をはなれて、國庫より俸給を受けるといふことは、教育者が全體として、大同團結し得る機會に接近し得ることである。かく解放されて團結し得る希望を以て、教育者は、強く國庫支辨の成立を絶叫する次第である。然しながら、教育者の心は弱い、力は弱い。此の問題を提げて全國教育者大會を、都下に開き、大演説會を催した時にも、都下幾千もある教育者の中で、此の演説會を聽きに來たものは、甚だ少い。傳へきけば、こんな會に出席するのは、誤解を受けて危險だから、行くのはよすのがよいといふ口吻が、學校幹部の間に洩れてをつたといふことである。而かも皆國庫支辨を希望してゐないのではない、教育者の權限の伸張を要求してゐないのではない、夫れでゐて、いざとなると、多くは尻込みしてしまふのが今日の教育者である。洵に弱いのは氣の毒といふべきほどである。出來れば、よいと思つてゐても、敢てみづからでかすことに働かない。謂はゞ、猫の頸に鈴をかけたならば、と思つてゐて、而かもやり得ない鼠同樣である。否夫れよりも尚弱い。

そこになると、市町村長は遙に強い。是等の人々は、叱るこ

とはあつても、叱られた經驗のない人々であるからであるかも知れぬが、其の人々が、市町村費輕減のために、代議士に迫り當局者に迫つた勢は、すばらしいもので、相手の胸倉をとつてせめつけかねまじき勢であつたといふことであるが、其れがためか否か、遂に政府黨は、市町村費輕減のために、教育者側の切望する國庫支辨法を取らずして、却つて教育費其者の節減案をもち出すに至つた。結局教育者の要求は無視されて、市町村長の要求は容れられたのである。正當なる要求をなしても、少しも顧みられぬ教育者生活こそ、洵にみぢめなものである。彼等は、此に一大團結をしなければならぬことを心の底では切願してゐるのであるが、さりとて、何かの理由なき祟りを恐れて、敢てどうすることもない。尤も、最近教育擁護同盟といふものも出來てをるが、これも教育者各人が道理に立つに勇がなければ、とても、甘くは行かぬ。

教員組合については、論のあることは、既に三四年前からのことで、社會問題がやかましくなつたと同時に出てをることであるが、其れが實際に試みられたのは、昨年の初夏、明治會館で發會式を上げたものが、最初のものではないかと思ふ。河津博士を會長にしたものであるが、其の後の成長については深く知らぬが、其の成立當時は、種々の誤傳訛傳もあつて、隨分擊肘を受けたといふことである。其の時の話にも、此の問題について小學校長などに面接して、其の意見をきいてみると、誰れも皆大賛成であつたといふことである。而かも愈其が實行になると、なるべく其の邊に近寄らぬのがよいといふ工合であつたといふことである。此の二重心理の哀れさは、現代教育者の一大弱點である。頃者、有馬賴寧氏が、日本教育者協會なるものを組織して、教育の權威を確立して、教育者の力を通して、社會的改造に努力するとの事であるが、予は、其健實なる發達を希望して止まないものである。(四月十二日)

將來の教員組合

慶大教授　石田新太郎

緒言

時代の進步を導くものは常に時代を超越した理想であるとすれば、改造の理想を立てるには須らく大膽なるべきである。大膽なれと云つても破壞的であつてはならぬ事は申す迄もないが、餘りに現狀を重んじて初めから實現の可能不可能、若くは其難易と云ふことの計量を主とするならば殆んど理想の生れる餘地が無くなるであらう。故に餘りに健全と目せられる思想は改造改進の上に多くは何等の影響をも來たさないものである。近來教員組合に就て說を立つる者多くあるが其の人々の態度は何れも健全である代りに、今日に執着して現狀から一歩も飛び出すまいと努めて居るかの如く見える。之れ一面に是等の論者が現在の教育者の人格を幼稚なものと見縊つて、少しでも彼等を誤らせてはならぬといふ老婆心にも由るであらうが、何れにせよ彼の論者のやうに、現在の政治が斯うであるから、現在の制度法律が斯うであるから、現在の教員の智德の程度が斯うであるからと、一にも二にも現在を楯に取るならば、現在以上のものは遂に望まれ得ないことになるのは明白なことである。併しながら、生々育々一日も停止することのない此の國家の生きた教育それ自身に於ては、已に現狀に甘んぜずして改造を要求する氣分が漲つて居るので、所謂健全な論者の議論を尻目にかけて着々進展しようとして居るのではなからうか。果して然りとすれば此の際吾人は先づ大膽に改造の理想を描くがよいと思ふ。假りにそれが空想に流れる嫌があらうとも、先づ吾人の要求する理想狀態を描き出して、偖て果して其の理想が我が日本教育の理想として採用すべく望ましいものであつたならば、何時しかそれが實現し得るやうに制度なり役人なり教員なりを改造して行くが至當である。容易に實行が出來ないからと言ふて空想を斥け理想を制限する樣の事は凡て進步前の途を遮り止めるものである。飜譯と模倣にのみ甘んじないで改造創作の時代を早く迎へたいなら今日空想の描出を歡迎奬勵するがよい。

斯ういふ意味からして、余は先づ教員組合に付て勝手に空想を描いて見たい。

百年後に於ける敎員組合の效果

百年後の敎育社會に身を置いて、今日の敎育社會を考へて見たならば恐らく非常な懸隔のあるのに驚くであらう。それは今日吾人が舊幕時代の敎育狀況を聞いて感ずるよりも遙に大なる結果であらう。今日吾人は漢學塾や寺子屋の狀況を稽へて、却つて其處に敎育の眞髓を得たるものが存在して居たやうに想像する點もあるが、百年以後に至つて今日を振回つて見たならば決して左樣な思慕の感を起さないであらう。丸でそれとは反對に、明治時代のやうな敎育狀態に於て、時の敎育家は自己の事業の權威と價値とを認めて衷心からの努力を敎育に捧げることが出來たであらうかと訝しむであらう。其當時の敎育即ち今日の敎育は敎育者以外の者の意見によつて行はれ、敎育家は全く隷屬の地位に置かれて居た。制度敎則敎科書等、あらゆるものは悉く官廳から宛てがはれて、敎員は其範圍を脫線しないやうに注意深く步いて居たに過ぎない。敎員は敎育に關する何一つをも自ら決定する力を有しなかつたのであるが、其にも拘らず猶ほ敎育者の事業は高貴であるとか神聖であるとか高く唱へる者があつたのは不思議である。全くあゝ時代の敎員心理は實に不可解だと思ふであらう。何となれば、百年後の社會には全國統一の鞏固なる敎員組合が出來て居て、其の組合の決議によつて敎育制度が定められ、敎育の內容が作り出され、敎員の任命が行はれて、敎育に關する大小の事悉く敎員組合の意志によつて行はれ、官廳は唯經濟に關する方面だけを分擔して、校舍の建築や設備や其の他敎育施設に要する物的方面だけを支配するに過ぎないものとなつたからである。斯の如き完全な實力ある敎員組合が出來た以上は、敎員は各自の地位や待遇を、敎育に理解なき者の意見、又は敎育以外の情實や都合の爲めに左右せらるることは無くなつて自分の信任する所の自己の組合によつて決定するのであるから、昔のやうに些々たる外部的理由によつて碁石のやうに置き換へられたり、或は唯、古くなつたと云ふだけの理由で首を切られるやうな不安が無くなる。此の不安が無くなると云ふ事だけでも今日に比すれば非常な幸福であるが、百年後の敎育社會に於ては之れ位のことは幸福とも何とも感ぜられず、普通平凡のことになつて了つて居る。それよりも此の組合の成立は實に次の如き效果を産むのである。

一、敎員は總て直接に陛下から其の赤子の敎育を委託されたのであると云ふことを明かに意識するやうになる。自分で考へ自分で決議し自分でそれを實行するのだから十分なる責任感の生ずるのは勿論であつて、事業に對する興味も熱誠も此處に始めて生じて來る。各自其の志を成して倦むことなきの狀態に達し

得て、自我實現と獻身犧牲とは全く一致するの境に入るのである。此の境遇に至つては最早教育事業の高貴なる所以を教員に向つて說く必要が無くなり教育は頗る愉快なる天職であることを說く必要も無くなる。職業に忠實なるは即ち自己に忠實なる所以であることを理論的に證明する必要もない、さういふことは總ての教員が日日の仕事の上に明かに實感して、快活に其の光榮ある職務に從事し、獨立自主の感に滿ちて而も忠誠奉仕悅樂の生活に入り得るのである。

二、此の境に在るものは、教育の目的を實感し、其の目的と方法との關係を明かにし、全教育活動中に一片と雖も器械的な部分を有たなくなる。他から命ぜられたものは理解すると否とに拘らず實行しなければならぬから、動もすれば器械的になる。教育の目的や方法は教員自身の作り出すべきものでなく、他によつて規定さるべきものだとなつて居れば、教員は先づ如何に規定せられたか、それを規定した人の意志は如何であるかと云ふやうに、他人の意を酌み取ることにのみ氣を配らねばならぬが、教員の自治となれば左樣な無責任なことでは今日が立たぬ。教育の實權を委託された以上は自ら其の方針を定めなくてはならぬ。自治の社會にありて協力して事を爲すには各自が其の目的方針を意識しなければならぬ。而して其の目的や方針の意識は、他動的の場合と違つて、他人の勸誘を待たずして自ら認めるに至るのである。國民の教育は自分達がやるのだと感じて居るに拘らず、其の目的が判然せぬと云ふやうな事はあり得ないので、教育事業に關係する第一步に於て之を明確に知らねばならぬのである。然るに若し教員が他動的である場合、即ち今日の現狀の如きに於ては、教育の目的に對して理解なき教員もあり得る。教育の目的などは、檢定試驗の準備の爲めに諳記するに止まつて何等の實感をも有たない者が今日では少くないが教員組合の自治となればさうは行かない、眼前に逼つた緊要な事實として目的を確乎と摑まねばならぬ。而して百年後の教員が教育の目的內容を如何に實感するかは詳述し得ないけれども、其の大綱に於て先づ國家といふことを感ずるであらう。それも抽象的な國家觀念ではなく、歷史を有する我が國家、我が民族の事を思はずには居ないであらう。そして一方には文化發展を志すであらうから、矢張り日本國民として日本の文化を發展せしめると云ふ大體の目的は決して變ずることはあるまい。併しそれが唯器械的に傳へ唱へられて居るものとは違つて、痛切に其の必要を實感するであらう。此の目的に達する手段方法に至つては、今日から豫想することは甚だ困難で、それは恐らく全く面目を一新したものであらう。

今日吾々が寺小屋時代の注入主義を笑つて居るより以上に百年後の吾人は今日の吾人の敎育方法の甚だ奇怪であつたのに驚くであらう。

三、敎育社會が斯樣に獨立自由であつて、且つ敎育に對して全我の力を傾注する以上は、我國全般の思想學術藝術の上に更新を加へるであらう。卽ち從來の虛名は悉く光輝を失つて眞に價値あるもの丶みが獨り尊ばれ、模倣はたゞ模倣としての價値を保つのみで、獨創的研究又は眞の創作が大に尊重せられるであらう。そして舊時代に於て、海外の思想學說を日本に紹介したといふ丈けで以て一代の學者として尊敬せられた事實のあつた事を顧みて、其の頗る幼稚であつたことを笑ふであらう。單に外國には何々主義が流行して居ると云ふことを傳へた丈けで、早くも盛名を海内に馳せ、彼處からも此處からも講師に招聘したといふやうな事は遠い昔の語り草として、お伽噺にでも殘るであらう。況して其時代には大學の敎授までが皆それであつたと云ふに至つては小學校の兒童と雖も恐らくそれを信ずることが出來ないであらう。

四、此の敎員によつて敎育せられる日本の社會は幾許ならずして國民各個が其の責任に目醒めるであらう。そして昔の政治や議會や選擧や、何れも珍妙な現象として好事者の詮穿する所となるであらう。專門の歷史家は百年以前には閥と云ふものがあつて、それが正義よりも強い力を有つて居た事を說くけれども、一般人は左樣なもの丶存在する理由が無いと云つて拒むであらう。財閥に擁護せられた藩閥軍閥黨閥などがあつてそれ等が聯合して各委員を出して政治をしたものだと說明して聞かせれば聞かせるほど、益々そんなものは立憲政治と相容れない筈だと云ふであらう。まして學閥といふものがあつて、學問にも閥があつたのだと云ふに至つては愈々理解し難い荒唐無稽の言として斥けるであらう。斯樣にして國民は總て純眞なる人間性を發揮すると共に、忠實に君民共治の純眞なる國家生活の機能を發揮し得るであらう。

敎員組合の組織一斑

さて如上の實際的効果を奏し得る百年後の敎員組合は如何なる性質と組織とを有するであらうか。想像に任せて其の一端を描し出すならば、

一、組合は總ての敎員をして悉く加入せしめることを期するもので、それが例外なく實行せられるであらう。卽ち幼稚園より大學に至るまでの官公私立の全部が殘りなく組合員となつて一定の組合費を負擔するのである。

二、組合員は少くとも左記の二項を信條とするものである。

（甲）奉公の至誠を以て職務に當ること。之れは苟も敎員たらんとするものが內心に於て先づ誓はねばならぬやうに百年後の敎育界の空氣は恐らく出來上つて居るであらう。一般に職業に對する觀念が現在とは異つて來て、如何なる社會の人でも職業を以て單に衣食の資を得るの手段とは見ないで、其處に奉仕の自覺を有つことが漸く深くなつて行くではあらうが、就中敎育者は最も先じて此の自覺に徹底しなければならぬと云ふのが敎育社會の信條となつて、隨つて敎員組合の一員たるに最も肝要な資格とせらるれるのである。

（乙）營利事業に從事する者の收入を羨むが如き陋劣なる根性を排除すること。尤も百年後に於ては今日の如き甚だしい營利事業はなくなるであらうし、隨つて敎員と營利會社の社員との收入にも大差なきものになるであらうが、併し元來營利的性質を少しも有しない敎員社會と他の社會との間には物質的の儲け方に多少の差違を殘すであらうが、既に敎育を以て職務とする以上は、他人の儲け高を見て羨ましく思ひ轉業を企てるやうな根性をば全然洗ひ去つて了はねばならぬ。如何に百年後と雖も此の一念の痕跡を殘存する間は凡百の弊害は此より起つて來るから、組合員たるの當初に於て、先づ斯の陋心を一洗拂拭することを要する。此の二つの信條を有せずしての組合ならば、其れは常に紛擾を重ねるのみで遂に何等一點の效果を收め得ないことは百年前と全く同じくなければならぬ。そして單に賃錢の値上げを要求するだけを目的の全部とする幼稚な同盟罷工と選ぶ所が無いであらう。

三、組合は中央地方の各部會に分れ、何れも選擧せられた理事若干名があつて其の事務の局に當つて居る。

四、組合成立と同時に、中央敎育會議及び地方敎育會議が組織せられる。敎育會議の議員は文政當局の代表者若干名、敎員組合の代表者若干名の外、帝國議會又は地方會議の議員若干名を列席せしめて父兄側の意思を發表させる。

五、敎育會議は經營者の代表者即ち校長或は校主と敎員との間の紛議を仲裁する。

六、中央及び地方の敎育會議は、文政當局から提出した豫算案（主として學校設備費）及び組合提出の豫算案（敎員給）を調査討議し、其の決定したものを帝國議會又は地方議會に提出する。

七、組合成立の上は、文政の局に當る中央地方の官公吏の權限中から、敎員の人事に關する一切の事項が削除されて、それが組合に移るであらう。是に於て上は文部大臣より下は町村學務委員に至るまで、人格の高い者を特に選ぶの必要が無くなる。

文部大臣は教育家の上に位して其の模範人物でなければならぬといふ謬見が無くなつて、道德品行に於ては普通一般の人物で差支ないことになり、普通人の遣る位な營利事業に手を出しても議會の問題に上す必要がなくなるのである。一世の風教に影響する力が減ずる代りに其の行動が自由になり其の責任が輕くなるのである。

八、學校の設立存廢等に關しては政府は教員組合と協議を遂げる爲めに教育會議に提出して之を議することになる。そこで黨略に出づる學校の存廢設立が不可能となつて、教育事業が政黨競爭の具に供せられるの弊は跡を絕つことになる。

九、組合は組合員を普通專門の若干級に分つて最高給料額と最低額とを定める。又家族の多寡によつて扶助料を給することをも定める。

十、組合は又右各級の教員の授業時數を定める。學校經營主にして若し制限以外の授業を望む場合には豫め組合の同意を經ねばならぬことになる。

十一、組合員の奬勵法に關しては百年後と雖も恐らく無頓着であることは出來ないであらう。組合は每年一回組合員の勤惰を査定し成績優良な者には相當に賞與又は表彰を講ずるであらうし、其最も優秀にして成績拔群な者に對しては其姓名を錄して、天覽に供するとか何等か特別な表彰法を講ずるであらう。其れが百年以後に行はれたやうな皮相なものではないことは云ふまでもあるまい。

十二、組合員中停年に達した者には一定の年金を與へて老後の生活を安定ならしめるであらう。又休職待命等の場合には當人の希望によつて相當の手當を與へて組合の事務を扱はせるやうな方法も講ぜられるであらう。

十三、文政當局からも視學官を置くであらうが、組合でも視學を置いて夫々の管內を視察させる。

十四、一つの學校に於ける教員全體を一團としてそれに團長を置くことになるであらう。教員中に意見又は不平のある者は先づ團長に訴へ、團長だけで處置し得ない時にはそれを組合の視學に訴へる。學校經營者側に不平のあつた場合にはそれを視學官に訴へる。斯くて視學及び視學官は事の大小に應じて教育會議に訴ふべきものと否らざるものを處置するのである。斯樣にして組合員の志は鬱屈することが無いやうに圖るのである。

十五、組合は各種の教員養成所及び共濟保險事業を經營する。

結語

百年後の教員は右の如き組合の成立によつて果して如何なる

利益を得るであらうか。教員の俸給の如きも生活し得る丈けにはなるであらうけれども、他の社會に比して劣るとも優ることは無いであらう。物質的には他の社會に比して何等の特權があるのではない。けれども彼等は自分の仕事を自分で定めることが出來る。教育の權威は遺憾なく確立して、何物にも隷屬しないで自家の尊嚴を保ち得るであらう。舊時のやうに、切り離して與へられた一小區分内の仕事を器械的に反復して居た狀態とは全く異なつて、國民教育の大局を自ら常に實感して、全體の一部として自己の仕事の生命を攫みながら、全力を傾注して快活に働くことが出來るのである。舊時代には單に一個の雇人としての教員であつたものが一變して自ら文部大臣たると同時に教員たるの教員となるのである。奴隷は變じて主人となり、受動的態度が轉じて能動的となり、厭ふべき勞働が變じて愉快なる活動となるのである。此の一轉を來したが爲に教員組合が統一的に出來上つたのであるか、或は教員組合が統一的に完成した爲めに此の轉回を生じたのであるか、其の何れであるかは知り難いけれども此の兩者は双繋兩輪の關係にあることは疑ひないであらう。

以上の如き想像は果して迷妄であらうか否か。未熟ながらも原案を提出して諸賢の批正を乞ふのである

教員組合と勞働組合

文部事務官　乘杉嘉壽

一　教員組合の本義

自主自立の教育を樹立するの要は教育者自身の眞の自覺こそ、現代教育を、救濟する只一の途でなくてはならぬ。教育の監督に關する今日の樣な不合理や不徹底が取除かれて、教育者をして自暴自棄に陷らしむることが、なくなつたとしても、教育者自身の自覺自奮が起らず其の天職に對して、滿腔の熱誠を捧ける考がないならば、寧ろ今日の樣な屈辱の教育に甘じて居た方がましであらふ。又いかに教育の經濟的方面に對して朝野上下の聰明にして且寬大なる理解を得て、今日の樣な貧弱さを脱出し得たとしても、教育者にして斯の如き國家並國民が教育

に對して拂はんとする大なる犠牲にふさわしき奉仕を怠りその期待に背く様では寧ろ教育者をして今日の逆境に立たしめておく方がましてあろふ。教育振興の要は教育者自身の自覺である、奮起である、その自覺奮起がいつでも利己本位では何の役にもならぬ、眞に教育の本義を體驗して國家社會の期待に副はんとする自覺奮起でなくてはならぬ。此の意味に於て我邦教育者が教員組合を組織して内には教育者自身の自覺を促進し、相互の堅き堅き共同一致の基礎を築き、外には教育をして眞に社會文化の最も有力なる一大權威たらしむべく努力することは誠に望ましいことである。

二　教員組合と教育會

近頃教員組合の呼聲が世に高まつて來て、教育に趣味ある人達の間に種々の議論がある様であるが、その比較的老人株に屬する連中には教員組合の不必要を唱ふる人が多い、これは、體の油が切れて血の氣の減すらいだ人達には無理もないことで予は寧ろ現代教育者が此種の老へ達と同様に氣力が衰へ時代におくれて居ないことを衷心より希望する。是等の論者の多くは從來の教育會との關係を述べて直に教員組合を新に組織することを不必要なりとするが、それはまだ教員組合の意味が充分に分らぬか又は外國に於ける教員組合の悪るい事例を見て之を直に我邦に採り入れるものと考へてのことである様である　既に述べた様に教員組合なるものは、教員自身の自發的自主的の團體であつて今日の我邦の教育會の様な全く生命もなく生氣もなく單に傳統に依り因襲に依つて出來上つて居る様な團體であつて、はならぬ、乃ち教育者自らがその責任を果たし又義務を完ふするが爲めに教員同志が内に堅く結び且相戒しめ外には正々堂々と行動を爲して眞に社會の先覺たるべき實を示すことを目的とする團體であるべきである。單に教育に趣味を持つとか又は關係があるかといふ所謂御役目とか體面とかいふ立場から多數の人を雜然と集めたのが今日の教育會の狀態である。かゝる團體で眞に教育の進歩發展の促進を企圖したり教育の權威や勢力を眞に高めることが到底望まれ得べきでないと思ふ。予は寧ろ此際滿天下の教育者が相提携して共力一致して活動すべき有力な機關が出來ることは國家社會の改造に資するにどれだけ有意義で且有利であるかを信ずる。現に思想問題や勞働問題や其他社會の諸問題に依つて苦んで居る際に教育者の心の奥底より眞に一致し共同し國家社會の爲に奉仕し其の天職に殉せんとする意氣が油然として湧いて來たならば之ほど有力な勢力、偉大な權威が又と他にあるであらうか。かゝる際に從來の因襲的形式一遍の教育會といふ團體に踏躇して居るよりは教育者が自ら

奮起して正しき組合を組織して眞にその自主的天分を發揮するといふことが邦家教育の爲誠に喜ばしいことで因循姑息で彼等自ら社會から葬り去られんとして居るよりも進で社會を導くの意氣が望ましい。

三　教員組合と勞働組合

論者の內には教員組合と勞働組合との關係を論じて教員が勞働組合の精神及手段に範つて其の待遇方法や執務條件などの改善を計る爲めに政治上に、はた經濟上に活動せんとするは教育者の威嚴を損し且殊に我邦の如き準官吏として待遇せらるゝ教員に於て一層不穩當であり不合理なりとするのである。此論は只外國の教員組合の事例を持ち來つて直に我邦に實現したと假定しての論であつて外國でも必しも總ての教員組合が斯樣に行動を爲して居る譯でもないのであつて、斯の如き教員の威嚴を損ひ身分を破ぶる樣な行動がもし現われたならば之は嚴重に措置すべきであつて、之は團體の成立不成立に係らず常に取締るべきである乃ち彼の佛國に於ける教員組合の如きは最初勞働組合と結合したが爲めに今日に於ては非常な不利な地位に立つて居る乃ち勞働者は官公吏組合や教員組合の如き知識階級に支配されることを好まないから、自然その後援を得ることが出來なくなり加之政府は教員組合の存立を承認しないのである、之に反して米國の教員組合は漸次勞働組合の同情を得て其の政治的經濟的要求が實現されつゝある、之は米國教員組合が社會の輿論を高め一般の同情を得るに正々堂々たる態度を持したが爲めであつて寧ろ勞働組合から進て之を援助したので今日でも勞働組合に左右せられない點に於て世界の教育組合中獨特の地歩を占めて居る、其他新獨逸では教育組合は公に認められ專制の統一及待遇の向上に盡力して居る、又英國では「全國教員同盟會」及「英、愛、教員組合」の如き有力なる團體が寧ろ勞働黨からの秋波を受けつゝ有力なる教員團體として教育的權威の向上發揚に活動して居る。要之教員組合は寧ろ勞働組合に對しては、指導の地位に立つべきであつて、好き模範を彼等に示すべきである、かゝる意味に於て健全なる教員組合が生れて內には互に相勵まし相戒め切磋琢磨し外には正々堂々其の品位を天下に發表し世の同情と覺醒とを喚起して眞に國家社會に有用なる教育者としての眞價を發揚することは誠に望ましいことである。

四　結言

我邦に於て近來斯く一二の教員組合の成立を見るに至つたが社會及當局は組合の要求主張をよく聽き之を理解するの雅量を必要とすると同時に組合は米國と佛國との相違に依つても見られる通り、ストライキなどの直接行動に出づることは愼まねばならぬ、教員がストライキの有害なるを自覺しつゝ然かもその直接手段に出でざるを得なくなるのは、社會一般及當局の彼等に對する冷淡が原因することが多い、此點は爲政者並社會の人達の深く考慮に値することゝ思ふ。(大正一〇四一一)

嵐の前

◇重版復

◇四六版最上用紙天金函入美本

ニイチエの天才と熱情とを憧憬した我が一大思想家中澤臨川は彼を主人公として小説「嵐の前」を描いた。彼れ臨川の燃ゆるが如き熱情と、天馬

◇東京芝區櫻田久保町

記念大出版 ◇

監修者（いろは順）

文學博士 波多野精一
文學博士 西田幾多郎
文學博士 朝永三十郎
文學博士 米田庄太郎
文學博士 田邊元
法學博士 左右田喜一郎
文學博士 藤井健次郎
文學博士 深田康算
阿部次郎

書目及び執筆者は六月號に於て詳報す
本書の內容は監修者に於て全責に任ず
斯の如き哲學界の完璧を網羅したるは
我學界に於ては未曾有のことにして
本社は社會に奉仕する一大決心を以て
多大の犧牲を拂ひ人類文化に貢獻せん
全卷拾貳冊、四千五百餘頁の一大冊子
「改造式」の裝幀を凝せる最新型の美本
壹冊の定價約貳圓五拾錢の豫定にして
豫約に應じて特價大割引提供の設あり
第壹卷は今秋を期して發賣せらるべく
一世を壓する權威の所產と大勞作とは
學者も青年も學校も家庭も必備の著作

新刊紹介

□**現代社會問題の社會的考察**（米田庄太郎著）社會問題研究の大家たる米田博士は筆硯益健かである、全篇十一章中、現代社會の分析、佛國黃色組合の發達、現代溫情主義の三篇は尤も精讀に値す、近時の社會問題を系統的に研究せんと欲する人は必ず坐右に備ふべき必要書で、そしてまた、新らしき社會問題に觸れんと欲するものは博士のこうした著述によりて尤も最新の社會思潮を知り得る（京都丸太町弘文堂發行定價貳圓）

□**人間禮拜**（與謝野晶子著）歌人として名高き晶子女史の感想集の第十編である、議論もあれば隨筆もある、紀行文もあれば批評もある、だが、その何よりも矢張り女史の著述ではその歌が優れて目立つ、女史の詩想は現代の日本ではまづ比類なきもので隨って本書も一讀の値がある（麴町區天佑社定價二圓六十錢）

□**女の心男の心**（澤田撫松著）情話哀話を集めたるもの、退窟まぎれに讀むによし（價一圓八十錢日本橋星文館發行）

□**藝術的活動の起源**（金田廉譯）大村叢書第五編、氣の利いた編輯で內容も萬更でなし、フイドラア原著を譯述せるもの（定價一圓參拾錢淺草區花川戶大村書店發行）

□**惡戯**（大杉榮著）例の筆鋒にて辛辣に痛快に世事を罵る、發賣禁止の記、とんだ木賃宿、模範囚人、獄中へ、鎌倉の若衆、遺言等一讀しておもしろく諷刺骨を刺すものがある、肩のこらぬ春の讀ものの一である（價一圓參拾錢神田中猿樂町アルス社）

□**經濟價値論**（加田哲二著）慶應大學少壯教授たる加田氏の處女作、價値學說史觀、主觀經濟價値論の二大項に頒ちて詳說する所あり（價貳圓五十錢芝三田國文堂發行）

□**江戶から東京へ**（矢田挿雲著）著者が報知新聞記者として步多き江戶時代より現實の東京へ史蹟事實の變遷を記述したる興趣多き讀物なり（價貳圓五拾錢神田表神保町金櫻堂發行）

□**お弓の結婚**（宇野喜代之介著）新進作家なる著者の長篇創作なり（價一圓參拾錢牛込矢來新潮社發行）

□**あき**（網野菊子著）著者が女子大學在學中に書ける短篇十二篇を集めたるものなり（價一圓五十錢芝三田國文堂書店發行）

□**不愉快な窮境**（永島直昭譯）ドストエーフスキーの短篇中從來餘りに照介せられざりし「不愉快な窮地」「九つの手紙の物語」の二篇を集む（價壹圓東京府下北豐島郡曠野社發行）

□**大洪水**（佐々木孝丸譯）波蘭の武士道を題材とせるシエンキウイッチの傑作なり二卷よりなり本書は其の終篇なり（價一圓八十錢牛込矢來町新潮社發行）

□**春の波**（生田春月譯）ツルゲエネフの創作中最も藝術的匂ひに富めるもの、附錄としてエルグノフ中尉の冒險を添ふ（價一圓三十錢牛込矢來町新潮社發行）

□**死の家の記錄**（長岡義夫譯）ドストエーフスキー全集の第十篇にて、オムスク監獄四年間の生活の深刻なる記錄なり、價一圓八十錢牛込區矢來町新潮社發行）

□**宗教學綱要**（清水友次郎譯）マクス、ミユラー博士の講演を抄譯せるもの斯界に獻貢する所多からん（價貳圓小石川區町丙午出版社發行）

□**アンナ・カレーニナ**（原田光譯）杜翁の傑作なり、本書はその中卷にして第三、四、五編を收む（價貳圓三十錢牛込矢來新潮社發行）

□**煩悶と自由**（丘淺次郎博士著）丘理學博士か數年間の思索に依る產物なり人生觀あり文明批評あり（價四圓五十錢本鄉駒込坂下町大日本雄辯會發行）

□社會問題概論（安部磯雄著）本書の目的は、組織的に社會問題の取扱方を示したもので、就中社會問題解決法の分類と共に對する批評とに努力されてある、興味深く必讀の書（定價四圓、早稻田大學出版部發行）

□自彊術の解說と實驗談（十文字大元編）創始者は中井房五郎氏で其の驚くべき自彊術の効驗を分り易く書いたものである（定價九十錢、實業之日本社發行）





6

北郊雜記

阿部次郎

私は前に、今の議會の論戰を見てゐると、神曲地獄篇中の詐欺漢シノネと贋金造アダモとの喧嘩を想ひ出すと云つたが、その後所謂珍品事件の勃發によつて（固よりこれは議場内部の喧嘩ではないが）益々この感を深くせずにはゐられなかつた。あまり思ひ當る事が多いから、まだ神曲を讀んでゐない人のために、あの場の光景と二人の對話との荒筋を御目にかけたい。印象をはつきりさせるために、脚本めいた形式をとるが、場面にも白にも、私が自分勝手につけ加へたところは少しもないことを記憶していたゞきたい。

場處　地獄の大坎のもう底に近いところ、「禍の嚢」の第十嚢

人物　ダンテ。ヰルジリオ。アダモ。シノネ。その他惡臭を發する疫病患者澤山。

帶のやうに繞つてゐる空濠とその上に架けられてある太鼓橋。お茶の水の橋や萬世橋が汚穢船の通る濠の上に架けられてゐる有樣を想像せよ。）堤も濠も鐵色の岩で出來て居る陰欝な暗い空氣。たまらない惡臭が濠の中から立ちのぼつて來る。

淵の中は疫病やみの罪人で一杯になつてゐる。或者はうつむいて臥し、或者は背中と背中ともたれ合つてゐる。或者は四つん這ひになつて淵の底をうろ〳〵と這つて行く。中には身體が瘡だらけになつてゐるのを爪でばり〳〵とかいてゐるのもある。さうすると庖丁で鯉の鱗をおとすやうに、痂がおちる。

向ふから、顔蒼ざめて裸かな男女二人の影が狂のやうに驅けて來る。男の方が、一人の病人の頭に噛みついてこれを曳ずつて行く。噛みつかれた者は堅い岩の底に腹をすりながら曳ずられて行く。

ダンテとギルジリオと橋を渡つて向ふの岸に立つてこの淵の中を見下して居る。ダンテは苦い顔をしてゐるが何處かに珍らしい物を見る好奇心が隠れてゐるやうに見える。

アダモ。贋金造が發覺して火あぶりの刑に處せられた奴。水腫で腫れ上つて、脚をきれば丁度琵琶の恰好に見えるほどに腹がふくれてゐる。

シノネ。トロヤ戰爭の最後に、トロヤ勢を欺いて計略の木馬を城内に曳き入れさせた男。アダモの右の方に一人の女と寄添つてねてゐる。高熱のために體から「冬の濡手の煙る」やうに煙をたてゝゐる。

暫くアダモの身の上話をきいたあとで

ダンテ

お前の右に近く二人の影がねてゐるね。あの冬の濡手のやうに煙つてゐる連中は一體誰かね。

アダモ

一人はヨセフをだました女で、一人は嘘つきのシノネですよ。あんまり熱がひどいんで、あんなに臭い烟を吐きやがるんです。

(シノネ腹を立てて、拳でアダモの腹を打つ。アダモの腹太鼓のやうな音をたてる。アダモ腕をあげてシノネの顔をひつぱたく)

アダモ　體こそ重くて動けねえが、かういふ用には持つて來いの、自由自在な肱があるぞ。

シノネ　火あぶりに連れて行かれるときにや、お前の腕はこんなに早くは動かなかつたね。だが賞金を拵える[illegible]にや、これよりもつと早く動きやがつたつけなあ。

アダモ　お前の云ふのは本當だ。が、トロヤでものをきかれたときには、今ほど本當の證人ぢやなかつたぞ。

シノネ　俺は言葉でだましたが、お前は金でだましたんだ。俺が此處に投げ込まれたのはたつた一つの罪のためだが、お前の罪は鬼よりも多いや。

アダモ　たてた誓を破つた奴め。馬のことを思ひ出すがいい。あれは世界中に隱れのねえ話だ。それを考へて苦しみやがれ。

シノネ　お前は又お前で、舌を燒くやうなその渇と、目の前の垣根のやうなその腹で苦しみやがるがいいや。

アダモ　相變らずへらず口を叩いて損をする奴さ。俺も水氣で膨れてゐるが、お前だつて頭が燃えて痛んでゐるぢやねえか。水さへ見れや飛びついて舐るだらう。

（ダンテ夢中になつて二人の喧嘩にきゝとれる。ヸルジリオ、ダンテを叱る）。
「かゝる事を聽くを願ふは卑しき願である」――併しから云ふ芝居を毎日見せつけられて、それでもこの「卑しき願」に感染せずにゐることは甚だ六かしい。私はこの醜い芝居を面白がつて見る心持が、はねのけてもはねのけきれないことを恥かしく思ふ。

7

所謂珍品事件のことを今更彼是云ふのも氣の毒だが、成金や政黨首領や幹事長といふやうなもの丶生活を覗く機會は、吾々のやうなものには滅多に與へられないから、證據書類が割合に多く提供されてゐる今日のやうな場合に、彼等の心術や生活態度を考へて置くことも必要だと思ふ。あの珍品事件は、吾々にどれだけのことを證明し若くは推測させるか。關係者の一人一人について、個條書きにして思ひつくことを書きつけて置きたい。

甲。内田信也

一、この人は寄附の好きな人と見える。水戸高等學校には何十萬圓とか何百萬圓とか寄附したさうだ。それから水産講ならぬ水産博の帳尻を合せるための三萬金。加藤高明への珍品五個（以上二口江木翼取次）。噂によれば憲政會の「特別會計」に珍品五個を差出した同期の選擧に、反對黨の政友會にも五個どころではなくてもつと澤山出してゐるとか云ふ。から云ふ寄附好きの動機は何だらう。純粹に正しい仕事を助けるためであるとは、後に云ふ理由からどうしても受取りかねる。殘るところは、現在權勢を持つてゐる者や將來權勢を持つかも知れない者の機嫌をとつておいて、積極的に寄附額を利息と見ても差支ないほどの利益を掴まうとするか、消極的に金儲けの邪魔をするのを防がうとするか、若くは又派手な名前を喜び、おだてられれば容易におだてに乘る、薄つぺらなお坊ちやんの見得坊か、二つに一つの外を出

でないだらう。若し前者だとすれば疑ひは今日の政府や政黨の全體にかゝつて來る。政府や政黨がそれほど政商に傭けさせることが出來るとすれば、彼等は結局國費を私するものである。又その御用をつとめないものゝ正當な金儲を妨げるとすれば、彼等は結局國權を私するものである。併し若し後者だとすれば、江木翼のやうなおだて上手のづるい顔と、內田信也の得意になつてゐる馬鹿氣た顔とが、吾々の眼の前に浮んで來るだけである。話の前後を考へ合せれば、どうも後者の臭ひが多いやうに思ふ。この事件は、多少の滑稽味を帶びてゐるところに、まだしも憎くないところがある。

二、珍品五個寄附の順序はかうなつてゐるらしい――第一、加藤高明から無心の前觸れが來る。第二、江木翼が無心の使に來る。第三、島田尾崎のやうな「小生大嫌ひ」な男を援助するために使はないやうにといふ條件をつけて寄附を承諾する。さうして寄附をしたあとの經過はかうである――第一、加藤が普選論を唱へる、內田は別に抗議も申込まない。第二、加藤の息子の結婚の時にはお祝ひを送つてゐる。第三、憲政會が滿鐵問題を擔ぎ出す、內田の金儲の話がこの問題に絡んで來る、內田が政友會の廣岡宇一郎に珍品事件の經過を物語つて證據の手紙を彼に渡す、さうして廣岡宇一郎の公開狀によれば、五萬金寄附の條件は普選阻止で、內田は加藤の背約を憤つてゐるといふのである。併しこの經過で明かであるやうに、內田が誠心誠意普選反對の條件を附して五萬金を寄附したのだとはどうしても考へられない。事後の態度がすつかりこれを裏切つてゐるからである。加藤の「背約」の時に事件を發かずに、憲政會が自分の不利益な態度をとるに至つて始めてこれを發く氣になつたのは、彼の根本動機が主義でなくて私慾であることの何よりの證據である。其處にはお坊ちやんのむつとした憤りのやうなものがある、併しその憤りは公憤ではなくて私憤である。

三、內田はこの私憤を晴すために他人の親展書を公にすることを許した。これは彼が人を賣りかねない男であることを證明する。

四、内田はこの私憤を晴すために憲政會との連絡を自ら絶つてしまつた。これは他の點と符合がとれてゐれば彼が痛快な男だといふ證據にもなり得るだらう、併しこの斷定は他の證據によつて崩される。これによつて明かにされるのは、彼が餘り猾巧な男ではなささうだといふことのみである。

乙、加藤高明

一、加藤高明は三菱の婿である、新聞の報道によれば自分の百何十萬圓とかの財産を持つてゐるといふことだ。併し彼が内田に珍品を無心したときには三菱からまだ選擧費用が出なかつたのださうだ（雪嶺翁の談話記事による）。自分の財産も何かの理由で使ひ得なかつたのであらう、彼は内田信也といふ成金に金を無心した。五萬圓を送られて「深謝に堪へず」、「御内示の條件は堅く遵守すべき」旨を申送つた。これが憲政會總裁の仕出來たしくじりである。この事實を見て私は又しても政治家を藝者に較べて考へることを禁じ得ない、どんな金持の旦那を持つてゐる者でも、自分の貯金がたんまりと出來てゐる女でも、役者につぎ込むためには金に困ることがあるのである、金に困つて内證で身を賣ることがあるのである。この意味で政治家も藝者と等しく淺ましい商賣である。

二、その金を内田からひき出すために、彼は自黨の領袖をそれで援助しないといふ約束をした。彼の黨派の辯解によれば島田尾崎等は從來とても金で援助する必要がなかつたのだから、内田から出た金で彼等を援助しないと約束したのは、決して彼等を見棄てたのではないといふ。この辯解は尤もなやうで決して尤もではない。その金をそちらに使ふにせよ使はぬにせよ、自黨の領袖を援助せぬといふ條件で金を受取ることそれ自身が既に水臭いみつともないことなのである。江木翼らしいものが自分の當選を妨げようとしたといふ島田三郎の談話は更にこの疑ひを濃くする。この疑ひは普選提唱の誠意に暗影を投げるものとして、加藤にとつては決して輕からぬ痛手である。私は煽動政治家（デマゴーグ）の心理の一例を

覗き得たやうな氣がする。加藤高明さへ猶これだから、吾々は政治家の言說を信ずることが出來ないのである。

三、加藤高明は內田に「御內示の條件堅く遵守すべき」ことを約束して珍品五つを受取つた。併しこの問題が持上る頃には彼は彼自身の云ふところに從へば――すつかりその事を忘れてゐた。最初には條件などはないといふことだつた。次には何だか忘れたといふことだつた。最後には條件はあるが普選阻止の條件ではないといふことだつた。手紙が出て來て實際それが直接に普選阻止の約束でないことはわかつたが、甚だ阻止に近い約束だといふことも亦わかつた。この事實は色々微妙な心理を語るものである。加藤が空とぼけたと見れば猶更だが、言葉通りにこの陳述を信じても、政治といふものがどれほど人の良心を麻痺させるか、恐ろしいと思はずにはゐられない。そんなに綺麗に忘れられるほどなら、加藤の心中には實際內田の條件などは最初からどうでもよかつたのであらう、金を受取つた上で「御內示の條件堅く遵守する」と云つて置きさへすれば取引はもう濟んだものと思ふことが出來たのであらう。一面から見れば、內田の條件が前にも云つたやうに本氣なものとは見られないのだから、加藤がそれを輕く見たのも尤もだと云へないこともない。併しそんな不眞面目な者の金を無心してまでとつて恥ぢないところに――さうして取つてしまへばどんな約束があつたかけろりと忘れてしまへるところに政治家の良心の鈍さがある。ある場合には

「どうも今少し纒つた金がなければ困る」。

「內田の馬鹿に出さしたらどうです」

「尾崎や島田に使はしちやいけないといふ條件附だがまあ要る金だ、とつて置かう。條件などは守ると云つて氣休めを云つて置けば澤山だらう」

から云ふやうな輕いだらしのない氣持から軍資金を徵集して來ることも決してないとはいへないであらう。併しこん

な軍資金の上に築かれた政黨が正しい主張を貫徹する力があらう筈はない。

四、併し珍品事件によつて吾々は加藤高明は特別に汚い政治家だといふ印象を受けたかといふと、決してさうではないのだから不思議である。吾々は「加藤さへあれだから他の奴等はどんなことをしてゐるか知れたものではない」と考へる。珍品事件は政治家の沽券を全體としてさげたさうしてその安物の政治家の中で、加藤高明の顔は矢張り割合に綺麗に見えるのだから困つたものである。

五、珍品事件の中で自分には忘れられない二枚の凄滄な畫面がある。一枚は加藤高明が、「あつた、あつた、反古にする不用な方の手紙の中にほをり込んであつたよ」といつて、問題の手紙を手下の面々に見せてゐるところである。手下の面々がそれを取圍んで歡呼してゐるところである。もう一枚は、樋口秀雄が「それぢや僕も貰ひに行けばよかつた」といふと、加藤が「君は一般會計組だよ」といつて破顏するところである。後の畫は、道具立は寂しいが特に凄い。これは一種の Galgen humar (絞首臺上の諧謔)である。加藤高明氏からこのガルゲンフモールをきくことは、昨日までは思ひもよらぬことであつた。

丙、廣岡宇一郎

一、廣岡は確かに或程度まで加藤を傷けることに成功した。併しそれだからと云つて、政友會の信用が一毛でも増したのではない。寧ろ吾々は、愈々攻勢的防禦を始めなければならぬほどに、滿鐵問題や亞片問題が政友會にとつて痛いのだなと思はない譯に行かない。この戰ひは組打のまゝにころ〳〵と谷底に轉げて行く智慧のない勇士の戰ひのやうなものである。結局自分達の時代の葬の鐘を一日も早く鳴り響かせるために、彼等は眞赤になつて喧嘩をしてゐるのである。彼等がこんな汚い喧嘩をすればするほど、一緒に命を縮めなければならぬといふことを本當に悟つてくれたら。こ

の喧嘩によつて兩方損をするやうに仕組まれてゐるところに、兩者共通の利害があるといふことを本當に自覺してくれたら。

二、廣岡宇一郎に云はせたら、自分もこんな喧嘩はしたくないのだが、憲政會の奴等があまりひどいことをいふから我慢が出來なかつたのだといふだらう。さう云ふのは一應尤ものやうでもあるが、そんな喧嘩を買はなければ立行かないところに、自分達の生活の根本的な過があるのだといふことに氣がつかないのだから困るのである。

8

二大政黨對立といふことが立憲政治の理想であるやうに考へられてゐた時代もあつた。併しこの二大政黨の爭ひが反對黨のあらを探し出さうとするところと、自黨の非を曲庇しようとするところとによつて行はれるとすれば、それは結局二匹の猫をいがみ合せることによつて鰹節の安全を保たうとするやうな量見に過ぎないだらう。お互に、隙を覘ふ敵を持つてゐるといふ自覺は、確かに吾々に油斷をさせず、確かに吾々が腰を据ゑて國務と權勢との骨をしやぶることを遠慮させるであらう。併し對手の小股をすくつてやらうと心掛けてゐる者によつてその空氣を支配される社會生活の一日一日は實にたまらない。

政黨は一つでも二つでも三つでも――若くは全然なくても構はない。絕對に必要なのは愛と公正との精神である、この精神を基礎とする相談と相互扶助とである。他人の美をなす心と他人の過失を劬る心とを喪つたところに、今も昔も善き政治が行はれる譯はないのである。

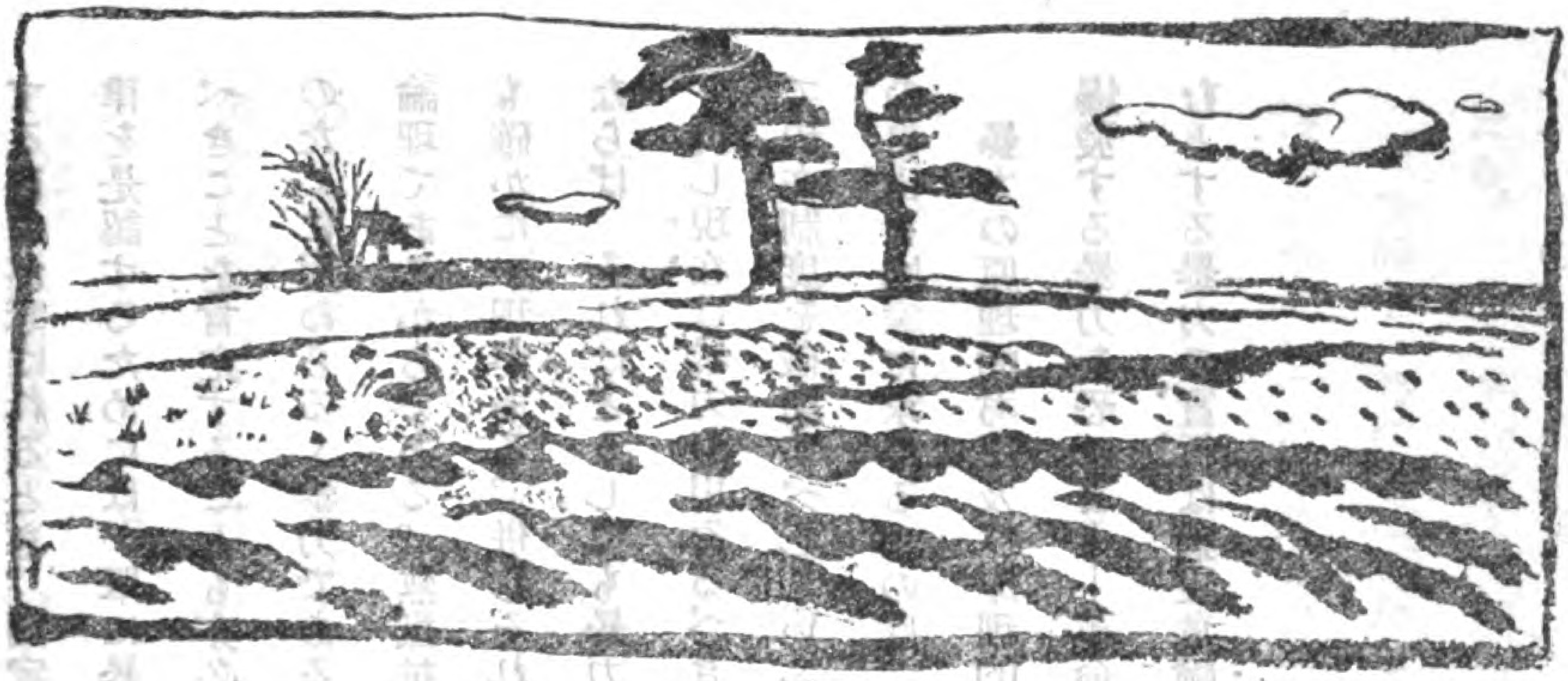
9

暴力の使用は場合によつて是認せらるべきか、絕對に否認せらるべきか、これは大問題である。併しこの問題を考究

する自由が奪はれるとき、國家哲學や法律哲學が全然成行し得ないことだけは極めて明瞭である。而も吾々が國家や法律を是認するためには、單に暴力使用の權利を考究する自由が必要なのみではなく、また場合によつてそれが是認さるべきことを肯定することも亦必要である。軍備は國家の自己防禦のために準備された暴力である。刑罰も亦社會の自衞のために用ゐらるゝ暴力である。絕對的に暴力の使用を否定する無抵抗主義が國家と法律とを否定するに至るは當然の論理であるからである。無抵抗主義は國家に對して暴力を用ゐることをも亦否定するからこれは危險でないと考へるのも確かに一理がある。併しそれは單純な便宜主義の見地であつて、國家や法律が自己の存在を眞理の上に築かうとするならば、それはどうしても暴力論考究の自由と或場合に於ける暴力を肯定する自由とを許さなければならない。

併し現在は暴力を用ゐるべきときであるかないか、それは暴力の原理的考察とは全然異れる問題である。暴力を用ゐて現在制度を破壞すべしといふ主張が、國家と法律とによつて許容さるゝを得ぬのは勿論である。これを主張する言論の自由を國家に求めるものは、その敵に糧を求める者に過ぎない。

暴力の原理的考察及び原理的肯定の問題と現在に於ける革命の煽動とを混同するは大なる過である。やむを得ずして爆發する暴力を恐れよ――革命の混亂を避けむがために。から云ふのも猶危險ならば、これほどの言論の自由をゝ抑へむとする暴力の實行は猶更危險でなければならぬ。（四月十二日）



小説 ホワイト・ファング（白牙）

Jack London 著
堺利彦 譯

第二篇

一 牙の戰ひ

かの（前回の）人聲と橇犬のうめきとを一番先に聞きつけたのは例の雌す狼であつた。そして消えかゝつた焰の圓周の中に取り圍まれてゐた人間から一番先に飛びのいたのも、同じく其の雌す狼であつた。狼の群は折角追ひつめた獲物を見放すのを殘念がつて、かの物音を確かめつゝ暫らくマゴマゴしてゐたが、それも矢張り雌す狼の跡を追うて飛び去つた。

群の先頭には、數個の首領中の一つなる大きな灰色の狼が走つてゐた。雌す狼の跡について全群を導いてゐるのが即ち彼であつた。又、群中の若者が生意氣にも彼を追ひ拔かうとすると、それをたしなめるように唸りつけたり、或は牙を以て嚙みつけたりするのが、即ち矢張り彼であつた。そして又、今は緩かに雲の中にダクを打つてゐる雌す狼を目當にして、急に其の歩みを早めたのも彼であつた。

雌すは彼れの脇に並び寄つて、丁度それを自分の極められた地位と思ふらしく、そ

して全群と足並を揃へてゐた。そして雌すが偶々彼より前に乘りだす事あつても、彼は唸りつけもせず、又齒を見せもしなかつた。否むしろ彼は雌すに對して頗る親切らしく見えてゐた。雌すに取つては親切すぎるほどに見えてゐた。彼は兎もすれば雌すに近く摺り寄り、そして餘り近く摺り寄つた時には、却つて雌すの方で唸つたり、齒を見せたりするのであつだ。時としては、雌すが鋭どく彼れの肩先を噛みやける事も無いではなかつた。彼はそういふ時、少しも怒る樣子がなかつた。彼は只だ脇の方に飛びのき、無樣な足取りで當惑らしく數歩前に駈けて行く者は、丁度田舍の若い衆のテレた身振に善く似てゐた。

彼としては。これが全軍の進行中に於ける只一つの難儀であつたが、雌すとしてはまだ外に難儀があつた。即ち彼女の後方には、幾多の戰鬪の傷あとだらけの、白髮まぢりの瘦せこけたそい狼が走つてゐた。彼はいつでも彼女の右側を走つてゐた。それは、彼れの目が一つしかなくて、其の一つが左の目であるからでもあらう。彼は又、絶えず雌すに黏寄つては其の方に顔を向け、傷あとだらけの其の口を彼女の體や肩や背に觸れるのであつた。すると彼女は、左り側の相手にしたと同じように、齒をむいては其の仕向を退けるのであつた。けれども兩方が同時にそういふ仕向をした場合には彼女は烈しく突きめくられるので、據んどころなく急に左右を噛みつけて、二個の情人を追ひのけ、そして同時に全群との足並を保ち、自分の前進する足元に注意するのであつた。そういふ場合、兩側の相手は各々齒をむきだして、威嚇的にいがみあふのであつた。彼等は戰ひもしかねたのであつたが、戀もそれの競爭も、一層切迫してゐる全群の饑饉の爲には、姑く時を待つのであつた。

斯ういふ追つ拂ひのある度毎に、老い狼が鋭どい牙いある其の性慾の目的物から慌てゝ離れると、彼はいつも其の目のない右側に走つてゐる、三歳の若狼とブッつかるのであつた。此の若狼は既に十分成長してゐて、全群の饑ゑ弱つた狀態からすると、普通以上の精力と元氣とを持つてゐた。それでも彼は、自分の頭を其の片目の先輩の肩に並んで走つてゐた。若し彼が全く老い狼と立ち並んで走らうとする時には（そんな事は稀であつたが）、彼は忽ち先輩の唸りと噛みつきとの爲に再び其の肩を並ぶ所まで追い返されるのであつた。然るに彼は折々、注意ぶかく且つおもむろにうしろの

方に退き、そして其の老いた首領と離す狼との間に割りこんだ。するとそれは、二重の怒り、甚だしきは三重の怒りを買つた。即ち離すが不機嫌の唸りを發すると、老いた首領が其の三歳の狼に喰つてかゝる。時としては、離すがそれと一緒に喰つてかゝる。又時としては、左側の若い首領も一緒に喰つてかゝるのであつた。

そういふ時、若狼は三組の恐ろしい齒に攻め立てられて絶對絶命に踏み止まり、尻を地に落して前足を堅く踏んばり、口を威嚇的に開き、首筋の毛を逆立てるのであつた。斯ういふ混雜が行進中の群の前方に起ると、後方にも必ず混雜が起つた。即ち後ろの狼共は其の若狼とブツつかるので、それの後ろ足や横腹に鋭どい齒がみを與へて、不快の感を表示した。食物の缺乏と短氣とはツキ物であるので、此の場合、彼は只だ自分の饑餓を積み重ねるのであつた。それでも彼は、常規を逸した年少の確信を以て、又しても執拗に其の作戰を繰返してゐた。勿論、それは失敗の外、何者をも彼れの爲に持ち來さないのであつたが。

若しこゝに食物があつたなら、戀事と戰鬪とがサッサと行はれて、群の組織は疾くにこわれてゐたであらう。然し群の境遇は絶對絶命であつた。群は今まで永續した饑餓の爲に衰へてゐた。其の走り方は平常の速力以下に落ちてゐた。後方には幼者と老者と、足弱の者共がビッコを引いてゐた。そして前方には一番丈夫な者共がゐた。けれども皆が、身體完備した狼と云ふよりは寧ろ骸骨のように見えてゐた。然しそれにも係らず、ビッコを引いてゐる者を除けば、彼等の運動は總て容易であり、疲れ知らずであつた。彼等の筋張つた筋肉は無盡藏なる精力の源泉と見えてゐた。一つの筋肉の鋼のような緊縮のうしろには、又一つの鋼のような緊縮があり、更に又一つ、又一つと、全く際限がないようであつた。

彼等は其日澤山の里數を走つた。其夜も走りつゞけた。そして其の翌日もまた走つてゐた。彼等は凍りつめた、死んだ世界の表面を走りまはつてゐた。一つの生命もうごめいてはゐなかつた。漠々たる不動狀態の間に只だ彼等のみ動いてゐた。生きてゐる者は只だ彼等ばかりであつた。そして彼等は、他の生きた物を求めて、それを食らうて自分の命を繋がうとするのであつた。

彼等は低い分水嶺を越えて、其の探求が酬いられる前に低地に於ける一ダスばかりの小い流れを渉つた。そこで彼等は大鹿の居るのに出會つた。彼等が初めて見つけたのは大きな一匹の牡鹿であつた。モウこゝには食物があり、生命があつた。そしてそれは不思議な火だの、焔の飛道具だのに依つて擁護されては居なかつた。外びらきのした蹄や、手のひらのように又のさした角は、よく心得てゐた。彼等は平生の忍耐と用心とを擲つてしまつた。簡單な猛烈な戰ひが起つた。其の大きな牡鹿は四方から取圍まれた。彼は其の大きな蹄の巧妙な打撃に依つて、狼共の肉を切り裂いたり、或は其の頭を割つたりした。彼は又その大きな角にかけて、狼共を叩きつけたり傷つけたりした。彼は又轉がりあひの戰闘に於いて、狼共を自分の體の下の雪の中に押しつけたりした。然し彼れの運は拙なかつた。彼は遂に其の喉を猛烈に食ひ裂いた彼の雌す狼と、及び其の全身の到る處に食ひついた他の多くの齒との爲に參つてしまつた。そして其の多くの齒は彼れの最後のモガキがまだ止まない中に、或は彼れの最後の負傷がまだ來ない前に、既に生きながら彼を貪ぼり食つてゐるのであつた。

これで食物が澤山になつた。牡鹿は八百ポンド以上の目方があつたので、四十幾疋の狼の群に對して一疋あて優に二十ポンドの肉があつた。然し彼等は不思議なほど絶食する事が出來る代り、亦た不思議なほど多食する事が出來る。それで間もなく、ツイ數時間前まで彼等と對戰してゐた、其の立派な生きた動物の名殘として、僅かばかりの骨がそこらに散らばつてゐた。

それから今度は多くの休息と睡眠とがあつた。胃袋がふくれて來ると若い雄す共の間に喧嘩やイサカイが始まつた。そしてそれが、群の解散するまでの數日間、繼續してゐた。饑饉は既に過ぎ去つた。狼等は今や獵場の國に來てゐるのであつた。彼等はまだ全群で獵をしてはゐたが、今までよりは用心して、出くわせる大鹿の小群の中から、身の重い牝鹿や、ビッコになつた年寄の牡鹿をはぐらかして、それを捕獲するのであつた。

然るに或日遂に、此の豐饒の土地に於いて、全群が二つに別れ、別々の方向に進む時が來た。かの雌す狼と、其の左にゐる若い首領と、又その右にゐる片目の先輩とは、群の半分を率ゐてマッケンジイ川のほとりに出で、更にそれを渉

つて東のかた湖水地方に進んだ。此の群の片われは更に日々その數を減じた。雄すと雌すと、二疋づゝ二疋づゝ、彼等は段々に逃亡した。時々には又、寂しそうな一疋の雄すが其の競爭者の鋭どい齒で追ひのけられてゐた。そして結局、かの雌す狼と、若い首領と、片目の先輩とそれから大望を持つた三歲狼と、此の四疋だけが殘つてゐた。

雌す狼は今や非常に獰猛な氣質を發揮してゐた。三疋の未婚者は皆な彼女の齒痕を留めてゐた。けれども彼等は決して噛み返すでもなく、又自分を防衞するでもなかつた。彼等は只だ彼女の最も殘酷な噛みつきに對して自分の肩を向けるばかりであつた。そして尾を振りつゝ、變な身振の足取をして、彼女の怒りをなだめる事に努めてゐた。然し彼等は彼女に對してこそは柔さしさ一方であつたが、彼等相互に對しては獰猛さ一方であつた。三歲狼は其の獰猛さがこうじて餘りに大望を持ちすぎた。彼は片目の先輩の見えない側に飛びついて、其の耳をズタズタに噛み裂いた。白毛まぢりの其の老い武者は、片側ばかりしか見えないけれども、敵の若さと力とに對抗して、多年の經驗から得た其の智慧を應用した。彼れの潰れた目と、疵だらけの鼻口とは、善く其の經驗の性質を證明してゐた。多くの戰場を經來つた彼として、此の場合、一瞬間たりとも躊躇する者ではなかつた。

戰鬪は公平に開始されたが、それは公平に終らなかつた。兩者の勝負がどうであつたらうかは見當もつかない。と云ふのは、第三の狼が先輩の方に加擔して、老いた首領と若い首領と、兩方が一緖になつて生意氣な三歲狼を攻擊し、而もそれを殺しに掛つたのであつた。卽ち彼は、ツイ先程まで仲間同志であつた者の殘忍な牙に依つて、兩側から攻め立てられた。彼等が共に獵を爲し、共に敵を仆し、共に饑饉に苦しんだ、共の昔しの日は忘れられてしまつた。それは既に過き去つた仕事であつた。今は眼前に戀の仕事があつた。それは食物の探求よりも一層嚴酷な、一層殘忍な仕事であつた。

そして其の間、此の戰鬪の總ての原因である所の雌す狼は、氣樂そうに尻を地におろして見物してゐた。彼女は寧ろそれを喜んでゐた。今こそ彼女の天下であつた。滅多には來ない彼女の時代であつた。雄す共の首毛が逆立ち、牙が牙とブツつかり、或は其の牙が敵の肉を食ひ裂き噛み切るのが、皆な只だ彼女を得んが爲であるのだ。

斯くて三歳狼は、初めての冒險を試みた此の戀の仕事に於いて、其の生命を落してしまつた。彼れの仆れた體の兩側には二疋の競爭者が立つてゐた。彼等は雌す狼の方を眺めてゐた。雌す狼はほゝゑみながら雪の中に坐つてゐた。所が、老いた首領は賢こかつた。戀に於いても戰ひに於いても、賢こかつた。若い首領は肩の傷を舐める爲に其の首を曲げた。其の曲げられた首筋が丁度競爭者の前に來た。老いた首領は片目で以て此の機會を見て取つた。彼は低く突進して、其の牙で食ひさがつた。それは長い裂傷を敵に與へた。固よりそれは深くもあつた。猶ほ彼れの齒は敵の咽喉の大動脈をも切り裂いた。そして彼はヒラリと飛びのいた。

若い首領は恐ろしく唸つたが、其の唸りは途中でむせるような咳に變つた。彼は其の痛手を負ひながら血に塗れ、咳をしつゝ、老いた首領に飛びかゝつて戰つたが、次第に精力が消耗して、足の踏みしめは弱り、目の光りは薄らぎ、攻撃も突進も段々こたへがなくなつて來た。

そして始終その間、雌す狼は尻を据えてほほゑんでゐた。彼女は何んとなく此の戰鬪を嬉しく思つてゐた。之が即ち曠地に於ける戀のすさびであつた。自然界に於ける性的の悲劇であつた。但しそれは死んだ者にだけの悲劇であつて、生き殘つた者に取つては、卽ち實に本願の成就であり、目的の獲得であつた。

若い首領が雪の中に倒れて最早や動きもしなくなつた時、片目は雌す狼の方にノソノソと歩み寄つた。彼れの態度は勝利と警戒とを混じた者であつた。彼は明かに拒絶を豫期してゐた。それで彼女が怒りの齒を彼に示さなかつた時、彼は亦た明かに驚いてゐた。彼女は今はじめて懷々らしく彼を遇した。彼女は彼と鼻を臭ぎあはせ、而も丸で小犬がするような樣子で、彼と共に跳ねまはつたり、ふざけちらしたりしてくれた。そして彼れ亦、其の老年と思慮深き經驗とに似げもなく、同じく小犬のように、或はそれよりもすこし馬鹿げた風に、ふざけちらしてゐた。

征服された競爭者の事も、雪の上に赤く書かれた戀物語も、今は既に忘れられてゐた。只一度、老した片目が硬ばつて來る傷を舐める爲に、暫らくのあいだ踏み止まつた。そして其時だけ、彼れの唇が半ば唸りを發し、首と肩との毛が我れ知らず逆立ち、膝は半ばかゞんで飛びかゝりの態度を示し、爪は堅い地盤を求めて、雪の上を痙攣的に摑み占めてゐ

た。然しそれも次の瞬間には全く忘れられて。彼は雌すの跡に飛び行き、雌すは又、媚を示して彼を誘ひつゝ、木立の闇を駈けて行つた。

それから後、彼等は打ち解けた仲善しの友達のように、ふたり並んだ走つてゐた。幾日たつても彼等は一緒にゐた。そして一緒に餌を取つては一緒に食つてゐた。暫くすると、雌すは何か不安な様子をしだした。何物かを探し求めて、それが見つからないといふ様子であつた。倒れた木の下のうつろなどが彼女の氣を引くらしかつた。彼女は又、岩の間の雪に埋もれた破れ目や、崖に蔽はれた洞穴の中を、永いあいだ嗅ぎまはつてゐた。老いた片目は一向そんな事に氣がつかなかつたが、それでも彼は氣の好ささうな顔をして、彼女の詮索のあとについて行つた。若し或る處で彼女の調査が非常に長引く場合には、彼はそこで横になつて、彼女が更に行かうとする時まで待つのであつた。

彼等は一つの場所に止まらないで、先から先にと其の地方を遍歴し、再びマッケンジイ川に立戻り、それを下つておもむろに進んで行つた。其の途中、幾度も幾度も、其の川に注ぐ小流れに沿うて、獲物を追うて行く事もあるが、いつでも又元の本流に立戻るのであつた。折々彼等は他の狼、大抵は一對の狼に出合ふ事があつた。けれども彼等は、どちらの側でも、親しみの意を示すでもなく、會つた事を喜ぶでもなく、元の群の組織に返らうといふ望みを持つでもなかつた。又幾度も彼等は孤獨な狼に出會つた。それらは大抵雄すで、しつこく片目と其の相手とにまつはつて來た。片目はそれを怒つた。そして雌すが彼と肩を並べて、毛を逆立て齒を現はすと、其の切なそうな孤獨な奴等が、跡しざりをして尻尾を向け、再び其の寂しい道を續けるのであつた。

或る月夜に、靜かな森の中を走つてゐた時、片目が不意に立ち止まつた。其の口は上に向き、其の尻尾は固くなり、其の鼻の穴は膨らんで頻りに空氣を嗅いでゐた。彼は又、丁度犬がするように、一つの足を持ちあげてゐた。彼は得心が行かないので、猶ほ頻りに空氣を嗅ぎつゞけ、其の中に籠められた消息を理解しようと努めてゐた。然るに彼れの相手は、ちよつと輕く鼻をピコつかせたばかりで滿足して、彼を安心させる爲にすッサと早足で進みだした。彼は彼女の跡についでは行つたが、それでもまだ不安心で、折々又立ち止まつては、一層注意深く其の臭ひの警告を吟味せずには

ゐられなかつた。

彼女は林の中にある大きな廣場のふちに用心しながら忍び出た。暫くは彼女ひとりでそこに立つてゐた。やがて片目も、忍びつゝ腹這ひつゝ、全身の感覺に油斷なく、全身の毛を無限の猜疑に放射して、彼女と一緒になつた。二たりは見張りつゝ、聞きつゝ、嗅ぎつゝ、並んで立つてゐた。

吠えあひイガみあふ犬共の聲、男共の喉音の叫び、女共の甲高な罵り、中に一度は子供のキイキイと訴へる泣聲などが、二たりの耳に聞えて來た。獸皮の小屋掛の幾つかの大きな棟の外には何も見える物はなく、只だ火焰が（時々諸物の運動に遮られて）見えるばかり、そして煙が靜かに空中に緩かに立登つてゐた。けれども二たりの鼻には、印度人のキャンプの無數の臭ひが聞えて、それが片目には大部分不可解なものばかりであつたが、雌す狼には其の事柄の詳細が明かに分つてゐた。

彼女は妙に心が動いて來て、愈々益々嬉しそうに、幾度も幾度も鼻をピコつかせてゐた。けれども片目は不安心であつた。彼は遂に疑惧の意を示して、試みに立去らうとした。彼女は振り向いて、大丈夫だよと保證するやうに、自分の口を彼れの首にさわらせた。そして再びキャンプを見つめてゐた。新らしいアコガレの色が彼女の顏に浮かんで來た。然しそれは饑のアコガレではなかつた。彼女は今そちらに向つて前進して、あの火のそばに近づき、犬共と喧嘩したり人間達の足元をよけてはヒラリト身をかはしたり、そんな事をして見たいといふ欲求に身を震はせてゐるのであつた。片目は彼女のそばでもどかしそうに身を動かした。彼女の不安が再び其の心に戻つて來た。彼女は再び、今まで探してゐた物を是非見つけねばならぬといふ急要を感じて來た。彼女は振り向いて森の中に歩み返つた。片目はそれで大安心をして、少し先に立つて歩みながら、漸く二たり木立の蔭に身を隱した。

彼等が月夜の中を、影のように音も立てずスルスルと歩いてゐる中、フト一つの通路に來あはせた。二たりの鼻は雪の中の足跡に向けられた。其の足跡は甚だ新らしかつた。片目は用心ぶかく前方に走りだした。相手の雌すも其あとに續いた。彼等の大きい足の裏は十分に廣げられて、其の雪ざわりはビロードのようであつた。片目は白い雪の眞中に何

かボンヤりした白い物の動くのを見つけた。彼れの滑るような歩み方は目立たないで如何にも速かだつたが、今まで走りだした其の速かさは又それとは比べ物にならなかつた。彼れの前には今見つけた白い小い幽かな物が飛び跳ねてゐた。

彼等は蝦夷松の若木で兩側を構はれた狹い小路を走つてゐた。其の小路の口が、月のさした向ふの廣場に開けてゐるのが、木立の間から見えてゐた。老いた片目は迅速に其の白い飛ぶ物に追ひつきつゝあつた。一飛び一飛びに彼はそれに近づいた。今いよ／＼追ひついた。今一飛びすれば、彼の齒は正にそれを嚙む所であつた。然るに其の一跳びをする暇がなかつた。空中に高く、而も眞直に、其の白い物は飛びあがつた。見るとそれは雪靴兎で、彼れの眞上の空中で飛んだり跳ねたり、不思議な踊りを演じつゝ、そして一度も地上には降りて來ないのであつた。

片目は飛びのいて不意の恐怖を其の鼻息に漏らし、身を縮めて雪の中にしやがみこみ、此のエタイの知れぬ恐ろしい物に對して威嚇の唸りを發した。然るに雌す狼は冷然として彼れの側を通りぬけた。彼女は暫らく身構へをしてゐたが、やがて其の踊つてゐる兎に向つて飛びついた。彼女も隨分高く飛びあがつたが、兎ほどには高く行かなかつた。そして彼女の齒は、一つの金物の狹みと一緒に、只だ空しく嚙みしめられた。彼女は更に飛びあがり、飛びあがりした。

片目はおもむろに其のシヤガミの姿勢を緩めて、彼女のする事を見守つてゐた。然るに彼は今、彼女の數回の失敗に對して不快の意を示し、自ら進んで猛烈な飛躍を試みた。彼れの齒は兎を嚙みしめた。そして自分の體と共にそれを地上に引きずつて來た。所が、それと同時に、彼れの傍らに何かメキメキといふ怪しい運動があつた。そして彼が驚いた目を見あげると、一本の蝦夷松の若木が彼れの上にこごみかゝつて彼を打たうとしてゐた。彼れの兩顎は其の獲物を放した。そして彼は此の不思議な危險を逃れる爲に後ろの方に飛びしさつた。彼れの唇は引上がつて牙を現はし、彼れの喉は唸りを發し、全身の毛は怒りと怖れとの爲に逆立つてゐた。そして其の時、若木は再び其の細い幹を直立させ、兎は再び空中に登つて踊つてゐた。

雌す狼は怒りだした。彼女は相手の遣り方を責めて其の肩に牙を入れた。片目は又、何の爲に此の新らしい襲撃を受けたかが分らないで、恐怖の餘り猛烈に彼女を嚙み返し、更に一層の恐怖の餘り、彼女の横面を嚙み裂いた。彼女は又、斯

ういふ譴責に對して彼れの怒るのが意外であつたので、憤慨の唸りを發して彼に飛びかゝつた。そこで彼は初めて自分の過ちを悟り、彼女をなだめようと試みた。けれども彼女はどこまでも彼を處罰しようとした。彼は遂に一切のなだめる事を思ひ止まり、只だ頭をそむけて彼女を避けつゝ圓周を畫き、肩を以て彼女の齒の處罰を受けてゐた。

其あいだに、兎は彼等の上で空中に跳つてゐた。雌す狼は雪の上に坐りこんだ。そして老いた片目は、今ではモウ不思議な若木よりも相手の方を餘計に恐れて、再び兎に向つて飛びついた。彼は齒の間に兎をくわえて地上に返つた時、其の目を若木に向けてゐた。若木は前の通り彼を追うて地上に俯向いてゐた、彼は其の襲ひかゝる打撃の下に、毛を逆立てながら身をしやがめてゐたが、其の齒は矢張り堅く兎をくわえてゐた。けれども打撃は來なかつた。若木は只だ彼れの上に俯向いてゐるばかりであつた。彼が動いた時、其の木も動いたので、彼は食ひしばつた兩顎の間から、其の木に對していがみつけた。然し彼がジットしてゐれば其の木もジットしてゐるで、彼はジットしてゐる事が安全だと結論した。それでも兎の暖かい血は彼れの口の中で旨かつた。

此の當惑の中から彼を救ひだしたのは、相手の雌す狼であつた。彼女は彼れの口から兎を取つた。そして若木が彼女の頭上で威嚇的にユサユサとしてゐるのに、彼女は悠々として兎の頭を食ひ切つた。すると、若木は忽ち刎ねあがつた。そしてそれきり何事もなく、自然がそれに與へてゐる其の行儀のよい垂直の姿勢を保つてゐた。

まだ外にも、兎の空中に懸つてゐる通路は幾つもあつた。狼の夫婦は悉くそれを探し廻つた。雌すが案内をすると、片目は柔順にそれに從ひ、ワナの獲物を盗む方法を學んだ。それは即ち彼に取つて、後に大いに役立つべき智識であつた。

二　洞穴の巣

二日の間、雌す狼と片目とは印度人のキャンプのあたりをうろついてゐた。片目は心配でもあり怖くもあつたが、雌すはキャンプに氣を引かれて、そこを立去るのが厭だつた。然し或朝、間近の空中に鐵砲の音が響いて、一つの彈丸が片目

の頭から四五インチばかりの處にある木の幹にブッつかつた時、彼等はもう躊躇せずに、大股走りでサッサと駈けい去し、間もなく自分等と其の危險との間に數マイルを隔てゝゐた。

彼等は餘り遠く行かず、ほんの二日ばかりの旅に過ぎなかつた。雌す狼が其の求めてゐる物を見つける事の必要が、今や切迫して來たのであつた。彼女はもう餘ほど身が重くなつて、ゆるゆると走る事しか出來なくなつた。或時、兎を追ひかけたが、平生ならば譯もなく捕へた筈であるのに、彼女はそれを見放して、横になつて休息した。片目がそこにやつて來たが、柔しげに其の口を彼女の首に當てた時、彼女は行きなり彼に噛みついた。其の遣り方が餘りに急で、餘りに猛烈であつたので、彼は其の齒を逃れようとする爲に、後ろに引くり返つて滑稽を演出した。彼女の氣短かさは今いよいよ募つて來た。然し彼は又、いよいよ辛抱づよく、いよいよまめやかになつて來た。

それから彼女は遂に求めてゐた物を見つけだした。それは小さい流れを四五マイルも登つた處で、其の流れは、夏の頃にはマッケンジイ川に注いでゐるのだが、今は岩の底までも凍りつめて、水源から川口まで全部が堅い白い死んだ流れであつた。雌す狼は相手の雄すを大ぶん先にやりすごして、獨り物憂げに歩んでゐた時、高い粘土の岸が、上から截ひかぶさつてゐるのに出くはした。春の雨風と雪解との爲に、其の岸の下の部分はゑぐり取られて、或る個所では、狹い裂け目の間に小い洞穴を作つてゐた。

彼女はその洞穴の口に止まり、仔細に其の壁を眺めた。それから右に左に其の壁の裾に沿うて、其の壁が稍や平らな川岸の風景の間に、突如として張り出してゐる處まで走つて見た。次に彼女は再び洞穴に歸つて、その狹い口をはいつて行つた。三フィート足らずの間、彼女はしやがんで歩かねばならなかつたが、それから先は壁が廣くもなり、高くもなつて、直經約六フイートの小さい丸い一室を成してゐた。天井は僅かに彼女の頭を離れる位であつたが、室内は善く乾いて居心地が好かつた。彼女は骨を折つて注意ぶかくそれを觀察してゐたが、其あいだ、跡戻つて來た片目は、入口の前に立つて辛抱づよく待つてゐた。彼女は頭を垂れて、自分の狹く踏み寄せた足元に近い地上の一點に鼻を向け、そして其の點のまはりを幾回もぐるぐると廻つた。それからサモ疲れたらしい殆んど脈の啼き聲のような溜息をして、體

を卷き、脚を縮め、そして頭を入口の方に向けて寢ころんだ。片目は尖つた耳に力を入れて、彼女に向つて笑ひかけた其の顏の向ふには、白い光りの中にクッキリと、彼れの總尾が氣の好さそうに搖れてゐるのが、彼女の目に見えてゐた。彼女は自身の耳は折り疊むように働いて、暫く其の尖先を後ろに向けて頭につけ、其の口は開き、其の舌はおだやかに垂れ、斯くて彼女は喜びと滿足とを表示してゐた。

片目はひもじくなつた。入口に横たはつて眠つてはゐたが、其の眠りは不定であつた。彼は絕えず目を覺まして、四月の太陽が雪の上に輝いてゐる、其の晴れやかな外の世界に對して、其の耳を突立ててゐた。彼がまどろむ時、隱れて流れる川の水の幽かな囁きが彼れの耳に忍びこんで來ると、彼は忽ち起きあがつて一心に耳を傾けるのであつた。太陽は既に返つてゐた。今ま目ざめつゝある北地の全世界が彼に向つて呼びかけてゐた。生命が動きつゝあつた。春の感じが空中に漲つてゐた。雪の下に萌えだす生命の感じ、樹木の中に登る樹液の感じ、霜のかすがひを破る若芽の感じもあつた。

彼は相手の雌すに對して自然つたそうな意見を送つたが、彼女は起きあがりそうにもしなかつた。彼は外を見わたすと、五六羽の雪鳥が眼界を横ぎつて飛び行つた。彼はハツトして起きあがらうとしたが、又相手の方を見返つた。そして又坐りこんで居眠つた。細い、小さい、銳どい歌ひ聲が彼れの耳に忍び入つた。一度、又二度、彼は眠むそうに手のひらで鼻をこすつた。次いで彼は目をさました。すると彼れの鼻の先に、わびしそうな蚊が一疋、ブンブンと鳴いてゐた。それは既に成熟した蚊で、冬のあいだ中、枯れた丸木の中に凍りついて、今やうやく太陽の爲に解かされて出たのであつた。彼はもう世界の招きを拒絕する事が出來なかつた。それに彼はひもじくもなつてゐた。

彼は相手の處まで這ひ寄つて、彼女に起きる事を勸めようと試みた。然るに彼女は只だ彼に唸りつけた。それで彼は獨り輝やく日光の下に步み出ると、雪の面は柔かになつて、それを踏むのが困難になつてゐた。彼は雪が木蔭になつて、まだ堅く結晶してゐる、其の凍つた川床を登つて行つた。八時間ばかり立つた後、彼は出發した時よりも一層空腹になつて、闇の中を戻つて來た。彼は獲物を見つけたけれども、取りそこなつたのであつた。彼は解けかゝつた雪の塊まりを踏

みぬいて其の中に落ちこみ、其の間に雪靴兎はいつもの身輕さでピョンピョンと逃げたのであつた。

彼は洞穴の口に立止まつて、急に不審のショックに打たれた。幽かな奇妙な聲が中から聞えてゐた。それは相手の雌すの聲ではないが、どこやら覺えのある聲ではあつた。彼は用心しつゝ中の方に這ひこむと、雌すの口から警告の唸りがやつて來た。それには別段驚きもしなかつたが、彼は素直に近づく事を遠慮した。然し彼は他の聲、――幽かな、吸り泣の含み聲、涎を垂らすような甘え聲に興味を持つてゐた。

雌すがイラだたしく彼を叱りとばすので、彼は又入口で丸くなつて寢た。朝になつて、薄明りが其の巣にさした時、彼は再び其の、どこやら覺えのある聲の源を探らうとした。すると、雌すの警告の唸りに新らしい響きがあつた。それは猜忌の響きであつた。それで彼は十分注意して表散的距離を保つてゐた。それでも彼は遂に、彼女の足の間に、蔽はれ、其の全身に沿うて、五つの不思議な生命の小袋が、かよわい、たよりない樣をして、目もあかないで細い泣聲を出してゐるのを發見した。彼は驚いてゐた。彼れの永い成功の生涯に、此の事の起つたのは初めてではなかつた。幾度も幾度も起つてゐた。けれどもそれが彼に取つては、其の度每にいつも新らしい驚きであつた。

雌すは氣遣はしそうに彼を眺めてゐた。そして殆んど絕間なく低い唸り聲を出し、若し彼が近く寄り過ぎたと見る度每には、其の唸りが烈しいイガミ聲となつて爆發した。彼女自身の經驗の中には、そういふ事の起つた記憶は無いのだけれども、彼女の本能、それは卽ち昔しからの有らゆる狼の母の經驗であるのだが、其の本能の中に、父親が生れたこの、かよわい子供を食つてしまつたといふ記憶が潛んでゐた。其の本能が彼女の體內に强い恐怖となつて現はれ、其の恐怖が彼女をして、片目に自分の產ませた子供をよく見る事を許させなかつたのである。

然しそれに何の危險もなかつた。老いた片目も或る衝動の迫つて來るのを感じてゐたそれは矢張り、昔しからの有らゆる狼の父から彼に傳はつた本能であつた。彼はそれに對して疑問をも持たず、又それを辨解しようともしなかつた。それは只だ彼れの體內の纖維の中に存してゐた。彼は只それに從つて、生れたての自分の家族に脊を向け、生活の爲に肉の跡を追うて出て行くのが、最も自然な事であつた。

巣から五六マイルの所で川が二つに分れ、直角になつた二股が山の中に入りこんでゐた。そこで彼は左の股を登つてゐる一つの新らしい足跡に出くわした。彼はそれを嗅いで、ツイ今の先きつけられたのである事を見て、忽ち身構へをして其の足跡の行く先を見やつた。然し彼は又分別らしく向き直つて、右の股の方に進んで行つた。彼は其の足跡が自分のよりゃ遙かに大きいのを見て、そういふ道に自分の食物のない事を知つたのであつた。

右の股を半マイルばかり登つた所で、彼れの早耳が或る歯の軋る音を聞きつけた。彼は其の獲物を探して、それが山あらしである事を發見した。山あらしは木の幹につかまつて眞直に立ち、其の皮をがじつてゐるのであつた。片目は用心しつゝそれに近づいた。然しそれに望みはなかつた。彼は此の北地で、まだ山あらしに出會つた事はなかつたけれども、それの性質は知つてゐた。彼れの長い生涯に於いて、山あらしが自分の食物になつた事は無いのであつた。然し彼は又、意外の場合、若しくば思ひがけない場合のある事を、疾くにから心得てゐたので、矢張り其の敵に近づいた。けれども、これがどんな事になるのか、少しも見當がつかなかつた。生き物を相手にした時は、大抵いつも變つた事が起つて來るのだから。

山あらしは丸い玉になつてしまつた。そして長い尖つた針を八方に放射して、寄りつく事も出來なかつた。片目は若い時に一度、これと同じような、外見上活力のないトゲの玉を餘り近よつて嗅いだ爲に、其の尻尾で不意に顔をはたかれた事があつた。其時、一本のトゲは彼れの唇に刺さつて、幾週間もそこに止まり、ズキズキと痛みつづけた末、やつと拔けでたのであつた。それで彼は樂な姿勢で腹這ひになり、鼻をタツプリ一フイートばかりも離して、尻尾の屆く距離を避けた。斯くて彼は只ジツトして待つてゐた。何んの手答へもなかつた。何か變化がありそうなものだつた。山あらしが體を延ばしそうにも思へた。其の柔らかな、防禦のない腹部に、巧みに前足を突込んで引掻いてやる機會もありそうに思へた。

然し半時間もたつて後、彼は立ちあがつた。そして其の不動の玉に向つて腹立たしそうな唸りを與へて歩み去つた。彼は過去に於いて、山あらしが體を延ばすのを待つて馬鹿を見た事が餘りに屢々あるので、此のうへ時間を費す氣に

れなかつた。彼は右股の川を登りつづけた。其の日は徒らにたけて、まだ何んの獲物もなかつた。

彼れの中に目ざめた女性の本能が强く彼に迫つて來た。彼は食物を見出さねばならなかつた。午後になつて彼はタルミガン(といふ山鶏)に出くわした。彼が或る藪から出ると、直ぐ目の前に其の遲鈍な鳥がゐた。それは丸太の上に止まつて、彼れの鼻の先から一フイートとは離れてゐなかつた。互に顔を見合せた。鳥はビツクリして飛び立つたが、彼はそれを前足で打つて、地の上に叩き落した。そして鳥が再び空中に飛ばうとして雪の上をチヨコチヨコト走る所を、直ぐに飛びついてくわえてしまつた。彼れの齒が其の柔らかい肉と脆い骨とを噛んだ時、彼は自然にそれを食ひはじめた。然し彼は思ひだした。そしてタルミギンをくわえたまゝ、元の道に引返して家路に向つた。

川股から一マイルばかり上で、いつもの通りビロード足で走りつゝ、雪道の見通しに成る處には用心ぶかく檢分をして丸で滑つてゐる影のようであつたが、彼はフト、今朝早く見つけたアノ大きな足跡が、其の後ち新らしくつけられてゐるのに出會つた。彼は其の足跡の導くまゝに進みつゝ、川の曲り角に成る處には、其の足跡の主に出會ふ用意をしてゐた。

川が非常な大曲りになりかけてゐる處で、彼は一つの岩角を廻つてソツト其の頭を出した。すると彼れの鋭どい目が直ぐに何物かを見つけて、すばやく彼をそこにしやがませた。それは卽ち足跡の主なる、大きな山猫の雌すであつた。彼女は彼が其日の朝しやがんでゐたようにしやがんでゐた。其の前には堅く卷かれたトゲの玉があつた。若し彼が先程まで滑つてゐる影であつたとするなら、今はそうした影の幽靈のように、其の沈默不動の一對の隣をソーツと廻つて、風下の方まで來ついた。

彼は雪の中に腹這ひ、タルミギンを傍らに置き、そして下た生えの蝦夷松の葉ごしに覗きながら、待つ山猫と、待つ山あらしと、各々一心に生を求めてゐる。其の眼前の生の活劇を見守つてゐた。一方の生の道は他を食ふ事に在り、一方の生の道は他に食はれない事に在るといふ。そこに此の勝負の面白味があつた。それに又、老いた片目の狼が、叢の中にしやがみながら、これも矢張り勝負の數に加はり、何かの拍子が自分の肉の求めを助けまいものでもないと待つて

ゐるのも同じく彼れの生の道であつた。

半時間、一時間過ぎた。そして何事も起らなかつた。トゲの玉は、よしんば幾ら動くにしても、丸で石であつた。山猫は丸で大理石に凝り固まつてゐた。そして老いた片目は丸で死んでゐた。而も此の三つの動物は、齊しく皆、痛ましいほどの生の緊張に縛られてゐた。そして今の此の外見上の化石狀態より、それより以上の活氣を持つ時は、恐らく遂に來ないであらう。

片目は幽かに身動きをして、一層の熱心を以て覗きこんだ。何事かゞ起りかけてゐた。山あらしは遂に敵が去つたものと斷定した。彼はそろそろと、用心ぶかく、其の難攻不落の鎧の玉をほぐしはじめた。彼は少しも豫感の震へに煩はされてゐなかた。そろそろそろそろと、其のとげだつた玉が緩んで延びた。それを見てゐた片目は、今ま目の前に自ら御馳走を並べてゐる、其の生きた肉に刺激されて、不意に口中が濕ひ、そして覺えず涎がダラダラと流れるのを感じた。

山あらしはまだ十分身をほぐさない中に、其の敵を發見した。其の瞬間に山猫が打撃を與へた。其の打撃は閃光の如くであつた。手鍵のように曲つた强い爪のある前足が、柔らかな腹部に突入して、そして敏捷な引掻き運動を以つて元に戻つた。若し山あらしが十分にほぐれてゐたならば或は若し彼が其の打撃の、一秒の何分の一か前に敵を發見しなかつたならば、山猫の前足は少しも傷つかずに免かれたであらう。然るに其の前足が引込む時、山あらしの尻尾の横ばたきが、銳どいトゲをそれに打込んだ。

何もかも一時に起つたのであつた。擊ち込も、擊ち返しも、山あらしの苦悶の悲鳴も、大猫が不意の痛手と驚きとに發した絶叫も。片目は昂奮して半ば起きあがつた。其の耳は立ち、其の尾は午蒡になつて後ろに震へてゐた。山猫の癇癪は自分の目を晦ました。彼女は自分を傷つけた物に對して無茶苦茶に飛びかゝつた。然るに山あらしは、泣き且つ唸りながら、又その引き裂かれた體を丸めて、力なさげに球狀防衛を作らうとしながら、それでも再び尻尾のハタキをやつた。そして大猫が再び痛手と驚きとで絶叫を發した。それで彼女はもう後ろに引きさがり、その鼻には大きな針さ

しのようにトゲが一パイ刺さつて、其の毒矢を抜かうとして、鼻を前足でこすり、雪の中に突き込み、又藪や枝にこすりつけた。そして始終その間、痛みと恐れとに氣が顚動して、或は上に、或は横に、或は眞逆樣に、刎ねまはつてゐた。

彼女は絶えずクシヤミをしてゐた。そして其の短い尻尾の株に迅速な激動を與へて、一生懸命に尾ではたきまはす眞似をしてゐた。次に彼女は其の道化をやめて、稍しばらくジツトしてゐた。片目はそれを見守つてゐた。然るに彼女が又突然、何の先ぶれもなく、眞直に空中に跳りあがり、同時に最も恐ろしい長い悲鳴を發した時には、片目もギヨツトして、覺えず脊筋の毛を逆立てずにゐられなかつた。それから彼女は雪路を登つて、一歩毎に悲鳴を擧げつゝ走り去つた。

山猫の騷ぎが遠方に消え去つたところで、片目が漸く乘り出だした。彼は、そこら中の雪が山あらしのトゲで敷きつめられ、而もそれが直立して彼れの柔かな足の裏を今にも突き刺すかのように、ビクビクもので歩んでゐた。山あらしは恐ろしい泣き叫びと、長い齒のかち合はせとを以て、狼に出で會うた。彼は再び體を卷いて玉になつてゐたが、それはもう迚も元のような堅い玉ではなかつた。そうなるには、彼れの筋肉が餘りに多く千切れてゐた。彼は殆んど眞二つに裂かれてゐた。そしてまだ夥たしく出血してゐた。

片目は血に染まつた雪を幾口も食ひ取つて、それを嚙んで味はつて飮みこんだ。これが味付けになつて、彼れの饑は恐ろしく增大した。けれども彼は自分の用心を忘れるには、餘りに世故に長けてゐた。彼は待つてゐた。腹這ひになつて待つてゐた。其の間に山あらしは、齒をギシギシ云はせたり、唸つたり、うめいたり、折々は又、小い金切聲で叫んだりしてゐた。暫くすると、トゲが萎れだして、大きな身震ひが起るのを片目は見た。其の身震ひが突然やんだ。そして長い齒の最後の無念の軋りがあつた。するとモウ、總てのトゲが全く折れ伏し、體は緩んで動かなくなつてしまつた。

おづおづした前足で、片目は山あらしの全身を延ばし、それを仰向に引くり返した。何事もなかつた。それは確かに

死んでゐた。彼は暫く一心にそれを檢分してゐた。それから歯でそれを確かりくわえて、半ばは提げ、半ばは引きずりつゝ、其のトゲのある體を踏まないように自分の頭を脇に向けて、川を下つて歩きだした。彼はフト何か思ひだして、其の荷物をおろし、タルミガンを置いて來た處に立ち戻つた。彼は少しも躊躇しなかつた。彼は明かに爲すべき事を知つてゐた。即ち彼は直ちにタルミガンを食つて、其の爲すべき事を爲した。それから彼は元の處に來て其の荷物を取りあげた。

彼が其日の獵の獲物を洞穴に引きずつて來た時、雌す狼はそれを檢分して、それから口を彼に向けて、輕く彼れの首を嘗めた。然し其の次の瞬間には、彼女は又唸りの警告を以て、子供から彼を遠ざけた。但し其の唸りはいつもほど烈しくなく、威嚇的と云ふよりは寧ろ辨明的であつた。子供の父に對する彼女の本能的恐怖が薄らぎつゝあつたのである。彼は又、狼の父としての當然の行ひを爲し、雌すが此の世に持ち來たした若き生命を食ふといふ、そんな不神聖な欲望を現出しないのであつた。（つづく）



無生物との對坐

賀川豊彦

靜かに──靜かに、靜かに爲て居なさいよ、私よ、私の魂よ、それ何者かゞ胸の底から囁やいて居るぢやありませんか、強くあれ、そして優しくあれとね！

靜かに──靜かにして居なさいよ、私よ私の魂よ──きちんと座つて居らしやい、膝をも崩さ無いでね、お友達の宅の茶室の爐に赤い火が燃えて居る。湯も鐵瓶に吹いて居る。褐色の壁も沈默して居るよ、天井の杉の木目が數へられる。疊の葦の數をも算へよう。靜かに、靜かに、魂を落付けて私の魂はきちんと私のある可き處に坐る。

混亂の中に暴漢がおまへを擲りに來てもおまへは氣を取り亂さなかつた。私の魂よ、おまへは靜かに、靜かに氣を落ちつけて、時代の行衛を凝視して居るのだよ、靜かな靈よ、私の魂よ、おまへは息を凝らして實在の奥の院に氣を通はせて居れ！

そうだ、颶風を越え、颶風を越え、凡ての嵐を越えて、おまへは猶靜かさを破るなよ。刀も、ピストルもダイナマイトも暗殺も凡て之等の企みはおまへの平靜を破るにはあまりに子供らしいことだ。

人はおまへの悪口を云ふ。おまへは憎れ子だ。然しおまへはそれでもおまへが貧民窟で出會つた混迷に打勝つて來たその靜けさを破つてはならないぞ。そうだ、

晩の十二時頃、一時頃、凡ての人が寢靜つた後、おまへは一人、長屋の上に出て居る月と物語るではないか。月は一言だつてものを云つたことが無いが、おまへも一言だつて、月に云ふことは無い。然し、あの白い月の面が輝きしておまへに微笑む時に、おまへは沈默を通じての物語をして居るでは無いか。

貧民窟に、ホテルに、お友達の茶室に、散步に、汽車に、電車に乘つて居る時――凡ての時に少しでも心の靜けさを破らずに居れるね。人は隨分あなたを困らすね、或は蹈みつけるようなことを云ふてね、また或時は羂にかけて引倒すこともあるね、夜寢る時だつて、全く氣を許して寢ると云ふことは出來ないのだね、隨分苦勞をして、人に盡して、それでまだ僞善者だと罵られ、馬鹿だと侮られ、虫けらのようにけなされるね。然し罵られて罵り返す勇氣も持たず蹴られて蹴る力もなく、擲られ蔑すまれて、それに仕返しする氣力も無いのだね。いやそれらは凡て、あなたが、神と結ばれた今の心の平靜を破らぬ爲めには必要なことだからね。

火が天から降つて來ても、氷の山が頭の上から落ちて來ても、今のおまへの平靜は破れ無いね。

火が燃え立つよ、足の下から、魔性の妖怪が天空を飛ぶよ、血生臭い鋒先がおまへの鼻先に見えるよ、「革命だ」「革命だ」と凡ての人が叫んで居るよ、おまへは首を刎ねられる第一人者だとさ！それユダも來た、ブルタスも來た！凡ての怪性に立ち勝るルシファも來た。總掛りで、おまへの心の擾亂を望んで居る。然し、凡ては無効だ。私の魂よ、おまへの心の結氷は神をそもの上を通過せしめ得る程堅いのだ。

あゝ、平靜よ、平靜よ、私の心の奥の平靜よ、擾亂に、流血に、革命に、脅迫に、痛罵に、逆境に、嘗て亂さ無かつた平靜よ、蠶が糸を吐く前に透明になるように、おまへは板ガラスのように平靜である。

長屋の破れ板戸の色彩の調和、友人の宅の茶室の中に置かれた蜜柑の色と、菓子鉢の色合ひ、靜かに、靜かにして居る時にそれらの色は凡て跳り出て、私の胸

底深く潜つて行く。

凡ての無生物は平靜に慣らされた私に對しては無生の生である。私は凡ての無生物に、解放せられたものの聲を聞く。私は人間全部に捨てられても、無生物の間に友達は充分ある。

友達よ、訪門客よ、みんなあつちへ行つてくれ、私は之から紙と、机と、海綿と、インキ壺に話するのだ。おゝ、あらゆる無生物よ、私はおまへに似て靜かに實花を楽しむ癖がある。それが美いことか、悪いことか尋ね無いでおいてくれ、兎に角それは天地開闢以來續いて居る無生物の實在の悦びを味ふことなのだ。それで私は辻に立つて説法をして居る時にも、電柱が私の變りに叫んで居てくれるのでは無いかと心强いのだ。それはまた講壇に立つて幾千人を前にして獅々吼して居る時にもそうなのだ。私が叫ぶ前に柱と床と座蒲團が先づ叫んでくれて居るのでは無いか！『我叫ばずば石叫ぶべし』とナザレ村の大工も云ふたことがあるが無生の世界に友人を持つものには、石の叫ぶことを聞くことはあまり珍らしくもない。

靜かに、靜かに——靜かになさいよ、私の魂よ、あれ、石が叫んで居ますよ、

あなたが無理をして叫ば無くとも、石も蜜柑も鉢もみな叫んでくれますから、あなたは靜かに、そこに聞いて居らつしやい。

そら、爆音が聞こえるでしよう。内なる魂に、凡ての無生物が作用して居るのです。

靜かに、靜かに、あなたはどんなに世界が混亂して赤い旗や黒い旗が空中に飛び廻つても、決してその平靜を破つちやいきませぬよ。昔エリヤは嵐の中でも無く、地震の中にでもなく、平靜の中に神を發見したと云ふぢやありませんか！

地震も揺りましよう、嵐も吹きましよう。百千遍の革命も打續くかも知れませぬ。然し神を見る人は、靜平にね——靜かに、靜かに、嵐を越えて、魂の目を据えて、内なる神を凝視して下さい。混亂を越え、亂闘を越えて、私は靜かに無生物と對坐する。



オォプン・フォラム

厨川白村

すべての事が公開的に民衆的に社會的に、また自由解放の精神を尊重して、行はれるべき今の代に、是等の精神とは全く相反した色々の現象が、なほ前代の遺物として到る所に殘存してゐる。改む可きを知りつつも猶ほ舊慣に絆されて改めざるもあればまた改むべきをさへ知らず覺らずして改めざる者も甚だ多い。わが日本のごとき後進國に於ては殊にさうだ。

民衆文化の向上のために、學校以外の社會教育が大切である事は今さら云ふまでもないが、その社會に生きる各個人がお互に接觸し、お互に意見を交換し合つて、人が人を教育すると云ふ機會が、今の日本などでは甚だしく乏しいと思ふ。一例を云へばわが國では大都會に於てすら、俱樂部は少しも發達しないで、それは唯だ玉突とか食事のためとか、乃至、會員の應接所に用ひられてゐる位に過ぎない。軍人も實業家も學者も政治家も官吏も、平素は業務の上に於て互に接觸すゝ機會の少いさう云ふ異つた方面の人たちが一堂に相會し、胸襟を披いて打寛ろいだ談笑の間に、意見や智識を交換するやうな機關は少しも發達して居ない。親しい間柄の人たちが、私利私情を離れて、時務を論じ合ひ、果ては

満面朱を濺ぎ口角泡を飛ばして激論しながらも、あとは睦まじい握手を交はして別れると云つたやうな現象は滅多に見られない。いやに勿體ぶつた東洋流の威儀三千禮儀八百によつて、空疎な辭令をのみ交換し、談論を以て書生流の児戯に過ぎずと見る悪習は、今日にして猶ほ改まらない。たま〱他人と對坐すれば、盗むが如く探るが如き眼付きをして相手の顔をさへも直視せずして、先づ伏目がちにひとの胸のあたりを見てゐると云つた風だ。收賄の相談や錢儲けの打合せならば、待合の奥座敷ででも出來よう。しかし思想を論じ政治文藝を談ずる倶樂部は、事實上日本には存在して居ないと云つて可い。學校や讀書によるほかは、社交界に出て識見を養ひ智識を啓發する機會は極めて僅かだ。言論を重んぜず思想を貴ばざる日本人一流の秘密墻壁主義、駈引萬能主義が根底に於て破壊せられざる限り、社交の進歩は政界の刷新と共に、或は望み難い事かも知れない。

しかし私が今こゝに述べたいと思ふのは、倶樂部のやうな社交機關に就てではない。もつと廣い意味での民衆的社會的教育機關とも云ふべき講演會に就てである。

すべての事が民衆本位に行はれようとする傾向の著るしい昨今の時勢に、講演會の流行するのは當然の現象である。三百五百の小集會から、二千三千の聽衆を集める大會合に至るまで、都鄙各地に於て、今では一種の流行物だと見られる位である。善い意味にも惡い意味にも世界で最も多く民衆的な米國が、最も多く講演の流行する國で、あの國では講演はさながら一種の興業物のごとくに取扱はれ、日本の芝居に於ける松竹合名會社と云つたやうな講演會社の存在をすら見るに至つたのは、全く民衆的氣分の所産である。各國の名ある詩人や作家批評家などが遠く海を越えて、柄にもなく筆の代りに口舌を以て出稼ぎをやり、役者の巡業や旅興行のやうな藝當をやるのは米國に於てである。タゴオアやマアテルリングのやうに此巡業に失敗した人も尠くないが、またあの殺風景な國を駈けずり廻はつて詩嚢を輕くした代

りには、うんと貯蓄を重くして故國に歸る人も多い事であらう。最近には英國文壇切つての皮肉專界の名人チエスタトンが、紐育あたりで彼れ一流の警句と奇想天外から墜ちるやうなパラドックスを、新聞雜誌ではなしに、講壇の上から連發し服覺してゐる。かれが先頃紐育での第一回の講演にも『教育ある者の無智』The Ignorance of the Educatedなどといふ奇拔な演題を掲げて、盛にヤンキイを喜ばしてゐる摸様を、わたくしは近着の外國雜誌で讀んで又かと思つた。

開話休題。わたくしは今日普通に行はれてゐる講演會の方法が、民衆的氣分から考へても、社會教育の手段として見ても、甚だしく不適當なものだと思ふ。もとより會の性質によつても異り、また講演者聽講者の種類によつても違ふではあらうが、近頃行はれる公開論壇 Open Forum の方法のごときは、たしかに一種の改良策として指示せらる可きものだと思ふ。

講演者が聽衆の坐席よりも一段高い所に突立つて、勝手な事を喋舌つてゐる。それを大勢の人たちが默々として謹聽してゐる(もとより婦女は別だが)。さう云ふ光景は、學校の講堂でならばいざ知らず、自由公開の民衆的な講演會には甚だふさはしからざる者だと思ふ。演壇の高所から聽衆を瞰下して、なかには隨分無責任な誤魔化しのお粗末千萬な言議を儼然として吹き立ててゐる。あの光景を見ると、私はそぞろに專制治下の民を想ひ、自由な民衆氣分と餘りに縁の遠い者であることを遺憾なりとせざるを得ない。

フオラムは言ふまでもなく古代羅馬の市に設けられた中央公會議場である。そのころ世界の中心地であつた七丘の大都城にキヤピトリヌの丘の麓からパラテイヌの東北にわたれる一大公會場 forum magnum があつた。そこには市民が集まつて政治法律その他の公事を議した。今日の言葉で演壇を rostrum といふのも、このフオラムに於ける名稱で

滿面朱を濺ぎ口角泡を飛ばして激論しながらも、あとは睦まじい握手を交はして別れると云つたやうな現象は滅多に見られない。いやに勿體ぶつた東洋流の威儀三千禮儀八百によつて、空疎な辭令をのみ交換し、談論を以て書生ッポの兒戲に過ぎずと見る惡習は、今日にして猶ほ改まらない。たま〳〵他人と對坐すれば、盜むが如く探るが如き眼付きをして相手の顏をさへも直視せずして、先づ伏目がちにひとの胸のあたりを見てゐると云つた風だ。收賄の相談や錢儲けの打合せならば、待合の奧座敷ででも出來よう。しかし思想を論じ政治文藝を談ずる倶樂部は、事實上日本には存在して居ないと云つて可い。學校や讀書によるほかは、社交界に出て識見を養ひ智識を啓發する機會は極めて僅かだ。言論を重んぜず思想を貴ばざる日本人一流の秘密墻壁主義、駈引萬能主義が根底に於て破壞せられざる限り、社交の進歩は政界の刷新と共に、或は望み難い事かも知れない。

しかし私が今こゝに述べたいと思ふのは、倶樂部のやうな社交機關に就てではない。もつと廣い意味での民衆的社會的教育機關とも云ふべき講演會に就てである。

すべての事が民衆本位に行はれようとする傾向の著るしい昨今の時勢に、講演會の流行するのは當然の現象である。三百五百の小集會から、二千三千の聽衆を集める大會合に至るまで、都鄙各地に於て、今では一種の流行物だと見られる位である。善い意味にも惡い意味にも世界で最も多く民衆的な米國が、最も多く講演の流行する國で、あの國では講演はさながら一種の興業物のごとくに取扱はれ、日本の芝居に於ける松竹合名會社と云つたやうな講演會社の存在をすら見るに至つたのは、全く民衆的氣分の所産である。各國の名ある詩人や作家批評家などが遠く海を越えて、柄にもなく筆の代りに口舌を以て出稼ぎをやり、役者の巡業や旅興行のやうな藝當をやるのは米國に於てである。タゴオアやマアテルリングのやうに此巡業に失敗した人も尠くないが、またあの殺風景な國を駈けずり廻はつて詩嚢を輕くした代

りには、うんと貯金を蓄くして故國に歸る人も多い事であらう。最近には英國文壇切つての皮肉諷界の名人チェスタトンが、敎育あたりで彼れ一流の警句と奇想天外から墜ちるやうなパラドックスを、新聞雜誌ではなしに、講壇の上から連發し廣宣してゐる。かれが先輩敎育での第一回の講演にも『敎育ある者の無智』The Ignorance of the Educatedなどといふ奇抜な演題を揭げて、盛にヤンキイを喜ばしてゐる模樣を、わたくしは近着の外國雜誌で讀んで又かと思つた。

閑話休題。わたくしは今日普通に行はれてゐる講演會の方法が、民衆的氣分から考へても、社會敎育の手段として見ても、甚だしく不適當なものだと思ふ。もとより會の性質によつても異り、また講演者聽講者の種類によつても違ふではあらうが、近頃行はれる公開論壇 Open Forum の方法のごときは、たしかに一種の改良策として指示せらる可きものだと思ふ。

講演者が聽衆の坐席よりも一段高い所に突立つて、勝手な事を喋舌つてゐる。それを大勢の人たちが默々として謹聽してゐる（もとより婦女は別だが）。さう云ふ光景は、學校の講堂でならばいざ知らず、自由公開の民衆的な講演會には甚だふさはしからざる者だと思ふ。演壇の高所から聽衆を瞰下して、なかには隨分無責任な誤魔化しのお粗末千萬な言說を儼然として吹き立ててゐる。あの光景を見ると、私はそゞろに專制治下の民を想ひ、自由な民衆氣分と餘りに緣の遠い者であることを遺憾なりとせざるを得ない。

フオラムは言ふまでもなく古代羅馬の市に設けられた中央公會議場である。そのころ世界の中心地であつた七丘の大都城にキャピトリヌの丘の麓からパラティヌの東北にわたれる一大公會場 forum magnum があつた。そこには市民が集まつて政治法律その他の公事を議した。今日の言葉で演壇を rostrum といふのも、このフオラムに於ける名稱

あつた。のちには此公開議場がいくつも設けられ、小フォラムは羅馬の市だけに十九ケ所も出來たさうだ、しかし今日いふ所のオオプン、フォラムは固より羅馬のそれと何の關係があるではなく、講演會の新しき樣式として、今特に米國で盛に行はれてゐる方法に名づけた名稱である。

オオプン、フォラムでは講演が了つてのちに、聽衆がその講演に就て自席から質問を發する。講演者は壇上から之に解答を與へる。講演後少くとも三十分位の時間は之が爲に割かれる事になつてゐる。また單に質問のみならず、聽衆中の希望者は、その講演の題目の範圍に於て三分演說五分演說をする事によつて自說を述べ聽講後の所感を語る機會を與へられるのである。かの講演後に講師が別室に退いてから、少數の有志者のみが講師を取圍んで問答すると云ふが如きは、今日普通の講演會で行はれる所であるが、それは聽衆全體の面前で皆が聞いてゐる問答でないだけに、功果は甚だ乏しい感がある。

かくの如きオオプン、フォラムは、必ずしも私が今さら事々しく述べ立てる程の珍らしい方法ではないかも知れない。しかも夫れは社會的民衆的教養の機關として、また思想言論の自由を尊重せる點に於て、普通の講演會よりも遙かにすぐれた者であると思ふ。

先づ聽衆の側から云ふと、自分たちが質問を提出し得る機會を持つと云ふ心持で聽くならば、おのづから多く注意も集注せられ、更にまた他の言說を批判的に批評論に受け入れる事も出來る。聽者の心持が在來のやうに純然たる受動的(パッシイブ)のものでなくて能動的(アクティブ)である。御無理御尤もに、所謂知名の士とやらの言を、默々として神の託宣をでも聽く如くに聽くのとは、最初から心の狀態を異にしてゐるからだ。また其質問や五分間演說も、それが衆人環視の中で行はれるとすれば、聽者はおのづからそこに批判と考量をかさねて、自尊自重の態度に出づるであらう。亂暴で無責任な彌次馬式の

發言なぞは、少くとも或程度に於て差控へられるのではなからうか。(しかし聞く所によれば、某文明國の議會に於ては、蟬噪蛙鳴その極に達して遂に動物園の如き奇觀を呈するさうだが、私の狹き見聞の範圍内に就て云へば、今日日本の普通の講演會の聽衆は、某國の田舍議員ほどには不作法な低級な者ではないと信じてゐる)。

壇上の言論を單に默聽してゐると云ふ事それ自らが既に、今の時勢から云へば、時代錯誤の autocratic な者である。のみならず普通の講演會では、講演者と聽衆との間に何等の連絡がない。從つて他人が勝手な事を喋舌つてゐるのを、唯だ其場かぎりに聞き流がして濟ますと云つた感がある。その講演によつて受ける感銘も印象も、極めて淺く極めて弱からざるを得ないではないか。

更に之を講演者の方から見るならば、聽衆が果して自己の言說を正しく理解したのか否か、主要の論點を逸して單に枝葉の部分をのみ受け入れたのではないか、或は自分の議論になほどこか不備の點があるのではないか。さう云ふ色々の事が、在來の舊式な講演會では講演者みづからに解らないで、多少不安危惧の念なきを得ない場合がある。また講演の後にさう云ふ質問者や、或は坐席(フローア)からの辯士が出る者だとすれば、世に所謂名士とか大家とか云ふ者が大きな顏をして、出鱈目な無責任な言說を弄することをも、或る程度までは妨止し得られるであらう。最初演者と題目との廣告を見て集まる聽衆のなかには、同種の問題に就て相當の研究をしてゐる人が必ずあるに相違ないと思へば、如何に無責任なる講演屋演說使ひと雖も、多少は自分の演說の內容に意を用ゆるのは自然の結果である。講演後に別室に退いてからの個人としての質問などは、たとひ其質問者が如何に熱心と誠意とを以てすればとて、老獪なる三寸の舌頭に丸められて、滿足な答辯を求め得られない場合が稀ではないと思ふ。たとひさう云ふ無責任な不用意な講演者でなくても、自說に忠なる講演者は、また動もすれば其論議が極端に走り矯激に失して正鵠を誤る場合がないとは限らない。それが聽者の方の自由な質問や言論によつて訂正修補を得るならば、演者に取つても一般聽衆に取つても、それは大なる利益であ

らねばならぬ。

言論機關の比較的發達してゐる米國、殊に紐育のやうな所では銀行家協會でも、商業會議所でも、其他婦人倶樂部や勞働團體などが皆このオープン・フォラムの法を用ひてゐる。在來は坊さんのお說教を唯だ默つて聽いてゐた教會に於てすら、このオープン・フォラムが廣く行はれるに至つたのは、時運の大勢に然らしむる所である。

歐洲大戰の初期であつた。國際聯盟の案がはじめ英國のサア・エドワアド・グレイによつて唱へられ、その聲は忽ち米國に反響した。當時は國際聯盟の事は未だ世上一般の人の注意を惹いて居なかつたが、米國の一部の識者は熱心に之を研究し唱導もして居た。そのころわたくしは紐育に居て、一夕コランビヤ大學で前大統領のタフト教授――さうだ、タフト氏は桂冠の後またエイルの教授をしてゐた――の國際聯盟の講演を聽いた。講演のあとで聽衆の一人が立つて質問を發した。「大國は國際聯盟によつて幸福なるを得べしとするも、小國は却つて之が爲に苦むの結果とはならずや」と云ふのであつた。此點は後には誰も皆氣付いた事ではあるが、確に當時行はれた國際聯盟說の一弱點であつた。急所に觸れた此質問に對して、タフト教授は何と答へるだらうと思つてゐると、眞摯に、『或は然らん』と答へたのは嬉しかつた。わたくしは當夜の印象を今も猶ほ忘れずに居る。その質問者は、後に聞けば、墨西哥人であつたと云ふ事も、更に面白いと思つた。

自說に對して十分の確信ある者でも、その說には自分の氣附かない弱點や缺點があり、或はまた講演者がことさらにさう云ふ點を誤魔化して置いたりする場合が無いとも限らない。それが質問者によつて一般聽衆の前で指摘せられる事は、色々な意味に於て喜ぶべき事だと思ふ。學殖識見に於て如何に劣れる者の言でも、さう云ふ眞面目な質問のうちには、たしかに他山の石として傾聽すべき者があるからだ。

かくの如くにして世に行はれる講演會の類が、社會教育の機關として一種の自由大學民衆講座の如き性質を帶ぶるに至るならば、文化發達の爲にわたくしは喜ぶべき結果を齎らすだらうと思ふ。（了）

咬豆茶話

■大正十二年から開校する東北大學法科は、東西の俊秀を選って新教授に任命することになっておるが、教授の年齢は大抵三十以下の若僧揃ゐだそうな、定めし、新らしい、元氣な處が見られだろうと新學長たるべき佐藤丑次郎君は語っていた。

■日本で一番のラッセル通は九州大學の桑木或雄君だそうな、氏は數學と云はず、哲學も、社會思想も苟もラ氏の書いたものなら片っ端から讀破しておるゲナ。

■巴里會議で散々の目に逢ったウヰルソンは目下は神經衰弱で非常に困ってゐる、それで彼は一日のうちにタッタ二時間だけ庭園散歩を許されておる、ソレでも彼の人氣は素破しいもので大統領引退後の第一に彼が執筆する一書は驚く勿れ大枚三十萬圓の稿料だそうな、これに較べるとランシングの五萬圓はその六分の一にしか當らない、まさかその智慧が六分の一しかないと云ふ譯でもあるまいが。

■一時危篤に瀕した大杉榮君は惡運未だ盡きずして遂に生還した、死んだ方が或筋では厄介拂でよかったろうが、お負けに全快の數日前に野枝夫人は玉のやうな？愛娘を擧げて一人減る所が却ってアベコベに社會主義の卵が一つ増加した譯だ。

■何にせよ元氣ものの人氣男のことゝて隨分毛色の變った人間が病氣見舞に行った、谷田監獄局長もその一人であったそうだが、監獄局長と大杉君の對照が馬鹿に面黑いテ。

■しかしそれ以上に面白いのは、いままでドシ〳〵罪人をフン縛った警視廰の大官連がゾロ〳〵と法廷に引き出さるる事だ。滿鐵の野村、中西、關東廰の中野、東京府の阿部、東京市の高橋、辰澤、宮崎なぞはまだ〳〵下っ端の役人だ、モット大鯨は居ないものか知ら。

■今回の檢擧で尤も硬骨の聞えの高いのは太田黒檢事正だが、アレで大田黒は中央大學の出身で司法部内からは繼兒扱ひにされて居る。しかしその力量、手腕はドウシテも彼を東京から離す譯には行かないらしい。

■同じ出身で司法部内の幅利きは大審院の林頼三郎博士だが、これも中央大學出身だ。それから山岡萬之助博士が日本大學出身だ、大田黒と角力を取らすなら先づ横濱の小原直だろうとの噂々のまゝ。

■京大哲學科は可なり碩學を網羅しておるが、それ等教授連の智識慾の猛烈なるは驚くべきものがある、ツイ此程も東北大學の石原博士、商大の左右田博士を招聘して大學内に長講演を開いた、そしてその講演に、西田、朝永、波多野米田の各碩學が少壯學生と机を一にして攻學しておる態は京都ならでは見ることが出來ぬ現象だと或人が話していた。

■左右田博士もその學風にスッカリ感心してしまって、今度は京大哲學科の新鋭田邊元博士を東京商科大學に招聘することになったそうだ、左右田氏の英斷は商大に對しキット立派な功果を擧げることだろう。

■茲に霞ケ關の失策の一を紹介する、歐洲大戰で、日本人はヒドク白耳義の孤忠義憤を嘆稱した、列強は平和克復と共に白耳義に大使館をおくこととした、日本では白國に大使館を置く前に、逸早く獨逸に日置某を遣すことを決定したので、佛國でも英國でも日本の評判が面白くない、特に佛國では日本の信義といふものは一體どんなものだイとフン〳〵する、それから外務省の慌て方はなかったヨと某外交官は語る、それはその筈だ、小幡某は北京で顧某に愚弄され、内田もこの顧某に對しては殆んど角力にはならないそうだ、

■巴里では顧某にサン〳〵な目に逢はされ、いままたこの通りの現象だ、霞ケ關はヨク〳〵人物拂拭と見える。

◇近刊豫告◇

死線を越へて（續篇）　賀川豐彦著

熱狂的歡迎を受けたる「死線を越へて」は僅々半歳のうちに五拾三版を賣り盡したり。尙著者は此程より『續篇』の起稿に着手し今將に油の乘りつゝある處なり。五月初旬までには脫稿の運に至るべければ、遠からず再び江湖に白熱的歡迎を受くるに至るべし。

レニンとトロツキー　山川均著

是れまた、本社に於て、今回發賣せられんとする最新刊なり。著者の風格は、玆に喋々するまでもなく、風霜を帶ぶる人格者として知らる。この人が椽大の筆を呵して、書き上げたる雄篇は、いかに讀者に批判さるるか。

◇本書に對する東西

國民新聞評　賀川豐彦氏の新著『死線を越えて』は小說體に書いてはあるが、讀んで行く內に、著者の自叙傳を讀みつゝある感がした所謂、專門小說家の目から見れば、抒情叙事の間に齒がゆい點があるかもしれぬ。併し、此書の使命は小說以上である事を感得せずには居られぬ。

主人公が神戶新川の貧民窟に飛込んで以來の記事は、人生の矛盾、悲慘、罪惡を最も現實的に描出してゐる。主人公の周圍に集まり來る人人は皆人生の落伍者である。社會が有する缺陷と其人々の有する自身の缺陷の爲めに、精神的に、物質的に、肉體的に墮落してゐるものゝみである。主人公の家に泊めて吳れと云ふ者は大抵結核性の半死半生の男である。或は足腰の立たなくなつた淫賣である。主人公の救を求めらるるは、子供が死んで葬式が出せない時である。其子供は親が養育料を得んが爲めに貰つた子である。土地の破落戶は短刀やピストルを以て主人公を脅かして金を貸せと云ふ。疥癬の男が來て主人公と同衾する、一夜に四五十匹の南京虫に攻められる。主人公はこんな全ての困苦と迫害を忍びつゝ、基督教を說いてゐる。主人公は無抵抗主義者である。惡人に對して、抵抗せぬ。只沈默してゐる。只忍んでゐる。而して一步進んで、あらん限りの愛を注いでゐる。主人公は人間を崇拜すると云ふ。乞食に對し、惡人に對し、淫賣に對しても人として尊敬してゐる

◇東京市芝區櫻田久保町七　改造

二大新聞の批評◇

貧民窟の生活は食ふや食はずの生活である、人間を本能化した生活である、之を見て、主人公は矢張り人間に失望せぬのである、毎日貧民窟の小兒を相手に嬉々として遊んでゐる。

此現實の社會を見ては、他の凡ての社會が虛僞と虛飾の如く見える、著者は、鐵拳とピストルと病氣に日夜脅かされてゐる。之は眞劍勝負である、之に比ぶれば、他の小說家が美しき燈と、美しき衣服を探すを以て、人生探檢と稱するのを聞くと、全く馬鹿氣た感じがする。

著者は日本の社會に存在する缺陷と病氣とを吾々に見せた。此書が出でた以上、政治家も國民も、貧民窟の問題に知らぬ顏をして居る譯に行かぬ。余は人間の屑に敬意を表する主人公に敬意を表すると共に著者が貧民窟の問題を天下に提供せられたに對して、世人と共に感謝せざるを得ぬ。（主筆馬場氏執筆）

大阪朝日新聞評

雜誌『改造』に連載中から深い興味を覺えさせられた小說である。社會改造主義者として、人知れぬ苦慘を嘗めたらしい、此著者の過去のリミニッセンスを親しく會見して聞くやうな感がする。その幾分に自敍傳的色彩のあることも否まれない。神戶を舞臺として、そこに幾多の牢獄のやうな下層社會に生活してゐる人々の生活を寫した後半の敍述は、此人ならでは他に描き得まい。

社　振替口座東京八四〇二番◇

五拾參版發賣

◇四六版ポイント組五百五拾頁◇定價金參圓◇

◇バイブル式裝幀天金函入美本◇送料拾八錢◇

死線を越えて

賀川豐彦著



ダビデと子たち

吉田絃二郎

『やつぱり駄目だ。ばかに頭が重い……病氣のせいなのだらう……』

ダビデは部屋のなかを歩きながら、左の手で輕く額だの、後頭部だのを叩いてみた。そして時々痛さうに、そうつと腕や胸あたりの筋肉を衣の上から撫でるやうなことをした。

かれがはじめてヘブロンの町で王位に即いてからでも、三十年近くもなるが、かれの生活は或る意味では惠まれ過ぎるくらゐ幸福であつた。しかし去年バビロンの遠征に出かけて行つてエルサレムに凱旋して歸つて來る途中から、急に健康を害つたり、また信頼しきつてゐた將軍に裏切られたり、自分の兄弟たちと義絶をしなければならぬやうな忌はしい事件などが持ち上つたりしたのであつた。

ダビデは去年の出征中ユウフラテス河盂の濕地に可なり長いこと陣を張つてゐたが、そこはきはめて不健康地であつたので、エルサレムを出て行つた二萬の兵のうちで過半は凱旋までに途中で病死してしまつた。ユウフラテス河からエルサレムまでの

長い軍旅の間に、かれ等は一日だつてイスラエルやユダの人々の墓を草野のなかに築かないことはなかつた。多い日には百、二百といふ死骸が異郷の草の丘などに葬られた。

ダビデも滞陣中にひどい濕瘡にかゝつた。それに、かれはバビロンの數人の若い女を愛したが、或る女の病毒がかれに感染したゝめに、かれはそれ以來、今日までいつも氣鬱な日を送らなければならなくなつた。首のまはりにべた〳〵一面に皮膚をたゞらすやうな腫物ができたり、日毎に髮の毛が落ちて行くことなどが、かれには耐らなく寂しく思はれて來たのであつた。

かれは部屋のなかをぐる〳〵歩きつゞけた。そして、快さうに眠りこけてゐる老人を見ては、ちよつと立ち止まつて再び憂欝な顏をして歩きはじめるのであつた。

『…いや、とても俺にはそんなことはできない。俺は死ぬまでこの城から外へは出ない…』かれはひとりごちながら、つゝけさまに後頭部を輕く叩いて、なやましげな溜息をついた。

春の午後のものうい空氣を一層ものうくするやうに、森の方から草笛のひゞきが流れて來た。ダビデは南の窓の方へ近づいて行つた。そこには牡丹色のカアテンが絞られてあつた。橄欖の若葉につゝまれた森や、エルサレムの町の南の部分が塔の下にぎら〳〵と太陽の光りを浴びてゐるのが、かれの眼にまばゆく映つた。

『何といふ美しい…俺は何うしてもこの町を捨てることはできぬ…』かれはしみじみとかうひとりごちながら、かれによつて二十幾年の間に見ちがへるほど美しくされた丘の上の町を見つめてゐた。青い嫻かな丘には眞つ白な大理石の露臺や、紅色がゝつたカアテンが、殊に空の色と美しいコントラストを作つてゐた。町の後には青いゆるやかなスロープをなした丘をめぐつて湖があつたりした。

俯向いたまゝうと〳〵と居眠りをしてゐた老人は、不圖眼をさましたが、そこにダビデが立つてゐたので、驚いてソーフアから起ち上らうとした。

『まあ、そのまゝに休んでおいで』と言つて老人を坐らせて『今日はミカルの墓から、直ぐに歸つて來ればこんなにまで疲れることもなかつたらうに、お前があの高地の森までも俺を連れるのだもの、俺さへすつかり草臥れてしまつた。お前の老體ではのうハツハツハツ……』笑ひながらダビデはソーフアの方に近づいて來て、白髪の老人の肩をかろくたゝいた。

『陛下ッ！』老人はよろめきながら起ち上つて、ソーフアから南の窓の方へ近寄つて行つた。『ミカルさまのお墓の裏の高地から、思はず南の空を眺めましたとき、あの懐かしい南の草原が青い大空の下にひろがつてゐるのを見出しました。わたくしの胸は躍りました。わたくしは幾十年振りに、あんなに胸の波打つのを感じたでせう。まるでわたくしは若者のやうに胸苦しいほど南の草原の土や、草の香をなつかしいと思ひました。』老人はダビデとはちようど反對の側の窓際に近づいて行つて、カアテンをあげて南の方の空を見た。白い翅の鳥の群がかすかな霧につゝまれながら翔んで行つた。しばらく沈默がつゞいた。

『あゝ、さうだ。ペテレヘムの仲間たちはもう南の方の旅からペテレヘムの方へ歸つて來るころでございますなあ。わたくしはさつき夢心地に草笛の音を聽いて、快く眠つてゐましたが、あの聲を聽くともう南の方の草ッ原の生活が耐らなく戀しうなります。わたくしはこの五六年はペテレヘムにゐても、南の方の旅へは出ませんでしたので、久しいこと角笛も吹きませんでしたが、あの駿々とした南の方の草原で若い女たちの前で朝つぱらから笛を吹き立てる心持つたらございませんねえ。わたくしも今年はいやでも若いものと一緒に南の方へ出かけたいと思ひます……それまでにあなたも何う

ぞ一度ベテレヘムの方へお歸りなされてはいかゞでございます。後のことはお若くとも賢いアブサロムさまなり、アムノンさまなり、お子さま方におゆづりなされまして……おからだのためにも元々の牧羊者におなりなさつてごらんなさい。おいやでございますかハッハッハッ……とても陛下には……わたくしのやうな人間は、このやうな立派な建物のなかの生活はしみじみ窮州だと思ひますのでハッハッハッ……』老人は笑ひながらも、うるませた眼をしばたゝいてゐた。そして深い吐息をついた。

『ハツハツハツ……バルジライ―お前はなかなか立派な外交官だ。俺をいやでも田舍につれて行つて元の牧羊者の仲間に引き入れようとするのだから。まだ、しかし、何うも俺にはその決心はつかぬ。しかし俺はお前が羨ましいよ。お前はほんとうに幸福だ。バルジライ―お前は俺の城を訪ねてくれてからまだ幾日も經たないちやないか。それだのにそんなにまで南の空が戀ひしいのかなあ。お前は八十になつてもまだ若い日の樂しい思ひ出を忘れないで持つてゐることができるのだなあ……』

ダビデは南の窓から町や空を眺めて、吐息をついた。蒼い王の顔には憂鬱な影が動いてゐた。

『わたくしのやうに智慧といふものも、力といふものも、幸運といふものも惠まれなかつた人間には、あの靜かな故鄕の生活や、あの南の方の草原の生活より他には生活の方法はないのですから……わたくしたちのやうなものは遠い過去を一生涯振りかへつて見るより他には生きて行く仕事がないのでございます。陛下のやうに人間の持ち得るすべての力、美貌、智慧、才藝、幸運といふものを御一身に集めておいでの方には、過去なんていふものを振りかへつてごらんになる遑はないのです。陛下には後から後へと、陛下がなさらなければならぬ新らしい事業やら、新らしい幸福やらが陛下をお待ち申してゐるのでございます……』

『新らしい幸福ばかりではない。このごろでは可なり新らしい不幸も俺を待つてゐるやうだ！』王の聲はばかに沈んでゐた。

『ほんとうにさようでございますなあ……』

王の胸にも、バルジライの胸にも嬰兒の可憐な病床の姿が思ひ出されたのであつた。二人の間にしばらく沈默がつゞいた。

『だが俺もこのごろになつて、どうかするとお前の言葉が幾らか分るやうな氣がすることもある。俺はベテレヘムの町の牧羊者の子から立つて、今ではユダ、イスラエルの人たちの上に君臨はしてゐるが、そして俺の宮中の博士たちは、アブラハムやモーゼと列んでダビデといふ名は歷史に載せられる筈だとまで言つてゐる。また俺も博士たちの言葉を全然追從ばかりだとは思はぬ。俺にはアブラハムにもモーゼにもまたサウル王にもすぐれたほどの力はあつた……』

『まつたくでございます。陛下がわたくし等と一緒にあの南の方の野で羊を牧つておいでになりましたころでございました。あの恐ろしい獅子と熊を一度に搏ち殺しなされたことや、またあのペリシテ人との戰ひの折エラの谷の戰場で一擧の下にゴリアテを打ち倒しなされた時は、まつたくアブラハムかモーゼの再臨だと思はぬものはございませんでした。あのやうに美しい少年でいらしつた陛下が、何うしてあのやうに、恐ろしい巨人のゴリアテを殺すことができようなんて、夢にでも想像する者がありませう？』

『俺は萬人にすぐれた力や勇氣を惠まれたことだけはほんとうに神に感謝する。俺くらゐ自分の力や勇氣に對して强い自信を持つことができた人間はなかつたゞらうと思ふ。俺が二度もあの恩知らずのサウル王を殺さないで逃がしてやつた時、ユダの人たちはダビデは仁者だと言つて褒め立てたし、サウル王自身も俺の親切は一生忘れはしないと言つて涙

を流してありがたがつたが……また俺自身も俺はサウル王よりは深い愛の心を持つた人間だと自惚れてゐたが、俺はこのところでは自分といふものを、また自分の心といふものを大分割引きして考へなければならなくなつた。今日俺がこの數日殆んど何も喰べないで弱つてゐる體を車で運んで、ミカルの墓まで出かけて行つたのも、このころ自分といふものに對する今までの信頼が大分動いて來たからだよ。俺はこれまで自分の力といふものと、自分の愛の心、正しい心といふものをごつちやにしてゐたやうに思ふ。或ひは、こんなことを思ふやうになつたのは、俺が年を老つたからかも知れない。子供の病氣やまた俺自身の病氣のせいかも知れないが……いつたい神によつて與へられたものは神がまた取りかへし給ふにちがひない。俺はこのところこんなことばかり考へるやうになつた……神は俺からすべての力といふものを取りかへさうとして居られるやうに思ふ。三十人餘もある子供たちのうちでたゞ一人の小ひさい嬰兒が、病氣をしたからといつて、かつてはあのサウル王にさへ恐れられた俺が、どうして食事をする氣にもなれないで一人の子供のために祈るやうな意氣地のないことをするやうになつたのだらう。俺は今まで人間の力の衰滅といふやうなことを夢にも思つたことはなかつたが、このごろでは、俺の心は取りとめのない不安な影に脅かされてゐるやうな氣がしてならぬ……』

『陛下、かりそめにも陛下のあの恐ろしいお力が衰へるといふやうな不吉なことを想像なすつてはいけませぬ。陛下のあのゴリアテを殺してサウル王と一緒にヘブロンの町へ凱旋なされた時、あなたの金髪や、あなたの美しいお顔や、そのひろいお胸を目がけて薔薇の花を投げかけたヘブロンの娘たちの群を憶へておいでになりますか。あの棕櫚の葉を道に布いてあなたを迎へた美しいユダの女たちを御記憶になつてゐますか。(サウルは千人を殺し、ダビデは萬人を殺す)と小鳥のやうな美しい聲で歌の音頭を取られたのは、サウル王の姫君のミカルさまでございました。城の外の廣場に集まつてゐましたヘブロンの娘たちがそれにつれて鼓を打ちました。磬をたゝきました。あなたはあの時ミカルさまに請

はれなされて立琴を彈じなさいました。宮の中の男も女もあなたのお美しいお顏と雄々しいお姿に魅せられてしまひました。まつたく男でさへあなたの美しい姿を見てゐると魂が拔けてしまふやうでございました。宮の中の人たちは、誰一人としてサウル王を振りかへつて見る者もありませんでした。サウル王は氣が狂つてしまひました、亂暴にも二度、出し拔けにあなたを投げ槍でもつて壁に刺しとほさうといたしました、あなたはそれでもわづかに身をおかはしになつたまゝで、立琴を握つたまゝ最後まで凱旋の歌をおうたひになりました。それからあの夜は……』

『あゝ、もうあの折のことは言つてくれるな。俺は思ひ出すだけでも苦しくてならぬ。俺はあの日はじめて戀といふものを知つたのであつた。お前が南方の草原を想ふて胸をとゞろかせるやうに、俺はあのころのことを思ふと今でも胸苦しくなつて來る。あのころは何も彼もほんとうに幸福だつた。王の娘の美しいミカルが、昨日までは野に羊を牧つてゐた俺の戀人となつてくれたのであつた。生まれてから物の恐ろしいといふことを知つたことのない俺も、ミカルの部屋に忍んで行く時だけはわな／＼と兩脚がすくむやうに思はれた。ミカルの部屋に通ふ長い廊下は一面花の薫りにむせびさうだつたので、俺は眞つ暗がりの廊下を歩いてゐながらも、ベテレヘムの野のことや、父のことなどを思ふて、急にベテレヘムに歸りたいと考へたこともあつた。飛んでもない惡いことをしてゐるやうな氣がしてならないこともあつた俺がためらふて暗のなかに立ち止まつてゐると、出しぬけに俺の頸に柔かい兩腕を投げかけて來た女があつた。俺ははじめて女といふものゝ懷かしい香を知つた。俺とミカルはサウル王の目を忍んでは每晩のやうに暗い塔の陰や、庭の亭の中で語つた。ミカルの柔かな手を握つて二人で草の上に坐つてゐると、俺は世界の中で何一つ欲しいとは思はなかつた。俺はミカルを連れて南の方の野の中に逃げ出さうかとも思つた。ミカルもまた牧羊者の妻になつてもいゝから、一緒に遠い旅に伴れて逃げてくれといふのであつた。もう半月もあのまゝであつたら、俺はミカルを城から連れ出して、

恐らくあの南方の異邦人の國までも逃げ出して一生牧羊者で幸福な生活を送つたであらう。ミカルも幸福な牧羊者の妻となつて一生平和な生活をしたゞらうと思ふ……』王は老人の傍の寶石の飾りのついた椅子に腰を卸して、吐息をついた。體中の臟物がむづ痒いやうに痛んで來たので、暗い顏をして、衿から手を突つ込んで背のあたりを掻いた。

『まつたく陛下は、あのころから四五十代の男たちも及ばぬほど上手な牧羊者でございました。一年もあなたに羊の群をおあづけして置きますと羊は肥るし、仔は殖るといつたやうな有様で……』

『まつたく、バルジライ!!俺は一番死んだミカルのことを深く思ふやうになつた。俺がもしあの時南方の草原の野にかへつて行くことができ、ミカルが城から逃げおはせることができて、一生夫婦が草の中で暮らしてゐたら、それの方が二人にとつて何れほど幸福であつたか知れないといふことを、つくぐ俺は思ふやうになつた。ミカルが死んでから、俺ははじめて取りかへしのつかない失策をしたことに氣付いたのであつた。今になつて考へると……』

×

廊下の方から跫音が聞えて、間もなく一人の侍從が扉口の前に來て跪いた。

『何の用ぢや？』ダビデの眼が不快さうに動いた。

『陛下。今夜の御晩餐の……』侍從の顏一面に汗が流れてゐた。侍從の聲は顫へてゐた。

『晩餐の話か？……俺は晩餐には出たくない。ダマスコからのお客さまにはお前たちの方で宜いやうに申して置いてくれ、アブサロムとアムノンに俺の代りに食卓に着くやうに言つて置いてくれ。』

『はい。かしこまりました……』

『それから夕マルもお客さまをおもてなしに出るやうに……あツ、それからあのメピボセテも晩餐の席に出すやうに、

あれは親もない子だから殊に大切にしてやるやうに……」

「はい。姫さまにもさう申し上げます……メピボセテさまにも……」

「子供の病氣の方は何うだ？」

「その事でございますが、先程から少しまた變がはりがございましたやうで……」

「では昨日より一層惡くなつたといふのだなあ……」ダビデは床の上を神經質な足どりで歩いた。

「はい、幾分……」侍從の言葉は途切れてしまつた。「この上は埃及の博士でもお迎へなされまして……」侍從は王の顏を見い見い、顫へ聲で語つた。

「埃及であらうと、何處の國であらうと世界中の名ある博士たちといふ博士たちは集めてくれ。でもそれ前に俺もあの子供のためにしなければならぬことがある。俺は今日からあの子一人のために祈りつゞけなければならぬ。俺はこの塔の中に一人でゐて祈りたいから、一片のパンも持つて來てはならぬ。たゞ鹽と水だけを日に一度づゝこゝまで運んでくれるやうに！」

侍從は更に何か言はうとしたが、王の憂鬱な顏を見て頭を下げて、廊下を歩いて出て行つてしまつた。王はその時何氣なしに北の窓の方へ近づいて行つて、窓にもたれかゝつたまゝ緑葉につゝまれたエルサレムの町の北の部分をながめてゐた。もく／＼と地の涯から湧いて來た雲のかたまりが町の北半分に灰色の影を投げて、やがて北の方へ北の方へと、地上の影がしづかに動いて行つた。

ちようどその時であつた。かれは開いてはならぬ北の窓が開かれてあり、見てはならぬ丘の上の建物を見てしまつたことに氣付いたのであつた。ダビデの眼には合歡樹の新緑が輝いた丘の上の白い建物の屋根が映つた。屋根の上はエル

サレムの他の屋根と同じやうに扁平な石の露臺になつてゐて、そこには三四脚の大理石の腰掛が置いてあつた。數年來住む者もないので、窓だの、石の壁だのがくづれ落ちてゐるのさへも見られた。

『ウリヤの館だッ!』ウリヤを戰場で殺させて、妻のバテシバを奪つた日以來、今日までかれは塔の北の窓をすつかり鎖してしまつてゐたのであつたが、今日偶然にも北の窓が開かれてあつたのであつた。かれは五年前にウリヤの妻のバテシバが、丘の上のその露臺の上で大理石の腰掛に腰を卸して、殆んど上半身をあらはにして、髮を洗つてゐたのを幾度となく、かれが今立つてゐる窓から、こつそりと偸み見たのであつた。ちようど合歡の淡紅色の花が露臺の周圍に美しく咲いてゐたころであつた。女の白い胸が合歡の紅い花に映つて殊に美しく見えた。かれは幾度自分の醜い心を恥ぢたか知れない。かれはひとりで禮拜堂に走つて自分を責めつゝ神に祈つたこともあつた。しかしかれはたうとう女のふくやかな白い肉體の誘惑に打ち克つことはできなかつた。かれは自分ひとりで窓のところに來ては露臺の上の若い女を眺めてゐた。普段はほんとに正しい、そして人一倍强い克己心を持ち、また一匹の小羊のためにも涙を流すほどの詩人らしいセンテイメントを持つた人であつたが、女の美しい肌や、黒い瞳の前に立たせられる時は、かれは自分で何うすることもできない弱點を持つてゐた。或ひはかれはすべての若い女の肉體の美、女の白い纖細い手や、女の髮の匂ひに對して、人以上の鋭い感覺を持つてゐたと言つた方が適當であつたかも知れない。かれは大抵の人たちがほとんど氣にも留めないで看過ごしてしまふであらうやうな、ちよつとした女の眼の美しさや、乳房のふくらみや、柔かな日光に照らされた若い女の肌に對しても、胸苦しいほどの誘惑を感じるのであつた。そして敵に對してすら或る時は驚くほど寛大であつたかれが、一度美しい女といふ問題に遭遇する時は、自分の欲求を滿たすためには、まるで別人のやうな殘忍さをあらはにするのであつた。思ひ切つて向ふ見ずな冒險を敢てするのであつた。

ミカル姫とダビデの媾曳のことが父王サウルの耳にはいつた時、サウルはダビデを殺さうとした。しかしミカル姫の兄のヨナタンの取りなしでダビデは死を免れたが、ミカルと結婚するためにサウル王はダビデに對してペリシテ人の百の陽皮を求めた。ミカルの美貌に醉ふてゐたダビデは、ミカルを得るためには何のやうな危險をも恐れなかつた。かれはその日白晝即座にペリシテ人の陣を襲ふて二百の陽皮をサウルに獻じて、ミカルを自分の妻とした。かれは獅子のやうな大膽さと、勇氣と、率直さとをもつて、かれの初戀に成功したのであつた。

かれが第二の妻のアビガルを得た時にもかれは、獅子のやうな大膽さと、超人の力とをあらはに示したのであつた。その時はかれはサウルのために妻ミカルを取り戻されて、パラノンの野を數日さ迷ふてゐたのであつた。かれは僅かに六十人の手兵をひきつれてゐたゞけであつた。かれは偶然パラノンの野を中心として勢力を張つてゐたカルメンの五百の兵のために退路を斷たれたのであつた。かれはちよつと失望した。しかし次の瞬間にかれの眼は或る恐ろしい決心に輝いた。かれはかつてベテレヘムにゐたころ、一度カルメンの美しい妻を見たことを思ひ出したのであつた。その刹那にかれの頭からは數日サウル王に追はれてゐることや、部下の兵の少いことや、半日行程後にはすでにサウル王の兵が追撃して來つゝあることや、カルメンの兵數が自分の手兵に對して十倍もあることや、また部下が數晝夜の激しい退却に疲れ切つてゐるといふやうなことは忘れられてしまつた。かれの頭には太陽のやうに輝かな顏をした、カルメンの妻の、アビガルのことだけが映つて來たのであつた。かれは無謀にも一擧に疲れ切つた少かの手兵を率ひて正面からカルメンの陣を襲ふてカルメンを殺した。美しいアビガルは若い、そしてユダヤ一番の美男と謳はれたダビデを見た刹那にほとんどカルメンの死を忘れて、ダビデの腕に抱かれるために走つて來たのであつた。かれは美しい妻アビガルや五人の侍女と一緒にパン、酒の革嚢、羊肉、烘麥、乾葡萄、乾無花果を十數匹の驢馬に積んでパラノンの野を去つた。

さらにかれが一度サウル王のために取りもどされたミカルを再び自分の手に取りかへした折でも、かれが取つた手段は思ひ切つて大膽であつた。ミカルの夫になつてゐたライシは、ダビデの門の前までミカルについて來て、地に頭を打ちつけて泣いたが、ダビデは冷かに笑ひながから、初戀の女ミカルを再び自分のものにしたのであつた。

かれはいつも超人の力と超人的な大膽な方法で、美しい女たちを自分の所有にしたのであつたが、かつて自分の行爲を疚しいと思つたことはなかつた。かれはかつて南方の草原に羊を牧つてゐた頃、幾度か經驗した野獸の生活を想ひ出した。そこでは何の陰謀もなく、狡智もなく、すべてが力一つで支配せられ、決定せられてゐた。かれは南の方へ羊を追ふて長い旅をつゞけて行つた時、一頭の牡獅子が、一頭の牡獅子を地に踏みにぢつてゐるのを見た。やがて勝ち矜つた牡獅子は金色の鬣を曠野の風に吹かせながら、數匹の牝獅子を隨へて草原のなかへ走つて行つた。かれは草にかくれて行く數匹の獅子と、撃ち碎かれた一疋の獅子とを見つめてゐた。そしてかれは無殘にも地の上に打ち殺された一疋の獅子のために泣いた。

しかしかれは戰に勝つごとに、敵の骸を踏みにぢるごとに、殊に敵を打ち倒して美しい敵の女を奪ふごとに、かつて南方の旅で見たあの勝ち矜つた牡獅子の威風を想ふのであつた。

『力がすべてを解決する。力はすべての正しい事の源なのだ!』かれは、そのやうな場合によくかう思ふことがあつたそしてかれは自分の超人的な大膽な、向ふ見ずなすべての行爲を是認しようとした。かれは自分のどのやうな行爲をも恥ぢなかつた。實際かれの戰場に於ける行爲は時としては殘忍過ぎるほど殘忍なものもあつた。アマレク人のために自分の二人の妻を奪はれた時、かれは復讐戰を起してアマレク人の根據地を襲ふて、その女子供や老人や更にアマレク人の羊、牛、驢馬までも一つ殘さず虐殺をやつたこともあつた。

かれは、幾度か城を陥れては先頭に立つて恐ろしい虐殺をやつたが、しかしその悪魔的な行爲の底には、一點の疚しい心もなく、陰謀もなかつた。かれの超人的な恐ろしい力が、自然のまゝにあらはれて來る時、それが或る時は戰ひとなり、或る時は虐殺となり、或る時は詩ともなり、或る時は燃ゆるやうな戀愛ともなつて來るのであつた。すべてがかれの超人的な力の自然的なあらはれに過ぎなかつた。それはあたかも野獸の力のあらはれと少しの逕庭もないところの自然さを持つてゐた。だから、かれは自分の何のやうな行爲に對しても、かつて後悔したり、自分を責めるやうなことはなかつた。

×

『俺の生涯のうちで、俺がはじめて俺自身の心のうちに、これほど臆病な心が潜んでゐるといふことを知つたのはウリヤの妻を奪つた日からであつた。俺は……あゝ、またウリヤの呪はしい、あの悲しさうな眼が……』窓に立つて丘の家を見てゐたかれは不圖振りかへつて老人の方を見た。老人はすつかり疲れたかしてふたゝびすや／＼とソーフアの上に眠りこけてゐた。

ダビデはその時、塔の下の橄欖の森から立琴に合せて歌の音が響いて來るのを聽いた。ダビデの顏は不快さうに曇つた。かれは侍從を呼んで歌を直ぐにも中止させようかとも考へたが、歌の調子があまり靜かだつたので、しまひには窓から半身を戸外に出すやうにして森の方へ耳を傾けた。

『メビボセテの奴だなあ……』ダビデの顏には寂しい微笑が浮かんだ。

サウル王がギルボアの山で戰死した時、ダビデのためには眞實の兄以上の恩人であつたヨナタンは父王サウルと一緒に討死をした。ヨナタンの子のメビボセテはその時五つであつた。従僕と共に逃げたのであつたが、途中で車から落さ

れてその時兩脚を折つてしまつた。メピボセテは貧しい農民のために捕へられて、後にダビデの陣に連れて來られたのであつたが、ダビデはこの不幸な跛者をまるで自分の子供のやうに不愍がつて育てゝゐるのであつた。跛少年は午後になると二三人の從者たちにまもられて橄欖の森に來ては立琴を彈ずるのであつた。跛少年の美しい聲はダビデを何時もよろこばせた。ダビデは新らしい詩を作るたんびに跛少年の立琴に合はせて歌はせたのであつた。

跛少年の立琴の歌の聲がかすかに橄欖の葉をくゞつて響いて來た。かれは直にそれは、かれがかつてサウル王やヨナタンの悲壯な戰死を悲しんで作つた(弓の歌)であることを知つた。

『俺の心の底には、あのころはまだ夢にも臆病だの、狡猾だのいふものはなかつた。もし俺があの時ゴリアテを打ち殺さなかつたらイスラエルは滅びてゐたにちがひない。それだのにサウル王は俺の力を恐れて幾度も卑怯な方法で俺を殺さうとばかり企てゝゐた。しかし俺が取つた態度は、ほんとうに立派ではなかつたか？俺は一度は戰場のあの暗い洞穴のなかで、サウル王を見出した。俺の一撃でサウル王の頭蓋骨は碎ける筈であつた。しかし俺は小刀を拔いて王の衣の裾を切つたゞけて王を逃がしてやつた。また俺は俺を殺すために追ふて來たサウル王の陣營に忍び込んで行つて、王が眠つてゐるのを見出した。あの時だつてもし俺が卑怯な人間であつたら王を殺したにちがひない。しかし俺は王の枕頭の土の中に突つ立てゝあつた王の槍と水瓶とを奪つたゞけで、王を殺さなかつた。あれほど忘恩の王であり、あれほど一生俺を苦しめた敵であつたが、俺はサウル王がペリシテ人のために殺されたことを聽いた時は、心から泣いた。俺はあの柳の下のダビデとヨナタンの墓の前に夜が明けるまで泣いた。あのころの俺の血管には何といふ英雄的な血が溢れてゐたのであらう。俺は神の前に立つて俺がしたすべての行を大膽に語ることができる。それだのに……』

かれは老人の傍の長椅子に身を投げ出すやうにして腰をかけた。そして兩手で顏を掩ふてしまつた。

丘の上のウリヤの館の露台で髮ゝ解いてゐた美しいバテシバの白い胸や、夜陰に乘じて美しいバテシバを奪つてゐる數人の男の姿や、ウリヤを殺すために部下の將軍に命じてウリヤを最も危險な先陣に立たせるやうにしたかれのたくらみや、バテシバを奪はれたウリヤが蒼白い顏をして出陣をした朝のことや、ウリヤが戰死をしたことを戰地から知らせて來た時、かれが何うしても殘忍な微笑を隱すことができなかつたことや……それからそれへと、その時の不快な記憶が想ひ出されるのであつた。

「たゞ一人のバテシバを奪ふために、俺は何といふ卑劣な手段を採つてウリヤを殺したのだらう！あの頃から、俺の心のうちにはかつて夢想もしなかつた俗人的な狡猾な智慧が頭を擡げかけてゐたのだつた。俺はこの頭を石に打ちつけて碎いてしまひたい。俺はこの臆病な俗人的な狡猾な智慧を宿してゐるこの胸を掻き裂いてしまひたい。あゝ……」かれは長い髮を摑んで二三度長椅子の上に反轉した。かれは腰の劍を床の上に叩きつけた。

×

「陛下……」老人は眼をさまして王の顏を見た。「何うなさいました。御劍が……」

「バルジライ！ほんとうなことを言つてくれ。お前は俺を眞實、ユダのうちで最も大きな勇士だと思つてゐるか？、ほんとうにモーゼにも並べられるほどの英雄だと思つてゐるのか？ほんとうにお前の心に僞りのないところを……」ダビデはまるで子供が大人にあまへるやうに、王としての權威も愼しみも捨てゝしまつて老人の肩に手をかけた。

「あなたほどの英雄が世界の何處の歷史にありませう。あなたほどの慈悲深い美しい心の王といふものが何處にありませう。あなたほど、あなたの道を眞つ直ぐに力强くお歩きになつた方が何處にありませう！」

「お前はほんとうに俺が歩いて來た道を正しいと思つてゐるかい？　お前が俺の立ち場に置かれたとしたら俺と同じ道

を歩かうと思ふかい？』
『いや、それはまた別問題でございます。あなたがお歩きになつた道はあなたにとりましてはお歩きにならなければならぬ道であつたにちがひありません。あなたはそのやうな道をお歩きになるやうに神さまに造られなさつたのですから。あなたのやうには造られなかつたわたくしのやうな意氣地なしには、歩きたくともその眞似もできるものではありません。』
『それならば、俺がこれまで踏んで來た道は、俺にとつては必然的な道であつたといふのだな。』
『さやうでございます。』
『正しい道であつたとは思はぬか？』
『いや、正しい道であつたか何うかは人間には分りません。たゞ人間はあなたのやうに或る點までは必然的な道を歩いて行くより他に仕方はないのでございます。歩いた跡が正しいか正しくないかといふことは神さまだけが御存じです。』
『それならば、正しい道を歩かうと、正しくない道を歩かうと、それは造られたものにとつて必然的な道を歩いたのだから、神の罰といふものはない筈ではないか。』
『いや、さうではございません。人間は必然に隨つて生きて行くことだけはゆるされて居ります。また必然以外には出ることはできないのでございますが、その行爲の結果に對しては神さまの正と不正、善と惡との御批判を受けなければなりませぬ。』
『そんな馬鹿なことがあるものか。神といふものが人間を造つて、必然以外には人間を生かさないとするならば、人間の行爲の結果が正であらうと、不正であらうと、善であらうと惡であらうと、それに對して神の裁斷を受けなければな

らぬ理由はないではないか。そのやうな不合理や矛盾があるものかッ！』

『いや、神さまには不合理も矛盾もあります。平氣で不合理や矛盾をどし／＼やつて、やり通して行かれる力が神さまでございます。』

『それはあんまりひどい。殘酷だ……』

『神は殘酷です。』

『俺はそんなことを信じたくない。』

『あなたは信じなさらなくとも、神はぐんぐん自分の意志通りを實行して行かれます。神は愛ばかりではありません。神には恐ろしい復讐や憎みがあります。』

ダビデは劍を掴んだまゝいら／＼しながら部屋のなかを歩いた。時々眩暈がしさうなので、額を輕く叩いたりした。

『俺もウリヤを戰場で殺させてからこつち、不思議と神を恐れるやうになつた。あれまでは俺は俺の體の中にめぐまれた人間の力のかぎりを盡して、人をも愛し、人をも憎んだ。殺した。……あのウリヤが俺に妻を奪はれ、そして死が戰場にかれを待つやうに準備されてゐることも知らないで、城の門を出て行つた時にあの男の顏を見てからこつち、俺の胸にはいつも暗い影が附きまとふやうになつてしまつた。俺は神の眼を恐れるやうになつてしまつた……人間はかれが自分の力いつぱいに生きてゐる間は、恐怖といふこともなければ、躊躇といふこともない。かれは恰度太陽のやうに輝き、太陽のやうに生きてゐる。太陽は美しい花を輝かさうと、橄欖の森を繁らさうと、または嵐を起さうと、羊を焼き殺さうと、太陽にとつてはそれは必然のことであつて、かれは生きてゐる間永劫にあの恐ろしい歎美すべき力の生活をつゞけて行くにちがひない。そしてます／＼激しく燃え、ます／＼明るく輝いて行くにちがひない。俺もかつて

はダビデは萬人を殺すと謳はれたこの腕の力で、敵といふ敵を眞正面か[illegible]して行つた。しかし俺には既うあの獅子を搏ち殺した時や、ゴリアテを撃ち殺した日の力は夢想することもできない。もし俺があの太陽のやうに永劫に若い日の力をめぐまれてあつたなら、俺には後悔といふものは起つて來なかつたにちがひない。また俺の胸のうちにはウリヤをたくらんだやうな卑怯な心は生まれて來なかつたにちがひない。俺の力が曇りはじめた日から、俺の胸に狐のやうな惡賢さや、明日に對する恐怖といふものが湧いて來た。』

『人間は人間でございます。人間は神にもなれず、太陽にもなれませぬ。人間はたゞ一日か二日だけ神の力や、太陽の力をめぐまれてゐるのです。そしてそのめぐまれた一日か二日の幸福の收穫として永劫の苦惱を忍ばなければならないのです。めぐまれた日の力や光りが大きければ大きいほど收穫の苦惱も大きくなつてまいります。』

『俺も、このごろになつてつくづくお前の言葉と同じやうなことを思ふやうになつた。俺が今日ミカルの墓に詣つたのも、一つはその收穫の苦惱を幾分神に願つて輕くしてもらひたかつたからぢや。卑怯な心からではあるが……俺には耐へ切れないほどの收穫の苦惱が今、目の前に始まりかゝつて來たことが氣付かれるのぢや』

『御子さまの御病氣……』

『いや、そればかりではない……あの子の病氣も實は俺の過去の罪惡の收穫ではないかと思ふてゐる。俺はさう信ずるやうになつた。俺は二十人餘の女を持つた。或ひは尙つと多いかも知れぬ。俺の美貌、俺の力はどの女の心をも自由にすることができた。しかし今になつて考へて見るとほんとうに心から打ち解けた女はなかつた。その中で初戀のミカルだけが生命を投げ出して俺を頼つて來た。だがサウル王のためにミカルは俺の手から奪はれて他の男にやられてしまつ

ミカルは再び俺のものになつた。しかし俺とミカルの初戀の日と、二度目にミカルが俺のところに歸つて來た日の間には十一年といふ時の隔りがあつた。時は、そして境遇は人の魂の上にまで恐ろしい力を持つてゐる。俺の手に取り戻されて來たミカルは昔のミカルではなかつた。俺も十一年の間には幾人もの女を知つてゐた。ミカルも他の男を知つてゐた。他の男を戀してゐた。俺とミカルは十一年前の戀の記憶だけを抱いて一緒になつたのであつた。ミカルの美貌は見ざめがするほど衰へてゐた。俺はミカルを奪ひかへしたことを後悔した。しかし再びミカルを敵の手に渡したくなかつた。俺は自分にすでに不用になつてゐた女さへ、敵にわたすことを惜しんで一生俺の城の中に押しこめて置いたのであつた。俺は一夜もミカルの部屋にはいつて行つたことはなかつた。ミカルは何から何まで俺の行爲に對して非難の態度を取つた。エルサレムの町にエホバの匱を迎へる時であつた、俺は町の若い女たちの間にエポデを着て踊つたことがあつた。城の窓から眺めてゐたミカルは、あの時から俺を（あなたはやつぱり牧羊者の子以上の人間にはなれません。あなたは卑しい女たちの前で裸になつて踊るやうな人間にできておいでなのです）と言つた。俺はあの時のミカルの眼ほど憎々しい冷淡な侮蔑の眼を見たことはない。牧羊者の子として生まれて來た俺はどこまでも牧羊者や市民たちと一緒に幸福を分つことのできる王であると信じてゐた。王の娘として育てられたミカルにはとても牧羊者や市民たちの幸福や悲しみはわからないのだと思つてゐた。しかし俺はこのごろになつてミカルこそほんとうにかれ等の道伴れであつたといふことを知つた。俺はあの高慢なミカルを尼寺に押し込めてしまつた。そこでもミカルの美しい魂は光つてゐた。尼寺の鳩や雀や小犬までがミカルの言葉を聽き分けたといふことを知つた。ミカルが俺から遠ざかつて靜かな淨い生活をつゞけてゐればゐるほど俺はミカルを憎んだ。俺にミカルを城の濠の下の牢舍に打ち込んでしまつた。そこでもミカルは暗の底から俺を冷笑してゐた。ミカルの周圍の囚人たちはまるでミカルを母のやうに懷かしがつてゐた。俺はミカル

を苦しめながらこれ見よがしに幾人もの美しい女を探して來た。しかし俺は恐らくミカル以上に苦しんでゐた。俺はミカルを幾度殺さうと思つたか知れない。しかしそのやうな時でも俺はミカルがあの初戀の日と同じやうな眼の輝きを見せて、俺の胸に飛び込んで來るかも知れないと夢のやうな想像を描いてゐたのであつた。ミカルは愛に於いても、憎みに於いても俺以上に强かつた。憎み合つた男女が一つの建物のなかに住んでゐる時、冷かに笑ひながら自分の苦痛や寂しさを耐へて行くのはほんとうの勇士でなければできぬ事だ。ミカルはそれを立派に仕遂げた。俺はミカルを抱き入れるか、でなければ殺すかでなければ、とてもぢつとしては、苦しくて、居れなかつた。俺は弱かつたからミカルを殺したのだ。俺はミカルのすべての生活を束縛して置いて、ミカルの青春を牢獄の中に投げ込んで置いて、ミカルが死ぬ日まで牢獄の鐵の門の前で美しい女を抱いて酒を飮んだり、踊つたりしてゐたんだ。俺はミカル一人の神の罰だけでども どんなに苦しいことでも忍ばなければならない……』ダビデは急に床の上に跪いて祈つた。かれの額からはぽた〳〵と汗が流れ落ちた。『だが、バルジライ―かつてあのやうに戀ひし合つた男女が、幾年の後には互に殺さうとするほど憎み合ふといふことができるといふのは、何といふ恐ろしいことなんだらう―俺は地の下の牢舍の中でミカルを殺した。しかし俺の憎みがそれほど强かつたからばかりではない。俺は愛せずに無關心で別れてゐることができなかつたからだ。神は俺のこの心持ちを理解してくれないのか!』ダビデは髮をくしや〳〵に摑んで悶へた。

『陛下、あなたは過去の四十年の間、あまりに働き過ぎなされたのです。お疲れになつたのです。ユダとイスラエルの國はあなたの御手ですつかり建設されました。あなたの大業はもう神におまかせなさつて宜い時になりました。陛下、わたくしと一緒にベテレヘムにお歸りなさい。またあすこから南の方の旅へ出ませう。まだあなたが角笛を吹いて羊を牧つて居られた曠野があのまゝ輝いてゐます。今、あすこでは野苺や野茱萸が紅い寶石のやうに熟れてゐるころでござ

います。若い男や女たちが、青い草原の上で笛を吹いたり、踊つたりして夜を更かしてゐるころでございます。豌豆の香ひや、無花果の熟りが薄暗の空氣に溶けこんで流れて來るころでございます。あなたはあのころから詩をお作りになることも、詩をおうたひになることもお上手でございました。』

『ほんとうに、俺はよくあのころ、お前に詩を作ることや、モーゼの律法を教へてもらつたりしたのう。俺もあのまゝお前のやうにあの草の中で子供たちに詩を作ることを教へたり、羊を牧ふてゐたりしたら、どんなにか幸福であつたかも知れぬ。そしたらミカルも……』

『陛下。まだ遲くはございません。折角わたくしがお迎へにまいりましたのでございます。わたくしと一緒にあの曠野におかへりなさいまして、昔の牧羊者のダビデにおなりなさい。御子さまの御病氣がおなほりになる日をしほにこのお城をお捨てなさいまして……』

ダビデはしばらく俯向いて、考へ込んでゐた。

『陛下。わたくしと一緒にあの曠野に……あすこにこそほんとうに人間の自由な、美しい生活がございます。胸いつぱいに涼しい野の空氣を吸ふことができます。』

『バルジライ！お前の言ふことはみんな俺にもわかる。俺も黄金の冠を捨てゝ、紫の衣を破つてあの曠い野に歸りたい。しかし既う遲過ぎる俺は野には歸れない……』

『何故でございます？陛下！』

『たとへ俺がベテレヘムや、更に南の國々の曠野に歸つて行つたところで、既う俺の心には自由はない？俺の胸はあの青い野の風を自由に呼吸するであらう。しかし俺の心には俺がどこに行かうと、ウリヤの蒼白い顏や、ミカルの冷たい

眼や、幾萬人といふ虐殺された男女たちの呪はしいうめき聲が刻みつけられてゐる。俺はたとへ一人になるまでもこゝに留つてゐて、最後の收穫の苦惱を嘗めなければならぬ。俺にはその時期が城の門口まで近づいて來てゐるやうな氣がしてならぬ。』

ダビデは打ちのめされた人のやうに疲れ果て、窓に凭れたまゝ、暮つて來た空を見つめてゐた。

『それでは陛下は何うしても曠野にはおかへりにはなりませぬか。あの平和な野の生活には……』

『既う、その話は止してくれ、俺を苦しめるばかりだから。俺は王としての力と王としての榮華と、王としてのほしいまゝな生活を貪つて來た。だから俺は今日からは何のやうな恐ろしい事件が持ち上つて來ようとも、やつぱり王者らしい苦惱、王者らしい悲歎を忍んで行かねばならぬ。俺は牧羊者の平和を求めて死なうとは思はぬ。俺は王者の光榮をめぐまれた日から、王者の苦惱をもめぐまれてゐたのだ。それを避けるのは卑怯だッ！光榮の冠をめぐまれた者は、當然荊棘の冠をも戴かねばならぬ筈だ！』

橄欖の森の中から立琴の音と一緒に歌の聲が聞えて來た。

『バルジライー、お聽きよ。メピボセテがまた(弓の歌)をうたつてゐる……』

老人はダビデと同じ窓に近づいて、耳に手をあてゝ森のなかの歌を聽いた。

『……ギルボアの山よ

ねがはくは汝の上に雨露くだることとあらざれ

供物の田圃もあらざれ

そはかしこに勇士の盾すてらるればなり

すなはちサウルの盾青をそゝがずしてかしこにすてらる
殺せし者の血をのまずしてヨナタンの弓は退かず
……サウルとヨナタンは愛らしく楽しげにして生死ともに離れじ二人は鷲よりも捷く獅子よりも強かりき
イスラエルの女等よサウルのために泣け
サウルは紅き衣をもて汝等をはなやかに粧ひ
黄金の飾りを汝等の衣につけたり
あゝ勇士は戰のうちにたほれたるかな……』

歌は途切れ途切れに聞えて來た。ダビデの心には戀人以上に愛してゐたヨナタンの戰死の日のことが思ひ出された。感激し易いかれの眼には涙が湛へられてゐた。

『メピボセテと申しますと？』老人が歌を聽きながら訊ねた。

『サウル王の孫だ。ヨナタンの子だ！氣の毒な子供でのう……』ダビデも窓に凭りかゝつて森の中を覗くやうにした。

ちようどその時であつた、廊下をあわたゞしく走つて來る人の跫音が聞えた。一人の若い侍從が部屋の入り口に跪いた

『陛下！御子さまのお脈搏が……』

『ひどく惡いとでもいふのか？』ダビデは振りかへつてさう言つた。かれの頰の筋肉がぴく〳〵と痙攣つた。

『はい、バテシバさまも、急いで陛下においで下されますやうにとのお言葉でございました。』

『そんなに心配なのか。よし直に行かう……』ダビデは扉口の方へ近づいて來た。

『それから』とちよつと言ひよどんで『あの立琴の……』と侍從は森の方を指した。

『メピボセテのか？』

『はい……』

『構ふことはない。父も殺され、祖父も殺され、たゞ世界に一人ぼつちの不具の少年だ。思ふまゝに琴でも彈かせたり、歌でもうたはして置け……』

ダビデは走るやうに廊下を歩いて行つた。侍從は王の後から痕いて行つた。

部屋にはたゞ一人のこされた老人がソーフアに凭りかゝつたまゝしばらく考へ込んでゐたが、間もなく再び快く眠りこけてしまつた。

橄欖の森からは絶えずしづかにメピボセテの立琴の歌が漂ふて來た。

×

病室にはいつて行つた。ダビデはそこに蠟石のやうな蒼白な顔をしたバテシバが病兒のベッドの傍に坐つてゐるのを見た。バテシバはダビデがはいつて來たのを見たが眼に涙をためて、たゞ唇を顫はせるだけで、言葉一つ語ることはできなかつた。半日見ない間に、バテシバは二年も三年も年をとつたやうに面やつれしてゐた。

『陛下。あまり何も召し上らないでは……』バテシバは美しい眼に不安な心持ちをあらはしながら、かう言つて王の顔を見た。王は頭を振つて見せた。部屋の中はお寺のやうに靜かで陰氣であつた。王は病人のベッドに近づいて行つて病兒の額に手をあてたり落ち窪んだ眼を覗いて見たりした。病兒は既う藻掻くほどの力もなく、幾度となく小刻みに手や足を痙攣るやうに動かすのであつた。病兒が動くたんびに小ひさな手や足の關節がひくひくと痙攣つてゐるのを見てゐるとダビデはかれが戰場で虐殺した無數の男女や色々な家畜の苦しい斷末魔の光景を想ひ出さずには居れなかつた。

ひいひいと咽喉をかすつて通る病兒の呼吸の音を聞くごとにかれは地下の獄舍で死んで行つた妻のミカルや、また戰場でたばかり殺されたウリヤの傷ましい最期を聯想せずには居れなかつた。痩せ衰へた病兒の額には老人のやうな醜い皺さへ刻まれてあつた。燧石のやうな顏や、落ち窪んだ眼窩にはやゝもすれば憎々しいほどの理智的な冷たさが漂ふてゐた。それが、冷笑しながら祭りの日のかれの裸躰を城の窓から覗いてゐたミカルの憎々しい眼を聯想させることもあつた。哀悔と憎惡と自責の念が一時にかれの胸に迫つて來るのであつた。

かれはいつまでもぢつとして病兒の前に坐つてゐることはできなかつた。かれを責むる神の聲が、かれの魂を窒息せしむるやうにさへ想はれるのであつた。

かれは再び、橄欖の森を眞下に見る塔のなかに逃げるやうにして歸つて行つた。

×

今日もダビデは斷食と忌はしい全身の皮膚のたゞれになやみながらも、終日塔と嬰兒の病室との間を幾度となく往き來してゐた。

可なり夜が更けてから、かれは疲れ切つた躰を塔のなかに運んで來た。そして入口の扉を部屋の中から鎖してしまつた。部屋の中は暗かつた。月の光りが部屋の床の三分の一ばかりを、幾何學的な規則正しい輪廓を描いて青白く照らしてゐた。

二日前に老人のバルジライと、かれが語つてゐたソーフアはそのまゝの場所に置かれてあつた。たゞ變つてゐるのはソーフアに凭りかゝつた老人がゐないことゝ、北の窓が鎖されてゐることだけであつた。かれは昨夜侍女たちに命じて北の窓を決して二度と開かないやうに嚴しく命じて置いたのであつた。

入り口の扉を鎖してじまつたダビデは急に激しい疲勞を感じたやうにひよろ〳〵とよろめきながらソーファの方へ近づいて行つた。扉口から七八間ばかり隔つたソーファまで歩く間に、かれは二度床の上に躓かうとして、辛ふじて體の釣合ひを取ることができた。かれの大きな肉體をソーファの上に投げかけた時ソーファの脚がめり〳〵と音を立てた。かれは非常に疲れ切つてゐた。

兩腕でソーファにかぢりつくやうにして、かれは小半時も苦痛な呼吸をつゞけてゐた。かれは呻いてゐたのであつた。

大抵の男はダビデの前に立つとまるで子供のやうに思はれるくらい、ダビデは偉大な體軀を持つてゐた。獅子を搏ち殺したかれの腕は大抵の男の股くらゐの大きさを持つてゐた。南の窓から射して來る月の光りに巨大な肉體を照らされて呻いてゐるダビデの姿は、凄壯な感じを與へた。殊に俯つ伏せになつてゐるかれの腹のどん底から絞り出されて來る呻き聲は傷づいた荒野の獅子を聯想させた。

或る時は塔の中に流れて來る月の光りがかすかに曇つた。また或る時は瞬間的に目立つてはつきりと月の光りが明るくなつた。かれははつと起き上つた。そして窓から夜の空を見つめた。かれの長い髮の毛が、かれの蒼白い顏に深い影を作つた。かれはソーファから離れて北の窓の方へ歩いて行かうとした。かれは躓いた。躊躇した。かれはしばらく起き上らうとはしなかつた。やがて床の上を病犬のやうに腹這つて、北の窓の傍へ近づいて行つて、そこにあつた水瓶を顚く兩手で掴んで、やにはに水をあふつた。そこは月の影が射してゐなかつたので、かれの擧動ははつきりは分らなかつたが、たゞかれがぐび〳〵と水を貪り飲む音と、野獸のやうな呻き聲のみがつゞいて聞えてゐた。かれは北の窓の前に立つて可なり長い間ためらふてゐた。しかしたうとうかれがやがて北の窓の一つを無理にこぢ明ける音が聞えた。かれ

の巨大な髑髏の陰影が窓の中央に、夜の空を背景として、描き出された。かつて獅子を搏ち、ペリシテ人の眉をへし曲げたかれの腕は、顫へながら窓の横木を鷲摑みに摑んでゐた。かれは墓場からよみがへつて來たばかりの人のやうな蒼白な顔をして北方の丘の上を見つめてゐた。

そこには死のやうな靜かな夜が漂ふてゐた。

小ひさな丘の上にも、丘の麓にも月の光りに照らされた白い石造りの建物が列んでゐた。すべての建物の一つ一つの窓からは夜の霧に煙つた燈がまたゝいてゐた。花の香がしめつぽい夜氣につゝまれて窓から流れて來た。

かれはその丘の上に一つの燈さへ持たないウリヤの白い建物を見た。他の建物の窓といふ窓からは黄橙色の燭がまたゝいてゐるのに、丘の一番高い所にあるウリヤの館の窓だけがすべて鎖されてゐるのが、殊に目立つて見えた。月の光りに照らされたウリヤの館の廢墟は捨てられた髑髏のやうに見えた。かれが視線を替へようとすればするほど髑髏の建物はかれの心を惹きつけるのであつた。

羊の肉を焚たり、羊の血を柱に塗る香氣のが街の方から柔かな風につれて漂ふて來るのであつた。逾越の節が近づいて來たことがダビデの心に浮かんで來た。月の光りと一緒に、若い女たちのからからと笑ふ樂しげな聲がどこからともなく響いて來るやうにも想はれた。世界中の人たちがみんな幸福で、かれ一人のみが悲しみや、後悔や自責の念に囚へられた不幸な人間であるやうな氣がしてならなかつた。

かれは尙一度脚をとゞめて水瓶を摑み上げた。そして貪るやうに音を立てゝ水を飲んだ。かれは北の窓を鎖してしまつた。そして五六歩、歩き出したが、深い溜息をついて、ぐつたり窓の脇の椅子に腰を卸してしまつた。

どこかで物の音がしたのでかれは聽き耳を立てゝ部屋の外の物音を聽き取らうとしたが、音は滅へてしまつた。森の

中で夜の鳥が啼いたのであつた。かれは疲れ切つた軀を椅子に凭せかけたまゝ眠りこけてしまつた。

二度目にかれが眼をさました時は、月の光りが南の窓からはいつて、部屋の東の一小部分だけを照らしてゐた。月は既う橄欖の森の西の端の方へ落ちかゝつてゐた。

かれは疲れ切つた眼をひらいて空を見た。紫色の星が一つきら／＼と輝いてゐた。

×

かれの頭には老人バルジライの言葉が思ひ出された。毎年夏の終りから翌年の春が近づくころまで羊の群を追ふては南の方へ旅をつゞけて行つた少年時代のことを想ひ出した。父のエサイや母を中心にして八人の子供たちが草原の天幕のなかで逾越の節を送つた日のことなどが、はつきりとかれの頭に浮かんで來るのであつた。少年にとつては草原の中の牧羊者の生活ほど單純なそして蠱惑的なものはなかつた。牧羊者たちは毎年群を作つては羊を追ふて南方の草の青い地方へ旅に出かけて行くのであつた。十日も二十日もかれ等は青い草原を横切つて羊を追ひながら南へ南へと旅をつゞけるのであつた。青い空と、白い雲だけが歩いても歩いても盡きることなくかれ等の前途に横はつてゐた。青い草原を埋めた白い雲のやうな羊の群と、草原から草原へ響く牧笛と、草の中に連ねられた天幕とがかれ等の生活のすべてゞあつた。人々は大抵起伏した草原の中の池や湖に近く、風を避ける木立の陰などを選んで天幕を張つた。夕暮になると殊に牧笛のものさびしい音が、丘から丘、草から草へと響いて行くのであつた。草の蔭の天幕の中からは小ひさな燈の光りが一つづゝ洩れて來るのであつた。月の夜など大抵の天幕の中からは笛だの、提琴の音などが響いて來た。人々は野葡萄を絞つて作つた酒を飲んでは歌をうたつた。春が近づいて來るころになると人々は急に故郷を戀ひしがつた。そのころになると夜の天幕のなかでは昔かれ等の祖先が、異邦人のために囚はれて望郷の悲しみをうたつた詩が多くうたはれた。

『われらバビロンの川のほとりにすわり
シオンをおもひいでゝ涙をながしぬ
われらそのあたりの柳にわが琴をかけたり……』

といふ歌が一つの天幕の中から響いて來ると、歌は一つの天幕から、更に他の一つの天幕へとうたはれて行くのであつた。そしてしまひには幾百と列んだ草原のすべての天幕から望郷の悲歌が響いて來るのであつた。ダビデはそのやうな時よく父が歌をうたひ終つてから眼に涙をためてゐるのを見たことがあつた。少年の心にも日一日と故郷が近づいて來るといふことがうれしかつた。ダビデも兄弟たちと一緒に天幕のなかに寢ては暗い燈の下で、故郷までの道程のことなどを語り合つた。

異邦人や、野獸の襲撃に備へるために、一つの天幕から一人づゝの男子がかはる〲武器を取つて夜警に出かけて行つた。かれ等は大抵展望の利く小高ひ丘の上などに別に天幕を張つて、その中に夜を徹してゐた。ダビデもよく父の劍を借りては夜警に出かけて行つた。かれは夜警所の天幕の中から幾度も紫色の星を見た。季節の移り替りや、かれ等の地理上の位置などの知識は、大抵は夜の星によつて判斷せられてゐたので、かれ等は少年のころから星の名や、星の移動についてはいろ〲な知識を與へられるのであつた。

紫の星が天幕の中に坐つてゐて覗かれるくらゐ南の地平線の方に近づいて來れば、かれ等は間もなく春が來ることを知つてゐた。

紫の星が南の地平線へ近づいたころであつた。望郷の歌が夜毎天幕の中から漂ふて來るころであつた。かれの弟の一人が、夜道を迷つて沼に落ちて死んだ。父や母と七人の子供たちが弟の骸を守つて天幕の中に悲しい夜を送つたことが

あつた。その後かれの一家には不幸がつゞいた。翌年の旅でも紫の星が地平線に近づいたころ更に倚一人の弟が天幕の中で死んだが、その翌々年の同じころの草原の天幕の中で、美しい、そして氣のやさしかつた母の骸が、一人の夫と六人の子供たちに守られて異郷の草原の中に葬らるゝことになつた。ダビデはその時母の屍にすがりついて泣いた。それ以來かれは紫の星を見るごとに、異郷の草原の中に埋められた弟のことや母のことを思ひ出すのであつた。母はかれにとつてこの世界で最もやさしい、懐かしい人であつた。かれは王位に即いてからも草原の中に埋められた母を想ふて幾度か泣いた。かれは人々に命じて母の墓場を草原のなかに探させたが、たうとう見出すこともできなかつた。

牧羊者の群は一ケ月も草原を歩いても一つの町をも見出さないこともあつた。しかし大抵は十日か二十日くらゐの旅をつゞけてゐると草原の中に小さな町を見出すことができた。そこではかれ等は町の人々に肥へた羊を與へて、驢馬や、牛や、美しい衣や、武器などと交換することもあつた。町にたどりついた日、ダビデは、交換されて町の人の手にわたされて行く父の羊を悲しんだ。かれは賣られて行く羊の首に抱きついて泣いたこともあつた。

寂しい、賴りない生活ではあつたが、草原の牧羊者の生活には忘れがたい、原始人の魂をゆりうごかすほどの生活の靈感が潜んでゐた。そこでは父と母、父と子、兄と弟、隣人と隣人、すべてが信じ合ひ扶け合ひ、賴り合つてゐた。そこでは人々は太陽の光りと、微風と、若い妻と、美しい流れと、肥へた青い草の他には何物をも要求しなかつた。そこでは何時も最も謙虚な心をもつて神への祈りがさゝげられた。そこでは父は子のために、また妻は夫のためにいつでも自分の生命を賭するだけの美しい骨肉の情愛が見出された。無邊際な大草原の中のさゝやかな天幕のうちには母と子供たちが、或る時は抱き合つて恐ろしい暴風雨の夜を送ることもあつた。

『俺の心はたまらなく寂しい。俺は世界にたゞ一人なのだ。俺はたゞ一人で宮殿を出て、あの草原に歸つて行かうか。ベルジライと一緒に草原のなかに歸らうか？あすこにほほんとうな俺の休息所があるのではないだらうか？』

かれは紫の星を見ながら、こんなことを思つた。

廊下を走つてゐる輕い跫音が聞えて、やがて再び元の靜さにかへつた。かれは病室の嬰兒のことを思つた。かれの肉體が一時に打ち碎かれたやうに思はれた。かれは呻くやうに溜息をついた。

月がすつかり橄欖の森にかくれてしまつた。遠くで鷄の聲が聞えた。塔のなかは土牢のやうに暗かつた。南の窓の輪廓だけがくつきりと戸外の光りを背景として暗のなかに浮き上つてゐた。

ダビデの大きな肉體が時折暗がりの底にわづかに動めいてゐるのが、墓場をあさつてゐる動物の影を聯想させた。

暗い部屋のなかゝら呻き聲と共にかれの言葉が途切れ途切れにひとしきり聞えた。

『ミカルに犯しましたわたくしの罪、ウリヤに犯しましたわたくしの罪……すべての罪の負ひ目をわたくし自身の上にお投げ下さい。幼い者の魂と肉體とをお救ひ下さい。わたくしの肉を壞り、魂を裂き給ふて……わたくしの……はゆふ日の影のやうに、また蝗のやうに吹き去られました。……膝は斷食でよろめき、肉はやせおとろへました……息さへ……あなたの御顏をわたくしのすべての罪からそむけてください。すべてのわたくしの不義をお消し下さい。わたくのために淸い心を作り、わたくしの裏に素直な魂を新たにおこして下さい……わたくしの肉には全きところなく、骨は疼き、傷は惡臭をはなつて腐れたゞれて居ります……終日かなしみ歩き……腰は焼けるやうに……歔欷は……溜息はあなたのお耳に……友も兄弟もわたくしを遠ざかつて蹟を……かつてわたくしはあなたの正しい道のために、またイスラエルやユダの人々のために四十年の間絶へず恐ろしい戰に立ち、苦しい流浪にも耐へました。わたくしを殺さうとした敵

を救ひ、わたくしに投げ槍を投げた人々のためにも涙を流しました。あなたの眼はそのやうなことをも見ておいでになる筈です…嬰兒の纖弱い吐息はあなたの耳に響くでございませう…夜になればわたくしの骨は刺され、肉は蟲に噛まれて眠ることさへできませぬ。皮膚はたゞれて裏衣にこびりついては、衣を替へるごとに全身を刺すやうに疼きます。あなたはわたくしを泥のなかに投げたまふてかへりみる者もないやうになさいました。わたくしは人間の伴侶でなく山犬や死にかゝつた牛の仲間となりました。…しかしわたくしは何のやうな苦惱をも耐へます、わたくしの過去の罪のために。たゞ無垢な嬰兒の病を救つてください。あなたは愛の神さまではございませんか。あの少年の呻き聲を…既うあの子は苦しい呻き聲を絞ることさへできなくなつてゐます。わたくしの肉の惱み、わたくしの骨の疼きをなほ十倍も百倍もになすつて下さい。そして嬰兒の苦しみを…あなたはわたくしの呻き聲をお聽き下さい。あなたの革嚢にわたくしの涙を盛つて下さい…』

×

ダビデはその夜から橄欖の森の中に走つて行つて、衣を裂き、頭に土を冠つて夜つぴて地の上に身を投げ出して嬰兒のために祈つた。或る時はかれは終夜雨とあらしのために土の中に埋めらるゝほどの苦痛をも忍んだ。かれの皮膚を喰つて破つてゐた腫物がただれ腐るやうなにほひの膿血をもつて全身を掩ふた。呻き、苦しみ祈るかれの聲が森のなかに聞えた。エホバの名と共にウリヤやミカルに對する懺悔の言葉がかれの口から繰りかへされた。

かれの絕食の七日目の午後嬰兒は死んだ。人々は嬰兒の死をかれに傳へることを恐れた。晝夜森の土にまみれ呻いてゐる巨人の姿を見るだけでも大抵の男たちは顫へ上つた。

しかしかれは城の方から響いて來た人々の泣き聲によつて嬰兒の死を直覺した。

かれは地から起きた。かれの裂かれた衣の間からは、たゞれた肉があらはに見えてゐた。かつて全ユダの女たちに美の化身のやうに崇められたゝへられたかれの顔は、土と腫物の膿血に汚されて、癩病患者のやうに黒くなつてゐた。かれが森から城の方へ近づいて行つた時、侍從長は跪いて嬰兒の死を告げた。かれはぢつと侍從長の顔を見つめてゐたが、その眼には絶望の悲しみと同時に、かれが敵を虐殺した折に見られた深い憎惡の影が動いてゐた。

かれは侍從長に命じて逾越の節のために準備せられてあつた小羊の肉と酒とを食卓の上に飾らせた。かれは七日間の絶食を一度に取り戻さうとするかのやうに、わなわなと顫へてゐる兩方の手で、肉を掴んで貪り食つた。

數日の後嬰兒の葬ひが城の外の丘の墓場で營まれた。

かれはまだ絶食の疲勞がすつかり恢復してはゐなかつたが、柩車の後から歩いて墓場まで行つた。墓場に行つてからもかれは二度柩の蓋を明けさして嬰兒の顔を覗いた。そして嬰兒の柩に涙を落した。

かれはその夜橄欖の森の周圍に篝火を焚かせ、塔のなかには眩いほどの七つの燈を飾らせた。かれは沐浴して、全身に香油を塗り、美しい衣を着かざつて、塔のなかにはいつて來た。かれの後からは老人バルジライが心配さうな顔つきをしてついて來た。

ダビデは體中の腫物が刺すやうに痛むので、時折り暗い顔をしたが、かれの態度は毅然として或るものに對する深い反抗を誇示してゐるやうに想はれた。そして忌々しげに唇を嚙んだり、兩腕を深く組んで不快げに部屋の中を歩いたりした。かれには七日間も絶食した後の人のやうな疲勞の痕はほとんど見られなくなつてゐた。

『陛下！何であなたはこのやうに城の中の建物といふ建物から森にいたるまでも燈を飾つたり、羊の肉を飾つたり、酒嚢の口を破つたりなさるのです。あなたのなさり方は者死の想ひ出のためではなく、まるでお祭のやうな……』

「パルジライ！お前のいふことはほんとうだ。まつたくは亡くなつた嬰兒のためにしづかな通夜でもしなければならぬかも知れぬ。しかし俺は無理にも俺の決心に勇氣を與へなければならぬやうになつた。俺はそのために葬ひの夜のしめやかな儀式のかはりに、出陣の日の賑かな酒宴を開くつもりなのだ。」

「イスラエルもユダも幾十年來見たことのないほどの泰平を樂しんで居りますのに、あなたは何處に敵を見出されたのですか？」

「俺の敵はバビロンにもゐる。埃及にもゐる。俺は生きてゐる間は俺の人間の力のかぎりを働かせなければならぬ。しかしまた俺の敵は俺の心の底にも潜んでゐる。神を賴り過ぎる弱い心である。自分の過去の行爲に對する後悔の念である。これは自分の心を奴隷にする。俺はこのころ卑怯であつた。過去の罪惡に對して神の赦しを願ふために、卑怯にも神に祈つた。神は俺の卑怯な、打算的な祈りを冷笑ふてゐるであらう。俺は衣を裂き、土を冠つて森のなかに野良犬のやうなあさましい幾晝夜を苦しんで祈つた。俺はユダとイスラエルの人たちを統ぶる王ではないか。それだのに俺は神の前に乞丐でも忍んだことのないほどなみぢめな、耻づべき姿になつて祈つた。神は何を俺に與へたか？……あゝあの罪もない嬰兒の死ッ！これが俺の乞丐のやうな、奴隷のやうな屈辱的な祈りの日に對する神の施物なのだッ！……何といふ俺は馬鹿な、卑怯な人間になつたのだらう！俺は神を賴つてはならぬ。俺はこの腕で、俺自身の力でユダとイスラエルの人たちを統一したのだ。神の力ではない。人間の力だッ！」

「陛下！あなたは御子さまの悲しい死のためにあまり神經をお痛めになつたので、昂奮のあまり、そのやうなことを仰つしやるのでせうが、それは神の怒りを更に增すものでございます……」バルジライの聲は顫へてゐた。

「でもお前は、神は殘忍だ、神には矛盾がある。神にはたゞ神の意志を永遠に貫き通す力だけがある。神は力のみだと

いふことを俺に語つたことがあるではないか。俺は神の怒りを恐れない。俺は人間の力が神の力に比べて如何に弱い、脆いものであるかを知つてゐる。しかし人間は人間であればいゝのだ。神の力を借りようとするのは愚だ。卑怯だ。敗けることを恐れて戰はぬのは臆病だ。俺は神に對して戰ふ時、無殘に敗られることを知つてゐる。しかし俺は既う神の前に跪かうとは思はぬ。俺はこの上になほ敗れようと、踏みにぢられようと恐れない。俺は俺一人の力で忍べるまで忍んで行く。何のやうな恐ろしい疫病でも俺を襲へ。俺のこの不快な耳鳴りが俺に虐殺されたペリシテ人の呻き聲を夜晝呻つても宜い。バビロンや埃及の王たちが一度に俺の城に押し寄せて來ても宜い。俺は俺一人で立つ。俺一人の力で戰つて見せる……』

『陛下。あなたは今夜はあまり感情が昂ぶつておいでになります。エホバは呪ひの神でございます。嫉みの神でございます。たゞわたくしたちは神の御心にさからはぬやうにするより他はないのでございます。あなたは既う人間の光榮の絶頂におのぼり盡しなされました。あなたは御自分の將來のことを靜かにお考へなさらねばなりませぬあなたは御子さまの悲しみのために御自分の魂をお傷けになつてはなりませぬ。深い悲しみほど尊い潤ひを魂にあたへてくれます。あなたはあの南の草原の靜かな生活にお還りなさい。御子さまのおかくれになつたのをよいしほになさつて……』

『バルジライ！お前の行く道と、俺の行く道は最初から違つてゐた。だから後になれば後になるほど二つの道は遠ざかつて行く。既うそんなことは語つてくれるな。俺は悲しみや、不幸が重なつて來るたんびに、そして俺ひとりになるたんびにだん／＼強くなつて行くことができる……』

『ですが……陛下……』と老人が語り出さうとした時、急に橄欖の森の中から群集の合唱の聲が響いて來た。それはユダの人たちがダビデに連れられてバビロンの戰場からの歸りにうたつた凱歌であつた。

「何といふ場所知らずな、時をわきまへぬ……」老人は窓から森を覗いて獨語ちた。

「あれは俺がうたはせたのだ、俺が。お前には今夜はあの歌はうたへないだらう。若い男たちの劍は葬ひの夜でも、戰場に出て敵の血を吸はうとうなつてゐるのだ……」

「わたくしは今夜、お葬ひの夜にこんな亂雜な……わたくしには耐へ切れません……あなたが仰つしやる通り、わたくしとあなたとは歩かねばならぬ道が最初からちがつてゐたことを今氣付きました。わたくしは明日、南への故郷歸ります。わたくしは……」老人は扉を排して出て行つてしまつた。

「ハツハツハツ……たうとうバルジライが怒つてしまつた……」ダビデは笑ひながら老人の後をしばらく見送つてゐた。

老人が出て行つてしまつてから、ダビデは一人で部屋のなかを歩いてゐた。そして窓の傍に立ちとまつては森の周圍の篝火を見つめてゐたが、つまらなさうにソーフアに全身を投げかけては、深い溜息をついた。かれの心には亡くなつた嬰兒の顏や眼が、はつきりとよみがへつて來るのであつた。かれは室の中の燭や、戸外の花やうな篝火や、音樂をもまつたく意識しないまでに考へ込んでしまつた。小半時も、亡くなつた嬰兒のことを考へてゐたかれは、ちつとしてソーフアに腰を卸してゐることができなくなつて、再び部屋のなかを歩き出した。かれは南の窓を締めてしまつた。次には部屋のなかにあつた七つの燈をすつかり消してしまつた。かれは一つの燭もない部屋のなかで再びソーフアに凭りかゝつたまゝ考へ込んでしまつた。

×

「こんな弱いことを考へては駄目だツ！」かれは自分を叱るやうに獨語ちた。かれの頭には嬰兒が死んだ日、かれが羊の肉を食り食つたこと、やさつきバルジライと諍つたかれ自身の言葉などが泛かんで來るのであつた。同時にかれの行

爲を批判してゐる或る嚴肅な實在が、或る超自然的な力が、はつきりとかれの心に映つて來るのであつた。

『エホバの前に跪けッ！……馬鹿、斯う俺は二度と跪いてはならぬ。俺は奴隷ではない。俺は國王だ！』かれは忌々しさうに舌打ちをした。しかし、何うしてもかれの決心を神の方へ引き戾さうとする或る力が、かれを脅かすやうに思はれてならなかつたので、かれはソーフアから立ち上つて、いらいらしげに部屋のなかを歩いた。

靜かな跫音がして喪服を着た若い女が塔のなかにはいつて來た。

『お父さま！いらつしやるんですか？』

若い女の美しい聲が暗い部屋の中に響いて來た。王はしばらく耳を傾けてゐた。森の音樂がともすれば女の聲を打ち消してしまふのであつた。

『お父さま！……』

『たれだ。俺はこゝにゐるよ……』

『あたしです。何處にいらつしやるのお父さま？ばかに暗いぢやありませんか。なぜ明りをおつけにならないの？お父さま。あたし何だか恐い……』

『ふゝむ、タマルかい？お父さんはこゝにゐるよ、窓のわきに……』

タマル姫は窓を探つて行つて南の窓を明けた。

青い月の光りにタマル姫の美しい顔と、品よくふくらんだ胸のあたりがはつきりと照らされた。森の篝火が窓から見えた。

『お父さまは何故ひりいでこゝにいらつしやるの？何故明りを消しておしまひなすつたの？戸外ではあんなに篝火を焚

かしたり、音樂をやらしたりなすつたくすに？』

『……………』

王は默り込んで、月の光りに映つてゐるタマル姫の美しい顔を見つめてゐた。

『今夜は坊やは山のお墓のなかで、ひとりで眠つてゐるんですねえ？寂しいでせうねえ！』

『……………』

『お父さま、あんな騒々しい音樂は止すやうになすつては何うです？　だつて坊はひとりでお山に眠つてゐるんですもの……』

『……………』

『止さしていゝでせう。それからついでに篝火も消さしてしまつて。ねえ……』

タマル姫はソーフアの傍に近寄つて來て、父の顔を覗き込んだ。

『お前のいゝやうにおし……』ダビデはかう言つて、ぼんやりタマル姫の顔を見てゐた。

タマル姫が部屋を出て行つて間もなく、音樂の音がはたと止つてしまつた。王はその間身動きもしないで暗の中に默り込んでゐた。

『靜になつたでせう！篝火も滅さしてしまふやうに言ひつけてきましたの……』と言ひながらタマル姫が再び部屋のなかにはいつて來た。窓を通して見られる森の篝火が一つ一つぽつり〳〵と滅されて行つた。

『お父さま坊やはほんとうに可哀さうね。死ぬつて何うするんでせう？何故人間は死ぬんでせう！』タマル姫は父の肩に手を投げかけやうとしたが、王が腫物で苦しんでゐることを思ひ出したので、そうつと手を引き込めてしまつた。

『死ぬつてかい？』

『えゝ……』

『………』王はしばらく考へ込んでゐたが吐き出すやうに『お父さんにもわからない。』

『人間は誰でも死なゝければならないの？　死なゝい方法はないものでせうか？』

『誰でも死なねばならぬ。直に死なねばならぬ……』

『死ぬつて何うするんでせうね。考へてみるとたまらなく寂しいことですねえ……』タマル姫は父のソーファに凭りかゝりながら窓の外の月の光りを眺めた。

『お前のやうに若い人はまだ死ぬことなんか考へない方がいゝ。若いうちにはできるだけ面白く暮した方がいゝ。死ぬことだの、いろ〳〵な心配なことなどは、いやでも年を取ると向ふの方から近づいて來るものだから……』

『だつて、坊やのやうな小ひさい人さへ死ぬんですもの。誰だつて考へさせられますもの……』

『お父さんはばかに今夜は寂しくなつた。だから今夜は何か面白い話でもしておくれ……』

『ぢや、明りをつけてからにしませうか？』

『いゝや、明りはなくてもいゝ。』

『さう。ぢやそのまゝにしませう。何を話しませう？』

『何でもいゝ、お前の好きな話を……こなひだダマスコのお客さまが見えたらう？あの時お前も晩餐の席に出たかい？』

『はい、出ました。』

『それではあの時の話でもいゝ。何か面白い話でもあつたかい？』

『ダマスコのお客さまが何か兄さんなんかと話してゐましたけれど、あたしなんかにはわからないことなんですもの。兄さんたちど何か話してはあたしの顔を見て笑つたりするんですもの……』

『アムノンにも出るやうに言つて置いたが出てくれたかい？』

『えゝ、アムノン兄さんも出ました。あツ、さうでした、晩餐の席の上でアムノン兄さんとうちのアブサロム兄さんがいさかひをしましたよ。』

『何うして？』

『よくはわからないんですけど、アムノン兄さんがあたしに、自分のわきに來て酒を注いでくれと仰つしやつたのです。さうするとうちのアブサロム兄さんが、タマルにはそんなことをさしてはいけないと言つたのです。そんなことも何かの原因になつてゐるんぢやないかと思ひます……』

『それでアムノンは何うした？』

『アムノン兄さんは無理にあたしの腕をぎゆつと握るんですもの、あたしびつくらしました。それでうちのアブサロム兄さんが立つて來てアムノン兄さんを押しやるやうなことをなすつたのです……アブサロム兄さんとあたしは一緒にうちの方へ歸りましたが、アムノン兄さんが後から追ひついて來てアブサロム兄さんに何か言ひました。それで二人は庭で劍を拔きました……』

『劍を拔いた？どつちから早く？』

『うちのアブサロム兄さんから……でも人が來て止めましたので何事もありませんでしたの。』

『そんなことがあつたからでもあらう、このごろアブサロムも、アムノンも一向俺のところに寄りつかぬ……』

『アムノン兄さんは時々恐いと思ふことがあるんですよ。あたしが一人でさへ歩いてゐると、何處からかひよつくり出て來なすつては、あたしの手を握つたり、無理にも御自分の家にあたしを連れて行かうとなさるんですもの！』

『アムノンがかい？お前を。』

ダビデの胸にはその刹那に稲妻のやうに或る不快な暗い聯想が湧いた。

アムノンはダビデの妾アヒノアムが生んだ子で、アブサロムとタマル姫はダビデの妾タルマイが生んだ子たちであつた。

アブサロムはユダヤイスラエルの若い女たちの話題にいつものぼつてゐた。若い女たちは、王子アブサロムが一人ゐるためにエルサレムの城が輝くといふやうな歌をいつもうたつてゐた。妹のタマル姫も兄に劣らぬほどの美貌を持つてゐた。實際ダビデの腹違ひの三十餘人の子供たちのうちで、アブサロムとタマル姫はエルサレムの光りであつた。ダビデでさへアブサロムとタマル姫が二人で庭などを歩いてゐるのを見ると、その美しさに魅せられてぢいつと見つめてゐることがあつた。

母のタルマイがタマル姫を生んで間もなく死んでしまつたので、アブサロムは自然タマル姫に對しては母の役目をもしなければならなかつた。アブサロムは妹のタマルのためには、何のやうな苦痛をもよろこんでさゝげるのであつた。

『隨分あたし困つてしまふのです。あたしほんとうにアムノン兄さんはきらひですの。あたしが知らないでゐると酒臭い息をして、出し拔けに飛んで來ては、あたしの顔なんかに口づけをしようとなさるんですもの……』タマル姫の頬には娘らしい羞恥の色が動いた。

『アムノンの馬鹿奴ッ！何といふ……』ダビデの聲は顫へてゐた。かれは昂奮し切つた顔をして窓の方を眺めた。ひそかにタマル姫の後を蹤けて行く遊蕩兒アムノンの、情火に燃えた眼や、紅い唇がかれの頭に描かるゝのであつた。

しばらく沈默がつゞいた。

何處からか打ち沈んだ音樂の音が聞えて來た。

『禮拜堂でせうか？』タマルは耳を傾けて訊ねた。

『あゝ、さうだらう。坊やのために夜のお祈りがはじまつたのだらう……』

ダビデもぢいつと耳を傾けて、靜かに漂ふて來る音樂を聽いてゐた。

『明りをつけませうか？つけても宜いでせう。お父さま……』

『あゝそんなにつけたいなら一つだけおつけ……』

タマル姫は探りながら廊下に出て行つた。しばらく經つてから、タマル姫の後から一人の女が燭を持つて來て、部屋の中央の燭を點けて、かすかな跫音を立てゝ部屋を出て行つた。

蒼白い、衰へ切つたダビテの顔と、白い百合の花を聯想させるやうな崇高い、美しい、何んな男をも惹きつけずには置かないタマル姫の顔とが、一つの燭に照らされた。切れの長い柔和な眼、寛かな白い額が、いかにも親と子といふことを誰にもうなづかせるほど似てゐた。

『あゝ、これで何だか樂になりました。さつきは陰氣で息がつまつてしまひさうでした……』タマル姫は物珍らしげに部屋の中を歩きまはつた。

『今度もし、アムノンが馬鹿な眞似をお前にするやうなことがあつたら、言つてやつたがいゝ、俺がその分では置かな

いと話してゐたと。』ダビデの胸には、滅さうとしても滅すことのできない醜い聯想がそれからそれへと湧いて來るのであつた。

『アムノン兄さんと、うちのアブサロム兄さんとは何うしてあんなにまで違ふのでせう？あたしアムノン兄さんは顔を見るだけでもいやだと思ふことがありますよ。あんなにいやな顔をして、それでゐて何だかあたしの顔さへ見ればにや〳〵笑つてゐるんですもの。うちのアブサロム兄さんでしたら、誰だつて褒めない人はないんですよ。お父さまのお若い時そつくりだつて言つてゐますよ。ほんとうに奇麗な方だと思ひます。親切で、やさしくつて、誰にでも可愛がられるのですものねえ……』

『まつたく、俺の子供のうちでお前の兄さんほど男らしい子はない。またあの子くらゐ俺が可愛いゝと思つた子はなかつた……』ダビデは遠い懐かしい日の思ひ出をたどるかのやうに月の光りに照らされてゐる森の方を眺めた。『お前ははつきり憶へてゐないだらうが、お前たちのおつ母さんくらゐ美しい女もなかつた。またあんなに氣のやさしい人もなかつた。その血を享けついだアブサロムにしろ、お前にしろ誰よりも、美しくもありやさしくもある。俺がお前たち二人を誰よりも可愛がつてゐることはお前にもよくわかつてゐるだらう……』とこゝまで語つて來た時、ダビデは不圖話を切つてしまつた。かれはその刹那に自分の心のうちに或る不快な回想が頭を擡げて來たことに氣付いたからであつた。

『えゝ、お父さまくらゐ兄さんやあたしたちを可愛がつてくれる人が世界にあるものですか。それにお父さんくらゐ慈悲深い王さまは世界にないつて誰も言つてゐます。お父さまのやうに國の人たちのためにも、土を冠つて斷食をしたり御自分ではいつも不自由な思ひをして國の人たちの貢物を少くしたり、牛や馬を可愛がつてやるために立派な法律を拵へたりなさる王さまは、世界にないつて言つてゐます。お父さまの世になつてから小鳥の巣を取る者もなくなつたつて

中します。百姓たちが喜んで旅人たちのために葡萄畑の隅を殘して置いたり、貧しい人たちのために落穗を拾てゝ置くやうになつたのも、みんなお父さまのおかげだつて言つてゐます。あたしお父さまのやうな善い方を持つてるんですもの、どんなにうれしいか知れません。それにお父さまはうちのアブサロム兄さんとあたしを一等可愛がつて下さるんですもの……」

×

ダビデは默り込んでタマル姫の言葉を聽いてゐた。他の子供たちや、妻や妾たちに隱れてタマルの母とアブサロム兄妹を連れて、ガリラヤの湖に舟を泛かべた夜のことなどが、かれの頭に泛かんで來た。年上のアムノンが野卑な、愚物であるのに對して、年下のアブサロムは容貌ばかりではなく、その人物の大きい點までもダビデそつくりであつた。ダビデは三十餘人の子供のうちで、アブサロムを自分の後繼者に立てる考であつたのであつた。

ところがアブサロムの病身な母が死んでから間もなくであつた、ダビデとアブサロムの間には、今までかれ等が少しも氣付かなかつた暗い溝がいつとはなしに二人の間に築かれてゐることをかれ等は知らなければならなかつた。

どの子にも增してアブサロムを愛してゐたダビデは、そのことに氣付いた時非常に驚いた。かれはこのやうな不快な感情は幻影に過ぎないと思つて、自分で無理にも追つて來る暗い影を取り除かうとした。しかしかれが幻影だと思ふものを除かうとすればするほど、その不快な影は確實な姿となつてあらはれて來るのであつた。（アブサロムは青年時代のダビデ以上の美男子だ！）といふ言葉や、（アブサロムはダビデ以上の英材だ！）といふ言葉が、たび／＼かれの耳に響いて來た。最初はかれはそのやうな噂をどんなに喜んだか知れない。しかしそのやうな人の噂が、喜びと同時に一種の不安や恐怖を伴ふてかれの胸に響くやうになつて來たのであつた。かれはその原因が何處にあるかをたしかめることは

できなかつた。しかしかれのうちに湧いて來たアブサロムに對する嫉妬に似た心持や、アブサロムを警戒する心持は日一日と影を濃くして行くのであつた。殊に先年かれがユウフラテス河まで遠征した日以來かれは一層アブサロムの力に驚歎すると同時にアブサロムを怖れもし、警戒するやうにもなつた。アブサロムはダビデに隨つてユウフラテス河岸に滯陣してゐたのであつたが、少かに二千の手兵を率ひて一萬のバビロンの兵を河の中に追ひまくつてしまふやうな目ざましい戰功をも立てた。

かれは或る夜たゞ一人で、ユウフラテス河岸を歩いてゐた。かれはその時不圖或る陣營の中から洩れて來る（ダビデは千人を殺し、アブサロムは萬人を殺す！）といふ歌の聲を聽いた。その翌日の戰鬪でバビロンの敵を破つた時も、またかれは同じ歌の聲を聽いた。同時にアブサロム萬歳の聲のみが河を埋めて聞へた。

かつてサウル王が、若いダビデに對して抱いた恐怖や嫉みをば、今やダビデ自身がアブサロムに對して抱かなければならぬ境遇に置かれてあつたのであつた。

ダビデとアブサロムの間が日一日と遠ざかつて行かなければならなかつた唯一つの原因は、すべての民衆がすべての時代を通じて持つてゐるところの、新らしい爲政者を待ち望む好奇心にあつた。どのやうな偉大な人格者であらうともまた何のやうな民衆の恩人であらうとも、三十年、四十年と支配者の地位を占めてゐる時には、大抵の民衆は理由なしに、古き者に飽いて更に新らしい支配者を求めやうとする好奇心を持つてゐる。この民衆の好奇心が一つの動かすことのできぬ社會的な氣運を作つて、人々はいつとはなしにダビデの政治に飽き、他の新らしい統治者を期待するやうになつて來たのであつた。アブサロムはダビデに飽いてゐたユダ、イスラエルの民衆たちが待つてゐた新らしい統治者として、かれ等の眼に映つて來たのであつた。外部からの無意識な社會的の力は自然さへ最も愛し合つた父と子の間に深い

溝を築いたのであつた。

この父と子が露骨に不快な感情を抱かれなければならぬやうになつた原因のうちには一つの婦人についての問題もあつた。それは去年ユウフラテス河の滞陣中に、父と子とが同じバビロンの女を奪ひ合はうとした忌はしい事件であつた。無論女はアブサロムを戀してゐたのであつたが、ダビデは無理にバビロンの女を奪つて自分のものにしようとした。しかしバビロンの女は、夜かれの陣から逃げて、行く衛不明になつてしまつたのであつた。かれは女が逃げたことについてはアブサロムを疑つた。しかしたうとうかれがユウフラテス河畔の軍を引き上げるまでは、女の消息はわからなかつた。

このやうな色々な外部の事情も手傳つて、父と子は日に日に、氣まづい思ひをして一つの城のなかに住んでゐなければならなかつたのであつた。しかしかれはできるだけ少年時代のアブサロムを自分の心の中によみがへらせようと試みた。かれは數日アブサロムを見ない時は自分からアブサロムの家に出かけて行つて、アブサロムと快く語つて歸つて來ることもあつた。

しかし、一度傷けられた父と子の愛は、永遠に完全に癒されることができないといふ傷ましい感じが、ダビデの胸に日毎に强く迫つて來るのであつた。

（こんなことを考へるのは恐ろしい罪だ！）とかれは思つた。しかしアブサロムと二人で笑つてゐる間にも、かれの眼はアブサロムの注意深い眼を見のがすことをしなかつた。そして想像してはならぬことを想像した。

アブサロムと心の底から打ち解けて語りたいと思つて、自分の部屋を出て行つたダビデは途中まで來ると、自分の心の底を見拔かうとする、理智的なアブサロムの冷たい眼を想ひ出すのであつた。かれは途中から引きかへしてしまふこ

ともあつた。

(今日こそは……)と思ひながら、アブサロムを訪ねて行つても、アブサロムの部屋の前に立つとダビデの心は不快な猜想に囚へられることがあつた。そしてスパイのやうな注意深い耳を立てゝ部屋の中の小ひさな聲をも聽きのがすまいとするのであつた。そしてかれは殊にアブサロムの周圍に集まつて行く人々を警戒した。かれは自分のやましい心を恥ぢた。しかしかれは自分の狹しい心を何うすることもできなかつた。

自然、父は滅多にアブサロムを訪ねることもせず、またアブサロムも滅多に父を訪ねて來なくなつてしまつた。

ところが、今夜偶然にもかれとアブサロムとの間には、更に越えがたい溝が築かれるやうになつたのであつた。タマル姫が父の部屋から歸つて行かうとして廊下まで出かけた時であつた、父はタマル姫を見送つて出て何氣なしに

『兄さんにも、すこしお父さんのところに來るやうに言つて置いておくれ。兄さんは一向、顔も見せないが何うしてるんだい？俺も逢ひたいから……』と言つた。まつたくかう語つてゐる間は、かれは心からアブサロムに逢ひたいと思つてゐたのであつた。別れ別れになつてゐる父と子のことをかんがへてその刹那だけは、かれは涙を嚥み込むやうな氣にもなつてゐたのであつた、……

しかしかれの心は、次の瞬間には刄で刺し貫かれたやうなショックを感じずには居れなかつた。

かれの二三歩先を歩いてゐたタマル姫は振りかへつて何氣なしに

『兄さんはこのころ夜になると家にはいらつしやらないのです。あたしはほんとうに寂しいんです……』と言つた。

『何處に出かけるんだらう？』ダビデも何氣なしに訊ねた。

『よくは知りませんけれど、何でも町外れのバビロン人の居留地あたりらしいのです？』

「……バビロン人の居留地ツ？」ダビデは獨語ちたまゝタマル姫を見送つてゐた。かれの胸にはその刹那に、バビロンの女とアブサロムが戀を語つてゐる姿が、直覺的に映つて來た。かれは廊下の甃の上に棒のやうになつて突つ立つてゐた。かれが氣付いた時はタマル姫の姿は薄暗がりの中に幻影のやうに滅へかゝつてゐた。

かれはあたかも傷いた野獸を想はせるやうな憤りに燃えた眼を輝かして、部屋のなかを歩いた。

森の梢が風にざわめき始めた。大粒の雨がはげしく戸を打ち始めた。燈が消えた。

ダビデは窓に凭りかゝつて、急に暗くなつた空を見つめてゐたが何か異常な決心をしたらしく、黒いマントを頭から深く引つ冠つて、人目を忍んで雨の中を森の方へ走つて行つた。かれが數日前嬰兒のために斷食して祈つた森の中を歩いてゐた時も、かれは殆んど亡くなつた嬰兒のことを忘れてゐた。木と木と相搏つ音、摧け行く梢の音、嵐の音、流れ行く濁流の音が恐ろしい魔の叫び聲のやうに狂ふてゐた。しかしかれの頭はそれ以上に渦を卷いて燃えてゐた。かれは殆んど冷靜な判斷を失つてゐた。かれは幾度か森のなかで躓いた。或る時はもんどり打つて深い窪地に落ちた。森を出たかれは土まみれになつて、大雨のなかをエルサレムの町外れのバビロン人の居留地の方へ歩いて行つた。

×

ダビデが嵐の夜森からエルサレムの町へ忍び出てバビロン人の居留地を歩いた頃から、五年後の或る靜かな初秋の日であつた。

塔の中の飾りも五年前と、そつくり同じであつた。ウリヤの館を見る北の窓は堅く鎖されたまゝになつてゐた。

五年前に老人バルジライが腰を卸してゐたソーフアには、ダビデが腰を掛けてゐた。ソーフアの位置も五年前とほとんど同じ場所であつた。

窓からはしつきりなしに小鳥の聲が聞えて來た。木の葉の落ちて地を搏つ音さへも聞えるほど靜かな日であつた。南の窓から流れて來る初秋の靜かな太陽の光りがダビデの全身を照らしてゐた。ダビデはソーフアに凭れたまゝ眠つてゐた。かれは黑い衣を着てゐた。

この五年の時は、ダビデにとつては過去の二十年三十年にも增した苦惱の時であつた。かれの髮も、鬚もこの五年の間にすつかり白くなつてしまつた。かれの額には鑿で刻んだやうな深い皺が幾條となく暗いいたましい影を作つてゐた。かつて盾のやうに頑丈な感じを與へたかれの兩肩はいたいたしいほど瘦せ細つてゐた。耳から、衿首あたりの筋肉には、五年前になやんだ忌まはしい病氣の痕が黑いひきつりになつてゐた。かつて獅子を搏ち殺したかれの腕は、たゞ骨ばかりがあらはになつて、肉はたるんで、倦怠さうに膝の上に投げ出されてゐた。かれは既う呼吸をすることさへ苦痛であるやうに思はれた。

老人バルジライが杖をついて廊下からはいつて來た。かれは五年前よりはずつと腰が曲つてゐた。かれは廊下の壁に杖をもたせかけて部屋の入り口に立つて聲をかけた。

『陛下ツ！……』

ダビデはやつぱり眠つてゐた。

『陛下ツ！バルジライがまひりました。』ふたゝびバルジライは聲をかけた。

ダビデはバルジライといふ聲に眼をさました。かれはソーフアの上に起ち上つて入り口に立つてゐる老人を見た。ダビデの眼の周圍には黑い隈ができてゐた。それが一層ダビデの顏全體を陰氣にした。かれはしばらく老人を見つめてゐたが、はつきりと老人がそこに立つてゐることを意識したので、急に立つて行つてバルジライの手を握つた。

『バルジライ！バルジライ！……』かれは自分の父にでも逢つたやうな懐かしさを顔に浮かべながら、バルジライに飛びかゝつて行つて、バルジライの肩に兩腕を凭せかけて、幾度もバルジライの名を呼んだ。

『陛下！ダビデさま、ダビデさま……』

バルジライもダビデの名を呼んではわなゝく兩腕でダビデの手を握つて、はげしく口づけをした。

妻へ切つた白髪の二老人は、眼に涙さへ湛へてお互の顔を見つめてゐた。

『何うして、今ごろエルサレムにやつて來たんだい、お前は？』ダビデが最初に口を切つた。

『陛下。五年前にお別れをいたしましてから、わたくしは南の草原に若い人たちと一緒に旅に出ましたきり、一度もベテレヘムにも歸りませんでございました。しかしわたくしは、一日でもわたくしの祈りの中にあなたのお名を忘れたことはございませんでした。わたくし等の一家が奴隷の境遇から救はれまして、少かの詩や律法の學問で御用を勤めまするやうになりましたのもみんな陛下のおかげでございます。それにあなたはもつたいなくもわたくしのやうなものを友達だなどと仰つしやつて下されました。どんな遠い旅をつゞけてゐましても、何うして陛下のお名が忘れられませう。わたくしは南の草原でタマル姫さまの悲しいお噂や、つゞいてはアムノンさまやアブサロムさま方のお噂も承りましたわたくしは陛下の御心中をお察し申し上げます……』バルジライは涙と一緒に演をすゝつた。

『それで俺をまた南の草原へ連れて行かうと思ふて來たのであらうハッハッハッ……』

ダビデは寂しく笑つた。そしてバルジライの顔をぢいつと見つめてゐた。

『…………』バルジライも俯向いたまゝ默り込んだ。

タマル姫がアムノンの室でアムノンに辱しめられた夜のこと、タマル姫が橄欖の森の陰の池に身を投げて死んだこと

逾越の節の日タマル姫の兄のアブサロムが劍を拔いてアムノンの心臓を突き通してタマル姫のために復讐したこと…：…それからそれへと傷ましい回想がダビデの胸によみがへつて來るのであつた。

『陛下はまだ人間の力を絶對に信じておいでになるのでございますか？』しばらく經つてからバルジライが訊ねた。

『人間の力？…：既う俺には人間の力を信ずるより他には仕方がないのだ。』

『あなたは神をすつかりお忘れになることができましたか？』

『俺は神を忘れることはできない。しかし昔のやうな心で祈ることはできない。神が人間に對して必ずしも親切な味方ではないことを、俺はこの數年來、あまりに良く知り過ぎたのぢや…：』アムノンの心臓から流れてゐた黒いねば〳〵した血の塊や、森の池の畔の靑い草の上に引き上げられてゐたタマル姫の水ぶくれした醜い皮膚が、かれの眼に泛かんで來た。

『しかし、あなたは神に祈らないで寂しいとはお思ひになりませんか？』

『寂しいとは思ふ。しかし既う俺には神を見出したにせよ、神を見失つたにせよ、寂しいことにはかはりはない。俺は神の存在は認める。しかし神の愛を信ずることはできなくなつたのだから…：』

『あなたは最初あまり多く神に惠まれなされたのでした。ですから悲しみもまた…：』

『さうかも知れぬ。しかし多く惠まれた者はまた多く觸せらるゝのであつたら、どこに神の愛がある。俺は人以上の力を惠まれた。俺はその力をユダ、イスラエルの新しい國家の建設のためにさゝげた。それはエホバの心にかなつた事業であつた。俺はそのために四十年が間、殆んど一日も落ちついて自分の妻や子たちとも溫かい人間らしい生活をすることはできなかつた。俺が四十年を費してエホバの新國家を打ち建つる事業に成功した時は、既う俺の心にはいろ〳〵な

暗い影が射してゐた。俺は疲れ過ぎてゐた。俺は休息を欲してゐた。それだのに過去の俺の正しい大事業からのよろこばしい報ひは一つも與へられないで、たゞ過去に犯した罪悪からの悲しい報ひばかりが、俺の疲れた心にはつきりと眼ざめて來た。俺はミカルのために、またウリヤのために、幾年も夜晝俺の心を傷らなければならなかつた。しかしそれだけではまだ俺の悲しみは盡きなかつた。俺はタマルを殺し、アムノンを殺してアブサロムを追放しなければならなかつた。俺の祈りは一つとしてエホバには聽かれなかつた。俺は少くとも過去の四十年をエホバのためにさゝげて來たのに……』しばらく沈默がつゞいた。

『俺はこのころこんなことを思ふ……(神は人間ほどの愛をも持たない)と……』ダビデは吐息をついた。

『陛下、それはあまり大膽な……』

『いや、あまり大膽な考ではない……俺はミカルやウリヤに對して犯した俺の罪に對しては何んなにでも神に懺悔もし、祈りもした。神は今日までも俺の胸に罪を悔ゆる荊棘を植へ付けてゐる。それは俺は忍んで行く。だが、神は俺の嬰兒を殺した。俺はその悲しみも忍んだ。神はあの清淨なタマルをも辱しめた。……俺はアムノンを殺すほど憎んだ。しかしアムノンの血管の中に流れてゐたあの呪はしい血は俺のなかから流れてゐたことに氣付いた時、俺はぞつとした。俺は何うしてもあの獸のやうな大馬鹿者のアムノンを憎む事はできなくなつた。それだのに神は殘酷にも俺の面前でアムノンの心臟を弟の劍で剔り取らせた。人間にはとても忍び切れないほどの殘酷を神は平氣でやり終はせる……アムノンばかりではない。あの賢いアブサロムにさへ獸のやうな醜い心が巣うてゐる。しかしその獸のやうな醜い心はみんな俺の血管から流れ出たものであつたことを俺はこのころ氣付いた。アブサロムはユウフラテス河の滞陣中に俺の陣營に連れて來た女を奪つて行つた。俺はあの嬰兒の野邊送りの夜、森を出てエルサレムの町外れまで出かけて行つた。バビ

ロンから來てゐる商人の家で、俺はアブサロムがその女と酒を飲んでゐるのを見た。俺はその時アブサロムを一撃の下に叩き切つてしまはうかと思つた。しかし俺の心は恐ろしい事實を發見した。俺の心は俺に語つた。（ウリヤの妻を盜んだダビデの幽靈が、今バビロンの女を奪つて父の前で酒を飲んでるのだッ！）と。俺はどうすることもできなくなつた。俺は誰にも氣付かれないやうに、そうつと再び森の中からこの塔の中に歸つて來た。』

『エホバの呪ひがあの頃からあなたの上に降りかゝつて來たのでございませう！』

『エホバの呪ひがあの頃から、はじめて、くだつて來たのではない。エホバの呪ひは俺の上にも子たちの上にも生まれる日から降りかゝつてゐたのぢや。俺がこの世界に生まれて來たといふことと、あの子たちが俺の子として生まれて來たといふことのうちに、すでにエホバの呪ひが芽を藏してゐたのぢや。…………………………

俺はあの野の草花のやうに清淨であつたタマルが俺の娘として生まれなかつたら！と後悔しないでは居れない。タマルを殺したのはアムノンでなく俺なのだッ！』

『陛下ッ！……』

『俺の話を聽いてくれ。俺はエルサレムの町外れのバビロン人の家から、こつそり歸つて來た時は、俺の血を稟けて生まれたゝめに、俺と同じやうな醜い獸のやうな情火に燃えてゐるアブサロムを眞心、可愛さうだと思つた。しかしそれは一時の感情に過ぎなかつた。俺はアブサロムに對してそれほど寛大ではなかつた。俺はその夜まんぢりともしないでアブサロムに對する復讐を考へてゐた。夜が明けて間もなくであつた。昨夜遲くまで俺とうれしさうに語つて行つたタマルが俺のためにレモンを持つて來て、歸つて行つて直き後であつた。まだ俺の食卓の上にはタマルが持つて來たレモンが載つてゐた。アムノンが俺の部屋にはいつて來て、躰の具合が惡くて床についてるから今日一日タマルを自分の部

居の手傳ひに貸してくれといふのであつた。俺は前の日タマルからアムノンの話を聽いてゐたのだから、直ぐ不快な聯想を持つたのであつが……そして俺の理性は俺に（タマルをアムノンに預けてはならぬ。不吉な事件を惹き起すかも知れない！）と命ずるのであつた。しかし俺は昨夜町外れの家で見たアブサロムとバビロンの女のことを想ひ出した。俺の復讐心は燃えた。俺はタマルをアムノンの手にわたしたのであつた……俺はアムノンがタマルにどんなことをしたかを語るのさへ汚らはしいと思ふ……タマルはその夜池に飛び込んで死んだのであつた。俺は池の畔の草の上でタマルの死骸を抱いて泣いた。俺は何といふ矛盾した自分を持つてゐるのだらう。俺がタマルを殺したのではないか……』

『それで、陛下は、なぜアブサロムさまとはまだお逢ひなされないのです。わたくしは今朝エルサレムの白い塔が、五六里の先きの野の中から見えました時、駱駝の背の上で眞つ先きにあなたとアブサロムさまのことを想ひました。アブサロムさまが城を逃げてゲシユルにおいでになつてからすでに五年にもなりますのに、まだ城の中にはお呼びかへしにならないといふ噂を聽きました時。わたくしはお二人方のためにどんなに悲しんだでございませう。エルサレムの町にはいつてから聽きますれば、陛下は二年前にわざ／＼ゲシユルからアブサロムさまをエルサレムにお招きになつて置きながら、ヨアブの家にあづけになつたきり、今日までお逢ひにならないと申すことでございますが、いつたい何ういふ思し召しで……』

『アブサロムが兄のアムノンを殺した時は、さすがに俺はアブサロムを憎まずには居れなかつた。しかし俺はアブサロムに生き別れをしてゐることは、アムノンに死別れをしたことよりも寂しかつた。俺はよく自分ひとりでアブサロムの家のまはりを歩いた。家の中にはいればアブサロムの寢床もあり、アブサロムの冑や楯もそのまゝになつてゐることを俺は知つてゐた。俺は侍從たちに命じて何も彼もアブサロムとタマルがゐた日のまゝにして置くやうに言ひつけて置い

たのであつた。しかし俺はアブサロムの家にはいつて行つて主人のない二つの空た寝床を見るに忍びなかつた。家のまはりにはタマルが愛してゐた台獣の花も紅く咲いてゐた。また或る時は、アブサロムが子供のころよく花を摘んでは吸つてゐた忍冬も咲いてゐた。家のまはりを歩いてゐると、いまにもアブサロムやタマルが窓からあの美しい顔を出してくれさうな氣がしてならなかつた。俺はアブサロムがゲシユルに逃げた日から一日だつてアブサロムのことを思はなかつたことはなかつた。俺は最初は晝の間にアブサロムの家のまはりを歩いた。後には人の目を偷んで夜家のまはりを歩いた。そしてもしかして窓から蠟燭の火でも見えると、俺はほんとうにアブサロムがよみがへつて來たのではないかと思つたこともあつた。俺は神の冷酷を怒つた。俺は祈りの無駄なことを知つた。しかし俺は夜一人でこの塔に來てはアブサロムのために涙を流して祈ることを再たはじめた。俺は何うしてもアブサロムなしには生きて居れないと思つた。俺はアブサロムを呼びにやつた。俺はアブサロムがエルサレムに歸つて來る日を待ちかねてゐた。アブサロムの車がエルサレムの町外れに見えたといふことを侍從たちが知らせて來た時俺は食事をしてゐたがパンを摑んだまゝこの塔に走つて來て、こゝの窓から見た。夏であつたが、黄色な麥畑の間を縫ふてゐる白い道を、驢馬と人とにかこまれた黄金の車が俺の眼についた時、俺の瞼は熱くほてつてしまつた。黄金の車は、俺がアブサロムのために拵つてヨアブに持たせて送つてやつたものであつた……』

ダビデはその日の樂しかつた思ひ出に耽りながら、窓の外の晴かな日光を見つめてゐた。

『それでゐて、あなたはアブサロムさまが、エルサレムにお歸りになつてからさへ二年も經ちますのに、何でお逢ひにはならないのですか？』

『俺はアブサロムを恐れてゐたんだ。アブサロムがエルサレムに着いた夜、明日アブサロムを見るのだと思ふとぢつと

はして眠れないほど俺の胸は躍るのであつた。俺は夜が明けるのが待ち遠しかつた。俺はこゝの塔に來て夜が明けるのを待つて、まんぢりともしなかつた。ところが、俺は夜半になつて悲しい歌を聽いた。（ダビデは千人を殺し、アブサロムは萬人を殺す！）といふ聲がこゝの窓から洩れて來たのぢや。俺はそれでもまだアブサロムを待つ心に燃えてゐた。しかし夜が明けてからであつた、昨日までは暗い顔をして俺のまはりにゐた城の中の男や女たちが、誰れも彼れもその日はまるでよみがへつたやうな朗かしい顔をして、城の中を歩いてゐるのぢや。いや走つてゐたと言つた方が適當であらう。そして誰の口からもたゞアブサロムの名だけが繰り返されるのぢや。その朝、俺の健康を問ねてくれたのはたゞあの跛者のメピボセテだけであつた。エルサレムの町からも若い女たちや男たちが、アブサロムを迎へる歌をうたつてゐる聲が、まるで遠い嵐のやうに城の中まで聞えて來た。エルサレム中がアブサロム一人のために、ダビデを忘れてしまつてゐた。城の中の男も女も、城を空虚にして門の外に出て行つてアブサロムを迎へようとしてゐた。アブサロムの黄金の車の響がこの塔の中にゐた俺の耳にも聞えて來た。その刹那であつた。俺はアブサロムの入城はモーゼの律法に協はぬからといふ口實を拵へてアブサロムの入城を俄に止めさせてしまつた。俺はたうとうアブサロムと逢はないことにしてしまつた…俺に惠まれた力が溢れてゐた頃は、敵に對しても俺は正直でもあり、寛容でもあつた。俺のうちに力が衰へると同時に、俺は狐のやうに狡猾になつた。俺は自分でもこのあさましい心の變り方を悲しいと思ふ。自分に對して愛相が盡きる。しかし俺が俺として生きて行く間は、これより他に行く道はない。俺は南の草原へは還らぬ！』

『お還りにならなければいたしかたもございませんが、あなたはこの城の中においでになる間は、ほんとうに人間といふものゝ生活をお摑みになることはできませぬ。あなたは外世界では最も富める王でおいでになります。しかし内世界では最も貧しい……』

『バルジライ、お前のいふことはよく俺にわかる。俺は内世界では最も貧しい乞丐であるかも知れぬが、俺は外世界で最も力強い王者であれば滿足ではないか。人間には二つの世界の王になる力は賦へられてないのだから。俺は最後まで外世界の王者として闘つて行くばかりだ。それより他に道はないのだから、俺には。……』

『わたくしにはお子様たち方からも無理に離れ離れにおなりなされて、たゞおひとりでまるで墓場のやうなエルサレムの城のなかに、寂しう暮しておいでになるあなたのことを想ひますと、おいたはしくてなりませぬ。南の草原の天幕のなかにも、まだ溫かい人間の生活がございます。わたくしにはぢつとしてあなたのこのお寂しいおひとりの生活を見てゐることはできないのでございます。一度あなたの寶石を飾つたお衣をお裂きなすつてごらんなさい。あなたは牧羊者の麻衣の快さをお忘れになつたのです。あなたが黃金の冠をいたゞき、寶石の衣を纏ふておいでになればこそ、アブサロムさまとあなたの間に人間の心が痲痺されてしまつてゐるのでございます。あなたが冠を捨てゝ、麻衣をおまとひになれば、その刹那にあなたとアブサロムさまのお心が昔通りに溫かく燃えてまいります。わたくしは今度こそはいやでもあなたに麻の衣を……』とバルジライが昂奮し切つた顏でこゝまで語つて來た時、一人の侍從武官が走つて來て、入り口の扉の傍に跪いた。

×

『何ぢや……』ダビデは不安な心に襲はれた。

『ヨアブの家らしうございますが。今恰度燃え盛つて居ります。アブサロムさまのお身が氣つかはれますので、城中から士官や兵士たちを早速送り出すことにいたしました……』

『アブサロムは無事かツ？』ダビデは驚きに擊たれた顏をして窓から戶外を覗いた。『あツ、これからもかすかに見える。

丘の向ふのあの煙ぢや、あれは火事の煙だらうヨアブの家にちがひない。』

老人もダビデの傍に立つて、遠くの煙をながめた。

『御子さまには何のおさわりもおありにならないかと思ひます。まだヨアブさまからも何の通知もございませんが……』

『兵は幾人出したッ？』

『はい、士官五人と兵五十人だけ取りあへず……』

『馬鹿ッ！それだけの兵で何ができる。アブサロムの警護だけでも百人や二百人は必要ぢや。士官も兵も十倍しろ、十倍ぢやッ』

『はい。十倍の兵にいたします』武官は剣の音をさせてあわたゞしく出て行つた。

『おい、待て。』ダビデは入り口まで走つて行つた。『そして何より先にアブサロムの一身についての報告を直ぐに知らせてくれるやうにッ！』

『はいツー！』といふ武官の聲だけが聞えた。

『このころではバビロンあたりから來た不逞の徒が大分エルサレムの町に隠れて、陰謀をたくらんでゐるといふやうな噂をも聞いたが……』ダビデは窓の方へ近づいて來て、バルジライの顔を見ながら獨語つやうに言つた。

『成るほど盛に燃えて居ります。ます／＼煙が高く上つてまひります。』バルジライも不安げに丘の上を見つめてゐた。かれの聲はひどく顫へてゐた。

馬の走る音、人の叫ぶ聲、車の軋る音などが塔の下から絶へず聞えて來た。

二三十分も經つてからであつた。一人の將軍が塔のなかにはいつて來て、入り口で跪いた。

『ヨアブではないかッ！アブサロムは？』とダビデは振りかへつてソーフアの方へ走つて來た。

『アブサロムさまは御無事でおいでになります。』ヨアブは可なり昂奮してゐた。

『お前の家は？』

『わたくしの家は何のさわりもございません。』

『燃えたのは？』

『わたくしの畑と、森でございます。』

『何うして燃えたのぢや？』

『放火でございます！』

『放火ッ？誰が？』

『殿下でございます。』

『アブサロムッ？あの子が！』

『はい。アブサロム殿下が、御自分の兵士たちにお命じになつて、わたくしの森と畑に火をお點けになつたのでございます。』

『何故そのやうなことをしたのだ、あの子が？』

『わたくしはたゞ今、殿下にお目にかゝりました。殿下が仰せられました。（自分はお父さまがエルサレムに來いと仰つしやつたからエルサレムに還つて來た。それだのにお父さまは一度も自分に逢つては下さらぬ。お父さまに逢へないほ

となら自分はゲシュルにゐた方がましであつた。自分はお父さまがお逢ひにならないならエルサレムの町を焼いてしまふ。そして火の中に飛び込んで死ぬつもりだ）と。かういふ次第でわたくしの森に……』

『それで火は消せさうか？』

『はい、わたくしの森と畑の周圍には池や沼がございますので、擴がる氣づかひはございますまい……』

『アブサロムは何んな顔をしてゐた？』

『泣いておいでになりました。』

『泣いてゐたかッ？』

『はい。まるで少年のやうにすゝり上げてお泣きになりました。』

『俺にそのやうに逢ひたいのか？アブサロムは……』

『普段はお忘れになつてゐるやうにも思はれますが、何かの機會で急に陛下のことをお考へになりますと、矢も盾もたまらないほど陛下の事をお思ひになりますと見えて、お父さまは髪がすつかり白くおなりになつたといふがほんとうかだの、お父さまは時々は自分のことをお話しになることがあるかなどと、わたくしにお訊ねになります。わたくしは殿下がこのころよく、お一人で夜遅くまで窓に凭れたまゝ考へ込んでおいでになるのを見かけました。わたくしの微力が足りないので、お父さまに逢はれないのだとばかりお疑ひになつてゐますので、今日はたうとうわたくしの森と畑に火をおつけになつたのでございます……』

『アブサロムが、そんなに俺に、アブサロムが……』

『その筈でございます。あなたはアブサロムさまをあれほど愛しておいでになつたのですから。あなたは何うでもアブ

サロムさまとお逢ひにならなければなりませぬ。今日直ぐにアブサロムさまを城中にお招きなさい……』とバルジライが熱心な句調ですゝめた。

『アブサロム殿下が正しい立派な方でおいでのことは、エルサレム中に誰れ一人知らぬものはございません。陛下が今日、城中にアブサロム殿下をお招きになれば、町の人たちまでがどんなにか陛下のやさしい御心をよろこびますことでございませう。陛下はあれほど陛下を殺さうとばかりたくらんでゐましたサウル王の孫のメピボセテでさへ、まるで御自分のお子さまのやうに愛しておいでになるではございませんか。陛下。どうぞアブサロム殿下を城中へ……』ヨアブは泣いてゐた。

『まつたくさうでございます。わたくしが只今からまひりましてアブサロムさまをお伴れいたしませうから……』バルジライはダビデの前に跪くやうにした。

『ヨアブ―アブサロムは病氣といふことであつたが、何うだ？』

『ユウフラテス河の御滯陣以來、お胸の方の御病氣が時々出ますやうで、熱などが急にさしてまひりますこともございます。』

『このころは？』

『この二三日大さう元氣でおいでになりますが、しかし二年前エルサレムにお還りになつた日から見ますと、すつかりおやつれになりました。お顏色もあまりお宜しうございません。それに夜、どうも眠れないで困ると言つておいでになります……』

『餘程瘦せたか？』

『昔とはまるで見ちがへますほど、おやつれになりました……』

ダビデは默り込んで窓の側に立つた。

丘の向ふの煙がわづかにかすかに殘つてゐるのが見られた。

バルジライとヨアブはダビデの蒼白い顔を心配げに眺めてゐた。

小鳥の聲が橄欖の森のなかゝら絕へず聞えて來た。ばた〳〵と地を搏つ落葉の音がかすかに響いて來た。

長い沈默がつゞいてからであつた。ダビデは堅い決心をしたらしい顔つきで、二人の方をかへり見た。そして

『俺は今日アブサロムと逢はう!』と言つた。

秋も末に近づいてゐた。

マハナイムに於けるダビデの天幕張りの陣營では、敵の眼を避けるために篝火は消されてしまつてゐた。ダビデの天幕の中にはたゞ一本の蠟燭が點されてゐた。

壁にはかれの重い盾と投げ槍とが立てかけられてゐた。かれは黑い甲を着てゐた。かれの劍と冑と水甕とが無造作にテーブルの上に投げ出されてあつた。甲を着た若者が犬のやうになつて、天幕に沿ふて床の上に眠つてゐた。慘敗また慘敗をつゞけた傷々しい空氣が天幕のうちに漲つてゐた。

かれは土の上に跪いて祈らうとしたが、はね返されたかのやうに急に立ち上つた。そして

『何といふ俺は意氣地なしだ!俺は俺以外のものを頼つてはならぬ筈だ!』と獨語ちつゝ、テーブルの周圍を步いた。

『俺は過去のすべての罪惡の報ひを俺一人の力で忍ばねばならぬ。俺は卑怯なことはしたくない。俺の力がつゞくかぎ

り は……』と思ひながら、かれはちらと盾と投げ槍に視線を向けた。

天幕の外にあわたゞしい跫音がした。剣の音や、剣と甲と打ち突かる音がした。一人の顔の白い若い士官が戸口に立つた。士官は左の腕を繃帯してゐた。士官の額からはぽたり〳〵と汗が落ちた。

『おう御苦勞だつた。そして何うだつた。情況は？』ダビデは心配さうに訊ねた。

『アブサロム殿下に隨いてヘブロンからエルサレムに上りましたイスラエルの兵數は約二萬といふ噂でございます。』

『二萬かッ？』ダビデの額にはさつと暗い影が動いた。

『それから殿下がエルサレムに御滯在中にまた、殿下の軍に隨したものもございますので、ヨルダンを渡りました敵は約三萬にもなりますかと思はれます……』

『約三萬かッ？』ダビデはしばらく默りこんだ。『それからあの退却の途中で俺に石を投げて俺を呪ふたシメイの奴は、アブサロムの軍にゐたか？』

『わたくしは日が暮れてしまひますまで河岸の葦のなかに隱れまして、殿下の軍が渡河しました船の數を算へて見ましたのですが敵の兵數は三萬と見て、大した見當ちがひはないかと思ひます。シメイは騾馬に乘つてゐました。そして到るところで陛下の名をやはり呪つて居りました。』

『今度シメイを見たら八ツ裂きにしてやる。シメイの奴も河を渡つたといふのか！』ダビデの顔は憤りに燃えてゐた。

『シメイは三番目の船で渡りました。』

『アブサロムも河を渡つたか？』

『はい、殿下もシメイと同じ船でございました。

『どのやうな顔をしてゐた？』

『可なり隔だつてをりましたので、お顔はわかりませんでした。』

『アブサロムの兵は全部渡河を終つたか？』

『はい、恰度日暮れごろまでに戰鬪部隊だけは渡河を終りました。輜重隊はまだ一部分だけ渡河してゐたやうでございますが、拂曉までには輜重も全部渡河を終りますかと思ひます。』

『それではいよいよ俺等と決戰をやるつもりと見えるのう。』ダビデの顳顬あたりの筋肉がぴく／＼と痙攣つた。『そして今夜何處に宿營をしてゐるのか？』

『ヨルダンを渡つて四里ばかりの地點に、前衞らしい部隊が止つてゐました。まだ宿營はしてゐませんでした。』

『うむ。さうか。御苦勞であつた……。』

若い士官は出て行つた。ダビデは眼をつむつて明日の戰のことを考へてゐた。

更に一人の中年の士官がはいつて來た。幾晝夜不眠不休で働いたかのやうにかれの顔は憔悴してゐた。

『わたくしは商人の風をもしましてエルサレムの町を探つてまひりました。エルサレムの町の女といふ女は、ヘブロンから上つて來た敵のために辱じめられたといふ噂でございます。』

『……。』ダビデの眼が耐らなく不快げに光つた。

『それにアブサロムさまはエルサレムの城中におはいりになつて、連夜酒宴をお開きなさいましたといふことでございます。そればかりか、しまひにはエルサレムにお止まりになりました城中の御婦人方をも、酒宴のお對手に無理にお連れ出しになつたといふことでございます……。』

『アブサロムが、俺の家の女たちをッ？』ダビデは胸を刺されたやうな驚きと憤りとを感じた。

『左樣でございます。』

『それで敵は今夜どこいらに宿營するやうな情況だつたか？』

『エフライムの森の中を歩いてゐるやうでございました！』

『エフライムの森の中を歩いてゐる。この暗い夜にッ！』ダビデは不審さうな顏をして一人で考へてゐた。

やがて中年の士官は歸つて行つた。

ダビデは天幕を揚げて空を仰いで見た。星が輝いてゐた。

かれは天幕の中に再びはいつて來て、腰を卸した。かれがエルサレムに遺して來た十一人の若い女や、アブサロムの美しい顏がはつきりと思ひ出されるのであつた。かれは腹立たしい不快な聯想を滅さうと思つて、幾度も床の上を歩いて見た。しかしすべての努力は無駄であつた。かれはペンを握つて何か書かうとしたが、手が顫へて書けなかつた。

しかしかれは十分ばかりの後、辛つと一通の命令書を書き終つて、床の上に眠つてゐた若者を揺り起した。

『ギベオンから來てゐる將軍のところに持つて行つてくれ、大至急だ。』

若者は天幕の外に出て行つた。かれは一人になつてからも寢床にもはいらないで、テーブルの上に羊の鞣皮をひろげて、色々な陣形を描いた。先つきのかれの暗い顏は、いつとはなしに希望に充ちた輝かな顏となつた。かれが明日の突戰をしてゐる間だけは、かれは四十年前のダビデにかへつてゐた。かれの超人的な勇氣と、好戰的な血は再びかれの全身によみがへつて來た。かれは時折り殘酷な微笑をさへ唇の上に浮かべた。

かれの直ぐ隣りの天幕で、けたゝましい叫び聲や、泣き聲が聞えた時も、かれは殆んどそれを意識しなかつた。たゞ

メピボセテがすゝり上げて泣いてゐる聲が聞えた時だけは、さすがにかれもちよつと憂鬱な顔をしたが、しかし次の刹那にはかれは微笑をたゝへながら、再び明日の決戦に夢中になつてゐた。

バルジライが麻の衣を着てダビデの天幕にはいつて来た。かれはわな〳〵と顫へてゐた。

『陛下ッ！あなたは、何であのやうな思ひ切つた恐ろしい罪を犯しなさるのでございます？』バルジライは自分の躰をさゝへることができないので、テーブルの上に両手を置いて全身の釣合をとるやうにした。

『恐ろしい罪ッ？』ダビデは落ちついた視線をバルジライに投げかけた。

『あなたはあれほど愛しておいでになつたメピボセテを、今夜急にギベオンの将軍の手にお渡しになつたのです。ギベオン人は代々ユダの不倶戴天の敵ではございませんか。可哀さうにメピボセテは、あなたがエルサレムを出られた日から、殆んど絶食同様にしてあなたのために祈つてゐました。あなたのことを氣づかひまして髪に油を塗らず、衣も濯がないで夜晝祈つてゐました。あなたはさつきあの青年が隣りの天幕の中で、ギベオンの兵士の手で絞め殺される時、あなたのお名を呼んだのをお聴きになりませんでしたか。あの子はあの時、あなたのためにお祈りをしてゐたのでございましたに……』バルジライは二三度手の巾で涙を拭いた。

『何も言つてくれるな。俺は明日は何うしてもアブサロムに勝たなければならぬ。また俺はエルサレムを出てから今日まで、俺を追撃しては石を投げ、俺に呪ひの言葉を浴びせかけたシメイに復讐しなければならぬ。俺の一生のうちあのシメイほど俺を辱かしめた者はない。俺は屹度シメイの喙を裂かずには置かぬ。』

『あゝ、あなたはそのやうな呪ひを……』

『呪に對しては俺は呪をかへす。俺は明日、何うしても勝つためには、既う手段を選ぶ餘裕はない。俺にはギベオン人の

助けを得るより他に方法はないのだ。アブサロムの兵は三萬だといふではないか、それだのに俺の兵は千にも足らぬ。俺もメピボセテだけは助けたいと思つたが、ギベオンの將軍たちはかれを渡さないなら一兵も貸さぬといふのぢや。俺にメピボセテとサウルの一族七人の血をギベオン人に贈るより他に策はなかつたのぢや。俺は明日、敵に勝つことより他には何も考へたくはない……』

『あれほど美しかつたあなたの心に何うしてこんな恐ろしい惡魔の心が、巣くやうになつたのでございませう？』

『バルジライ！お前の心は俺にもよくわかる。しかし明日俺がアブサロムに勝つまでは、シメイの首を踏みにぢるまでは、何も言つてくれるな。』

ダビデはそこにバルジライが立つてゐるのも意識しないかのやうに、輝かな顔をして熱心にテーブルの上の獸皮に陣形を描いては策戰に耽つてゐた。

×

朝の二時ころであつた。ダビデは一萬のギベオン人の援兵を得ることができた。

ヨアブ、アビシヤイ、イツタイ三將軍の兵とギベオン人とを集むれば殆んど一萬五千の精兵を得ることができた。

更にダビデに非常な安心を抱かせたのは、敵の總司令官のアヒトペルがダビデの反間苦肉の策に乘つて、首を縊つて死んだといふことがその朝知れたことであつた。

暗い夜に敵がエフライムの森を歩いてゐるといふ報告を聽いた時、すでにかれは敵の無謀な策戰を不審に思つてゐたのであつたが、アヒトペルの死が傳へられた時、かれは敵のまづい策戰と照り合はせて、確實にアヒトペルの死を信ずることができた。

約三ケ月にわたつて連戰連勝の好運を持つたアブサロムの軍は、一擧にダビデの軍を踏みにぢるつもりで、ヨルダンを渡つて殆んど強行軍をつゞけて夜エフライムの森の手前まで達したのであつた。かれ等の眼中には夜もなければ、大森林の障碍もなかつた。かれ等は夜が明けぬうちに大森林を突破してダビデの陣を襲ふ計畫であつた。しかしアブサロムのこの無謀な策戰は全然失敗した。拂曉になつてダビデ軍の逆襲を食つた時、アブサロムは僅かに五六百の部下を擁つてゐるに過ぎなかつた。アブサロムの三萬の軍は大森林の中に聯絡を失ひ、方向を迷つてしまつたのであつた。

霧が深く森も沼も一樣につゝんでゐた。ダビデは夜明け前からマハナイムの町の入り口の城門の上に立つてゐた。

戰鬪は拂曉から森の中や、林緣で開かれたのであつた。ダビデが立つてゐる城門のあたりまで人々の叫び喚く聲が聞えて來るのであつた。その日は殊に霧が深かつた。

森の中から走つて來る傳令の影が霧の中に黑く描かれるたんびにダビデは伸び上つて傳令の方を見た。來る傳令、來る傳令が味方の勝利の報告を持つて來た。

勝利が確實になつて來ると、ダビデの心にはまた一つの暗い不安な影が動いて來た。

『俺は誰に勝たうとしてゐるのだ？誰を殺さうとしてゐるのだ？』かれは自分の恐ろしい血なまぐさい計畫にショックを感ぜずには居れなかつた。

かれの心には再び忍冬の花の露を吸つてゐた少年アブサロムや、三ケ月前最後に塔のなかで五年振りに逢つた時のアブサロムの姿が泛かんで來た。

『あの時、あの子は土の上に身を投げ出して俺を拜した。俺はどんなにかあの子をいたいたしく思つたか知れない。俺は地からあの子を抱き起して接吻をした。俺は心臟が破けさうであつた、涙がこみ上げて來て…しかしあの夜の睨

宴會の席上で、あの子が俺と並んで食卓に着いた時、そして城の中の男も女も、あの子のことばかりを話して、あの子ばかりに顔を向けて、俺はまるで砂漠のなかにでも捨てられたやうな寂しさを感じた時、俺の胸うちにはまた卑怯なそしてかれを恐れる心が湧いて來た。俺を見たあの子の眼もまるでちがつた冷酷な光りを持つてゐた。しかし……』かれは城門の上を歩きながら戰爭の聲を忘れて、ひたすらその夜のアブサロムのことを考へてゐた。恰度その時であつた。かれは城門の下にゐた兵士たちが高い聲で語り合つてゐる聲を聽いた。

『俺のとこの大將はあの男の首を取つた者には銀十枚と帶一本をくれるといふた！』と一人の男が語つた。

『でもなあ、何ぼ敵になつたいふても、ダビデさまの御子さまぢやないか！』と第二の男が言つた。

『さうだとも、だから俺が大將に言つてやつたんだ。俺はたとへ銀千枚貰ふてもアブサロムさまを殺すのはいやだつてツ！』第一の男が言つた。

『何うだか。しかし、その場になつて見んと知れぬ。心臓一つ槍の先で刺れば銀十枚と帶一本だツハツハツハツ……』第三の男が言つた。そして三人が一緒に大きな聲で笑ひこけた。

兵士たちの話を聽いてゐたダビデはぢつとして立つてゐることができなくなつた。かれはわな〳〵と兩脚が顫へて、すくんでしまふのを何うすることもできなかつた。かれは門の傍に立つてゐた數人の傳騎を走らせて、三人の將軍たちへアブサロムを殺さないやうにといふ命令を發した。

しかし三人の將軍のところへ傳騎がダビデの命令を持つて行つた時は、アブサロムの胸は三本の槍に刺し貫かれてゐたのであつた。

驢馬に乘つて森の中を走つてゐたアブサロムは冑と一緒に樫樹の梢に首を引つかけてしまつたのであつた。かれが乘

つてゐた騾馬はかれを捨てゝ逃げたので、アブサロムは樫樹から宙にぶら下つてしまつたのであつた。それを發見したヨアブの部下の男たちは一度に三本の槍で、かれの心臟を刺して、かれが樹から倒さに落ちて來るのを待つてゐて更に十人の男たちが斧や棍棒を揮つて、アブサロムの房々とした髮につゝまれた頭や、美しい顏を滅茶々々に打ち碎いてしまつた。

かれ等はあまりに殘酷な殺し方をしたことを後悔した。かれ等はダビデにアブサロムの死骸を見せることを怒れたかれ等はアブサロムの武器だけを盜みとつて、かれを素裸にして森の中の大きな穴のなかに、他の雜兵の屍と一緒くたにして投げ込んでしまつた。屍の上には大きな石を幾段にも積み重ねて歸つて行つた。

午後になつてもアブサロムの消息は知れなかつた。

城門の上に立つてゐたダビデの胸には、勝敗といふ觀念は殆んど失はれてしまつてゐた。かれは伸び上つては森の方から來る傳令を待つてゐた。

ダビデは一人の男を城門の屋根の上に驅けのぼらせた。更に尙一人の若者を城の石垣の上に走らせて森の方から來る傳令を見させた。

太陽が沈みかけてゐた。霧が再び地の上をかすかに鎖しはじめてゐた。

屋根の上にゐた男が

『陛下、傳令らしい男がこちらの方へ走つてまひります！何だかひどく疲れてゐるやうでございます。』と叫んだ。

ダビデの胸は波打つた。かれは直覺的に不吉な聯想を描いた。

『陛下！傳令はアヒマアズらしうございます。』としばらく經つてから屋根の上の傳令が叫んだ。

『アヒマアズとは誰だ？』と王は訊きかへした。
『ザドクの三番目の子でございます。』と屋根の上の男が答へた。
『ふうむ、あの男は善い若者だから、屹度善い知らせを持つて來てくれるだらう！』と言ひながらもダビデは不安でたまらなかつたので、伸び上つて傳令の來のを見ようとした。
『陛下！イスラエルの人たちはみな散り〴〵になつて逃げました。森の中に遺棄された敵の死骸だけでも一萬と申すことでございます。』とアヒマアズが言つた。
『アブサロムは無事かッ？』ダビデの顔は暗かつた。
『アブサロムさまの消息はまだわかりません。』
ダビデは再び城門に立つて森の方を見つめてゐた。
『また傳令らしい男がこちらにやつてまひります！』と石垣の上の若者が言つた。
『たしかに傳令でございます。冑を脱いでうれしさうにこちらを向いて振つて居ります。直ぐ向ふの橋の袂までまひりました。』と再び石垣の上の若者が叫んだ。
疲れはてた顔に、つゝみ切れぬよろこびをたゝへながら傳令はダビデの前に跪いた。
『アブサロムは無事かッ？』ダビデはこれだけのことを言ふのに、咽喉がかすかすになつて苦しがつた。
傳令の若い士官は落ちついた調子で語り出した。
『陛下。およろこび下さい！あなたに反逆を企て、あなたを殺さうとする者は、すべてアブサロムと同じ運命に……
ダビデの顔からは一時に血の氣が失せてしまつた。かれはそれから先きの言葉を聽くに耐へなかつた。かれは城門の

床の上に倒れやうとした。

かれの傍に立つてゐたバルジライと、戰場から馳けつけて來たヨアブがかれを扶けて、城門の上にあつた甲冑の上に腰を卸させた。

『アブサロムは死んだのか！父と子が憎み合つたまゝ……………』かれは二人に扶けられながら、失神したやうになつて、森の方を見つめてゐたが、急に冑を脫いで床の上に叩きつけた。そしてまるで少年のやうに床の上に身を投げて歔欷いた。

『アブサロムを殺すくらゐなら俺が代りに死ぬのであつたものを……』かれはバルジライの肩に手をかけながら、さう言つていつまでも森の方を見つめてゐた。エフライムの森はわづかに落日の影を殘して深く霧にとざされてゐた。

×

『あなたはこれで、あなたの上に投げかけられたエホバの呪ひが、充されたとお思ひになりますか。』城門を下つて天幕の陣營の方へ草の中を歩きながら、バルジライが、ダビデに話しかけた。

『俺はエホバの復讐があまりに冷酷過ぎると思ふ。』ダビデは溜息をつきながら步いてゐた。

『エホバの呪ひは、あなたがエルサレムの城中においでの間は、なほこの上にもあなたの上に加へられるかも知れません。あなたの劍が人の血を吸ふ間は、あなたの上にエホバの呪ひがかゝつて來るにちがひありません。あなたは第二のアブサロムさま、第三のアブサロムさまの悲しい日をお持ちにならなければなりますまい。あなたはわたくしと一緒に南の草原にお歸りなさい。劍のかはりに牧羊者の杖をお持ちなさい。』

ダビデは陣營に歸るまで默り込んでゐた。

喪服を着たダビデとバルジライはその夜も遍くまで語つた。ダビデの胸にも折々は南の草原の自由な生活が思ひ出さるゝのではあつたが、かれは到底バルジライと一緒に野の中に還つて行くことはできなかつた。

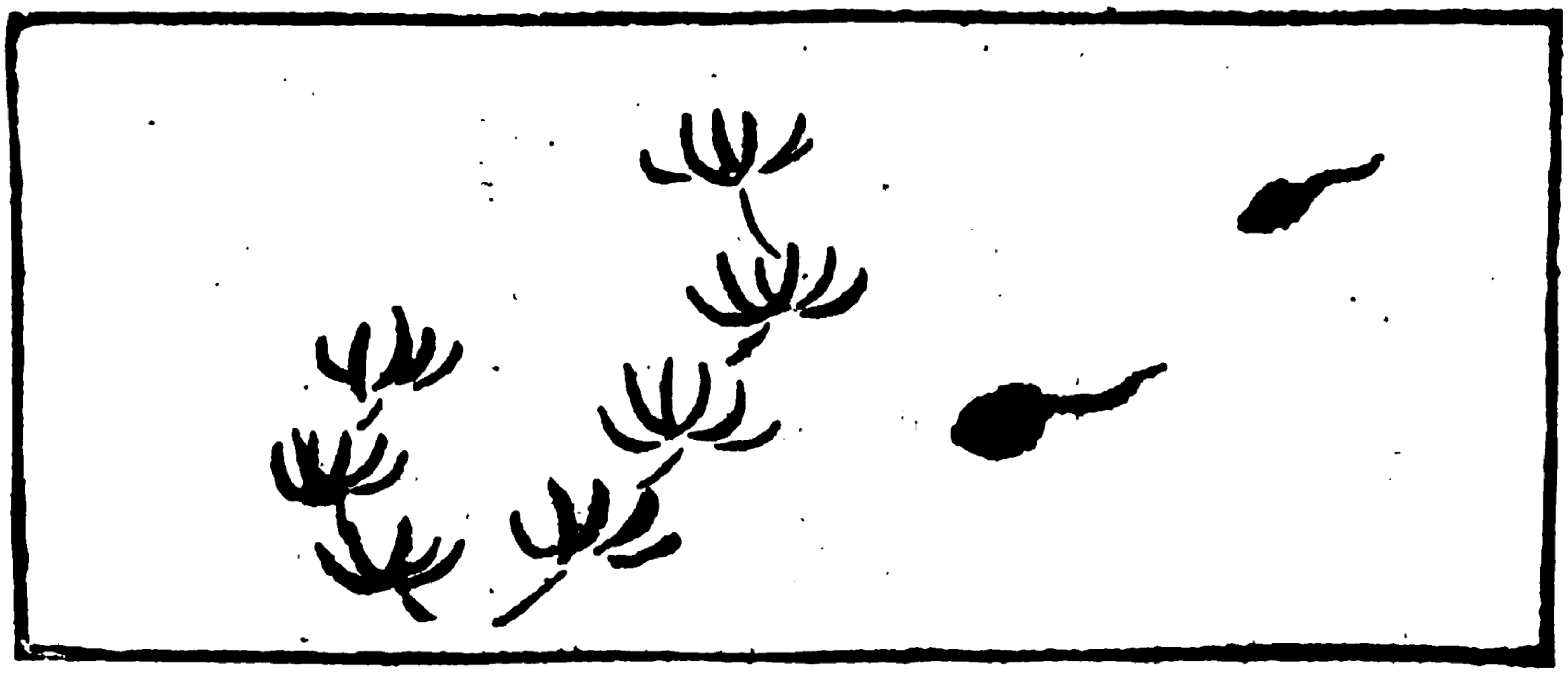
ダビデは熱心にバルジライを止めたが、バルジライは夜明け前にダビデの天幕を立つて南の草原へ還つて行つた。

ダビデは一人の兵士も連れないでヨルダンの河岸までバルジライを送つて行つて、バルジライを抱いて接吻した。霧の深いヨルダンの磧で白髪の二老人は可なり長いこと別れを惜しんだ。

バルジライをヨルダン河に送つて、マハナイムの陣營に歸つて來たダビデは、再び天幕の中の机に凭りかゝつては次の作戰に夢中になつてゐた。

『あいつ等の最後の一人を撃ち殺すまでは、俺の劍を收めてはならぬ！』かれはさう思つた。かれの顏には惡魔のやうな呪はしい憤りの血が漲つてゐた。かれはかれの退陣中にかれを罵詈し、かれに石を投げ、呪を浴びせかけたシメイの一族に對する燃ゆるやうな復讐を頭に描いてゐたのであつた。

――一九二〇・四――



潮風

里見弴

十四

舊暦十五日の月が汽車と一緒に走つた。いつか、大分小さくなつて光を增して來た。

直衞は、三等車の窓ぎわに席を占めて、ものを思ふともなく、ぢつと月の面を見詰めてゐた。片瀬の游泳部の方へ遊びに行つて、そこの連中が口癖のやうに唄つてゐた。「君と別れて逢ひたい時は、月が鏡となればよい」と云ふ俗謡、――なんて下等な奴等だ、くだらない唄を得意になつて唄つてやアがる、と頭から反感をもつて聞くも耳の穢(けがれ)、くらゐに思つてゐた――その俗謡が、知らぬ間に彼の口のなかに唄はれてゐた。そしてその「君と別れて」と云ふ歌詞のかげには、煙のやうに、お才に纏(まつ)はるさま〴〵の記憶が流れ漂つてゐた。どれもこれも、不思議に哀愁の色に濡れた、しみ〴〵とした思ひ出ばかりだつた。

「君と別れて逢ひたい時は、月が鏡となればよい」

直衞は、痛いところへ故ら觸れてみる一種の快さに似た氣持で、またロづさんだ今この瞬間、自分がぢツと見詰めてゐる月の面には、あの勞れたやうな、もう悲し

げなお才の瞳もまた、ぴたりと射つけられてゐるのだ。……なんとなく。堅くさう信じられると同時に、渡殿の上で、柱に軽く身をよせかけて、魂を吸はれてゐるやうに、ぼうッとして空を仰いでゐるお才の姿が、心の目の前に立つた。月光をあびて、蒼白い額が淋しかつた……。

（ほんとに、月は鏡だ！）

直衛はしんからさう思つた。が、次の瞬間には、その安價な文學趣味で、思はず頬が赤くなるやうな氣がした。こんな心の呟きを、悦三にでも竊聞されたひには、どんなにやツつけられるか知れやしない、などゝ思つたりした。

……それにしても、かうお才のことばかり心に浮んで來るのが、直衛にはわけが解らなかつた。何故と云つて、別に根據があるのではないが、どうしてもこれを戀だとはうけがへなかつた。相手が「月見草」ならば、かづ子ならば、瞳の澄んだ「彼女」ならば、心に絡はるところはもつと淡くとも。或はそれを戀と許せさうな氣がするのに、お才では、どうしてもさうとは感じられないのだつた。

（みんなは、兩親か誰かの金でやつてゐるのに、お才だけは自分で働いてゐる――に違ひないと云へばそんなもんだ。つまり、宿屋の女中だと云ふことが……。やつぱり俺は、表面的な階級觀念に捉はれてゐるのかなア……）ほかにかうと云ふほどの理由もないまゝに、直衛も、いや／＼その考に屈服したが、然しさうかと云つて、それが、そんなに恥しいことゝも感じられなかつた。階級觀念の打破、と云ふやうな、少しでも革進的な色を帶びたことは、一切自分の柄にないものと諦めきつてもゐたし、たゞ感情だけから云つても、宿屋の女中に思ひをかけるなどゝ云ふのが、いかにも下卑た書生の仕草じみてゐて、いやでもあつた。

（それぢア、どう云ふわけだらう……）

と、執念く、またほかの理由を考へてみた。そして、やつとかう云ふところへ落ちついた。――（一體俺は懷しがりやなんだ。何も人ばかりぢアない、土地や家に對してもさうだ。旅行すると云つたつて、どこか知らない土地へ行つてみようと云ふ好奇心よりも、前に行つていゝ印象の殘つてゐるところへもう一度行かうと云ふ、懷しがりの氣持の方が、

いつも餘計に働く。一寸でも氣に入つた土地からでも、人からでも、離れて行くのが、馬鹿々々しいほどに悲しく思はれる性分に生れついてゐるんだ。だから、俺は洋行なんぞ與ッ平御免だ。横濱ではきつと泣き出すにきまつてるし、行く先々では、氣に入つた土地や人々から離れるたんびに、辛いいやな思ひをするに違ひないんだ。それだけ、行きたてには、容子の知れない、氣の許せない日々を送らなきアならないんだし……」

こんなことを考へてゐるうちに、もとの、お才の問題は忘れて了つてゐた。

横濱の停車場で、席から立つて。行き往する日本人や西洋人を眺めてゐるうちに、四十格構の肥つた男に、窓ぎはを占領されて了つた。可なり腹が立つたけれども、藤澤から一人でいろ／＼考へ込んで來た氣持の引き續きで、なんとなく、大人びた寛大を保たうと力めた。默つて、その男の隣に腰をおろした。男は、發車まぎはになつて、サイダアを買つたが、もう口金をとつて貰ふ暇がなかつた。

「弱つたなア、こいつア……」

汽車が動き出してから、自ら嘲ふやうな調子で呟きながら、手拭を捲きつけて引つ張つてみたり、窓の手をかける金具に引つかけてこぢてみたりしてゐる、ブク／＼とした指先の不器用さを尻目にかけて、直衞は內々溜飮をさげてゐたト、ガチャリと栓がとれて、さつきからひねくり廻されてゐた瓶の內味が、えらい勢で噴き出すのを、男が、慌て、掌で蓋をする、——隙間を洩れたやつが、水鐵砲のやうに、シュッと直衞の顏から胸にかゝつた。

「オイ氣をつけないか」

「ヤ、どうも濟みません／＼」

云ふなりもう瓶の口を頬ばつて、ガックリ天井を振り仰いだが、見ると、その顏にも、いつぱい飛沫がかゝつてゐた直衞は可笑しくなつて了つて、手巾で顏や胸を拭きながら、口のはたによせて來る笑ひの波をやつとこらえてゐた。肥つた男は、美事に二息ほどに飮みほすと、カラリと腰かけの下に瓶を投げ込んで、手拭で顏を一つブルンとやつてからさて改めて直衞の方に向き直つて、

「いやどうも、なんとも申譯ありません」

と、存外實直に詫びを云つた。直衛は、さつき窓ぎはを占領された時、くだらなくガミ〳〵云つたりしないでよかつた、と思ひながら。柔い氣持で、

「どう致しまして」

と。笑顔で會釋を返した。

やがて品川へ來た、そこの海の上に、月光が末廣がりの長い帶になつて映つてゐるのを見ると、直衛の耳のなかには鵠沼の宿で聞き馴れた波の音が、幽かによみがへつて來るやうな氣がした。それと同時に、久し振りの東京に、やつと歸りついた、と云ふ氣持も嬉しかつた。

十五

「オイ」

いきなり、ポンと肩を叩くものがある、見ると、眞ツ黒な顔に、大きな白い歯並を見せて、ニコ〳〵してゐるのが悦三だつた。

「どうしたんだい」

あまり思ひがけないので、ぼんやりしてゐる直衛の手から、バスケツトを奪ひとつて、

「市内配達にしよう。鞄はチツキか」

「お先にごめん」

四五人おくれて改札口を出て來た肥つた男が、一寸小腰をかゞめて、直衛のそばをすりぬけて行つた。

「誰だい」

「知らないやつなんだけれど。……サイダアをひツかけられたんだよ」

「どうして……」

「まアあとでゆつくり話すがね、……一體どうして迎になんぞ來たんだい」

「豫定通りなら今日歸る筈だし、めつたに豫定を狂はすやつでもなし……」

「でも、滊車の時間がさ」

「面倒臭がりの貴様のことだから、時間表を見る氣支はまづないと睨んだね。俺の乘つた汽車の時間なら覺えてゐるだらうから、きつとあれにするな、と思つたのが、案の定さ。どうだい、名探偵だらう」

「フン、でも感心だつた」

「なアに、よしんば乘つてなくつたつて、ちつとも驚きアしないんだ。晩めしを食つて、銀座を散歩する定刻内の出來ことだからね、お安いご用だよ」

「醉つてるんだな？」

「そんないやな顔をしないつたつていゝぢアないか、オイ、鞄はチッキかよ」

「チッキはチッキだが、……俺アすぐ歸るよ」

「そんな馬鹿なやつがあるかい。態々俺が迎ひに來てやつてるんぢアないか」

「だつて、お安いご用ぢアないか」

「まアいゝから、俺に委しとけよ」

直衛が蟇口から出した眞鍮の荷札もひつたくるやうにして、悦三は市内配達係の方へ急いだ。

三十分ほど後に、悦三は新橋近くの或る酒場の扉をあげて、直衛をつれ込んだ。

「お歸ンなさい」

布哇女のやうな眉毛の長い、顎の角張つた女給仕が、しなをしながら馳けよつて來た。

「ゐたよ〳〵。矢ツ張り俺の見込通り乘つてたよ」

「いらつしやいまし」

直衛には一寸改つた挨拶をして、いやにそばへよつて來て椅子を勸めたりしながら、「あら、川瀬さん、嘘でせう。きつと前から打合せがしてあつたんでせう？」

「馬鹿云へ。ちやアんと俺が、心理學を應用して、ぴたりとあてちやつたんだ。……嘘だと思ふなら、この人に訊いてごらんな」

停車場に來るまで、こゝで酒を飲みながら、自分のことを喋つてゐたのかと思ふと、ヒヨツクリ顏を見た時の嬉しさに引かへて、直衛は一向面白くなくなつて了つた。頸をかしげて、「ねえ、嘘でせう」などゝ甘えたやうに話しかける女には返事もせずに、

「オイ、銀座でもブラついて歸らうよ」

「こゝだつて銀座だよ。……オイ、おきよさん、生ビールを二つ」

「僕はアイスクリームにするよ」

聞えなかつたふりでもするか、そんなことを云はずにビールになさい、とかなんとか餘計な口でもきくかと思つて、睨みつけるやうにしてゐると、案外すなほに、

「アイスクリーム？はい」

と云つて、さつさとパアの方へ行つて了つた。すらりとした後姿は惡くなかつた。

「どうしたい、その後は」

卓の上に兩肘で乘り出して、ニコ〳〵してゐる悦三に目を返すと、けれども、すぐに直衛の反感も消えて行つた。なんと云つても、僅な言葉で澤山な意を通はすことの出來る友達だつた。言葉でなくつても、笑顏一つでも……

「あんまりおもてへも出なかつた。……雨も多かつたしね……」

「うちで、一人でなにしてたんだい」

「勉強してたさ。貴樣さへゐなけれア……」
「ミス・タレントはどうしたい」
「タレント？なんだいタレントつて」
「タレントさ。t・a・l・e・n・tさ」
「タレント、才能つて字か」
「血のめぐりが惡いな」
「あゝさうか」
直衞は、陽に焦けた頬を火照らして、「よくいろんな隱語を發明するやつだな」
「まアさう誤間化さなくつたつていゝよ。その後の經過はどうだつたんだい」
「どうもしやしないさ」
「ぢア、あれア一體なにもんだね？」
「どれ」
「あれさ、改札口で遇つた……」
「あゝあれかア、あれアね、橫濱でサイダアを貰つて、口をぬいて貰はないうちに汽車が出ちまつたもんだから、窓の取手の金具で……」
「え？え？なんだい、それア。一體、誰の話をしてゐるんだい」
「だから、さつき新橋で俺に挨拶して行つた肥つたおやぢのことだらう？」
「なんだい、冗談ぢやないぜ。間違へるにもことを欠いて、あんな爺……」
「ぢア……」
そこへ、前の女が誂ものを運んで來た。

「お待遠さま」
「まア一杯飲めよ」
「いやだ。アイスクリームの方がうまい」
「それア僕にさうですわね」
「オヤ〳〵、いやに肩を持つね」
「だつて、ビールは苦いでせう。アイスクリームは甘いでせう」
「チエツ、世の中にはね、甘くつたつてまづいものもありやア、苦くつたつてうまいものもあるんだよ」
「さう〳〵。ですから、つまり、苦くつてまづいものも、甘くつておいしいものもあるわけだわね」
「うるさい〳〵」
悦三は、西洋人のするやうに、默れと云ふ意で、食指を唇にあてがつて睨みつけてから、直衞の方に向き直つて、
「違ふよ、女だよ」
「女なら、藤澤の電車の終點だらう？」
「さうさ」
「さうさ、だから。あれがどうだつて云ふんだい」
「だから、誰だつて云ふんだよ」
「知らないよ」
「えエ？なアに？、なんだかずいぶん妙てけれんな話ねえ。女だと藤澤の電車の終點つて、一體どう云ふわけ？」
「さうなんだよ。それで、男だと新橋の停車場なんだ」
直衞もなんとなく氣輕になつて、そんな口を利いてみた。
「ほんとに知らないのか？」

悦三は、――疑ぐり深くニヤリ〳〵してゐた。
「知らない。先方ぢア知つてゐるのかも知れないが、俺にやア一向覺えがない」
直衛は故意としやア〳〵とした顔をしてみせた。
「やつてやアがる」
一寸てれた悦三は、誂へた通り二つ持つて來た生ビールの大コップを、一つおきよの前に押しやつて、「どうだい、君のまないか」
「ビールは苦い」
「やつてやアがら、馬鹿々々しい」
一層てれて了つて、ゴクリ〳〵あほりつける狢子を見詰めてゐた直衛は、何か友達の急を救つてやらなければならないやうな氣がして、
「一寸うまさうだな」
「うまいよ、冷くつて」
と、悦三に、上唇についた泡を手の甲で横撫にしながら、案のじよう勢を盛り返して來た。「飲めよ咽の渇いてゐる時にア、たまらなくうまいぜ」
「こちら、ちつともめしやがらないんですか」
「酒は嫌だ」
「ビールは酒ぢやないよ。飲めよ。まあ飲めよ」
「めしやがれよ。あたし、半分すけますわ」
あいた椅子の背に兩肘を置いて立つてゐたおきよが、三和土の上をがり〳〵とうしろへ引くと、暢氣よくそこへかけて、「さア、貴君方からさき」

「オヤ〳〵、一體こりアどう云ふことになるんだい」
悦三は、圓卓の脚の間を十字に渡した支を踏ン張りにして、ぐつとうしろに身を反らせて、文字通り仰天してみせた。
今度は直衛がひどくてれたが、すぐ決心したやうに、大コップを引きよせると、勇敢にも、ゴクリ〳〵と一息で綺麗にほして了つた。
「ブラヴオ！ブラヴオ！おきよさん、お代り！」
直衛は苦い顔をしながら、
「何かブラヴオだい」
と、呟いたが、急いで代りを取りに立つた女給仕の後姿をそつと見送つて、「あんな女と半分づゝ飲んだりしたひにア、一代の名折だからなア」
「えらい〳〵。直公、えらいぞ！」
「えらいとも。……えらいが、ビールは苦いな」
「ぢや、ウイスキーと行かうか」
「いやだよう。おだてたつて駄目だい」
「こちら嘘つきね。あがれるんだわ」
代りを運んで來たおきよは、またそこに坐り込んで、「さア、本性を現して召し上れ」
「冗談云つちアいけない。我慢して飲んだんだよ」
「それぢア、もう一杯我慢なさいね？」
云ひながら、泡の溢れるやつを、鼻のさきへ持つて來られて、直衛はぐツと癪にさはつた。
「我慢なんてものは、一度で澤山なもんだ」
「お互の健康を祝して飲まう」

悦三がコップを目の高さまで擧げて云つた。今度は俺が救はれてゐるな、直衞は思つたが、

「いやだ。つまんない」

「ぢア、ミス、タレントの健康ために」

「フン、いやだ」

「彼女に、K公に、月見草に、……藤澤の終點、……あらゆる彼女等の健康のために……」

「ぢアまア、そんなことでなしに、たゞ飲まうよ」

直衞は、すなほに救はれてゐる方が無事だと思つて、またうまくもない液體を咽へ流し込んだ。

「美事々々」

三分の二ほど飲んだ時に、おきよに囃し立てられると、急にいや氣がさした。

「もういやだ。あと、君のめ」

自分でも（オヤ！）と思つたが、直衞の手は、平氣でコップを女の前に押しやつてゐた。大理石の卓の上に、底の幅で濡れた道が描かれた。それを目の前に見てゐながら、ついそこへ肘をついて了つた。醉つたのかなと思つた。

「俺もう歸るよ」

「あなた、それア卑怯よ」

おきよが、卓の上の手を、甲の方からしつかりと掴んで、右でもう一度コップを押し返した。

「まアいゝよ。君のめよ」

悦三が、おきよの方を向いてさう云つた。

「ぢア、のむわ」

飲みながらも、片手はしつかりと直衞の手を掴んでゐた。

「オイ、ウイスキイを持つといで、瓶ごと、コップを三つ」

その悦三の聲を聞いて、直衛はふいと淋しいやうな氣がしたと思ふと、手の甲に重なつてゐた女の手の上に、もう一つ自分の手を置せて、下のをひつくり返した、ぎゆツと引き寄せるやうにして了つた。

「いけない。行つちやアいけない。こゝにゐなくつちやアいけない」

「ブラヴォ！」

悦二は椅子から飛び上つて、バアへ馳けつけた。はツと、やゝ我にかへて直衛が云つた。

「オイ、俺歸るよ。俥をさう云つてくれないか」

「まアいゝわよ」

「よかアないよ。頼むから……」

と、兩手の間で女の指を揉むやうに締めつけながら「俥夫にね、四谷仲町三丁目五番地……、いゝかい、わかつたかい、四谷仲町三丁目五番地だよ、そこまでやつてくれつて……」

「お名前は？」

「名前？」

がくりと首をもたげて、相手を見据えた直衛の目は、もうすつかり醉漢らしくすわつてゐた。「名前？生意氣云つてやアがら。そんな手に乘つてたまるかい……」

「あらいやだ、何が手よ、人聞きの惡い」

「ヨウ〳〵。おきよさん、早速に、なんかもめてるね」

悦三が、右にウイスキイの瓶をぶらさげ、左の食指と中指と藥指との頭に小さなコップを帽子のやうに被せたのを、調子をとつてガチャ〳〵打ち合せながら戻つて來た。

「こちらのお名前、なんて仰有るの」

「オイ、直公、しつかりしてくれよ」

「いゝよ〳〵」
「よかアないよ。形勢おだやかならずだぜ」
「ねえ、川瀬さん、後生だから敎へて頂戴よ」
「いくら出す」
「こん畜生、友達を賣る氣だな」
「それみろ、叱られちやつたぢアないか」
悅三が、手酌で注がうとするのを、
「いゝわよ。お酌ぐらゐしてあげるわよ」
「へエ〳〵」
「ねえ、なんて仰有るの？お宅はもう覺えちやつた、四谷仲町三丁目……」
「オイ〳〵、俺ア知らないよ」
「俺ア歸るよ。俥をさう云つてくれよ」
「まつたくお弱いのね」
ウイスキイを注ぎながら、悅三に呟いた。
「さうさ。君の責任だぜ、こんなに醉せちやつて……」
「よくつてよ。あたし責任をゝつことよ。だから、お名前を敎へて頂戴よウ、川瀬さん！」
「俺、……知らないよ……」
「いゝわよ、ぢア、もう訊かないことよ。名前なんぞどうだつていゝわ。……さア、あたしにも一杯注いで頂戴！」
「感心々々！　だん〳〵面白くなつて來たな」
「貴方、貴方ッてば！」

「ウ、〻む？」
「あたし、さつき、半分のんだでせう？だから、こんだは貴方、こいだけ、もう半分もないんだから、すけてくださるわね？」
「苦くつてまづいよ」
「あら、ビールぢアなくつてよ」
「なんだい。ヤア、今度は馬鹿に小さなコップだな、これア一體なんだい」
「葡萄酒だい〳〵」
「馬鹿にするない。こんな、……赤かァないぢアないか」
「だから白葡萄酒だよ」
「まアなんだつていゝや。……ウ、ブツ、こいつアいけねえ、ペツ、ペツ、あゝ辛い！」
「あら、ごめんなさいね。おしやあげませうか」
「いやだよ！……なにを飲されるか知れやしねえ。……歸る、オイ、俺ア歸るよ」
「いゝ〳〵。直公、中々醉ひツぷりがいゝぜ。ハハア、こいつアどうして、見込があらア」
いつの間にか、悦三もいゝ心持に醉つてゐた。
「ねえオイ、酒を飲まう。日本酒を飲まう」
「日本酒？　はい」
そこに水を持つて來たおきよが、帳場の方へ通さうとすると、
「違ふよ〳〵。こんなとこで日本酒が飲めるかい。日本酒は疊の上さ。ウイスキイは椅子の上さ。なぞとこたくは酒の上か……」
「川瀨さん、あちら、お倖を云つてあげないでもいゝんですか」

「いゝよ〳〵。勘定！」
「貴方、大丈夫？」
「大丈夫だよ！…オイ、直公、どうしたい。いくぢがないなア」
卓の上に伏さつてゐるのを引き起すと、
「大丈夫だよ！」
「大丈夫か、よし！ぢア、壘の上で深く飲まう！」
「飲め〳〵」
「飲めはいやだな。飲まう、大に飲まう！つて、一つ景氣よくやつてくれよ」
「飲むかね、俺ア歸るよ」
「いゝよ、大丈夫歸すよ」
「四谷仲町…」
「わかつてるよ」
「あゝさうか〳〵。わかつてれァいゝさ。ぢア、深く壘の上へ行くかね、何しろ市内配達…」
「うるさいよ、わかつてるよ」
「あの、お會計は、ご一緒でよろしうございますつて…」
「當り前さ、ご一緒でいゝのさ」
「違ふよ。今度一緒に貰ふつて云ふんだよ」
「なんでえ、けちなことを云ふない。拂つてゆけ〳〵。誰がこんなとこに、またと再び來るもんか」
「まあ…」
「オイ、おきよさんが呆れてるぜ。愛想づかしだとさ」

「あ、さうか。ぢア水くれ」
「そちらに、卓の上に置いたります」
「あゝ成程、置いたりました。おいたりました。……ねえオイ、勘定はどうだい、つて云ふんだよ……」
「いゝよ、今してゐるから默つてろよ」
「さうぢアないよ。洒落なんだよ」
「何が洒落だよ」
「勘定はどうだい、さ。オイ、足りました。……どうだい、うまいだらう」
「おいたりました、か。つまらないね。つまらないが、然しいゝよ〳〵。貴樣、醉つてる方が、よつぽどいゝぞ」
「うまいね。おいたりました……」
「いけない、いけない。折角のを、なぞつちア仕樣がないな」
「あゝさうか。ぢア出かけよう」
二人は、ひよろ〳〵とおもてに出た。

十六

……ふいと目が覺めると、俥の上にゐた。
「オイ〳〵、オイ〳〵」
「へ？　へ？」
俥夫が、足を前に突ッ張るやうにして、惰勢をとめながら、「何か落ちましたか」
「オイ、どこだい、こゝは」
云ひながら見廻すと、廣い電車通りではあるが、もう赤電車も通つたあとゝみえて、電柱の灯も消え、家並もすつか

り[illegible][illegible]つてゐた。

「へえ、黒門町です」

なんのことだ、と云ふやうに、俥夫は、一旦やめた歩調を早めて、前を行く俥に追ひ縋つた。

「黒門町？」

どこだつたか、すぐにはあたまに浮んで來なかつた。

「オイ〳〵、兎に角一寸待つてくれ。黒門町つて云ふと……」

「もうすぐ上野です」

「上野？　オイ、違ふぜ〳〵。まるで方角違ひだぜ」

俥夫は返事もしずに、さつさと馳けて、前の車に追ひついた。見ると、左の泥よけの上で、なんにも被らない悦三の頭がグラ〳〵揺れてゐた。

「オイ、一體どこへ行く氣なんだい」

「ご冗談もんで。旦那。仲の町三丁目五番地を耳に胼胝がいるほど聞かされましたぜ」

「さうさ。四谷仲町三丁目五番地だよ。まるでお前、方角違ひぢアないか。オイ、止めろつたら。オイ〳〵、オイ！」

「だつて、前の旦那が……」

「いゝよ。あいつはあいつだい。俺のうちは四谷なんだ。止めないと、飛びおりるぞ！」

「ほんとですか」

と、もう一度歩調をゆるめて、「ほんとに吉原ぢアないんですか」

「當り前だよ」

「オウ〳〵、オイ、違ふんだとよ〳〵」

前の俥夫を呼びかけて、「吉原ぢアないんだとよ」

前の俥もとまりかけた。

「いゝんだ〳〵。そつちはそれでいゝんだ」

直衛は、もうすつかりはツきりしてゐた。悦三が目を覺して、なんのか云ひ出すとうるさい、と思つて、一言さう云つたきりで、あとは帽子を振つて、ドン〳〵先へ行けと云ふ合圖をした。帽子は、どこで變つたのか、悦三の例の阿父さん讓りの古パナマになつてゐた。

「ほんとにいゝんですか」

彼を乘せてゐる俥夫が、振り返つて、もう一度念を押した。

「いゝんだつたら」

それで俥夫も手を擧げて合圖をした。悦三は、頭をグラ〳〵させながら、なんにも知らずに、また先へ運ばれて行つて了つた。

「それで、どこですつて？」

俥夫は、やゝ突ツかへるやうな調子で云つた。

「だからさ、四谷だよ。仲町三丁目五番地だ。……こんなとこい來て了つて、仕樣がありやアしない」

「だつて、あつちの旦那は吉原だ〳〵つて云ふし、旦那は旦那で、仲の町三丁目ばかり云つてるんだもの、こつちはお前さん、うツぷんにその氣でもつて、こゝまで來てから急に四谷だなんて……」

「だつて駄目がないぢアないか、仲町を仲の町と間違へるなんて。俺は慥に仲町と云つたに違ひないけれど、四谷つてことを云はなかつたとすれア、俺の方も惡いにア惡いが……」

「なアに、旦那が、はつきり仲の町つて云つたんでさアね」

「そんな馬鹿な話があるもんか。いくら醉つてたつて、自分のうちの所番地を云ひ間違へるなんて……。然しまアいゝやね。そんなことまでいつまでグヅ〳〵云ひ合つてたつて仕樣がありやアしない。四谷にやつてくれよ」

「困りますねえ」

「困るつたつてお前、無駄しただけのものをとりさへすればア同じこつちアないか」

「さうはいきませんよ」

「何故さういかない人だい」

「四谷あたり、お前さん、捨場が惡くつて、歸りが利くんぢアなし、一晩一杯や二杯稼いだんぢア、商法になりませんや」

「だから、一杯で商法になるだけ取れアいゝぢアないか」

「ぢア旦那、こつちで云ふだけ出しておくんなさるんですね」

「出すから、さつさとやれよ」

それには返事もしずに、俥夫は梶をかへして駈けだした。直衛は擧てほつとして、悦三の帽子をぬいで空を仰いだ。一點の雲もなく晴れ亘つた沖天に、まん圓な月が小さくかゝつてゐた。なんとなく、直衛は、永く見てゐられなかつた。すぐに首を垂れた。……角ばつた額の女給仕にへんな愛著を感じたことや、歸がけにひどくその女を怒らして了つたやうな氣がや、銀座の裏通で、どこかの門口にあつた竹の緣臺の上に、ひや〳〵と背筋を冷して、月を仰いでいゝ心持ひにつくり返つてゐるのを、無理無體に悦三に引づり起されて了つたことや、國觀と竹坡の合作の襖のはまつた廣間にゐたことや、たしかそこで現はれた甚しく長い顏の女や、悦三が銀釜々々とそればかり云つてたことや、出窓に出てあぶながられたことや、「疊の上にて死ぬことは、武士のなすべきわざならず」と云ふ軍歌の、そこばかり繰り返し〳〵、悦三と二人で、出る限りの聲を振りしぼつて唱つてゐたことや、三尺くらゐの高さの、煙草か何か入れる外箱らしいものが、人道と車道との間に出してあつたのに胸をよせかけてもどしたことや、その時郵便脚夫が、ちよいとカンテラの灯をこつちへ向けて通つて行つたことや、國觀と竹坡を罵つてゐたら、前から氣に食はなかつた年增の藝者が、すつかりこつちに反感をもつて了つて、何か隱語で、露骨な惡口を云つたらしかつたのに腹を立てゝ、怒鳴り立てたことや、悦三に宥められてゐるうちに、急に淚が出て來たことや、どこかでひどくイヒチヨオルの匂がしてやりきれなかつたこと

や、……丁度沼の底からプクリ〳〵泡が浮んで來るやうに、生れて初ての大醉中の出來ごとが、斷片ながら目の前にかへつて來た。そのどれもが、不愉快で、情ない自分だつた。が、それはまだ〳〵いゝとして、思ひ出せない部分に、この上どんないやなことが潜むでゐるか知れないと云ふ不安は、とてもぢツとしてはゐられないほどのものだつた。俥の上で、思はず、「アーツ」と聲をあげたり、（馬鹿々々馬鹿）と、心のなかで自分を罵りつゞけてゐるのが、腕力になつて胸に組んでゐる手で、がり〳〵そこらをひツ掻き廻したりした。それにはまた、こんなにおそくうちへ歸ることが、兩親の手前ひどく心配でもあつたし、内懐に財布の手答はあるが、中味はどのくらゐ殘つてゐるのやら、一文なしになつてゐるのやら、まるで見當がつかなかつたから、俥夫に拂ふ金がなかつた場合に、門をあけさせる爺やや、書生にもまさか借りられず、母親を起して貰ふのも氣がひけるし、それも氣がかりだつた。でも、財布を出して、なかをあらためてみることは、なほ恐ろしかつた。さう云ふ、吉凶をはつきり見るやうなことは、一刻もさきに延ばして置きたい心弱さに陥つてゐた。行くところまで行つて、どんな恥でも忍び、どんな小言でも喰はふ、それよりほかに仕様がない、と思つてゐた……。

何にしても、四谷までは長い道中だつた。凡の時刻も知らなかつたし、どこからこの俥に乘つたのか、そんなことも訊いてみたい氣もするのだが、さつき荒ツぽく口を利き合つた俥夫に、こつちから折れて出るやうなのも業腹なので、默つてゐた。九段坂をあがる時などは、おりて歩いた方が早いと思ひながらも、我慢して乘つてゐた。あがり切つて、廣々としたところに出たのと、もうなんてつたつてこつちの居廻りだ、と云ふ氣持とで、漸く少しは元氣づいた。そして、有繋にもうひえ〳〵として來た空氣を、快く額にうけながら、胸を張つて、空を仰いでみた。限もない月かげだつた。——思へば、鵠沼の小松林の上に、檸檬色の光も淡く、洗濯盥ほどの大さにぬつと顏を出してゐたのもこの月だ。走り動く汽車を一緒に、だん〳〵小さく、だん〳〵光をましながら、品川の海の上までつれだつて來てくれたのもこの月だ。考へると、どうやら醫者家らしいうちの前に出してあつた竹の縁臺に、だらしくなくひつくり返つた醉眼の上に照つてゐたのもこの月だ。……直衛には、とても信じられないほどだつた。鵠沼で見た月の姿などは、一二三日も、いや

二十日も一月も前のことのやうな氣がする。もう一つ大袈裟に云へば、今昔の感に堪えない、とすら云ひたい氣持がするのに、それが今この俥から仰ぎみるのと、同じ一夜の月なのだ。月にしても、あの男、ずいぶんいろんな心持で、變つたところ〳〵から、俺の顏を見てゐるなア、と思ふに違ひない。いや、自分には覺えがないことまで、お月樣は見ていらつしやる……。

「アッアー、いやだ!」

もう一度直衛は、自己嫌惡の悲鳴をあげた。

「えゝ?なんか云ひましたか」

「いゝや、なんでもない。……ときにもうなん時頃だらうね」

「さうですね、一時半一寸廻つたくらゐでせうか……」

「さうかね」

思ひのほかに早いのが嬉しかつた。三時とか四時とか云はれても、どこに尻の持ち込みどころもない、重々自分の不心持と、悄氣かへつてゐる直衛にとつては、それが、十年とまで觀念してゐた刑期が、案外にも三年と云ひ渡された罪人ほどの心の勇みになつた。

松の老木の覆ひかぶさつた濠ばたから、四谷見附を出て、やがて彼は父母の家に歸りついた、門燈の光の下で、懐から、懸案の財布を取り出しながら、

「いくらだね」

「すみませんが、五圓おやんなすつてください」

俥賃としては、背て彼が拂つたことのない多い額だつた、少しも高いと云ふ氣はしなかつた、また、これも、思つたより罰が輕い、──その氣持だつた。汽車賃以後、そつくりそのまゝでゐるとすれば、まだ二枚は慥ある筈の札だつた。もう、こゝまで來れば、一文なしになつてもいゝのだ……。

あけてみると、そつくりしてゐた。直衛は二枚ともやつて了ひたいほどの氣持だつたが、五十錢骨折を添へて渡した。俥夫が頻と禮を云ふのを耳なかで聞きながら、嚴丈な長屋門の耳門を叩いた。
「へえ、どなた！」
爺やの胴間聲もなつかしかつた。
「俺だよ、爺や、俺だよ」
「えエ、若旦那さんですか」
「さうだ」
がら〳〵がらツと、仰山に鎖が鳴つて、あいた。
「あゝ、お歸り。えらいおそございましたなア」
ゆかた一枚の帶しろ裸の前を、片手で抑えて、爺やが若狹訛をだして云つた。
「あゝ、わきいよつてたもんだから。おそく起してお氣の毒だつたね」
「何をおつしやいます。では、おやすみなさりまし……」
直衛はさつさと內玄關の方へ廻つた。と、明い月のもとに眞白に跳んで來たものがあつた。
「ピヤンコ！ピヤンコ！」
すぐそこにしやがんで、兩手を大きく擴げた膝へ、クウンと長くひいて鼻を鳴しながら、雪白の、伊太利種の番犬が武者ぶりつくやうに兩の前足をかけて、
「オイ、暫だつたね、どうしたい」
直衛は、グリ〳〵といやに彈力性の手答のある背なかへ手を廻して、ぐつと抱きよせてやつた。ウツ、ウツ、ウツ、ウツ、ウと、短く息を喘ぐやうにしながら、生あたゝかいざらつく舌で、ペロ〳〵と頸を舐め廻す……。
「オイ〳〵。冗談ぢやアないぜ」
ガチヤ〳〵と頸輪を鳴しながら、懷に鼻の先を突つ込んでみたり、ちよいと足をおろしてみたり、すぐまた跳びかゝ

つてみたり、どうしていゝのかわからないやうにめちやくちやに踏んでゐた。
「ビヤンコ！オイ、ビヤンコ！」
両掌でくるんで了ふやうに、耳の上から顎へかけてしつかりとつかまへて、直衛は、犬の冷い鼻のさきを、自分の鼻の頭へこすりつけた。クウーン、と甘えるやうに鳴いて、前足を突ツ張つて、いやだと云ふ容子をする。そのくせ、ちぎれるほど尾を振つて、一瞬間もぢつとはしてゐられないやうに、後足で跳びはねる。
「こいつめ！いやだなんて云ふとかうだぞ！」
直衛は、もう一度亂暴に引きよせて、犬の口に脣を合せると、舌の先をちよいと舐めて、そのまゝ横へ投げ飛ばすやうにした。そしてすぐ立たうとする懷へ、また跳びついて來るのを、頸根ツこへ兩手をかけて、耳と耳とをおツつけ合ふやうにして抱きしめたが、――と急に、なんとも云はれない氣持になつて、涙がポロ〳〵頬へこぼれた。
犬も、今度は、そのまゝぢツと抱かれてゐた。
ふと、黑門町で目を覺まさずに、そのまゝどこかへ行つてゐたら……、と思つた。――そのみぢめさはどんなだらう！犬とかうしてゐるのと、……あゝそれは、天と地ほどの違ひだ……。
「オイ、ビヤンコ！」
黑門町で目が覺めたのも、時刻が思つたより早かつたのも、俥夫の拂ひが出來たのも、みんなお前のおかげだよ！――直衛は、心の底でさう云つて、頸に廻してゐた手をほどくと、思はず大地に手をついた……。
が、その時、同じ心のうちに、なぜだい、と幽かに呟くものがあつた。
なぜ？なぜもくそもあるものか！さうなのだ、それに違ひないのだ！とは思つたが、ふいと彼は立ち上つて了つた。
限もなく月は照り亙つてゐる。
お月樣も證人だ、それに違ひないのだ！もう一度さう思つて、空を仰いだ。
やゝ西に傾いた月の光は、黑々と陽に焦げた、巖丈な、そのくせ涙のあとを頬に殘した若者の上に、靜かに、靜かに落ちてゐた……。（大正十年四月脫稿）



暗夜行路

志賀直哉

（十八の續き）

讀みながら、謙作は自分の頰の冷めたさを感じた。そして、不知手紙を持つて立ち上がつて居た。

「どうすればいゝのか」彼は獨り言を云つた。狹い部屋をうろ〳〵と歩きながら、

「どうすればいゝんだ」と又云つた。殆ど意味なく彼はそんな言葉を小聲で繰返えした。「そんなら俺はどうすればいゝのか」

總てが夢のやうな氣がした。それよりも先づ、自分と云ふものが――今までの自分と云ふものが、霧のやうに遠のき、消えて行くのを感じた。

あの母がどうしてそんな事をしたか？これが打擊だつた。其結果として自分が生れたのだ。其事なしに自分の存在は考へられない。これはわかつて居た。が、左う思ふ事で彼は母のした事を是認出來なかつた。あの下品な、いぢけた、何一つ取柄

のない祖父、これと母と。此結びつきは如何にも醜く、穢らはしかつた。母の爲めに穢らはしかつた。

彼はたまらなく母がいぢらしくなつた。彼は母の胸へ抱きついて行くやうな心持で、

「お母さん」と云つた。

十九

氣持にも身體にも異狀な疲勞が來た。彼はもう何も考へられなかつた。彼はそれから二時間ばかり、ぐつすりと眠つた。

四時頃眼を覺ました。其時は氣分も身體も殆ど日頃の彼になつてゐた。彼は顏を洗つて、少時、椽へしやがんで、ぼんやり前の景色を眺めてゐた。其内彼はお榮や信行が心配して居るだらう事を想ひ出した。そして早速返事を出す事にした。

お手紙拜見しました。一時はかなり參りました。日頃の自分を見失つた程でした。然し一ト寢入りして今はもうそれを取りもどして居ます。君が云ひにくい事を打明けて下さつた事は本統にありがたく思ひました。

母上の事、今は何も書きたくありません。然し左ういふ事の母上にあつたといふのは何より淋しい氣をさす事でした。尤もそれで母上を責める氣は毛頭ありません。僕には母上が此上なく不幸な人だつたといふ事きり今は考へられません。

父上に對しては、多分、この事を知つたが爲めに僕は一層父上に感謝しなければならぬのだらうと云ふ氣が漠然してゐます。實際父上がこれまで僕にして下さつた事は普通の人間には出來ない事だつたに違ひありません。それを感謝しなければならぬと思つてゐます。そして父上がこの事から受けられた永い苦みに就いても、想像はつきます。隨分恐

しい事だつたに違ひありません。只僕としては、これから先、父上とどういふ關係をとるか、これを疑問にしてゐます。父上に御苦痛を與へる事なしに、矢張り今度を機會として、無理のない所まで關係をはつきり落ちつける方がいゝやうに考へます。

然し君との關係は別です。それから出來る事なら、咲子や妙子との關係も別だと云ひたい氣が實に強くしてゐます。自分に就いては、どうか餘り心配しないで頂きます。一時は隨分まひりましたし、今後もまひる事があるかも知れません。然し回避かも知れませんが、自分が左ういふ風にして生れた人間だといふ事を餘りに大きく考へまいと思つてゐます。いやです。それは恐しい事かも知れません。然しそれは僕の知つた事ではありません。僕には關係のない事がらです。責任の持ちやうのない事です。左う考へます。左う考へるより仕方ありません。そしてそれが正當な考へ方だと思ひます。

そんな風にして自分が生れたといふ事は不愉快な事です。然し今更に左ういふ意識で苦しんだ所で何にもなりません。無益で馬鹿氣てゐます。そして僕はそれを呪はれたものとも考へません。肺病を遺傳される方が餘程呪はれた事です。君は愛子さんとの事でそれが祟つたといはれますが、あれは何方かと云へば、僕が斷はられる源因を知る事が出來なかつた所に變な暗い苦みがあつたのです。源因が分かつてゐればあれ程は弱らずに濟んだのです。然し左ういつて君を責める氣ではありません。君の打明けられないお氣持よく分かりました。少しも無理とは考へません。殊に父上想ひの君としては當り前な事です。そして僕は今度の機會に又それを繰返えさず、打明けて下さつた事を心から感謝して居ます。君が打明けて下さらなければ、僕はまだ／＼知らずにゐなければならなかつたのです。しかも知らぬまゝに其事は不思議な重苦しいものとして僕の頭に被ひかぶさつてゐたかも知れません。どうか僕の事は心配しないで頂きま

す。僕は知つたが爲めに一層仕事に對する執着を強くする事が出來ます。それが僕にとつて唯一の血路です。其所に頼つて打克つより仕方ありません。それが一擧兩得の道です。

歸京の事、もう少し延ばします。然し此先き餘りに参る場合あれば、左う我慢はしません。君にもお榮さんにも隨分會ひたくなる事あります。弱音を吹けば弱音は幾らもあります。然しもう少し落ちつく考へです。仕事の收獲が餘り少くな過ぎます。然し歸るべき時が來ればなるべく素直に歸ります。

それから創作に自家の事の出る事、心配されるお氣持、同感出來ます。それは何かの形で出ない事はないかも知れません。然し不愉快な結果を生ずる事には出來るだけ注意します。

咲子妙子によろしく、

お榮さんも餘り心配しないやう願ひます。

それからお榮さんの事はもう少し考へさして頂きます。然しお榮さんにはつきり斷はる意志あれば止むを得ませんが、僕としてはもう一度申出をするか、此儘斷念するか、此事もう少し考へたく思ひます。

書き終ると、彼は完全に今は自分を取りもどしたやうに感じた。彼は立つて柱に懸けて置いた手鏡を取つて、自分の顏を見た。少し靑い顏をしてゐたが、其所には日頃の自分が居た。亢奮から寧ろ生き／＼した顏だつた。何といふ事なし彼は微笑した。そして「いよ／＼俺は獨りだ」と思つた。彼には自由ないゝ氣持が起こつた。

外から聲をかけて、隣りの婆さんが恐る／＼障子を開けた。夕食の飯を持つて來たのである。そして彼が何も菜の支度をしてないのを見ると、

「でべらなと燒きやんせうかの」といつた。

彼には殆ど食慾がなかつた。

「後で食ふから、其所へ置いてつて下さい」

婆さんはお燗(かん)を其所へ置いて歸ると、又湯がいたほうれん草を山盛りにつけた皿を持つて其所へ置いて行つた。

彼は矢張り何んとなく家へ落ちついてゐられない氣持になつた。丁度新地の芝居小屋に大阪役者が來てゐる時で、彼は隣りの老人夫婦を誘つて其所へ行つて見ようと思つた。然し隣りでは其晩三原といふ所へやつてある孫娘が泊りがけで來る筈だつたので行けなかつた。爺さんは婆さんにお前だけ行けと切りに勸めたが、婆さんは「へえ、わしもやめやんせう」こんな事をいつて笑ひながら中々應じなかつた。婆さんは後妻で子がなかつた。それ故それは義理の孫娘だつた。

「折角ぢや、お前だけ供をせえ」爺さんはいい機會を逃がす事を惜しむやうに押して云つた。が、婆さんはどうしても應じなかつた。切りがないので、

「そんなら又此次ぎにすればいゝ」かういつて謙作は婆さんのつけて與れた小さいぶら提灯を下げて一人坂路を下りて行つた。

盛綱の芝居をしてゐた。それは今までとは異つた平舞臺に澤山の金屏風を立て廻はしてする首實檢で、盛綱になつた役者が淨瑠璃の三味線に乘つて寧ろよく踊つてゐた。少しも内面的な所がなく、然し氣樂に見てゐるにはそれも面白かつた。そして三幕程見て其所を出た。彼はぶら／＼と一人海添の往來を歸つて來た。彼の胸には淋しい、謙遜な澄んだ氣持が往來してゐた。お榮でも信行でも、咲子でも、妙子でも、其姿が丁度双眼鏡を逆に見た時のやうに忽に自分から遠のき、小さくなつて了つたやう感ぜられた。そして誰れも彼れもが。それは本統に孤獨の味だつた。しかも彼にはそ

れらの人々に對し、實に懷かしい氣持が湧き起つてゐた。そして彼は又亡き母を憶ひ、何んといつても自分には母だけだつたといふ事を今更に想つた。幼時の樣々な記憶が甦つて來た。彼は臆面なく感傷的な氣持に浸つてそれらを振り返へつた。それがせめてもの安全辨だつた。彼は此所でも屋根に乘つた時の記憶を想ひ浮かべ、涙ぐんだ。然し母の床に深くもぐつて行つた時の事を憶ふと、彼は不意に何かから突き返えされたやうな氣がした。此時の母の情けない氣持が彼に映つたのだ。母にはそれが自身の罪を突きつけられる事だつたに違ひない。罪の子、自分は本統に罪の子なるが故に生れながらにして、左う出來てゐたのではなかつたか。こんなに考へられた。

彼は段々自分が、左ういふ氣分に惹き込まれつゝある事を意識した。坂路を惰性のまゝに段々早くなる、それを踏み止まるやうな心持で寧ろ意志的に彼は氣分を惹きもどさうとした。手段として、彼は廣い〳〵世界を想ひ浮かべた。地球、それから、星（相憎曇つてゐて、星は見えなかつたが）宇宙、左う想ひ廣ろめて行つて、更にその一元子程もない自身へ想ひ返えす。すると今まで頭一杯に擴ろがつてゐた暗い慘めな彼だけの世界が急に芥子粒程のものになる。――これは彼のかういふ場合の手段で、今も、或る程度には成功した。

少し腹が空いて來た。彼は時々行く西洋料理屋まで引きかへさうかと思つたが、新地を又通つて、行く事がいやに思へた。そして暗い海添ひ道を一寸後もどりして蠣船料理へ行つた。

棧橋からかけ橋を渡つて入ると紺の靑くはげ落ちた法衣を着た十四五の生々した子供が中腰でないと歩けない小さな廊下から彼を座敷へ案內した。座敷には低い天井から暗い電燈が只一つ下がつてゐるばかりだつた。

彼は食ふものを云ひつけた。そして、それを待つ間に座敷の陰氣臭さが又彼の氣分に影響して來た。彼は殊更に自分の頭を仕事へ向けようとした。それは本統に今の彼には唯一の血路に違ひなかつた。然し左う思つても、努めても、彼

の氣分は中々其方へ入つては行かなかつた。變な淋しさ、そして、暗い何か知れぬものが四方から被ひかぶさつて來る。そして今はそれを跳返えすだけの力は身中の何所にも潜んでゐなかつた。頭も胸も全で空虚だつた。左ういふものは浸み込み放題だつた。彼は浪に卷き込まれた者が浪に身を任かせ、その過ぎ去るのを待つやうな心持で、今は素直にされるまゝになつてゐた。それより仕方がないと考へた。

彼は低い窓障子を開けて、其所から外の景色を眺めた。石垣の上が暗い往來で、向側に五六軒破風を竝べて、倉庫がある。新地から宿屋へ呼ばれて行く藝者だらう、三四臺續いた俥の上で互に浮かれた高調子で、何か云ひ合ひながら通つて行くのが其暗い中に見られた。

自分のやうな運命で生れた人間も決して少なくないに違ひない、謙作はそんな事を考へた。道德的缺陷から生れたといふ事は何かの意味でそれは恐しい遺傳となりかねない氣もした。左ういふ芽ば自分にもないとは云へない氣がした。然し自分には同時に其反對なものも惠まれてある。それによつて自分は其惡い芽を延ばさなければいゝのだと思つた。本統につゝしまう。自分は自分の左ういふ出生を知つたが爲めに一層つゝしめばいゝのだ。少しもそれに致命的な要素は含まれて居ないのだ。寧ろ親の泥醉中に出來た子の生涯呪はれた生理的の缺陷などに較べると、それは遙かに仕合はせに思へた。淫蕩な氣持、これを本統につゝしまねばならぬ。そんな事を思つた。

食事をのせた大きな盆を持つて、先刻の子供が大股に入つて來た。そしてそれをぐら〳〵する小さな食臺の上に置くと元氣に一寸頭を下げ、出て行つた。

腹が空いてゐるつもりだつたが、彼は餘り食へなかつた。酢にした蠣だけが食へた。

何か小さな物が舌の上に殘つたので、彼はそれを指の先に落として見た。それは目高の眼程の小さい眞珠だつた。勿

論大きさからいつても別に價のあるものではなかつたが、口へ入れたものから、そんなもの丶出た所に何かしら穢らしい氣持が感じられた。

二十

十日程經つた。其間彼は幾度か參り、又元氣になつた。元氣になつた時はもう參らないぞ、と思つた。が、其元氣——亢奮が去ると、又ジリ／＼と參つた。それは熱のやうなものだつた。今は「時」によつて自然それのうすめられるのを待つよりなかつた。

彼は蠣船から持つて歸つた小さい眞珠を咲子へ送つてやつた。そして咲子から其禮手紙が來た時に、一緒に信行からも一通來た。

困つた事が起つた。俺はお前に濟まない事をして了つた。自分の淺慮からお前に思はぬ不快と迷惑を與へる結果になつた事をあやまらなければならない。俺はその事で生れて初めてといつてい丶位烈しい衝突を父上とした。その結果は矢張り思はしくない。

實際それは云はなくてもい丶事だつたが、深い考へもなしに俺はお前がお榮さんに對してした申出の事を義母上に話したのだ。所が直ぐそれが父の耳へ傳はつた。父上は非常に怒られた。最初俺は何がそれ程に父上を怒らしたか解からなかつた程だ。俺はそんな父上を初めて見た氣がした。「そんな事は斷然ならんから。お榮は今から直ぐ解雇して了へ」こんな風に云はれた。今になれば俺にも父上の氣持はよく解かる。何がそれ程に父上を激怒さしたか、それを想ふと涙が出て來る。お前に對する怒りでも、お榮さんに對する怒りでも、それはない。さういふ間違つた事（此言葉は父上の言葉だが）に對するそれは激怒なのだ。が、俺は其場にあつて、其所まではつい考へられなかつた。其時の俺の氣持を云

へば先づ何よりも父上の激怒に度膽を拔れて了つたのだ。次に俺はお前に對し、これは大變濟まない事をして了つたといふ氣がした。さうしてこれはどうしても父上を説いて、お榮さんを出して了へといふやうな今となれば最早父上としても潜越過ぎるさういふ命令的な言葉を取消して貰はねばならぬと思つたのだ。面食つてゐる俺には其場合それだけしか考へられなかつた。しかも、俺として、近頃段々好意を感じて來たお榮さんを、そんな調子で出して了ふと云ふ事は長い間散々世話になつた人に對する如何にも道でない氣がしたのだ。其所で俺はお前の爲にも辯じたが、それよりもお榮さんの爲めに辯じて、かなり烈しく反對したのだ。

『貴樣までがそんなことをいふか』父上は机の筆筒をいきなり俺の膝の前へたゝきつけられた。其の時筆筒の底にあつたペン先きが、どうしたはづみか一本疊へさゝつた。俺は迚も今話した所で駄目だと思つた。それでも俺は、『そんな事を仰有つても、謙作が承知しますまい』といつた。『いや斷然それは俺が許さん』と父上は云はれた。仕方がない俺は其儘其場を切り上げたが、後で亢奮が少し靜まると、初めて俺には父上の氣持がハッキリ映つて來た。俺は何年振りかで泣いた。そして自分でつくづく馬鹿だと思つた。俺の淺慮は一度にお前やお榮さんに思はぬ迷惑をかけ、父上には漸く忘れかけた苦痛を呼び起して了つたのだ。どうか俺を余り責めないで呉れ。云ふまでもなく、それは全く惡意からではなく、淺慮からの過失だつたのだ。

──俺は本統に此手紙が書きにくい。何一つお前に氣持のいゝ事が書けず、又自分としても、何一つ賴み甲斐のある兄らしい事（事實はどうあらうと、感情的に俺はお前を何時までも弟と思つてゐる）が出來ず、反つてお前を失望さす事ばかり續けてゐる事は實に俺も心苦しい。俺はお前に愛想を盡かされるだらう。

俺は同じ晩又父上と會つた。其時は父上も俺も前々は全く變つてゐたが、それは氣分の上の事で、平靜ではあつたが、

父上の云ひ分は前と少しも變つてゐなかつた。もう俺はそれに反對出來なかつた。そして俺は父上の云はれる通りを承知してしまつたのだ。

表面上の理由はかうだ。お前が左うして、尾の道にゐる以上、別に東京に家を持つてゐる必要はないし、お榮さんとしても、永久に一緒にゐる筈の人でないのだから、早く一人になつて、生涯安心の道を立てた方がいゝだらうと云ふのだ。で、お榮さんの爲めには父上は前から其つもりでゐたやうに、二千圓だけの金をあげると云ふのだ。俺は二千圓ばかり、今時どんな商賣をするにしても足りはしないから、五千圓位出して頂きたいと云つたのだ。父上は中々承知されなかつたが、仕舞に三千圓だけ出すといふ事になつた。こんな事まで書くのはお前の氣を惡くする事に違ひない。然し萬々一、お前の氣持が變つて、これを承知する場合がないとも云へないので、こんな事も決めたわけだ。

義母上は俺と同樣、父上にこれを話した事を後悔してゐられる風だ。然し一切、此話の中に入られないのは、却つて吾々の爲めに好都合だ。で、俺は昨日兎も角、此事を云ひに福吉町へ行つた。勿論、此事は父上の意見だけで決められる事ではない。だから、俺のは寧ろ只其報告に行つたのだ。——其所で露骨に云へばかういふ事になる。父上の命令的な云ひ條は、それを認める、認めないは實はお前達の勝手なのだ。只認めないとなると、お榮さんの受取る筈の金を請求する事は一寸困難になりさうだ。これだけだ。俺は其事も、少し露骨だつたがお榮さんにハッキリ云つたのだ。然しお榮さんはそれに對し、何もハッキリした返事はされなかつた。無論大した金ではないが、お榮さんのやうな境遇の人にとつて、左う冷淡ではゐられなかつたに違ひない。お榮さんからすれば、自身お前と結婚しようとは思つてゐないから、早晩お前が誰れかと結婚した場合、別れる事に變りはないと考へられるのが本統らしい。只それは時期の問題だ。今、直ぐ別れるか、他日かといふ。然し金の方は今なら受取れるが、他日では駄目だとなると、これは問題が變つて來

る。それ故お榮さんは自身のこれからを考へれば、父上の云はれるやうに今お前と別れるのがいゝ事にもなるのだが、又まるで異う氣持から、今お前と引き離される事は隨分つらいらしく、それは俺の眼に見えてゐた。

「私には解かりませんわ。何事も貴方と謙さんにお任せ致します」かうお榮さんは云はれた。實際左うとよりお榮さんとしたら云へない事だ。結局ハッキリした事は何も聽かずに歸つて來たが、お榮さんはお前がまだ尾の道に居るやうならば、一人でこんな家に住んでゐるのは贅澤過ぎるから、兎も角最近、もつと小さい家に引越したいと、それを切りに云つて居られた。で、俺も其事は贊成して來た。

そして夜おそく、(一つは父上と會うのがいやだつたので)歸つて來ると、二十八日出しのお前の手紙が來てゐた。俺はそれを讀みながら、流石お前らしく、參りながらも、其苦みから拔け出す路を見出さうとする氣持に感心した。本統に隨分苦しかつた事と思ふ。然し其苦みに又添えて今度のやうな問題を云つてやらねばならぬ事を考へると俺は全く氣が滅入つて了つた。のみなず、俺はお前がお榮さんに對する申出を未だ斷念してないのを見ると、これは若しかすると今度の問題でお前が一層その決心を堅くしはしまいかといふ不安を感じだ。不安と云つては濟まぬ氣もするが、實際俺にはそれは不安だ。お前の爲めにも不安だが、父上がそれから受けられる苦痛を考へると、變に不安になる。俺は本統に自分の無力を齒がゆく思ふ。全く板ばさまりだ。若し自分に力があればこんな事もどうか出來る事かも知れない。然し俺にはどうする事も出來ない。父上は父上の思ひ通りに主張される。お前はお前の考へに從つて何んでもしようとする。兩方それは正しく、兩方に俺はよく同情出來る。が、扨て自分の立場へ歸つてそれを考へる時に、俺は本統にどうしていゝか分からなくなる。

全く俺は臆病なのだ。二三年前一年程家を持たした事のある或る女とも、約束しながら、仕舞ひに俺はそれを破つて

了つた。これは恥づべき事とは思ふが、迚も承知する筈のない父上との衝突が考へてもいやだつたからだ。衝突はいゝが、俺が勝つたとしても父上がそれで弱られる事を考へると、俺にはそれを押してやる氣にはなれない。幸に其女も簡單に納得したからいゝやうなものゝ、かういふ事はお前としては考へられない事かも知れない。それからお前がたつ前日にも一寸いつたが、俺は今の生活をどうかして變へねばならぬといふ氣を隨分強く感じてゐる。精しい事は長くなるから書けないが、あの時お前は「そんなら直ぐ會社をよしたらよからう」といつたが、それすら俺には出來ない。――今更に前にこんな事を書くまでもないが、どうしてかう弱いか自分でも齒がゆくなる。

其所で仕方がない。俺は俺の希望を正直に書く。出來る事なら、どうかお榮さんの事を念ひ斷つてくれ。これは前の手紙にも書いた通り、必ずしも父上を本位にしていふのではない。その事は何故かお前の將來を暗いものとして思はせる。そして尚出來る事なら、此機會に思ひ切つてお榮さんと別かれてくれ。これは後になれば皆にいゝ事だつたといふ風になると思ふ。それはお前の意地としては中々承知しにくい事とは思ふ。が、それを若しお前が承知して呉れゝば吾々皆が助かる事だ。俺は俺の過失に重ねて、こんな蟲のいゝ事をいへた義理でない事をよく知つてゐる。が、俺の希望を正直に現はせばかういふより他ない。重ね〴〵俺はお前に濟まぬ氣がしてゐる。

此手紙もつと、ずつと前に出せたのだが、續け樣にいやな事を聽かす事も恐れたし、それに、俺もいひたくない事を書かねばならぬので、つい今まで延ばして了つた。俺は其後氣にしながら未だ稲吉町へも行かない。そして父上ともあの晩以來何んだか會うのがいやで、會はぬやう避けてゐる。云々。

謙作は漸くこの彼には不快な手紙を讀み了つた。そして矢張り彼は何よりも父の怒りに對する怒りで一杯になつた。しかも彼は自分の怒りが必ずしも正しいとは考へなかつた。同樣に父の怒りも正しいとは考へられなかつた。

兎も角彼は腹が立つた。愛子の事は、「左う云ふ事は自分でやつたらいゝだらう」と變に冷めたく云つた父が、何時か彼には浸み込んで居た。そして其時はそれを可成り不快に感じたが、段々彼は「それもいゝ」といふ風に考へるやうになつた。それ故、今度の場合ではそれは父が不快に感ずる事は勿論豫期してゐたが、それ程に怒り、それ程に命令的な態度を取つたと云ふ事は、兎も角腹立たしかつた。

彼は信行に對しても餘りいゝ感じがしなかつた。事の決まらぬ内に義母に話したといふ事も、義母に相談する必要はないのだから、雜談以上の事でなかつたに違ひないと思はれる點で、全くそれは要らざる事だつた。そして、信行は自分に同情して居るやうに云ひながら、結局は父の氣持を絶對にしてゐる所が氣に入らなかつた。

然し謙作にも信行の氣持、同情出來ない事はなかつた。同情しなければ、いけないといふ氣持すらあつた。が、同時に其所まで同情したら、自分の方はどうするのか？といふ氣がした。それに信行は自分がお榮に申出でをした事だけを話したらしく書いて居るが、自分に自分の出生を打明けた事を話したか話さないか、まるで書いてゐない。此事も彼は一寸不快に感じた。それは勿論話したのだ。只自身の輕擧を幾つも云ひたくない氣持から、それが書けなかつたに違ひないと彼は思つた。其所まで話したとすれば何の事、自分の事は自分だけで處理さすやう徹底的に父を納得させるがいゝのだ。三千圓に執してゐるやうな所も、感心出來なかつた。

彼は直ぐ返事を書いた。

お手紙只今拜見、父上のお怒り、僕には不愉快でした。此問題は前の手紙にも書いた通り、父上との關係が本統の所まで、はつきり落ちついてゐない所から起つた事です。それがはつきりしないうちに父上のお耳に入れたのは面白くない事でした。然し今更それもいつた所で始まりません。が、僕としては——僕の行動としては關係がはつきりした後に

とるべき行動と、同様のものを今もとるより仕方ありません。いひかへれば僕は僕の考へ通りにするより仕方ありません。

結婚の事は勿論僕だけの勝手には行きません。然しお榮さんと別れる、別れないは、(或る時別れる場合があるとしても、)それは二人の間だけの問題にしたいと思ひます。然し只これだけの事は云へます。僕はこれからお榮さんと正式に結婚すればよし、若しそれが出來ないとすれば、出來ない儘に今までと全く同じ關係を續け、決して深入りはしまいと決心してゐるといふ事ゝ。それなら父上にも今までと同じわけです。尤もこれは父上の爲めにした決心ではなく、僕は僕の運命を知る事で、一層さういふ事につゝしみ深くならねばならぬと云ふ氣が強くしてゐるからの事です。

それから金の事は僕直接の事ではありませんが、お斷りします。僕の金も元々父上から頂いたものですが、お榮さんにはそれから分けます。

それから家を引越す事、これもそんな必要ないとも思ひますが。お榮さんが氣になるなら、引越す事賛成します。何所か郊外へでも行つたらいいでせう。

父上が怒られたお氣持僕にも解かります。然し僕には君のやうに父上のお氣持を全然主にしては、自分の事だけに考へられません。君の板ばさまりの立ち場についても同樣です。これは僕の我儘かも知れません。然し君の望まれる通りになる事は僕には性格的に不自然です。どうか惡しからずお思ひ下さい。(つゞく)

編輯局より

□三週年記念號は發賣後二日の短命で發賣禁止、社主山本光彥君は前途有爲の身を以て九泉の歸らぬ客となり、ラッセル博士は燕京に病んで未だ臥床中だ。三月は祝福さるべき佳春と思つたが、眞にイヤな春であつた、「改造」社は一層の多難に遭逢した、艱難汝を璧にす、僕たちはその瞬間に齒を喰ひしばり、必ず世界第一の權威ある雜誌となし、そして平常の目的を達せねばならぬと血涙を絞りながら固く誓つたことであつた。

□それで、帝劇に於ける記念會にも、入道館や京都ホテルに於ける記念會でも一種悲壯の感がした、我社は同志の深甚なる御見舞を感謝する。

□福田德三氏が本誌の災難に同情して、數百枚に亘る長論策を寄稿して下さつたことと、賀川豐彥氏が持前の義俠心で早急に「死線を越へて」の續篇を執筆して下さることになつた、兩氏の芳情は同[illegible]厚く感謝する處である、それから厨川白村氏、山川均氏が他の幾多の豫定を變更して本號のために執筆して下つたことに對して感謝する。

□四月十四日ブラック女史から長文の郵書が到來した、その要を摘錄すれば「ラッセル氏は未だ危險の狀態にあり、私は氏の回春の爲め、總ての精力、總ての時を捧げつつあり、回復の見込は充分なるも、それ以上は申し難く、既にラ氏は人間の耐へ難き事と思しき程度まで苦痛を忍ばれたる事にい、氏の死去說に對しては私に取りては非常の迷惑を感じ申候、國際通信社、若くは他の北京在の日本人通信社に於て日本に發したる電報は總ての點に於て不正確を極め候。

□かゝる無責任なる新聞業は實に許すべからざる事なり、氏の生死如何は當時電話を以て病院に尋問せば忽ち分明すべき筈に候、私は日夜氏に侍して看病致居候、そは新聞記者を新聞記事掲載のため陳述の勞[illegible]り、ラッセル[illegible]一層重要なる任務と存候故に候。ラッセル氏が遺言をなせりなど無根の風說に候間貴臺に於て右風說を取消下され候へば難有く存候」。

□氏の病氣は未だ重態の裡にある、ブラック女史、趙氏、デユウイ氏等熱心に看護の勞を執りつゝあれば回春の悅びを見るも近き日にあらう、本社は切にその本復を神かけて祈つている、隨つて七月來朝のことに關しては改めて六月號に發表する、かかる狀態で五月號には執筆して戴くことが出來なかつたのは讀者と共に深き遺憾を覺ゆるものである。

□京都大學に其人ありと知られた佐々木惣一氏が法學部長に互選せられ、同志社教授として俊英の目ありし恒藤恭君が今回京都帝大の講師に就任したのは二つながら嬉しい。恒藤君は本誌六月號のために「世界民の愉悅と悲哀」の長大篇を寄せられた。

改造定價			
册數	定價	郵稅	
壹册	七十錢	二錢	
半ヶ年	四圓二十錢	不要	
壹ヶ年	八圓四十錢	不要	

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正十年四月二十日印刷納本
大正十年五月一日發行

本號特價金八拾錢

編輯兼發行者　東京府中目黑七七〇　横關利藤太
印刷者　東京市京橋區南紺屋町廿七番地
印刷所　秀英舍

發行所　東京芝區櫻田久保町七　改造社
電話新橋一八五九
振替東京八四〇二

主幹 森本厚吉

同 有島武郎 吉野作造

初號五月十日發行

文化生活研究

□新會員募集□

◇講師（ABC順）

帝大教授文學博士 姉崎正治

有島武郎

有島生馬

帝大教授農學博士 半澤洵

帝大教授農學博士 星野勇三

帝大教授法學博士 穗積重遠

女子大學家政學部長 井上秀子

賀川豐彦

帝大教授法學博士 神戸正雄

帝大教授法學博士 河田嗣郎

帝大教授法學博士 河津暹

女子高等師範教授 近藤耕藏

帝大教授理農學博士 松村松年

文學博士 三宅雄二郎

帝大教授法學博士 森本厚吉

森本靜子

帝大教授醫學博士 永井潜

帝大教授工學博士 佐野利器

帝大教授醫學博士 佐藤彰

法學博士 高野岩三郎

理學士 田邊尚雄

女子大學教授 手塚かね子

帝大教授法學博士 渡邊鐵藏

與謝野晶子

帝大教授法學博士 吉野作造

裝畫 有島武郎

一ヶ月分 金一圓五十錢

六ヶ月分 金八圓五十錢

一ヶ年分 金拾五圓六十錢

（外ニ入會金一圓）

即時申込に限り入會金半減

毎月十日發行 三百餘頁の講義錄十二冊で完結（要覽贈呈）

東京京橋尾張町二丁目

振替東京五五壹番

電話銀座 二 ｝五六 八九 七九

文化生活研究會

…S. LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS. ETC.
…: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
…E :KAIZOSHA, 7 SAKURADAKUBO-CHO SHIBA, TOKIO